福　岡　市

有田・小田部

第19集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集

1994

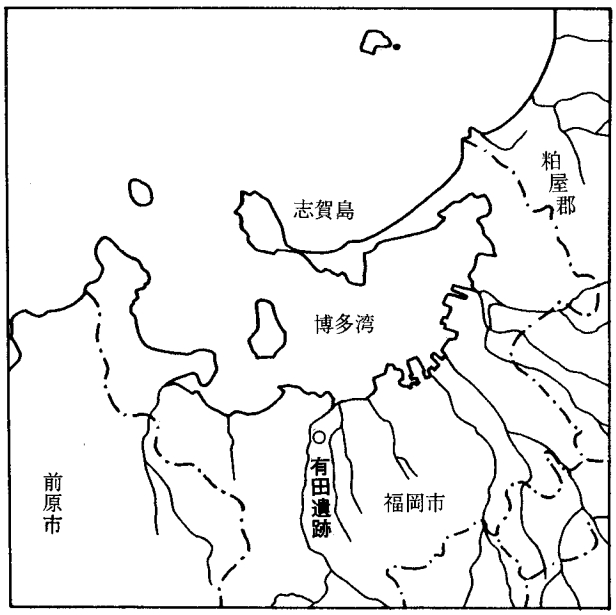
福岡市教育委員会

福　岡　市

有田・小田部

＜福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告＞

第19集



1994

福岡市教育委員会

第 6 次調査区　SD－03 断面

第 6 次調査区　SC－02 全景

第67次調査全景（西から）

第67次調査掘立柱建物　SB－01（南から）

序

福岡市は地理的に大陸に近く、古来よりその門戸の役割を果し、多くの遺跡が残されています。特に福岡市の西南部に位置する早良平野は、都市化がややおくれ、ここ20数年に開発が集中したために、多くの遺跡が調査され、周知されています。

この平野のほぼ中央より北に片寄った有田、小田部地区の低丘陵上に位置する有田遺跡群は、昭和41年の九州大学考古学研究室による区画整理に伴う発掘調査以来、約160次におよぶ発掘調査が実施されています。その結果、旧石器時代から近世におよぶ遺跡が明らかにされ、福岡市内遺跡の中で最も重要な遺跡の一つであります。特に弥生時代初頭の環濠集落や古代の柵列に囲まれた倉庫群、奈良時代の官衙と考えられる建物群は注目されるところです。

本報告書に収録した第6，50，58，61，65，67次調査では旧石器時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の各時期の遺構・遺物が明らかになり、早良平野の歴史をより明らかにすることができました。

発掘調査から報告書作成まで長期間を要しましたが、その間、ご指導いただいた先生方をはじめ、地元の皆様、作業員、整理員等、多くの方々の協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり、併せて研究資料としてご活用いただけることを願うものであります。

平成5年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

（1）　本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和52年・56年・57年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査の報告書である。

（2）　本書には昭和52年度に実施した第６次調査、昭和56年度に実施した第50・58・61次調査、及び昭和57年度の第65・67次調査の６ヶ所について収録する。

（3）　本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。

（4）　本書に収録した発掘調査は、昭和52年度については山崎純男、沢皇臣、山口譲治、横山邦継、昭和56年度については井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄、昭和57年度については井澤、松村道博が担当した。

（5）　本書に掲載した遺構実測及び写真撮影は以下のとおりである。

第６次調査　実測　山崎、沢、山口、横山、福岡大学歴史研究部
　　写真撮影　山崎、沢、山口、横山

第50次調査　実測　山崎、井澤
　　写真撮影　井澤

第58次調査　実測　杉山、山崎
　　写真撮影　井澤、杉山

第61次調査　実測　山崎、杉山
　　写真撮影　山崎、杉山

第65次調査　実測　井澤、杉山、池野尚武
　　写真撮影　井澤

第67次調査　実測　松村、清原ユリ子
　　写真撮影　井澤、松村

（6）　遺物実測は第６次調査は山崎、山口、横山、前田義人、第50次、58次、61次、65次、67次調査は田中昭子、井澤、池田孝弘が担当したが、瓦、石器については器械実測を行い、廣嵜香が担当した。

（7）　遺構・遺物実測図の製図は、第６次調査は山崎、山口、入江のり子、撫養久美子、第50次、58次、61次、65次、67次調査は井澤、田中、廣嵜、吉田扶希子、吉永祐美子が行った。

（8）　本書の執筆は、第１章、第２章、第３章１、３～６を山崎純男が、第３章２を山口譲治が、４章～第８章を井澤が分担して行った。

（9）　報告書作成にあたっては、久賀登世子、藤アイ子、成清直子、村田悦子、矢川みどり、三栗野明美、木場いずみ、吉田扶希子、福田小菊、多田映子、西口キミ子、三浦明子、黒瀬志保の協力を得た。

（10）　本書の編集は第１章～第３章については、山口譲治の協力を得て、山崎純男が、第４章～第８章については井澤洋一が担当した。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……1
第２章　遺跡の立地と周辺遺跡……4
　１．遺跡の立地と年次調査区の位置……4
　２．周辺の遺跡と歴史的環境……7
第３章　第６次調査の記録……9
　１．調査区の地形と調査概要……9
　２．旧石器時代の調査……11
　３．弥生時代の遺構と遺物……16
　　(1)　SD－03 と出土遺物……16
　　①　SD－03……16
　　②　遺物出土状況……17
　　③　出土遺物……19
　　(2)　SD－04 と出土遺物……22
　　①　SD－04……22
　　②　下層遺物出土状況……24
　　③　出土遺物……24
　　④　上層遺物出土状況……32
　　⑤　上層出土遺物……32
　４．古墳時代の遺構と遺物……34
　　(1)　SC－01 と出土遺物……34
　　①　SC－01……34
　　②　遺物出土状況……34
　　③　出土遺物……35
　　(2)　SC－02 と出土遺物……38
　　①　SC－02……38
　　②　SC－02 下層遺物出土状況……41
　　③　下層出土遺物……41
　　④　上層遺物出土状況……46
　　⑤　上層出土遺物……46

(3) SK－02 と出土遺物……51
① SK－02……51
② 出土遺物……51
(4) SK－05 と出土遺物……52
① SK－05……52
② 出土遺物……53
(5) SK－06 と出土遺物……54
① SK－06……54
② 出土遺物……54
(6) SK－09 と出土遺物……55
① SK－09……55
② 出土遺物……56
(7) SK－11 と出土遺物……57
① SK－11……57
② 出土遺物……57
(8) SD－07 と出土遺物……58
① SD－07……58
② 出土遺物……59
5．歴史時代の遺構と遺物……59
(1) SA－01、02と出土遺物……59
① SA－01……59
② SA－02……60
③ 出土遺物……62
(2) SD－01 と出土遺物……62
① SD－01……62
② 出土遺物……64
(3) SD－02 と出土遺物……68
① SD－02……68
② 出土遺物……69
(4) SD－05 と出土遺物……70
① SD－05……70
② 出土遺物……72
(5) SD－06 と出土遺物……74

① SD－06……74
② 出土遺物……74
(6) SD－08 と出土遺物……75
① SD－08……75
② 出土遺物……75
(7) SK－01 と出土遺物……76
① SK－01……76
② 出土遺物……76
(8) SK－03 と出土遺物……79
① SK－03……79
② 出土遺物……79
(9) SK－04 と出土遺物……80
① SK－04……80
② 出土遺物……80
(10) SK－07 と出土遺物……84
① SK－07……84
② 出土遺物……86
(11) SK－08 と出土遺物……87
① SK－08……87
② 出土遺物……87
(12) SK－10 と出土遺物……87
① SK－10……87
② 出土遺物……87
(13) SK－12、13……88
(14) 掘立柱建物……90
① SB－01……90
② SB－02……90
③ SB－03……90
(15) ピットおよび表土層出土遺物……90
6．第 6 次調査区のまとめ……94
(1) 旧石器時代……95
(2) 弥生時代……95
(3) 古墳時代……96

(4) 古代……97
第4章　第50次調査……101
1．調査地区の地形と概要……101
2．遺構各説……102
3．遺物各説……103
4．まとめ……106
第5章　第58次調査……107
1．調査地区の地形と概要……107
2．遺構各説……108
3．遺物各説……110
4．まとめ……112
第6章　第61次調査……113
1．調査地区の地形と概要……113
2．遺構各説……113
3．遺物各説……115
4．まとめ……124
第7章　第65次調査……126
1．調査地区の地形と概要……126
2．遺構各説……126
3．遺物各説……127
4．まとめ……130
第8章　第67次調査……131
1．調査地区の地形と概要……131
2．遺構各説……131
3．遺物各説……136
4．まとめ……138

挿 図 目 次

Fig. 1　有田・小田部の位置と周辺遺跡……5
Fig. 2　調査区の位置……6
Fig. 3　第6次調査区遺構全体図……10
Fig. 4　第6次調査出土遺物分布状態……12
Fig. 5　B群出土石器分布状態および集石実測図……13
Fig. 6　第6次調査出土石器実測図(1)……14
Fig. 7　第6次調査および第4・5次調査出土石器実測図(2)……15
Fig. 8　SD－03 断面実測図……16
Fig. 9　SD－03 上層遺物（タコ壺）出土状況……17
Fig. 10　SD－03 出土遺物実測図Ⅰ……18
Fig. 11　SD－03 出土遺物実測図Ⅱ……20
Fig. 12　SD－03 出土遺物（タコ壺）実測図Ⅲ……21
Fig. 13　SD－04 断面実測図……23
Fig. 14　SD－04 平面実測図と遺物出土状況……25
Fig. 15　SD－04 出土遺物実測図Ⅰ……27
Fig. 16　SD－04 出土遺物実測図Ⅱ……28
Fig. 17　SD－04 出土遺物実測図Ⅲ……30
Fig. 18　SD－04 出土遺物実測図Ⅳ……31
Fig. 19　SD－04 上層遺物出土状況……32
Fig. 20　SD－04 上層遺物実測図……33
Fig. 21　SC－01 実測図……35
Fig. 22　SC－01 出土遺物実測図Ⅰ……36
Fig. 23　SC－01 出土遺物実測図Ⅱ……37
Fig. 24　SC－02 実測図……39
Fig. 25　SC－02 遺物出土状況……40
Fig. 26　SC－02 出土遺物実測図Ⅰ……42
Fig. 27　SC－02 出土遺物実測図Ⅱ……43
Fig. 28　SC－02 出土遺物実測図Ⅲ……44
Fig. 29　SC－02 上層遺物出土状況……45
Fig. 30　SC－02 上層出土遺物実測図Ⅰ……47
Fig. 31　SC－02 上層出土遺物実測図Ⅱ……48

Fig. 32　SK－02 実測図……50
Fig. 33　SK－02 出土遺物実測図……51
Fig. 34　SK－05 実測図……52
Fig. 35　SK－05 出土遺物実測図……53
Fig. 36　SK－06 実測図……54
Fig. 37　SK－06 出土遺物実測図……55
Fig. 38　SK－09 実測図……55
Fig. 39　SK－09 出土遺物実測図……56
Fig. 40　SK－11 実測図……57
Fig. 41　SK－11 出土遺物実測図……57
Fig. 42　SD－07 断面実測図……58
Fig. 43　SD－07 出土遺物実測図……59
Fig. 44　SA－01・02 平面実測図……60
Fig. 45　SA－01・02 実測図……61
Fig. 46　SD－01 断面実測図……62
Fig. 47　SD－01 実測図……63
Fig. 48　SD－01 出土遺物実測図Ⅰ……65
Fig. 49　SD－01 出土遺物（硯）実測図Ⅱ……66
Fig. 50　SD－01 出土遺物実測図Ⅲ……67
Fig. 51　SD－02 断面実測図……68
Fig. 52　SD－02 平面実測図……69
Fig. 53　SD－02 出土遺物実測図……70
Fig. 54　SD－05 実測図……71
Fig. 55　SD－05・06 出土遺物実測図……73
Fig. 56　SD－06 実測図……74
Fig. 57　SD－08 実測図……75
Fig. 58　SK－01 実測図……76
Fig. 59　SK－01 出土遺物実測図……77
Fig. 60　SK－03 実測図……78
Fig. 61　SK－04 実測図……79
Fig. 62　SK－04 出土遺物実測図Ⅰ……81
Fig. 63　SK－04 出土遺物実測図Ⅱ……82
Fig. 64　SK－04 出土遺物実測図Ⅲ……83

Fig. 65　SK－07 実測図……85
Fig. 66　SK－07 出土遺物実測図……86
Fig. 67　SK－08 実測図……87
Fig. 68　SK－10 実測図……87
Fig. 69　SK－12・13実測図……88
Fig. 70　SB－01～03 実測図……89
Fig. 71　ピット・表土層出土遺物実測図Ⅰ……91
Fig. 72　ピット・表土層出土遺物実測図Ⅱ……93
Fig. 73　柵列復原図……98
Fig. 74　第50次調査地点位置図……101
Fig. 75　第50次調査遺構配置図……102
Fig. 76　土壙 SK 01・02、井戸 SE 01 実測図……104
Fig. 77　溝 SD 01・02 土層断面実測図……105
Fig. 78　出土遺物実測図……106
Fig. 79　第58次調査地点位置図……107
Fig. 80　第58次調査遺構配置図……108
Fig. 81　住居跡 SC 01・02 実測図……109
Fig. 82　住居跡 SC 02 復原図……110
Fig. 83　土壙 SK 01・03、掘立柱建物 SB 01・02 実測図……111
Fig. 84　出土遺物実測図……112
Fig. 85　第61次調査地点位置図……113
Fig. 86　第61次調査遺構配置図……114
Fig. 87　土壙 SK 01 実測図……115
Fig. 88　調査区土層図……116
Fig. 89　包含層及び溝 SD 01 出土遺物実測図……117
Fig. 90　溝 SD 01 出土遺物実測図①……119
Fig. 91　溝 SD 01 出土遺物実測図②……120
Fig. 92　溝 SD 01 出土遺物実測図③……121
Fig. 93　溝 SD 01 出土遺物実測図④……122
Fig. 94　溝 SD 01・02 出土遺物実測図……123
Fig. 95　第65次調査地点位置図……126
Fig. 96　第65次調査遺構配置図……127
Fig. 97　調査区東壁土層断面図及び土壙 SK 01～03 実測図……128

Fig. 98　出土遺物実測図……129
Fig. 99　出土遺物実測図……130
Fig. 100　第67次調査地点位置図……131
Fig. 101　第67次調査遺構配置図……132
Fig. 102　住居跡 SC 01 実測図……133
Fig. 103　SX 01～05 実測図……134
Fig. 104　掘立柱建物 SB 01～04 実測図……135
Fig. 105　掘立柱建物 SB 05 実測図……136
Fig. 106　出土遺物実測図……137
Fig. 107　出土遺物実測図……138

図版目次

ＰＬ．1　(1)　有田６次調査区全景（東から）
　　(2)　有田６次調査区西半部（東から）
ＰＬ．2　有田６次調査区 SD－04 全景　(上)南から　(下)北から
ＰＬ．3　有田６次調査区 SD－04 遺物出土状況　(上)西から　(下)北から
ＰＬ．4　有田６次調査区 SD－04 遺物出土状況近景　(上)南端部　(下)北端部
ＰＬ．5　(1)　有田６次調査区 SD－03・SC－02 発掘状況
　　(2)　有田６次調査区 SD－03 断面
ＰＬ．6　(1)　有田６次調査区 SC－01 遺物出土状況（南から）
　　(2)　有田６次調査区 SC－01 完掘状況（北から）
ＰＬ．7　(1)　有田６次調査区 SC－02 遺物出土状況（東から）
　　(2)　有田６次調査区 SC－02 遺物出土状況（復原）東から
ＰＬ．8　(1)　有田６次調査区 SC－02 床面遺物出土状況近景
　　(2)　有田６次調査区 SC－02 床面遺物出土状況近景
ＰＬ．9　(1)　有田６次調査区 SC－02 床面遺物出土状況
　　(2)　有田６次調査区 SC－02 西主柱穴遺物出土状況
ＰＬ．10　(1)　有田６次調査区 SC－02 北東コーナー貯蔵穴遺物出土状況
　　(2)　有田６次調査地区　SC－02 ベッド床面遺物出土状況
ＰＬ．11　(1)　有田６次調査区 SC－02 床面遺物出土状況（北東から）
　　(2)　有田６次調査区 SC－02 完掘状況（東から）

ＰＬ．12 (1) 有田６次調査区 SC－02 上層祭祀遺物出土状況
(2) 有田６次調査区 SC－02 上層祭祀遺物出土状況近景
ＰＬ．13 有田６次調査区 SC－02 上層祭祀遺物出土状況
ＰＬ．14 (1) 有田６次調査区 SD--01 全景
(2) 有田６次調査区 SD－01 集石
ＰＬ．15 有田６次調査区 (上) SD－01 完掘状況 (下) SD－05
ＰＬ．16 (1) 有田６次調査区 SD－01 集石と断面
(2) 有田６次調査区 SD－01 遺物出土状況
ＰＬ．17 (1) 有田６次調査区 SD－02 (西から)
(2) 有田６次調査区 SD－02 (南から)
ＰＬ．18 有田６次調査区 (上)SD－02 集石状況 (下) SD－02 完掘状況
ＰＬ．19 (1) 有田６次調査区 SD－02 陸橋部
(2) 有田６次調査区 SD－02 断面
ＰＬ．20 (1) 有田６次調査区 SK－04
(2) 有田６次調査区 SK－05
ＰＬ．21 有田６次調査区 SD－04 出土遺物
ＰＬ．22 有田６次調査区 SC－02 上層出土遺物
ＰＬ．23 有田６次調査区出土・陶質土器と初期須恵器
ＰＬ．24 有田６次調査区 SD－03 出土飯ダコ壺
ＰＬ．25 (1) 第50次調査全景 (南東から)
(2) 第50次調査全景 (北から)
ＰＬ．26 (1) 井戸 SE 01 (西から)
(2) 井戸 SE 01 完掘状態
(3) 土壙 SK 01 完掘状態 (北東から)
(4) 土壙 SK 01 土層 (北東から)
ＰＬ．27 (1) 溝 SD 01 (南から)
(2) 溝 SD 01 土層状態 (北から)
(3) 溝 SD 02 (北から)
(4) 調査地区全景 (北から)
ＰＬ．28 第50次調査出土遺物
ＰＬ．29 (1) 第58次調査全景 (西から)
(2) 住居跡 SC 01 (北西から)
ＰＬ．30 (1) 住居跡 SC 02 (南西から)

(2) 土壙 SK 02（北西から）
(3) 土壙 SK 03 完掘状態（北西から）
ＰＬ．31 (1) 作業風景
(2) 調査前全景（西から）
(3) 第58次調査出土遺物
ＰＬ．32 (1) 第61次調査Ⅰ区全景（北から）
(2) 第61次調査Ⅱ区全景（北東から）
ＰＬ．33 (1) 溝 SD 01（東から）
(2) 溝 SD 01 完掘状態（東から）
(3) 溝 SD 01 Ⅰ区北壁土層状態（南から）
(4) 溝 SD 01 東壁土層状態（西から）
ＰＬ．34 (1) 溝 SD 01（北から）
(2) 溝 SD 01 完掘状態（北から）
(3) Ⅰ区溝 SD 01 南壁土層状態（北から）
(4) 作業風景
ＰＬ．35 (1) 溝 SD 01 内礫群出土状態（北西から）
(2) 溝 SD 01 内風炉出土状態
(3) 土壙 SK 01（東から）
(4) 土壙 SK 01 内礫出土状態（西から）
ＰＬ．36 第61次調査出土遺物①
ＰＬ．37 第61次調査出土遺物②
ＰＬ．38 第61次調査出土遺物③
ＰＬ．39 第61次調査出土遺物④
ＰＬ．40 (1) 第65次調査全景（北東から）
(2) 調査東側土層（北から）
(3) 調査東側土層（北西から）
ＰＬ．41 (1) SK 01（北西から）
(2) SK 02（北東から）
(3) 第65次調査出土遺物
ＰＬ．42 (1) 第67次調査区全景（西から）
(2) 第67次調査全景（西から）
ＰＬ．43 (1) 住居跡 SC 01（北から）
(2) 住居跡 SC 01（南から）

(3) 土壙 SX 01（北から）
(4) 土壙 SX 01 完掘状態（北から）
ＰＬ．44 (1) 土壙 SX 02（北西から）
(2) 土壙 SX 02（南西から）
(3) 土壙 SX 03（北西から）
(4) 土壙 SX 05（北から）
ＰＬ．45 (1) 土壙 SX 04（南から）
(2) 土壙 SX 04 遺物出土状態（西から）
(3) 掘立柱建物 SB 01（西から）
(4) 掘立柱建物 SB 01（南から）
ＰＬ．46 (1) SB 01－２柱穴断面土層状態（西から）
(2) SB 01－３柱穴断面土層状態（西から）
(3) SB 01－４柱穴断面土層状態（西から）
(4) SB 01－５柱穴断面土層状態（西から）
ＰＬ．47 (1) SB 01－７柱穴断面土層状態（西から）
(2) SB 01－10 柱穴断面土層状態（西から）
(3) SB 01－15 柱穴断面土層状態（西から）
(4) 掘立柱建物 SB 02（西から）
ＰＬ．48 (1) 掘立柱建物 SB 02（西から）
(2) 掘立柱建物 SB 03（南から）
(3) 調査区北壁土層状態（南から）
(4) 調査区北壁土層状態（南から）
ＰＬ．49 第67次調査出土遺物①
ＰＬ．50 第67次調査出土遺物②

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市の平野部は東の福岡平野と西の早良平野からなっている。有田・小田部地区は西の早良平野のほぼ中央部に位置し、かつては福岡市近郊の農村地帯であった。しかし、福岡市域は昭和47年、政令指定都市になった以後の都市化がめざましく、昭和57年の市営地下鉄の開通は、さらにそれに拍車をかけることとなった。有田・小田部地区も例外ではなく、開発の波が押し寄せ、今は高層住宅が建ち並び過日の姿はない。

福岡市教育委員会は、有田・小田部地区のこれらの開発に対処し、発掘調査を実施してきたが、それらの多くは、専用住宅であり、国庫補助事業であった。有田遺跡の調査件数は、平成３年度まで168件に達している。この中には国庫補助事業ばかりでなく、学校建設、市営住宅建設などの公共事業や、民間の開発に伴う原因者負担の事業も含まれている。　本書には、国庫補助事業として調査を実施した昭和52年度の第６次調査、昭和56年度の第50・58・61次調査、昭和57年度の第65・67次調査の成果を報告する。

２．調査体制

(1)　第６次調査の調査組織

調 査 地 区　福岡市早良区有田１丁目20-3
調 査 期 間　昭和52年８月18日～10月30日
調 査 主 体　福岡市教育委員会
福岡市教育委員会
教　育　長　戸田成一、社会教育部長　青木　崇、主幹　志鶴幸弘、文化課長
　　清水義彦
庶務、会計、埋蔵文化財係長　三宅安吉、国武勝利
発 掘 調 査　山崎純男、沢皇臣、横山邦継、山口謙治
調査補助員　前田義人、原俊一、奈良崎和典、曽根田諭、久保達三、市橋和夫、吉留秀敏、
　　中井

(2)　昭和56年度の調査組織

調 査 主 体　福岡市教育委員会
調 査 担 当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
庶 務 担 当　岡島洋一

発掘担当　井澤洋一、山崎龍雄、杉山富雄

調査報告　井澤洋一

調査協力者　松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、池田孝弘、山口勝己、安岡洋二、安達昌利、前田次郎、松井フユ子、坂口フミ子、佐藤テル子、金子由理子、清原百合子、渡辺武子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、内尾トミ子、真子昌子、真鍋町代、佐谷静枝、尾園桂枝、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子

(3) 昭和57年度の調査組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査担当　福岡市教育委員会文化部文化埋蔵文化財第2係

庶務担当　埋蔵文化財第2係長　折尾学、(庶務) 岡嶋洋一

発掘担当　井澤洋一、松村道博

整理報告　井澤洋一

調査補助員　山口勝己、池野尚昭、谷沢仁、辻哲也

調査協力者　松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、渡辺武子、松井フユ子、佐藤テル子、金子由利子、清原ユリ子、真子昌子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、土斐崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、末松信子、砥綿チエ子、堀川ヒロ子、中村千里、伊庭秀子、坂田まさ子、平井和子、後藤ミサヲ、柴田勝子、柴田春代、緒方マサヨ、山田悦子、阿部宏、堺裕明、前田次郎、安岡洋二、明野隆、西島健一、前田乱、松江宏文、萩原陽一郎、北川智恵美

資料整理　福田小菊、多田映子、西口キミ子、吉永祐美子、黒瀬志保、吉田扶希子、廣嵜香（調査員）、田中昭子

有田6次

遺跡調査番号	7712			遺跡略号	ART-6
地番	有田一丁目20－3			分布地図番号	原 82
開発面積	1289㎡	調査対象面積	1289㎡	調査面積	1200㎡
調査期間	昭和52年8月18日～10月30日				

有田第50次

遺跡調査番号	8112		遺跡略号	ART-50	
地番	早良区小田部3丁目6−2、11−2		分布地図番号	原 82	
開発面積	182㎡	調査対象面積	128㎡	調査面積	125.805㎡
調査期間	昭和56年6月10日～6月17日				

第58次

遺跡調査番号	8120		遺跡略号	ART-58	
地番	早良区南庄185、186		分布地図番号	室見 81	
開発面積	333.34㎡	調査対象面積	333.34㎡	調査面積	133.339㎡
調査期間	昭和56年10月2日～10月20日				

第61次

遺跡調査番号	8123		遺跡略号	ART-61	
地番	早良区有田2丁目21−2		分布地図番号	原 82	
開発面積	187.03㎡	調査対象面積	187.03㎡	調査面積	123.705㎡
調査期間	昭和56年11月21日～12月13日				

第65次

遺跡調査番号	8206		遺跡略号	ART-65	
地番	早良区有田2丁目7−10		分布地図番号	原 82	
開発面積	251㎡	調査対象面積	251㎡	調査面積	36.01㎡
調査期間	昭和57年4月23日～4月26日				

第67次

遺跡調査番号	8208		遺跡略号	ART-67	
地番	早良区小田部1丁目171、172−1		分布地図番号	原 82	
開発面積	802㎡	調査対象面積	802㎡	調査面積	689.79㎡
調査期間	昭和57年5月25日～6月18日				

第２章　遺跡の立地と周辺遺跡

１．遺跡の立地と年次調査区の位置

福岡市の平野部は地形的に東の福岡平野と西の早良平野に二分される。この境界をなすのが、背振山系の支脈である油山（標高569.4ｍ）より派生した平尾丘陵（最高位は鴻ノ巣山の標高100.5ｍ）や長尾、飯倉の低丘陵である。

有田遺跡群は西の早良平野のほぼ中央に位置する標高15ｍ前後を測る独立した中位段丘Ⅱ面上に分布している。台地の西側には、背振山系を水源とする室見川が早良平野を中央から二分するように北流している。また、東側には室見川東岸の水田の主要な用水路としての機能をもつ金屑川が同様に北流している。有田・小田部の東西の台地裾は流路の侵蝕によって削られ段丘崖を形成している。このような地形と遺跡立地のあり方は、福岡平野における弥生時代開始期の遺跡として著名な板付遺跡と極めて類似している。有田遺跡にも同時期の環濠が存在することは早くから知られており、弥生時代開始期、換言すれば稲作農耕開始期には、このような地形が、開田を行うに有効であったことが推測される。今後は弥生時代開始については地形学的追求も必要であろう。

有田遺跡の立地する有田・小田部の台地の形成は洪積世までさかのぼることが判明している。基盤層は阿蘇火山灰に由来する白色粘土の八女粘土層が厚く推積し、その上に黄褐色の鳥栖ロームが推積し、その上にさらに新期ローム層が堆積している。沖積世の堆積はほとんどみられず、調査区の大部分は耕作土である表土層を除去すると、直下に新期ロームないしは鳥栖ロームがすぐ顔を出す。遺構は新期ないしは鳥栖ロームに切り込まれたものである。

台地は南北方向に細長く、南北の長さ約１㎞、最大幅0.7㎞を測り、北に緩やかに傾斜している。旧地形では最高所（第６次調査区周辺部）は標高約15ｍ、周辺の水田面との比高差は５～７ｍである。台地には、浅く緩やかな谷がいくつも形成され、台地は北方向にむかって八つ手状に分岐している。

各調査区の位置は第６次調査が中央部台地の最高所から東斜面にかけての一部に立地、本遺跡の中心部に近い。第50次調査区は、北側台地に位置し、第６次調査区の北西約500ｍの地にあたり、浅い谷の最も奥まった所に立地している。第58次調査区は、北側台地の最北部近くに位置し、第６次調査区とは、900ｍ離れている。南庄のほぼ中心にあたる所である。第61次調査区は中央部台地に位置し、第６次調査区のすぐ北側で、約50ｍ離れている。最高所からゆるやかに下る台地上に立地している。第６次調査区中央台地の東側裾にあり、第６次調査区の南東約160ｍの所に位置している。第67次調査区は北側台地の先端部に位置し、第50次調査区の北東100ｍの所に位置している。

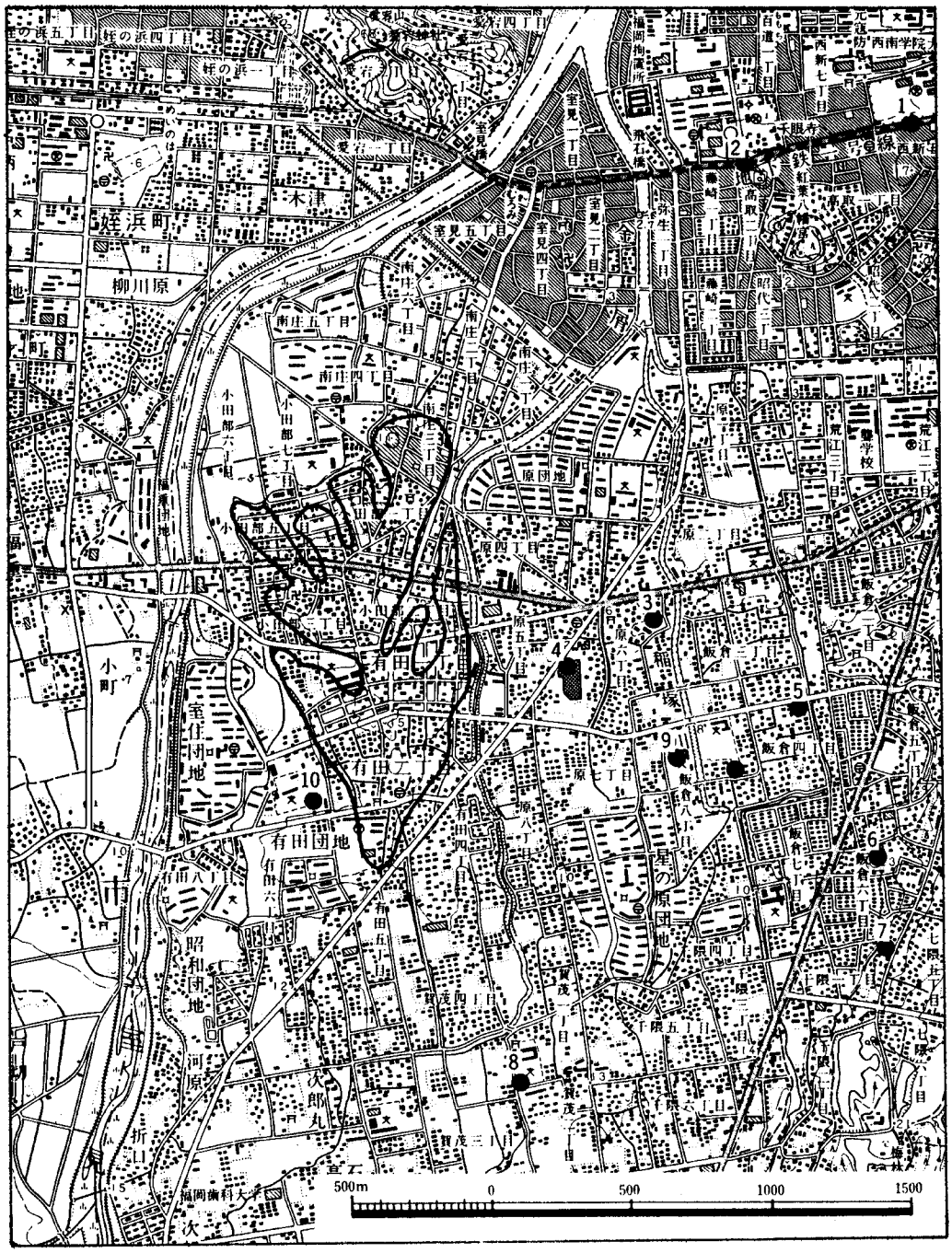


Fig. 1 有田・小田部の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

Fig. 2　調査区の位置

2．周辺の遺跡と歴史的環境

有田遺跡を含めた早良平野の考古学的調査は、市街地の拡大に伴い飛躍的に増加し、福岡市内で最もその内容が明らかになりつつある。以下、有田遺跡群を中心として、早良平野の歴史的展開の概略をみていこう。

旧石器時代

最近の調査で遺跡の存在も序々に明らかになりつつある。本報告の第６次調査区の旧石器時代遺跡は、早良平野における最も早い調査例である。ナイフ形石器、剝片尖頭器を主体とする文化層であったが、その後、有田・小田部の台地の各所で散発的に遺物が発見されている。吉武高木地区の圃場整備に伴う調査では、細石器を中心とした文化層が調査され、有力な資料を提供している。20数年前の表採遺物によって若干の遺跡が知られていた頃と比較すると、調査によって遺跡が確認され、その内容が明らかになりつつある現在は、早良平野における旧石器研究の第二段階に移行したとみられる。今後、さらにその内容が明らかになろう。

縄文時代

旧石器時代同様に、表面採集による遺跡が若干が知られていたが、近年の調査で飛躍的な成果をあげている。従来の北部九州における縄文時代観は完全に変えられたとしてよいであろう。

縄文時代草創期、早期の遺跡は、早良平野をとり囲む東側の油山をはじめその支脈、南側の背振山系、西側を限る飯盛山、叶岳とその支脈の山麓部に点々と発見されつつあり、遺跡の密度は日増しに濃くなっている。代表的遺跡として、やや東にはずれるが、柏原遺跡群がある。早良平野に面した山麓部では東側で、クエゾノ遺跡、田村遺跡群、脇山遺跡群が、西側で広石遺跡、コノリ遺跡群で有望な押型文土器期の遺跡が調査され、遺跡のあり方やその内容が明らかになりつつある。前・中期遺跡も同様に増加傾向にあるが、早期遺跡よりはやや下った山麓と沖積地の境に分布する傾向をみせる。湯納遺跡、四箇遺跡群、有田高畠遺跡、吉武遺跡群は代表的な遺跡といえる。特に湯納遺跡(前期)有田高畠遺跡、吉武遺跡(中～後期)では、貯蔵穴、いわゆるドングリ・ピットが多数検出されており、前期以降、植物食への比重がより重くなったことがうかがえ、生産活動の変化を読みとることができる。有田高畠のピット群は径40ｍの円形の配置をみせ、縄文時代の集落構造についても追求できる展開をみせている。後期遺跡では四箇遺跡群が代表的遺跡である。ドングリの皮で占められる特殊泥炭層や木製品の発見は注目される。その内容は北部九州を代表するものである。晩期遺跡は入部遺跡群で晩期初頭の竪穴住居址、あるいは竪穴住居址状の遺構が発見され終末期の突帯文土器遺跡も序々に数が増えつつあり、今後、さらにその様相が明確になることは疑いない。これまで、弥生時代との関連で遺跡の少なさが解釈されていたが、その根拠が希薄になってきた。日本における弥生時代の開始をより理解するためには、早良平野の縄文時代遺跡について積極的な研究が必要であろう。

弥生時代

早良平野で最も大きな問題を提起したのはこの時代の調査である。一つは弥生時代開始期、換言すれば稲作農耕の問題。他の一つは国の成立に関する問題である。

弥生時代開始期の問題を提起したのは有田遺跡群もその重要な位置を占めている。台地上における突帯文土器期～弥生時代における環濠の確認。さらに本報告における二本の弥生時代前期の濠は、開始期の集落構造の解明に重要な資料を提供した。また，有田台地の西側に位置する有田七田前遺跡からは溝が検出され、突帯文単純期の遺物が多量に出土した。この中には大陸系磨製石器をはじめ、稲作関連遺物が含まれ、稲作農耕の開始期を突帯文土器期に遡らせる、重要な役割を果した。同様な遺跡は有田遺跡群の西に位置する石丸・古川遺跡でも認められ、早良平野の弥生時代開始期に担った重要な位置が再確認されたのである。また、隣接して存在する拾六町築地遺跡では前期から古代における多量の木製品が出土し、木製農具や祭祀の上から、農耕問題を明らかにしたことは特記されるべきである。今後は、早良平野における開始期の水田構造等多方面からの追求が必要であろう。

国の成立問題で特記されるのは吉武高木、大石、樋渡遺跡群の調査である。多量の青銅武器を伴う墳墓群である。時期的には高木→大石→樋渡と移行し、樋渡遺跡では墳丘墓の形成も見られる。また、同様の墳墓群として入部遺跡がある。ここでは鉄製武器が主体となるが、周囲に祭祀溝をもち墳丘墓であった可能性も強い。これら新発見の遺跡と従来から判明していた有田遺跡や飯倉青木遺跡の青銅武器副葬の墓地の分析から、国がどのようにして形成されたかの検証に大きな飛躍を期待できる。ともあれ、早良平野における弥生時代の歴史的動向は一つのモデルとして、今後に大きな期待がもてる。

古墳時代以降

古墳時代～歴史時代も考古学的調査で解釈の変化を余儀なくされている。早良平野はこれまで、前方後円墳のない地域として特殊視されていたが、重留の拝塚古墳は全長70.8mの特殊な形をした前方後円墳であることが判明した。また、吉武樋渡古墳も造出しをもつことがわかった。両者共に埴輪を有していることも特記すべきである。一方、海岸部遺跡である藤崎遺跡からは三角縁神獣鏡をもった方形周溝墓が発見され、弥生時代とは異なった勢力関係が成立していることがわかる。古墳時代に目立つ遺物として朝鮮陶質土器がある。他の平野と比較し、早良平野の量は多く、海外との関連性を追求する上でも注目される。

歴史時代でも変化は同様で、有田台地における三本柱の柵列区画（本報告他）や官衙的な掘立柱建物の発見などがある。早良平野における考古学的調査で、その歴史像は大きく塗りかえられようとしているが、その影には失われた遺跡の多さも忘れてはならない。

第３章　第６次調査の記録

１．調査区の地形と調査概要

第６次調査は福岡市早良区有田１丁目20－3の1289㎡を対象として調査を実施した。調査期間は1977年８月18日～10月30日の67日間にわたる。

調査区は早良平野の中央の北端近くに位置する有田・小田部の独立丘陵上に立地している。この独立丘陵は八女粘土層、鳥栖ローム層の洪積層を基盤とした中位段丘Ⅱ面で、有田の最高地（標高15ｍ）を中心とする中央部にはかなりの広さの平坦地があり、その南北には小さな谷に解析された舌状台地がヤツデ状に分枝している。調査区は中央部の最高地に近い標高約14ｍを測る南側斜面にあたる。調査前は畑地となっており、周辺の人家はほとんどなく、調査区から早良平野が一望のもとに眺められたが、現在は高層ビルが乱立し、かつての眺望は望めない。調査区は東西、70ｍ南北、18ｍの東西に細長い長方形区画をなしている。西側は丘陵中央部の最高所に近く、東側は調査区の隣接地から段状になって低くなるが、元来はゆるやかな傾斜面となっていたと推測される。なお、本調査区の一部は九州大学による第２次調査で調査されている。

調査区は厚さ約20～40㎝の表土層（現・畑耕作土）の直下に新期ローム層があり、縄文時代以降の包含層は存在しない。新期ローム層から鳥栖ローム、八女粘土層にかけて遺構が掘り込まれている。遺構の切り合い、重複関係はあまり多くない。検出した住居址の立ちあがりが極めて低いことや、包含層が存在しないことは、この地区が後世にかなりの削平を受けていることを示唆している。

本調査区から検出した遺物、遺構は各時代にわたっていて複雑である。以下、概要をみていこう。先ず、最も古い時期として新期ローム層中に旧石器時代包含層を確認した。ナイフ形石器、削器、剝片尖頭器等の石器のみが出土し、礫群の存在もある。周辺の調査区からも旧石器の出土があるので、この平坦面には転々と旧石器時代の包含層が存在していたとみられる。ただし、本調査区の旧石器時代包含層が礫群と石器のみから構成される点、特異なあり方であり注目される。縄文時代の遺跡は確認できないが、弥生時代の遺構として SD－03，SD－04 としたＶ字溝がある。SD－03 の正確な時期決定はできないが、上層には古式土師器が包含され、この溝が古墳時代には凹みとして残っていたことが想定される。下層には若干の中・前期の弥生式土器が包含されている。SD－04 からは最下面において前期弥生式土器を多量に検出した。これらの土器は板付Ⅱ式土器の古い段階の一括遺物であり、この時期の単純な構成は編年的にも重要である。古墳時代では２基の竪穴住居址がある。SC－01 は５世紀前半代、SC－02 は４世紀代に比定でき、特に SC－02 は床面に土器が当時の姿を保って良好な状態で出土した。住居址内の間仕切りや使用目的の問題を提供するものである。また、上層の凹みには、土師器高

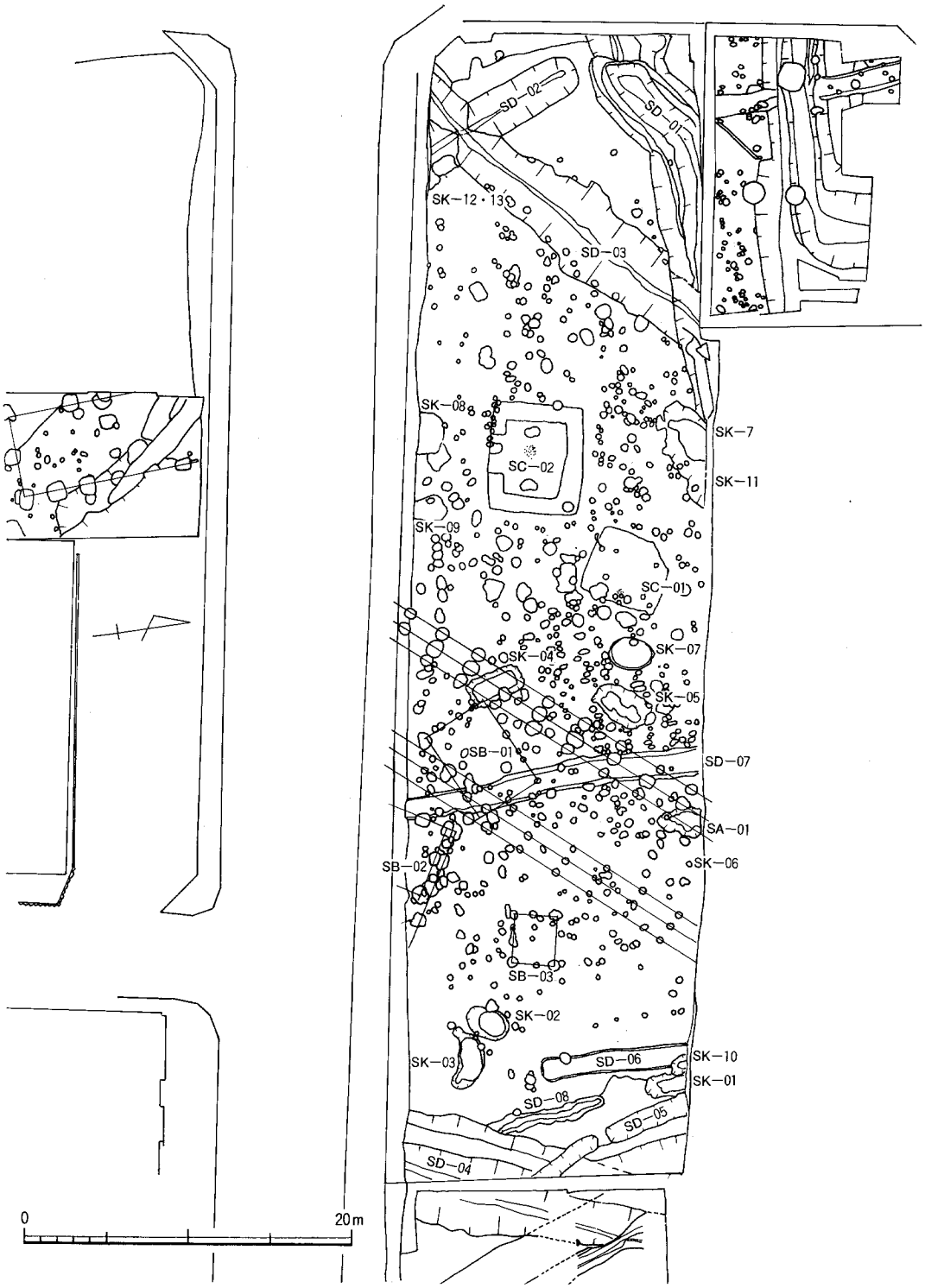


Fig. 3 第6次調査区遺構全体図

坏を主体とし、朝鮮陶質土器、初期須恵器をふくんだ祭祀遺物とみられる一括遺物が投棄されている。この他に古墳時代遺構としては南北に走る溝１条と数基の土坑がある。なお調査区全面にわたってピットや土坑や表土層中より朝鮮陶質土器や初期須恵器が出土していることは注目される。歴史時代遺構としては柵列２条と溝４条、土坑、墓(？)、掘立柱建物３棟がある。柵列は並列した３個の柱穴を一組とした３条の柵で、並列して２ヶ所を確認した。これらの柵列の一つは柱穴掘り方が１ｍ前後と大規模である。切り合い関係や出土遺物からは５世紀以降であることは疑いないが、正確な時期比定はできない。６～７世紀代のものであろうか。その性格を含めて問題の多い遺構である。歴史時代の溝はすべてが出土遺物から室町時代のものとみられる。小田部氏居城との関連遺構と考えることができる。

以上が本調査区の調査概要であるが、周辺地域では本調査後、約50ヶ所以上の地区で調査が実施され、各遺構の関連性等が明らかになりつつある。後節において本調査区の遺跡の関連性や復原を試みることとする。

２．旧石器時代の調査 (Fig. ４～７)

弥生・古墳時代の調査終了後、先土器時代の文化層の遺存が予見できたので調査を実施した。調査は、実測基準杭列から北側に幅３ｍの調査溝を設定して実施し、石器が出土したSC－02の西側を中心に北側に拡張した。その結果、SC－02の西側を中心に北側に拡張した。その結果、第２号住居址の西側と北側２ヶ所の石器集中区が検出できた。

Ａ群出土石器 (Fig. ４・６・７)

１・２・４・９・10の５点が標高13.67ｍ前後で出土した。１・２・４はナイフ形石器、９は剝片尖頭器である。10は剝片石器である。９は古銅輝石安山岩製で、他は黒曜石製である。２・９は縦長剝片の素材打点を基部とし、１・４は素材打点を刃潰し加工によって切断し、先端部としている。１・４の基部の主要剝離面には平坦剝離が加えられている。

Ｂ群出土石器と集石 (Fig. ５・６・７)

標高13.55ｍ～13.63ｍにかけて、21個の円礫・角礫が東西2.5ｍ、南北３ｍの範囲で出土した。新期・鳥栖ロームの境界にあたる。６・11・12の３点の遺物がＢ群出土遺物である。６・11は黒曜石製で、12は石英質の岩石である。６はナイフ形石器類、11・12は削片。

その他の出土石器 (Fig. ６)

３・７・８はナイフ形石器、５は台形石器で、８が古銅輝石安山岩製で、他は黒曜石製である。13は第４次出土、14～16は第５次出土で、14・15はナイフ形石器である。

以上、Ａ・Ｂ群の出土石器は新期・鳥栖ローム境界に位置し、出土したナイフ形石器類から、旧石器時代ナイフ形石器文化期のAT直上の文化層に比定できる。

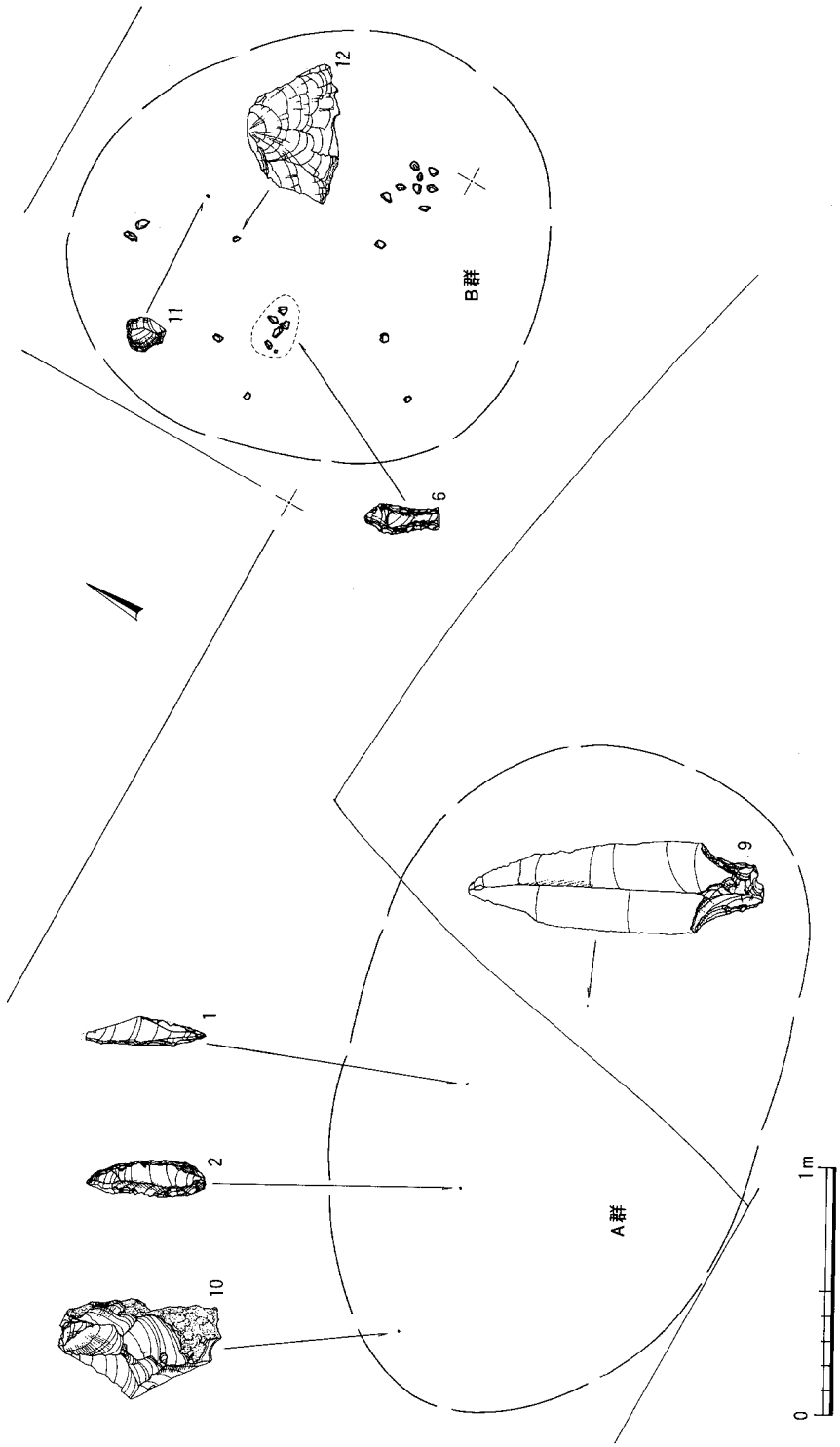


Fig. 4　第6次調査出土遺物分布状態

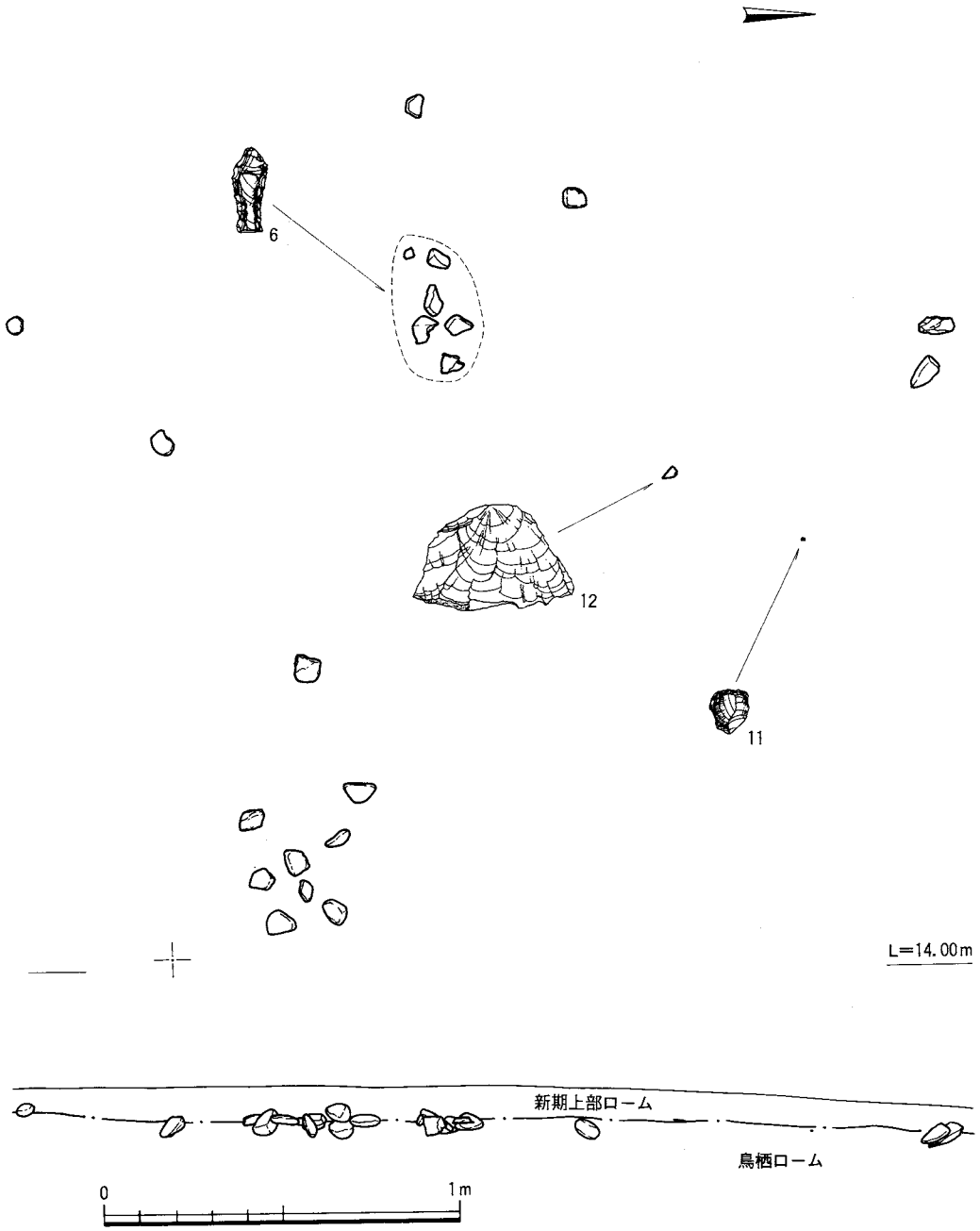


Fig. 5　B群出土石器分布状態および集石実測図

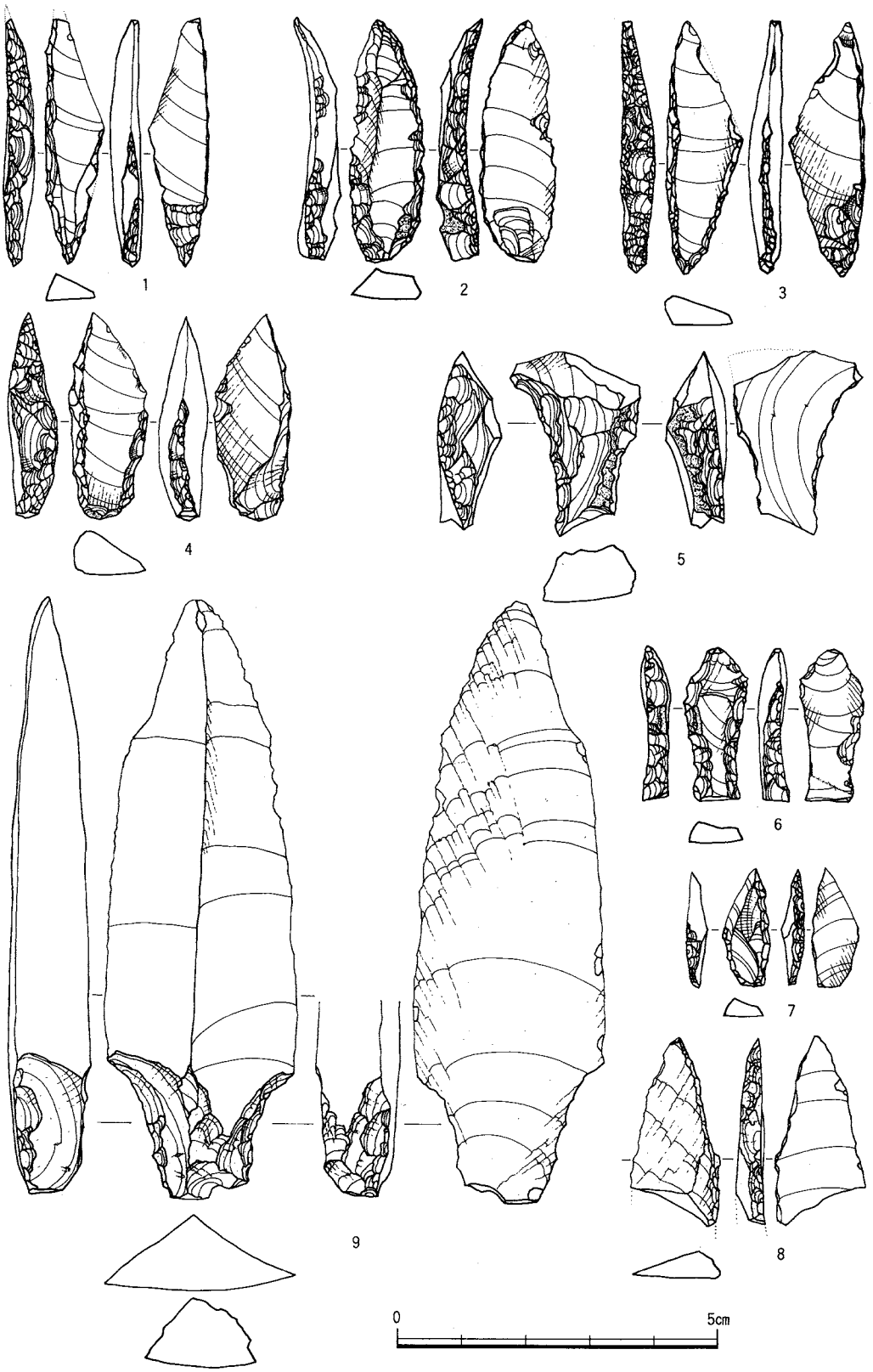


Fig. 6　第6次調査出土石器実測図(1)

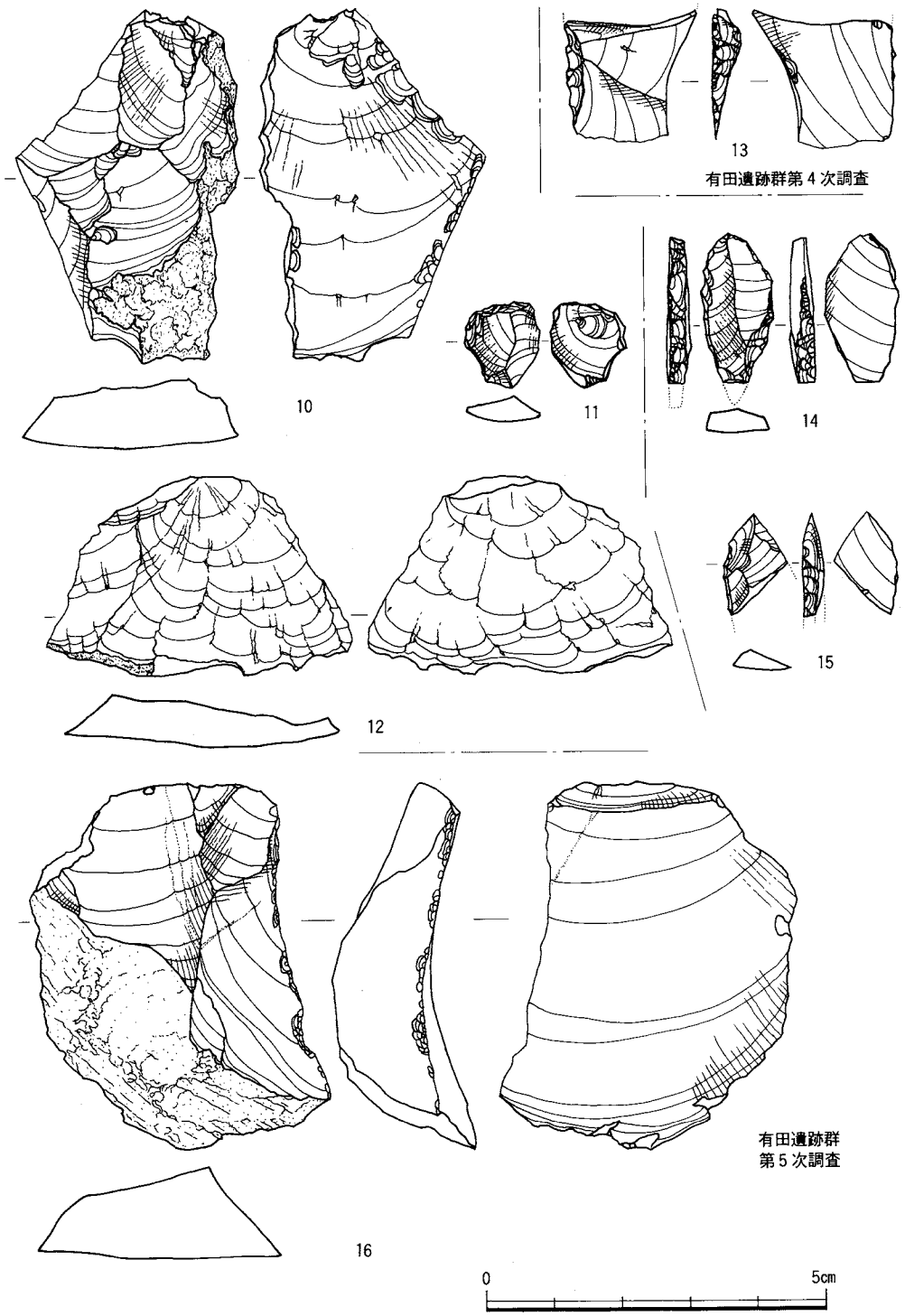


Fig. 7　第６次調査および第４・５次調査出土石器実測図(2)

3．弥生時代の遺構と遺物

(1) SD－03 と出土遺物

① **SD－03** (Fig. 8)

調査区の西端部に検出した弥生時代のＶ字溝である。N－50°－E に主軸方向をとり、調査区内ではほぼ直線的にのびる。SD－01 と SD－02 と重複関係にあり、いずれにも切られている。九州大学考古学研究室による第２次調査の31街区Ｃ溝と同一の遺構である。調査区内で検出した溝の長さは23ｍ，幅は３ｍ～５ｍで南側に行くにしたがい狭くなる。深さは1.35ｍ～2.0ｍで、北に行くにしたがい深くなっている。断面は幅広いＶ字形をなしているが、溝底は一段深く掘り込まれている。

溝内の埋土の堆積は Fig. 8 に示すように流れ込みによるレンズ状堆積である。表土下の層序は、第１層、黒褐色粘質土、厚さ20～50cm。第２層、第３層中に見られる焼土のブロック層である。第３層、パミス混在の黒褐色粘質土層、厚さ10～40cm。第４層、第３層同様パミス混在の黒褐色粘質土層であるが、第３層に比較し、より黒く粘質も高い。厚さ約25cm。第３、４層は第５層中に掘り込まれた遺構の可能性が強いが、プランや性格については明らかにすることができなかった。第５層、パミス混在の黒褐色粘質土層である。第３、４層に比較し、明るい色であるが、粘性は強い。厚さは20～60cmと厚い。第６層、鳥栖ロームと黒色土の混在した層で、黄褐色粘質土層、厚さ10～20cm。西側に片寄って堆積しており、西側一方からの流れ込

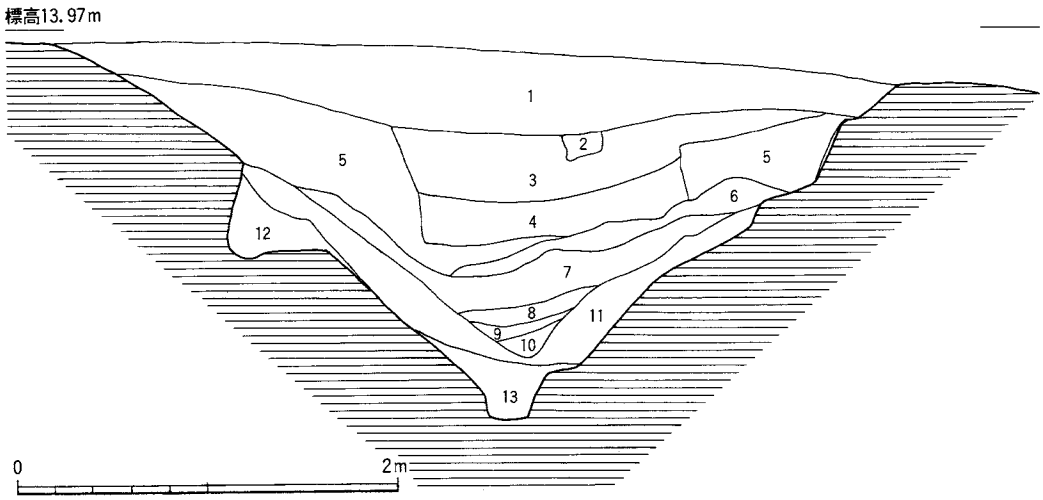


Fig. 8 SD－03 断面実測図

みと推測できる。第７層、パミスが若干混在する黒色粘質土層、厚さ10～30cm。第８層、砂混在の暗褐色土層、厚さ10cm。第９層、砂混在の黒褐色土層、厚さ５～10cm。第10層、やや粒子が荒い砂混在の暗褐色土層。第11層、褐色土層、厚さ10～25cm。第12層、鳥栖ローム混在の黄褐色土層、壁の凹みを埋めている。第13層白色混入の赤褐色粘質土（八女粘土層）で埋まる。Ｖ字溝掘削直後に堆積した層である。

この土層観察からは、第11層堆積後に溝さらえが行われたと考えることができる。遺物が包含されるのは第１～５層であり、第１層中には後述するように多量のタコ壺が存在する。第１～５層の出土遺物は古式土師器を主体とするものである。第７層以下は遺物は極端に少なく、この溝の掘削時期を確定することは困難であるが、第11層からは出土遺物でのべるように板付Ⅰ式土器の小型壺底部１点が出土している。

② 遺物出土状況（Fig. 9）

SD－03 の出土遺物は後述するように、その大部分は上層、古墳時代のもので、下層よりの遺物は極端に少ない。上層遺物は第１～５層からの出土であるが、集中部分や完形品があるとか特別の出土状態はない。ただし、第１層より出土した飯ダコ壺の一群は使用のあり方を推測するのに極めて示唆的な出土状況を示している。（Fig. 9）飯ダコ壺の一群は SD－03 の北側部分で出土した。溝の東岸部から溝内にかけてほぼ一直線に並んだ状態で５ｍの範囲に出土している。飯ダコ壺の総数は約40個体分である。溝岸部分の飯ダコ壺は割れていて完形を保つものはなく、やや散在した状

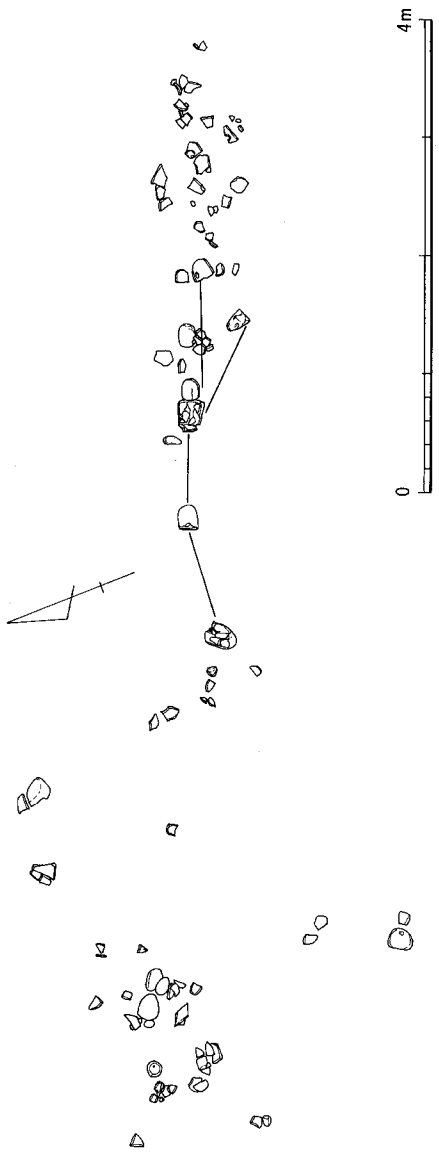


Fig. 9 SD－03 上層遺物（タコ壺）出土状況

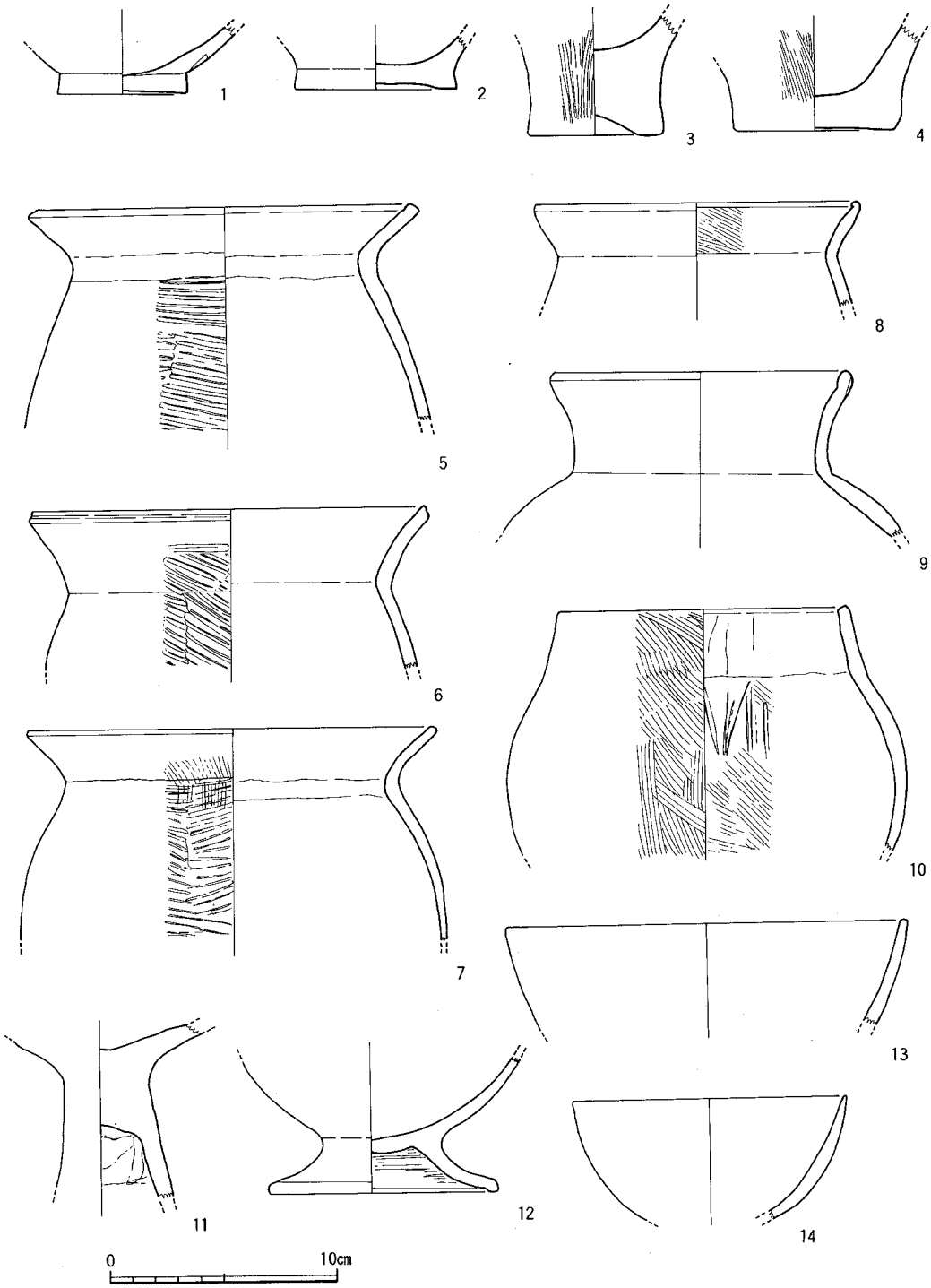


Fig. 10 SD－03 出土遺物実測図Ⅰ

態であるが、溝の凹みにある飯ダコ壺は完形品が多い。一括投棄された状態であることは疑いない。溝の凹みの最も深い部分に重なりあって集中することは、上記の推測を裏づけるものであるが、ここで注意したいのは、岸部から溝にかけて直線的に間隔をもって並んだ飯ダコ壺の出土状況である。図に直線で結んだ飯ダコ壺間の距離は約50cmと同一値を示している。この数値は偶然の結果としては考え難く、その間隔が意味をもっていることは充分考えられることである。一つの解釈としては使用時におけるハエ縄に結ばれた飯ダコ壺の間隔とみることができよう。そうすれば、一括投棄のタコ壺によってタコ漁のハエ縄の規模や当時の漁業のあり方をより具体的に把握することができることになる。今後、類例をもって検討を加えてみたい。

③ 出土遺物 (Fig. 10～12)

SD－03（第２次調査Ｃ溝）の出土遺物は第２次調査では良好な資料が多数出土し、土師器編年の標式資料として使用されているが、今次調査では破片は多量に存在するものの、タコ壺を除いて図化できるものはきわめて少ない。以下、図示したものについて説明する。

Fig. 10－1～4 は弥生式土器底部破片である。１は第11層出土、３、４は出土層位は明らかでないが、土師器出土層（以下上層とする）より下層から出土している。２は上層に混在して出土。１はいわゆる円盤貼り付けで小壺の底部である。底部端がやや張り出しわずかに断面が台形状をなす。外面は丁寧なヘラ研磨、内底部にはヘラの調整がみられる。胎土は精選され良質、焼成良好。底径5.6cm。２も１同様に小壺の底部である。器面は荒れて磨滅している。１ほど明瞭な円盤貼り付けの底部ではない。ややあげ底である。胎土には砂粒を含む。底径7.0cm。１は板付Ⅰ式、２はやや後出のものである。３は城ノ越式の甕の底部である。わずかにあげ底になる。底径6.0cm。外面に縦位の刷毛目痕が残る。４は前期の甕形土器の底部。胎土には多量の砂粒を含み、良質ではない。胎土の特徴は板付Ⅰ式土器の胎土に近い。外面に細い縦位の刷毛目痕が残る。底径7.0cm。下層出土の遺物は極めて少なく、溝の掘削時期を決定するのは困難であるが、以上の４点の土器からすると前期にさかのぼる可能性が強い。

５～14は土師器である。５～８は口縁部がくの字に外反する甕形土器である。いずれも保存状態が悪く、器面が荒れている。５は胴部外面は粗い平行タタキ、口径17.0cm。６は口縁端部に沈線一条がめぐる。外面は粗い平行タタキで、口縁部はナデ消される。口径17.4cm。７は口縁端部を丸くおさめる。外面に粗い平行タタキ、口縁から頸部にかけてタタキの上に縦位の刷毛目を施す。口径18.0cm。８は口縁端部内側をつまみ上げて段を形成する。内外面の調整不明。口径14.1cm。９は壺形土器。口縁部はわずかに外反しながらたち上がり、口縁端部が内傾する。肩部は大きく張る。内外面の調整は不明。口径14.2cm。10は無頸壺。内面は粗い斜位の刷毛目調整で、口縁部は上からナデが加えられる。内面は条痕状の削りあげで、口縁はその上からナデが加えられる。胎土には砂粒を含む。口径12.8cm。胴部はあまり張らない。11は高坏脚部。

脚筒部内側はヘラ状工具による削り状をなす。坏部と脚筒部は厚い。12は脚付鉢と考えられる。脚部は低く外にひろがる。脚端部は内側に肥厚し、段を有する。内外面は横ナデ調整。脚端部径10.0cm。13、14は口径11.0cm。いずれも内外面の調整は不明。

Fig. 11－1～3 は須恵器である。いずれも第Ⅰ層よりの出土である。1は蓋付坏の身。口縁部を欠失する。受部復原径12.9cm、たちあがりは高くなる。受部下に一条の凹線がめぐり、底部の3/4の範囲に回転ヘラ削りが施され、他は横ナデ調整である。ロクロ回転は左まわり。焼成は堅緻で、胎土に若干の砂粒を含む。2は有蓋高坏の坏部破片である。蓋受けのたちあがりを欠失するが、低く内傾するものと考えられる。受部は上外方にのび、復原受部径13.3cm。内外面とも横ナデ調整。脚部は接合部を欠く。焼成は堅緻で、胎土に若干の砂粒を含む。3は器台脚筒部の破片である。裾部と筒部の境に二条の鋭い突線をめぐらす。文様帯には長方形の透し窓があけられ、窓の横は上下二段に櫛描波状文が配される。胎土に若干の砂粒を含み、焼成は堅緻である。

4～6は石器。4、5は今山産の玄武岩太形蛤刃石斧の破片である。4は刃部破片。刃部は

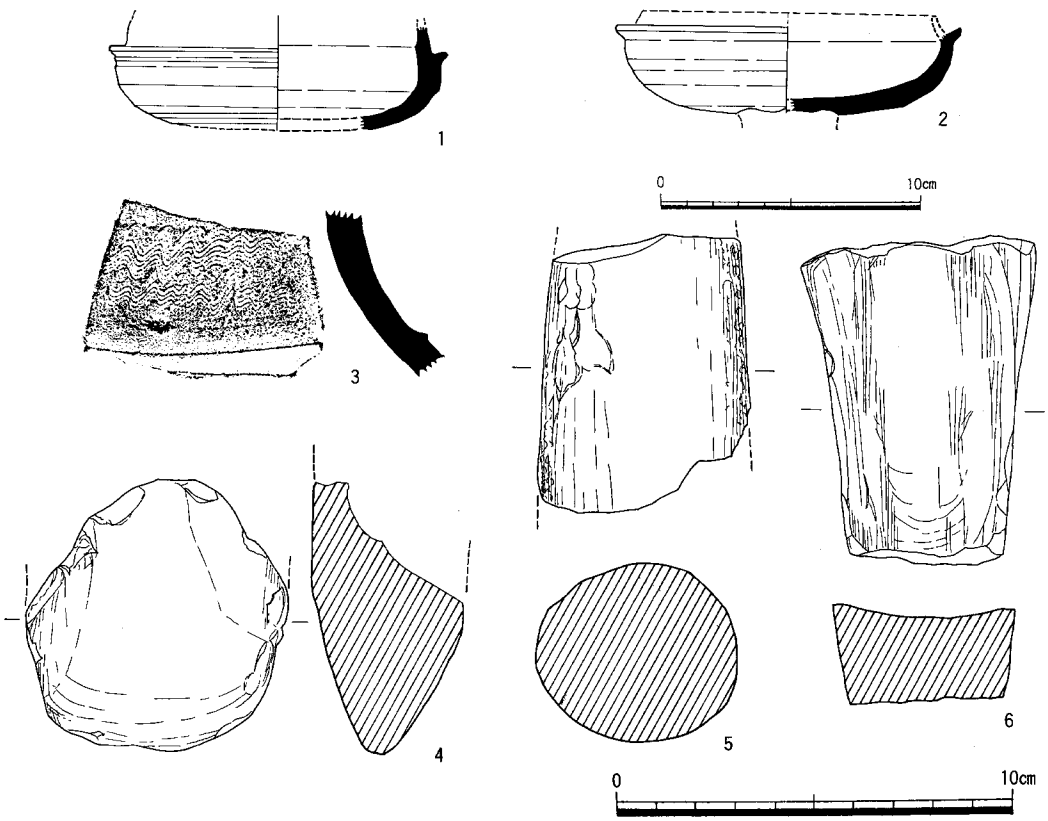


Fig. 11 SD－03 出土遺物実測図Ⅱ

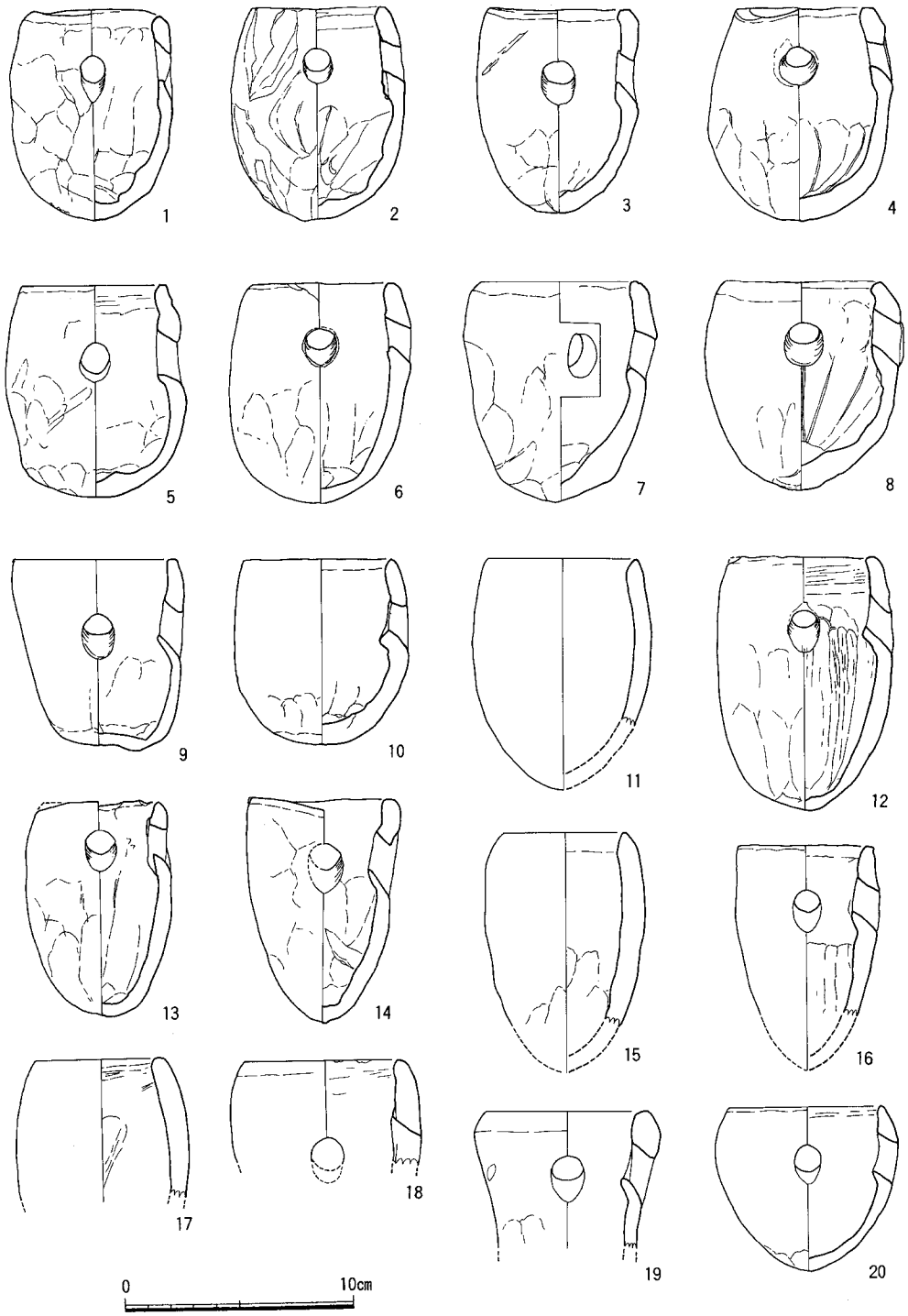


Fig. 12 SD－03 出土遺物（タコ壺）実測図Ⅲ

使用によってつぶれている。5は体部破片。断面形は円形に近い。共に風化が著しく研磨痕等は不明。下層出土である。6は砥石。長辺は三辺が使用され、特に図示した面は使用によって大きく凹んでいる。砂岩製の中砥と考えられる。二次的に火を受け赤変している。上層の第Ⅱ層出土である。

Fig. 12－1～20は飯ダコ壺である。形態的には大きな差はないが、小さな形状の違いからⅣ類に分類できる。

Ⅰ類（1～10）口径6～7㎝、器高7～9㎝、口径より器高がやや長い。口縁端部は丸くおさめ内傾する。全体に成形の指押さえの痕跡が顕著であるが、口縁内側は指押さえの上に横ナデ調整を加え、痕跡を消している。3、4、8は内底部にヘラによる器面調整が加えられ、その痕跡が放射状に残る。底部はゆるやかな丸底をなす。紐結びの孔は外側下方から内側上方に向って穿つ。器壁の厚さ5～8㎜、胎土にはやや粒子の大きい石英、長石、黒雲母、赤色鉱物の砂粒を含み、やや不良、焼成は普通である。色調は白黄色～黄赤色で1ヶ所に黒斑がみられる。

Ⅱ類（11、12）わずか2個体がある。Ⅰ類に比較し、体部が長くなり、やや大型品である。口径約7㎝、器高11㎝前後、口縁端部はやや尖り気味におさめる。口縁部はわずかに内傾する。体部の成形、調整はⅠ類と同様であるが、内面はやや丁寧なヘラナデ調整。胎土、焼成、色調はⅠ類と同じ。

Ⅲ類（13～16）口径5～6.5㎝、器高9.2～10㎝、口縁端部はやや尖り気味のものと丸くおさめるものとがある。口縁部はあまり内傾しない。底部は尖り気味の丸底で、Ⅰ、Ⅱ類に比較し細身である。成形、調整はⅠ・Ⅱ類と同様であるが、外面の指押さえの痕跡は顕著ではない。13、16は内面にヘラ調整がみられる。胎土、焼成はⅠ・Ⅱ類と大差ないが、色調は黄赤色～赤褐色である。

Ⅳ類（20）1個体があるのみである。口径6.6㎝、器高7.2㎝、Ⅰ～Ⅲ類に比較し、器高が低い。口縁端部は尖り気味におさめる。成形の指押さえの痕跡は顕著でなく、口縁内側は横ナデ調整。胎土等は他と同様である。

その他（17～19）口縁部破片、形態的にはⅠ～Ⅲ類のいずれかにはいると思われる。ただし、19は口縁部が外反気味になる。なお、体部に籾圧痕があり、注意される。他に飯ダコ壺とわかる破片は数多いが図化していない。約40個体が存在する。

(2) SD－04と出土遺物

① SD－04 (Fig. 13)

調査区の東端部に検出した弥生時代前期のV字溝である。N－20°－Eに主軸方向をとる。調査区内ではほぼ直線的にのびるが、溝の東岸部は調査区外に拡がる。SD－05と切り合い関係

にあり、SD－05 に切られている。

調査区内で検出した溝の長さは15m、幅は調査区外に拡がるので明らかでないが、現状幅4mである（後の調査で溝幅は、7mを測ることが判明）。深さ2.5m、断面は幅広のV字形をなす。大規模なV字溝である。

溝内の埋土の堆積状況は Fig. 13に示したように、自然の流れ込みによるレンズ状をなしている。表土下の層序は次のようになっている。第1層、固まりの悪い腐植土、黒色土層である。厚さ20～40cm。第2層、ロームの小ブロックを多く含んだ黒黄褐色土層、厚さ10～30cm。堆積は西側に片寄っており、溝西側からの流れ込みである。第3層、ロームブロックを若干含んだ黒色粘質土。厚い堆積で20～90cmの厚さを有する。第4層、ローム小塊を多量に含んだ黒黄褐色粘質土層、厚さ20～30cm。第5層、黒褐色粘質土層、厚さ10cm。第6層黒色粘質土層、厚さ10cm。西側に片寄った堆積である。第7層、黄褐色粘質土層、厚さ10～30cm。第8層、黄褐色土層、厚さ10～20cm。第7・8層には前期土器が、出土状況で述べるように多量に堆積している。第9層、暗黄褐色土層、厚さ10～20cm、東に片寄った堆積である。第10、11層、黒～黒褐色土層、厚さ10～20cm、東に片寄った堆積である。第10、11層、黒～黒褐色土層、厚さ10cm前後、西に片寄った堆積、第11層、黄褐色土層、厚さ20cm。第12層、黒褐色土層、厚さ10cm。第13層、黄褐色土層、厚さ10cm。第14層、溝底に堆積する層で黒褐色土層、厚さ10cm。第15層、壁に密着した土層で暗黄褐色土層、粘質である。厚さ5～10cm。第1、2層には古式土師器が

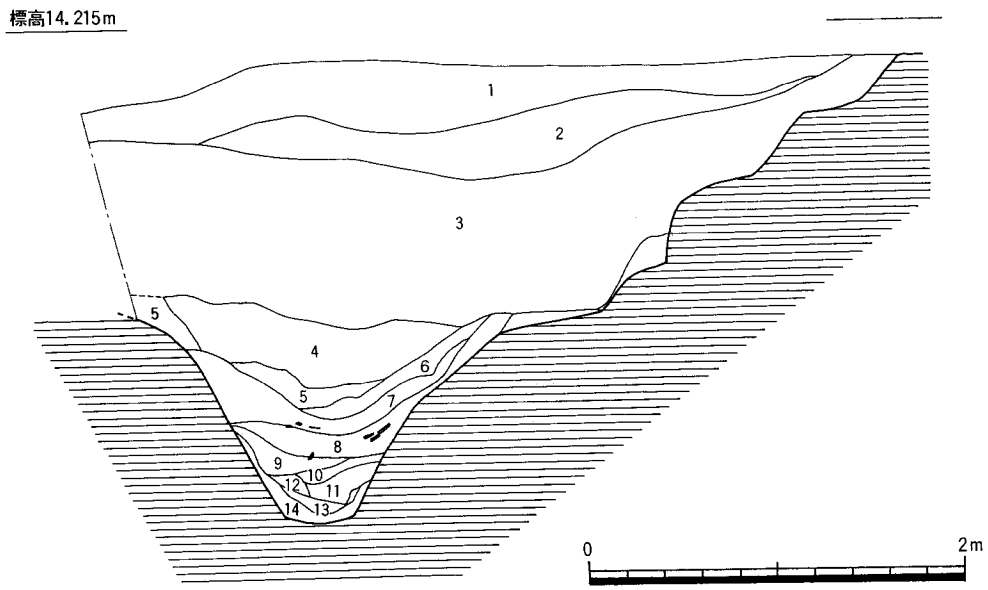


Fig. 13 SD－04 断面実測図

包含されており、古墳時代には、この溝はまだ凹みとして残っていたことが推測できる。

② 下層遺物出土状況 (Fig. 14)

SD-04 の遺物は、上層遺物と下層遺物に大別できるが、上層遺物は後述するように極めて少ない。下層遺物は量は多いが、出土層は第7層と8層に限定され、他の層から出土する遺物は希である。

下層出土遺物は大部分が土器で、他に数点の石器がある。土層堆積の状況からみて下層土器はV字濠掘削後、あまり時間の経過を経ずして遺物が投棄されたと考えられる。出土状態はFig. 14に示したように、濠底いっぱいにぎっしりと破片が重なり合う状態である。これらを詳細に観察すると、いずれもが破片の接合によって完形近くに復原できるものばかりであり、しかも、器種の90%以上が大型壺によって占められている。甕は極めて少なく、2個体が存在する。1個体は板付系の甕で完全に復原できたが、他の1個体は刻目突帯文土器の口縁部小破片である。このような器種構成の極端な片寄りや、そのほとんどが完形品に近いこと、また、出土状況から一時期に投棄されたと推測されることは、これらの土器が単に濠内に捨てられたとするには不自然である。このような出土状況を作り出す要因が何によるか現時点では合理的な解釈は持ちあわせてはいない。ただし、初期の環濠集落で有名な板付遺跡をはじめ、他の環濠集落の濠内の土層堆積と土器の出土状況は、完形品に近い土器がぎっしりつまった土器層と全く無遺物層に近い層の繰り返しが観察できる点、本例と極めて類似している。

今後、充分検討すべき問題点であろう。

③ 出土遺物 (Fig. 15～18)

出土遺物には土器と数点の石器片がある。土器は前期板付Ⅱa式の単純期のもので、90%以上が大型壺によって占められ、甕や小型壺は数点の出土である。出土点数は多いが、ここでは、ほぼ完形に復原できたものを図示した。

Fig. 15-1 は夜臼系の大型壺である。底部を欠失するため底部形態は不明。胴部は球状をなし、胴部最大径はやや上方にある。肩部と頸部の境に沈線一条を巡らす。頸部は内傾しながらゆるやかに立ちあがり、口縁端部は丸くおさめる。外面と口縁部内側は丹塗りされ丁寧なヘラ研磨調整が加えられるが、丹ははげおちている。頸部内側に指押えの痕跡が残る。胴部内面には粘土接合部が明瞭に残るところがあり、内傾接合である。胎土は石英、長石の砂粒を多く含んでいるが良好。焼成は良く、色調は黄褐色をなす。胴部の相対する二ヶ所に黒斑がみられる。口径19.2cm、胴部最大径31.7cm、現在高30cmで復原高は35cm前後と考えられる。

2は板付系の大型壺である。底部は円盤貼り付けをなす。胴部は大きくふくらみ、胴部最大径は中位である。肩部と頸部の境にはわずかに段を形成し、5条の沈線がめぐる。沈線下には

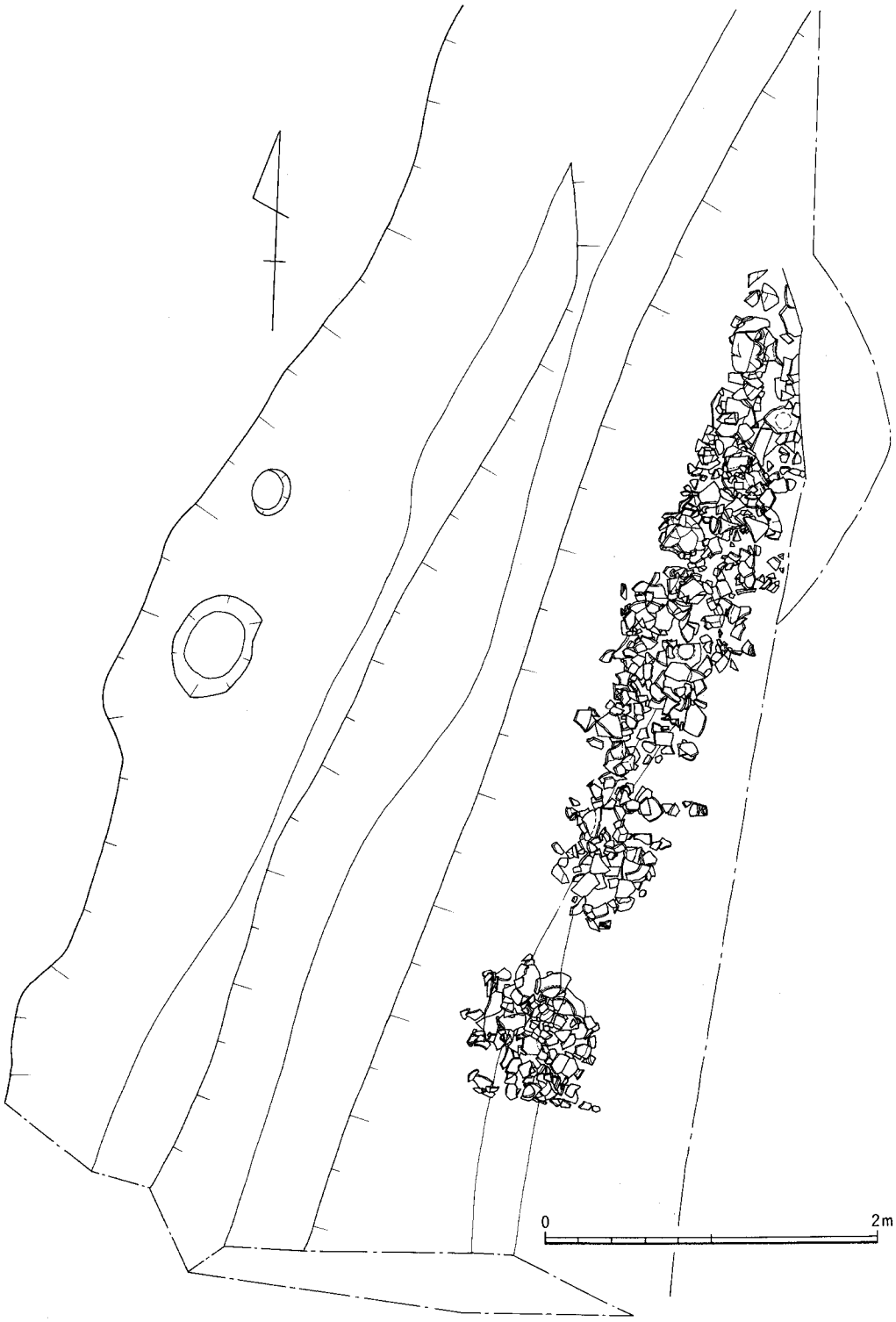


Fig. 14　SD－04 平面実測図と遺物出土状況

4条の沈線で複線山形文がめぐるが、山形文は直線的ではなく、やや弧状をなす。また、山形文は連続的に描いたのではなく、1個ずつ個別に描かれたものである。頸部は内傾しながらたちあがるが上半部を欠している。外面は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、胴中位の相対する部分に黒斑がみられる。胎土には石英、長石の砂粒を多量に含む。焼成は良好、赤褐色をなす。底部径9.7cm、胴部最大径33.6cm、現在高28cmで復原高は35cm前後とみられる。

3は夜臼系の大型壺である。底部を欠失し底部形態は不明。肩部が張り、胴部最大径は上位にある。やや長胴になると考えられる。頸部と肩部の境に沈線2条がめぐる。頸部は内傾しながらゆるやかにたちあがり、口縁部は外反する。口縁端部は角ばっている。肩部には沈線各1条をめぐらし、二段の帯区画をつくり、その間を斜格子文で埋めるが、上、下の斜格子文は別々に描かれている。外面と口縁部内側には、丁寧な横方向のヘラ研磨が加えられる。胴部上位に黒斑がある。胎土には石英、長石の砂粒が多量に混入されている。焼成は良好。色調は黄白色をなす。口径19.5cm、胴部最大径36.3cm、現在高28.2cm、復原器高40cm前後と考えられる。

Fig. 16-1　底部は円盤貼り付け状で、やや高い。胴部は球状に張り、胴部最大径は中位にある。肩部と頸部の境には沈線4条をめぐらす。頸部は内傾しながら短くたちあがる。口縁部は粘土を貼り付けて肥厚させ、端部は外反し、丸くおさめる。外面から口縁部内側にかけて丁寧な横方向のヘラ研磨が施される。肩部から胴部にかけて大きな黒斑があり、それと相対する部分にも小さな黒斑がある。胎土には石英、長石、赤色鉱物の砂粒が多量混入される。焼成は良く、色調は白黄色をなす。底部径10.2cm、胴部最大径22.4cm、口径17.4cm、器高32.5cmを測る。

2は底部が円盤貼り付け状でややあげ底状をなす。胴部は球状に張り、胴部最大径は上位にあり、肩部が張る。肩部と頸部の境に沈線2条をめぐらす。頸部は内傾しながら短くたちあがる。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下位に明瞭な段を形成する。口縁端部は外反し、丸くおさめる。外面から口縁部内側は丹塗りで、丁寧な横方向のヘラ研磨調整が施されるが、器面の遺存状態が悪く不明瞭である。頸部内側は押圧痕が残る。胴部最大径近くの相対する2ヶ所に黒斑がみられる。胎土にはやや粒子の粗い石英、長石の砂粒が混入される。焼成はややあまい。色調は保存状態の良い所は赤色で、荒れた所は黄白色をなす。底径10cm、胴部最大径36.6cm、口径19cm、器高37cmを測る。図示した中で最も大型品である。

Fig. 17-1 は板付系の大型壺である。底部はややあげ底状の平底。胴部は外傾しながらたちあがり、肩部がやや張る。最大径は上位にある。肩部と頸部の境には3本の沈線をめぐらす。頸部は内傾しながら短くたちあがる。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段を形成する。口縁中位から外反し、端部は丸くおさめる。外面と口縁内側は横方向の丁寧なヘラ研磨調整、底部近くは斜位のヘラ研磨である。研磨の前は全面に刷毛目調整が加えられていたとみられ、部分的に観察できる。胴中位に籾圧痕がある。肩部とそれに相対する胴下位に黒斑が認められる。胎土は他と同様で砂粒の混入が多い。焼成は堅緻で、色調は赤褐色をなす。底部径

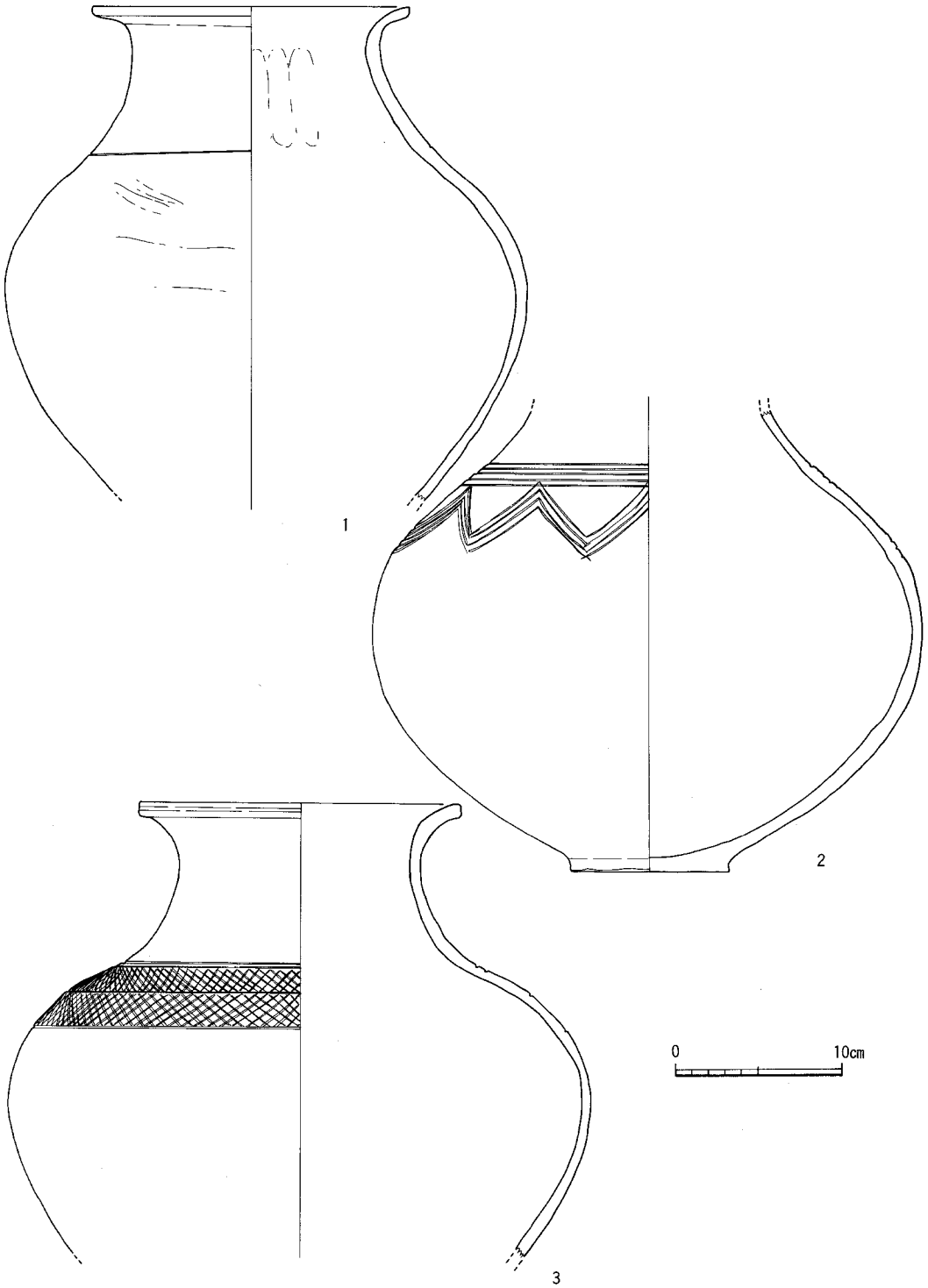


Fig. 15 SD－04 出土遺物実測図Ⅰ

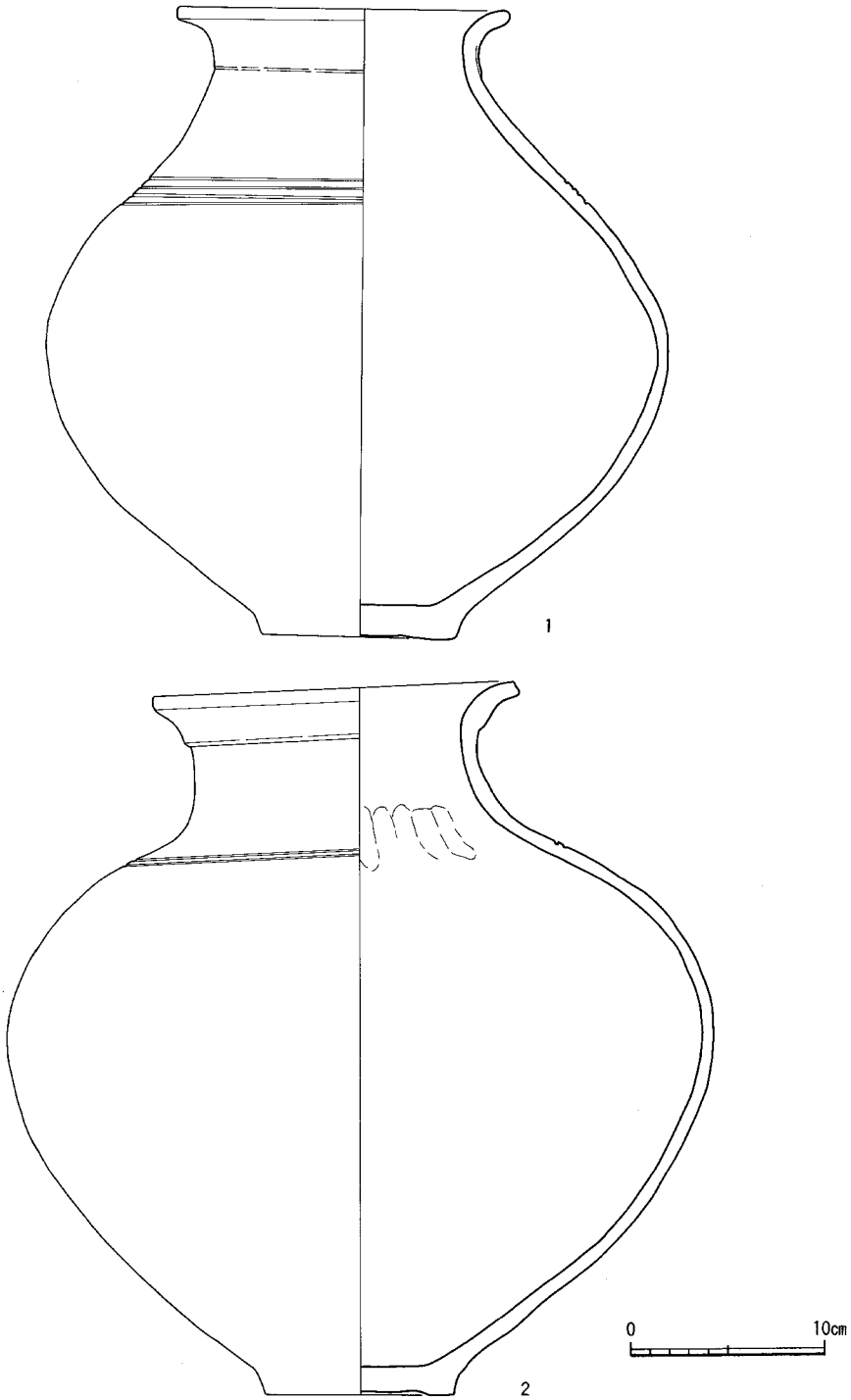


Fig. 16 SD－04 出土遺物実測図Ⅱ

9.5cm、胴部最大径32.5cm、口径17.7cm、器高36.2cmを測る。

2は底部を欠失する。胴部は球状に張り、最大径は中位にある。肩部と頸部の境に4条の沈線をめぐらす。頸部は内傾しながらゆるやかにたちあがる。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端にゆるやかな段を形成する。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面と内面の上半部は丹塗りされているが、保存状態が悪く、はげおちている。外面と口縁部内側は丁寧な横方向のヘラ研磨調整、他の内面は指圧痕が顕著に残る。胎土には砂粒が混入されるが良質、焼成はややあまい。色調は赤色～黄褐色、口径18.6cm、胴部最大径29.6cm、残存高23.7cm、復原高は28cm前後、他よりやや小型品である。

3は板付系の大型壺である。底部を欠失する。胴部は球状に膨み、最大径は上位にある。肩部と頸部の境に沈線1条をめぐらす。頸部は内傾しながらゆるやかにたちあがり、口縁上半で大きく外反する。口縁部には粘土を貼り付け肥厚させ、下端部に段が形成される。口縁端部は角ばり、浅い凹線がめぐる。外面から口縁内側にかけて横方向の丁寧なヘラ研磨、頸部内面は指押さの痕跡が顕著である。肩部に黒斑1ヶ所がある。胎土には多量の石英、長石の砂粒を含む。焼成は良好で、黄褐色～赤褐色をなす。口径17.9cm、胴部最大径33.4cm、現在高27.6cm、復原高33cm前後と考えられる。

Fig. 18-1は板付系土器の大型壺である。底部はケズリによってあげ底状をなしている。胴部は球状に膨れるが、胴部最大径は上位にある。肩部と頸部の境に1条の沈線をめぐらす。頸部は内傾しながらゆるやかにたちあがり、口縁部で大きく外反する。口縁部は粘土帯を貼り付け肥厚させる。下端部に段が形成され、口縁部は丸くおさめる。肩部には3本の沈線によって重弧文が描かれる。外面から口縁部内側にかけては丁寧な横方向のヘラ研磨、頸部内側は指押さえの上に横ナデを加える。胴部内側には粘土接合痕が部分的に残る。それからみた粘土帯の幅は4cm前後である。外面の一部にススが付着している。胎土には石英、長石、雲母の砂粒を多く含む。焼成は堅緻、色調は淡黄褐色をなす。底部径8.2cm、胴部最大径31.7cm、口径19.7cm、器高33.4cmを測る。

2も板付系の大型壺であるが、他とは器形的に若干の違いがある。底部は円盤貼り付け状をなす。胴部はやや膨み、胴部最大径は中位にある。肩部と頸部の境が不明瞭で、胴部から直接口縁部にいたるような器形である。口縁部下半に粘土を貼り付け肥厚させ、下端に段ができる。口縁端部は丸くおさめる。外面から口縁内側にかけてはヘラ研磨が施されるが、遺存状態が悪く不明瞭である。頸部には指押さえの痕が顕著である。胎土は粗い砂粒を多量に含み、良くない。焼成はややあまい。色調は黄褐色、体部の三ヶ所に黒斑がある。底部径8.9cm、胴部最大径28cm、口径19.1cm、器高34.8cmを測る。

3は小壺。底部を欠失するが円盤貼り付け状になると考えられる。胴部は球状に膨み、最大径は中位にある。肩部と頸部の境は不明瞭で、沈線1条がめぐり、段がつく。内面も同様で粘

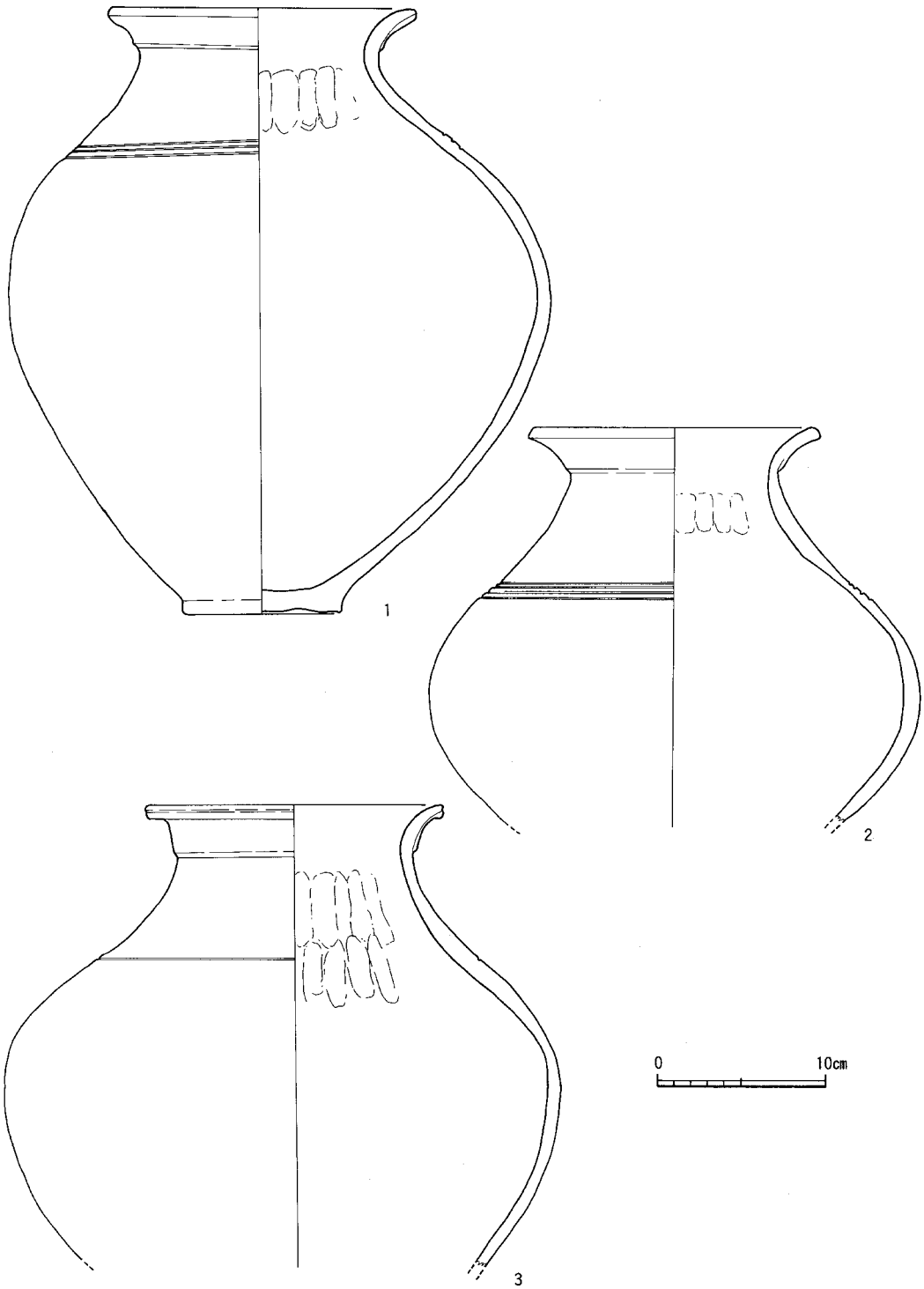


Fig. 17 SD－04 出土遺物実測図Ⅲ

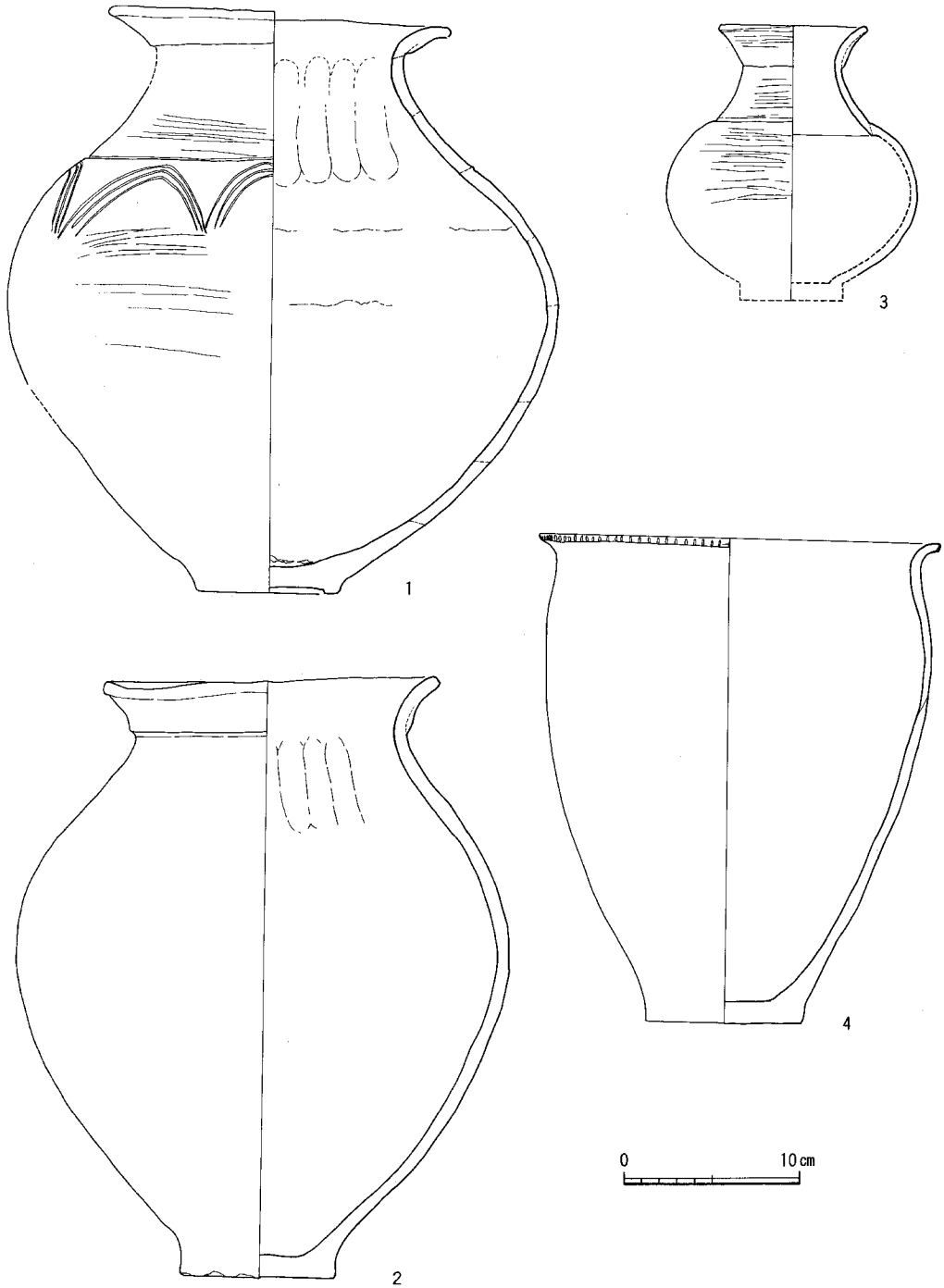


Fig. 18 SD－04 出土遺物実測図Ⅳ

土接合の段が残っている。頸部は内傾しながらゆるやかにたちあがり、口縁部が外反する。口縁部には粘土が貼り付けられ、肥厚する。外面と口縁内側は丁寧な横方向のヘラ研磨、内面はナデ調整である。口縁端部に赤色顔料が付着しているので、元来は彩文土器であった可能性が強い。胎土は精選された良質のものを用い、焼成は良好。色調は黄褐色である。板付Ⅰ式の小壺の特徴を良く備えている。この土器の共伴からみて他の大壺の時期が古いことが推測できる。口径8.6cm、胴部最大径14.5cm、現在高14cm、復原高15.5cm前後とみられる。

4は甕形土器である。甕はこの一個体の他、刻目突入帯文をもつ口縁部小破片があるのみである。底部は平底で、体部は外傾しながらたちあがり、あまり膨まない。口縁部は如意状に外反し、端部下半に細いヘラによる刻みがつけられる。内外面共ナデによる調整がみられるが、遺存状態が悪く不明瞭、胴部下半から上半部にかけて二次的に火を受け変色している。胎土には石英粒を含む。焼成は普通。色調は褐色～黒褐色である。口径12.8cm、器高27.9cm、底径9cmを測る。

④ 上層遺物出土状況 (Fig. 19)

上層の遺物は極めて少なく、ここに示す3点のみである。第2層、暗褐色土層の下半において出土した。出土状況は Fig. 19に示すように3個体が1ヶ所に集っていた。甕と鉢は割れて重なり合い、やや離れて短頸壺が横たわっていた。特別の出土状況ではなく、投棄され、溝の凹みにたまった状態とみられる。ここで重要なことは、弥生時代の前期に掘削された濠が、古墳時代前期には、まだ凹みとして残っていたとみられることである。

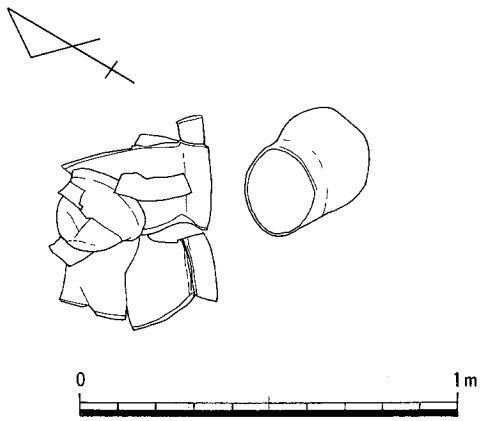


Fig. 19 SD－04 上層遺物出土状況

⑤ 上層出土遺物 (Fig. 20)

甕、短頸壺、鉢の3個体があり、いずれも復原してその器形を知ることができる。

1は長胴の甕である。底部はわずかであるが平底の痕跡をとどめている。胴部はわずかに膨らみ長胴。口縁部はくの字に屈曲し外反する。口縁端部内側が肥厚する。体部外面は粗い平行タタキを斜位に入れ、下半部はヘラナデによってタタキを消している。口縁部外面はタタキの上に刷毛目調整、内面は斜位の刷毛目調整。体部内面は丁寧な刷毛目調整である。内底部は指押さえの凹みが顕著である。外面にスス

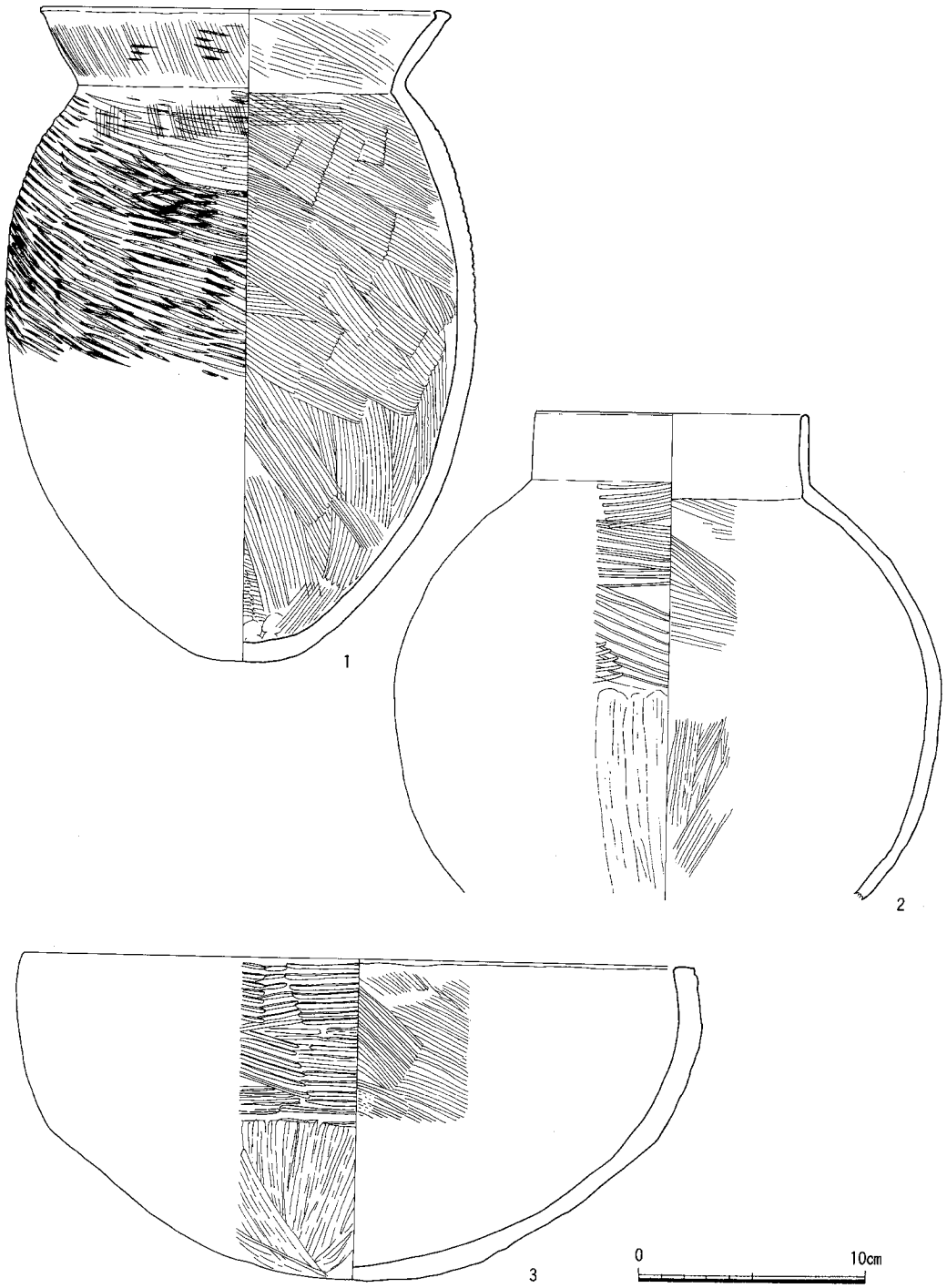


Fig. 20 SD－04 上層遺物実測図

が付着する。口径17.8cm、器高28.5cm。2は短頸壺。体部は球状をなし、口縁部は短くたちあがる。体部外面は粗い平行タタキ、下半部は削り状のヘラナデによってタタキが消される。内面は刷毛目調整。口径12.0cm、胴部最大径23.7cm。3は大型の鉢。底部は丸底で器形はボール状をなす。口縁端部は平坦に仕上げる。体部外面は平行タタキを横位に施し、下半部は棒状のヘラで削り状のナデを施しタタキを消している。内面は刷毛目調整後ナデを加えて丁寧に仕上げる。口径29.2cm、器高14.0cm。3個体共焼成良好。胎土はわずかに砂粒を含むが精良。色調は1が黄褐色から黒褐色、2、3が黄褐色をなす。

4．古墳時代の遺構と遺物

(1) SC－01と出土遺物

① SC－01 (Fig. 21)

調査区の中央部、北側に片寄って検出した竪穴住居址である。南西に位置するSC-02とは約1.5m離れている。削平が著しく壁の一部が消失している。南側壁長4.25m、東側壁長4.95m、北側壁長3.0＋αm、西側壁長3.20＋αmの方形プランに近い長方形プランをなす。主軸方向をN－31°－Eにとる。壁高6～10cmと残存状態はきわめて悪い。通常、住居址の壁に沿って掘られる壁溝は認められない。北側壁中央部に接して南北径2.0m、東西径1.3～1.9m、深さ8.0～20mの不整形の土坑が掘り込まれる。この土坑は北側の主柱穴間に位置している。主柱穴は4本、南壁から1.3m、東西壁から各1.4m、北壁から1.0m、東西壁から各1.2m離れた位置に掘り込まれる。主柱穴掘り方は南西に位置する柱穴が30cm×40cmの楕円形、深さ65.5cm、南東に位置する柱穴が35cm×45cmの楕円形、深さ67.5cm、北東に位置する柱穴が径25cmの円形、深さ55cmである。東壁中央部より約50cm離れた内側に径30cmの範囲に焼土面が存在し、炉址と考えることができる。炉址がより壁に近づいていることは時期的な反映であろう。床面は固くしまっていない。敷物等の存在が推測される。

② 遺物出土状況

本竪穴住居址から出土した遺物には土師器、滑石製品、台石、タタキ石等がある。遺物は床面に密着したものと埋土中のものとに二分され、埋土中から出土した遺物は小破片で図化できるものは少ない。床面密着の遺物は原位置を保ったものが多く、完形品であったと考えられるが、いずれも削平によって上半部を欠失している。

土器はその大部分が住居址東半部に集中しており、その中でも原位置に保っていると考えられる下半部を残す土器は炉址より北側に存在している。これらに対して住居址西半部には土器

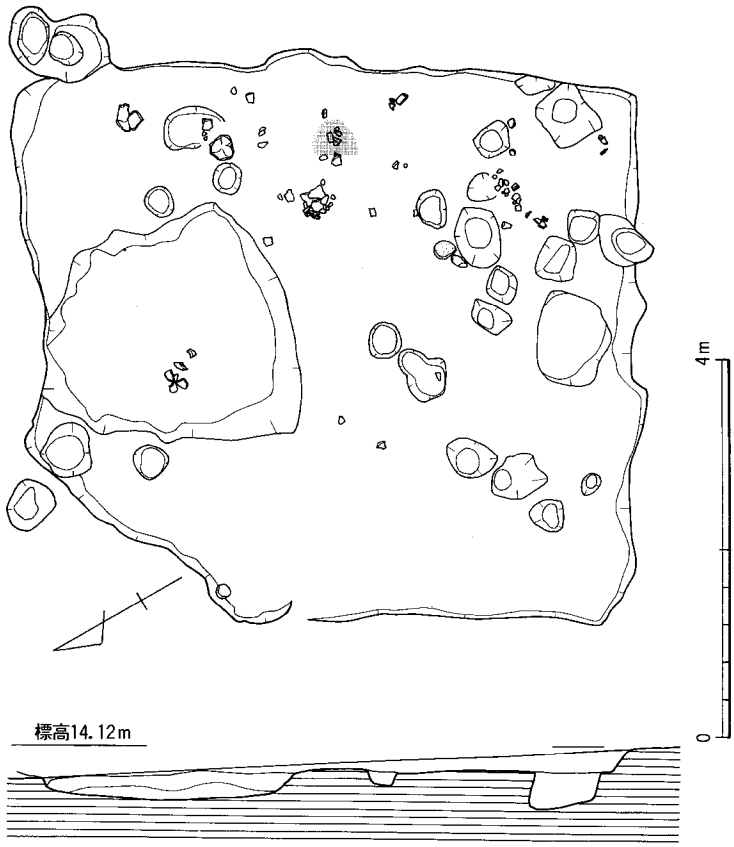


Fig. 21　SC－01 実測図

の出土はほとんどなく、床面から祭祀遺物である滑石製有孔円盤が出土している。住居址内の空間の使い分けが把握できる。なお、南東主柱穴の脇には台石が据えられ、その横にタタキ石１個が存在した。台石には打痕が顕著であり、何に使用されたか興味があるところである。埋土中より有孔円盤未製品が出土していることは注意される。

③　**出土遺物**（Fig. 22～23）

住居址はかなり削平を受け、遺物も良好なものは少い。出土遺物には土師器、滑石製有孔円盤、石器がある。

Fig. 22－１は甕。口縁部はくの字に屈曲し外反する。口縁端部は丸くおさめる。遺存状態が悪いので調整痕は不明瞭であるが、外面は粗い平行タタキを横位に施す。胎土には石英、長石の砂粒を含む。焼成はもろい。黄褐色をなす。口径17.8cm。２、３は高坏の坏部。６、８は脚部である。坏部は体部中位で屈曲し、突帯状の段を形成する。口縁端部は丸くおさめる。内外

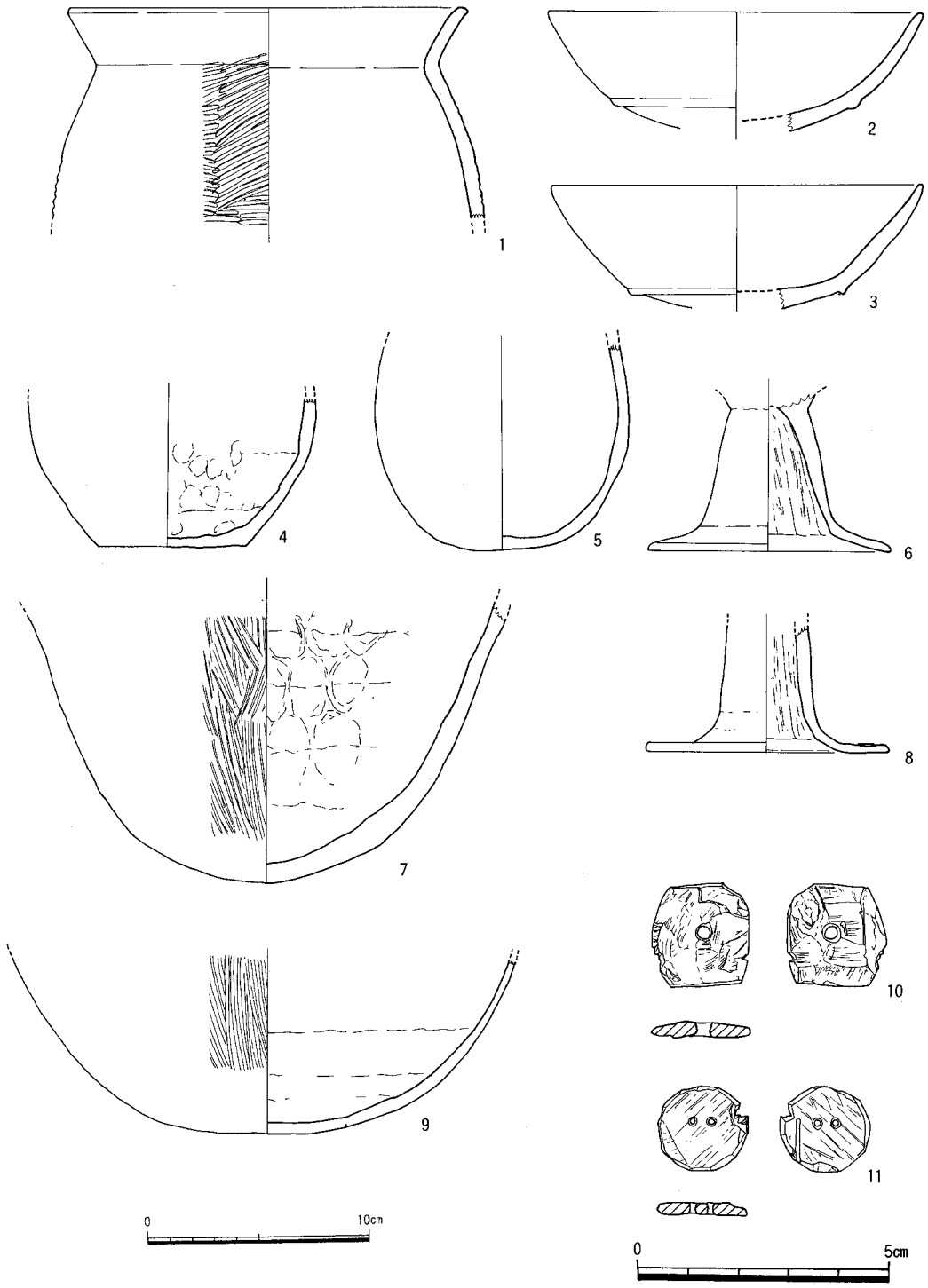


Fig. 22　SC－01 出土遺物実測図Ⅰ

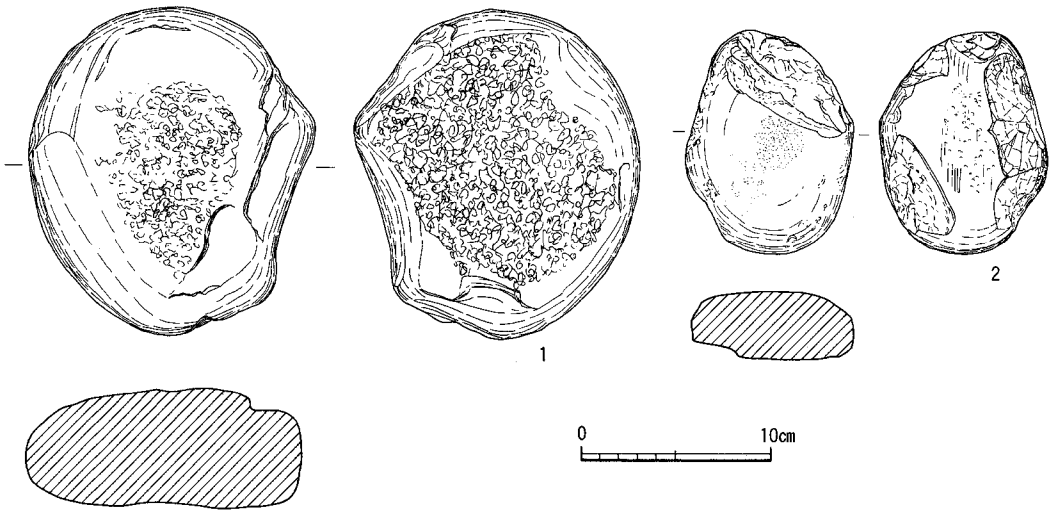


Fig. 23　SC－01 出土遺物実測図Ⅱ

面の調整はナデ。脚部は裾で強く屈曲し外方にひろがる。脚端部は丸くおさめる。脚筒部と坏部の接合部はしぼりによって小さくなる。脚筒部内面はヘラによる削り調整。共に胎土は精良。焼成は堅緻。2は黄褐色、3、6、8は赤褐色をなす。2は口径16.6cm、3は16.6cm。6は脚端径10.8cm、8は10.6cm。4、5、7、9はいずれも上半部を欠失する。4は底部は平底である。体部はゆるやかに外にひろがりながらたちあがり、上部は直に近い。外面は遺存状態が悪く、調整痕は不明。内面は指押さえによる凹凸が顕著に残る。底部径6.6cm。5は平底に近い丸底をもつ。体部は丸味をもってたちあがる。内外面共、遺存状態が悪く調整痕は不明瞭であるが、外面はナデ、内面はヘラケズリとみられる。胎土には粗い石英、長石、赤色鉱物の砂粒を含み不良。焼成は普通。色調は黄褐色から黒褐色、特に底部よりやや上方、幅3cmで体部を一周するように黒変している。7は底部が丸底をなし、体部は外傾しながらたちあがる。外面は粗い刷毛目（タタキか？）が縦位に施される。内面は内底部から体部にかけて指押さえの痕跡が顕著である。指押さえの部分は粘土接合部と一致している。他と比較し、器壁がやや厚く、0.7～1.3cmを測る。胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。色調は黄褐色をなす。9は底部は丸底。大型の壺になると考えられる。体部は大きくふくらみながらたちあがる。外面は刷毛目調整痕がわずかに残る。内面はケズリによる調整とみられる。内傾の粘土接合痕が残る。粘土帯の幅は3cm前後である。他に比較し、器壁が薄く0.5cm前後である。胎土には砂粒を含む。焼成は良好。色調は黄褐色～赤褐色をなす。特に底よりやや上方は二次的な加熱により赤変している。

10、11は滑石製の有孔円盤である。10は茶黄色の石材を用い、粗加工が加えられている。平

面形は隅丸方形状をなし、中心部に径２㎜の孔が穿たれている。厚さ0.3㎝。未製品か。11は灰緑色の石材を用いる。直径２㎝の円形でやや片寄って径１㎜の孔が２個穿たれる。厚さ0.3㎝。表面に粗い磨痕が残る。

Fig. 23 の１、２は石器である。１は台石、２は磨石で、床面からセットで出土した。１は長さ17.4㎝、幅15.3㎝、厚さ６㎝の扁平な玄武岩円礫を用いたものである。扁平な２面に敲打痕が著しく、台石として使用されたのは明白である。２は図の左面は凹石、左側部は叩石として使用、打痕が顕著である。右面は磨石として使用されている。石材は不明。この２点の石器は埋土中から滑石の未製品が出土しているので、それらの製作とかかわるかもしれない。

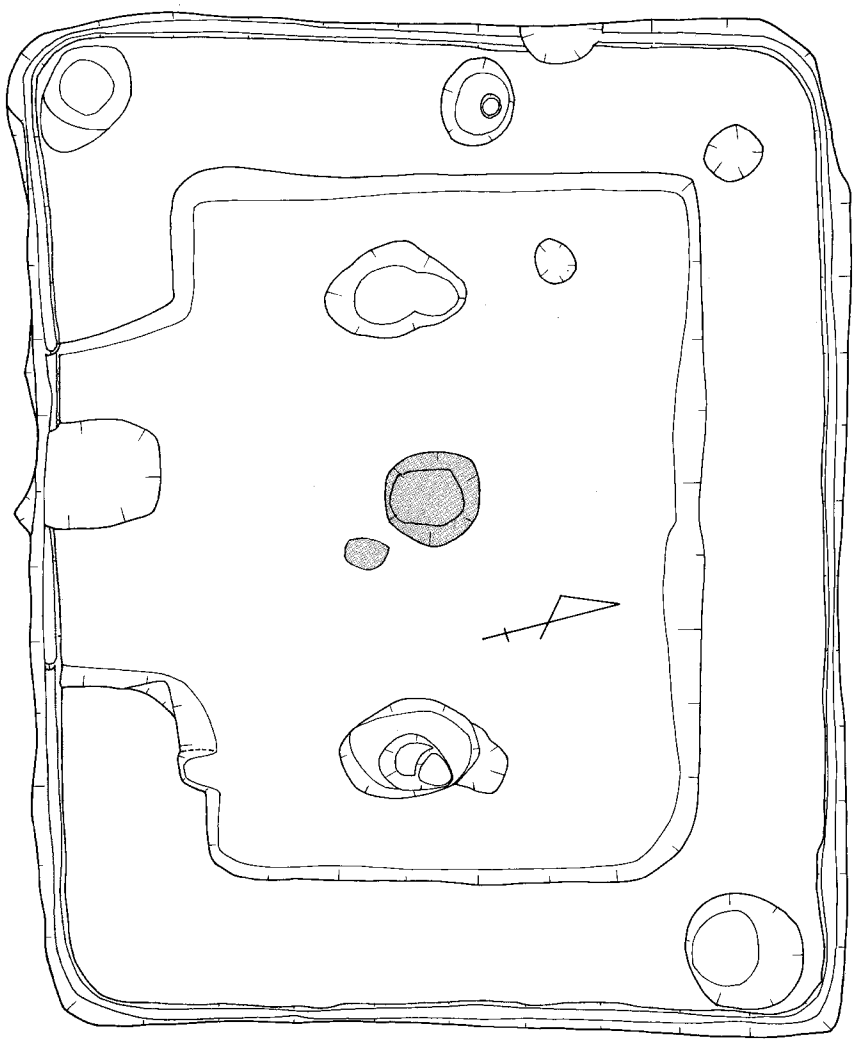
(2) SC－02と出土遺物

① SC－02 (Fig. 24)

調査区の中央部に検出した竪穴住居址である。北西部1.5ｍ離れて SC－01が存在する。削平が著しいにもかかわらず、残存状態は良好である。

埋土は自然の流れ込みによると考えられ、いずれもレンズ状堆積をなしている。大きくは上下二層に分離できる。下層は黒褐色黒色粘質土層、全体にロームの小ブロックを多く含み、特に上部では黄褐色（ローム土）がレンズ状に堆積し、下部は黒色が強くなる。周溝は暗い褐色粘質土によって埋まっている。上層は黒褐色粘質土、５世紀代の土師器を中心とした祭祀遺物が多量に投棄されており、この住居址はかなり長い間にわたって凹みとして残っていた可能性が強い。さらに上層から掘り込まれた柱穴は焼土塊を多く含んだ暗褐色砂質土層となっている。住居址の東側壁長5.15ｍ、西側壁長5.40ｍ、南側壁長6.60ｍ、北側壁長6.70ｍを測る。主軸方向を N－18°－E にとる長方形プラン。壁の残存高36.0㎝、壁に沿って溝がめぐる。周溝は幅６～10㎝、深さ８～10㎝前後である。南側の中央部に接してピットが掘り込まれている。ピットは東西径68㎝、南北径64㎝の隅丸方形プラン、深さ16㎝前後を測る。ピット部分に周溝はめぐらない。このピットの西側からベッド状遺溝がめぐる。南壁の西側のベッド状遺構は幅80～95㎝、西壁までの長さ2.05ｍ、高さ19～21㎝。南壁の東側のベッド状遺構は幅95～105㎝、北側までの長さ2.20ｍ、高さ10～16㎝を測る。南壁のベッド状遺構は幅100～110㎝、高さ19～23㎝。このベッド状遺構の上に存在する柱穴はいずれも後世のものである。北壁のベッド状遺構は幅90～110㎝、高さ15～20㎝。東壁のベッド状遺構は幅90～95㎝、高さ16～25㎝。なおベッド状遺構上の北東コーナーには径75㎝、深さ40㎝の円形ピットが掘り込まれている。内部からは完形の土器が出土しており、貯蔵用のピットと考えることができる。

炉はベッド状遺構に囲まれた床面のほぼ中央に位置している。炉は径62㎝の円形プラン、深さ約10㎝で皿状に掘り込まれている。炉床は加熱のため中央部がよく焼けていて赤変している。



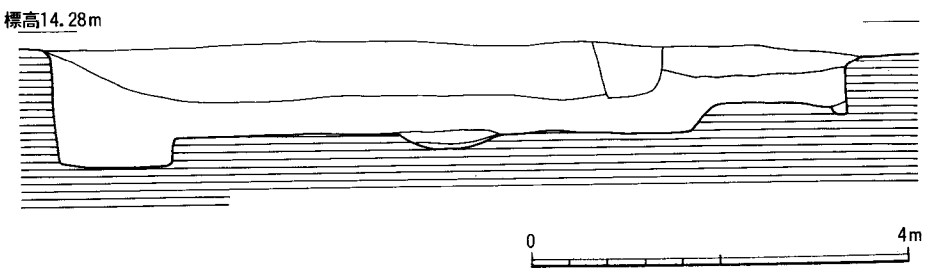


Fig. 24 SC－02 実測図

炉の南東15cmの所にも径20cmの範囲で焼土が認められる。炉内には焼土、炭、灰が充塡している。

柱穴は炉をはさんで、住居址長軸線に相対する２個が主柱穴である。西側主柱穴は炉から約80cm離れていて、長径95cm、短径65cmの楕円形プランの掘り方、深さは約60cmを測る。東側主柱穴は炉から約100cm離れていて、長径90cm、短径65cmの楕円形プランの掘り方、深さは約80cmを測る。本住居址では上記の主柱穴以外の柱穴は確認されていない。

床面は硬化していて、特に炉周辺の硬化が著しいが、土間的な硬化の状態ではない。

なお、本調査区では２基の竪穴住居址を確認したが、時期的に差があり、同時併存ではない。周辺部には他に竪穴住居址は存在しない。周辺部を含めてかなり削平されていることを考えれば、消滅した可能性があるが、単独で存在した可能性もあり、今後の検討が必要であろう。

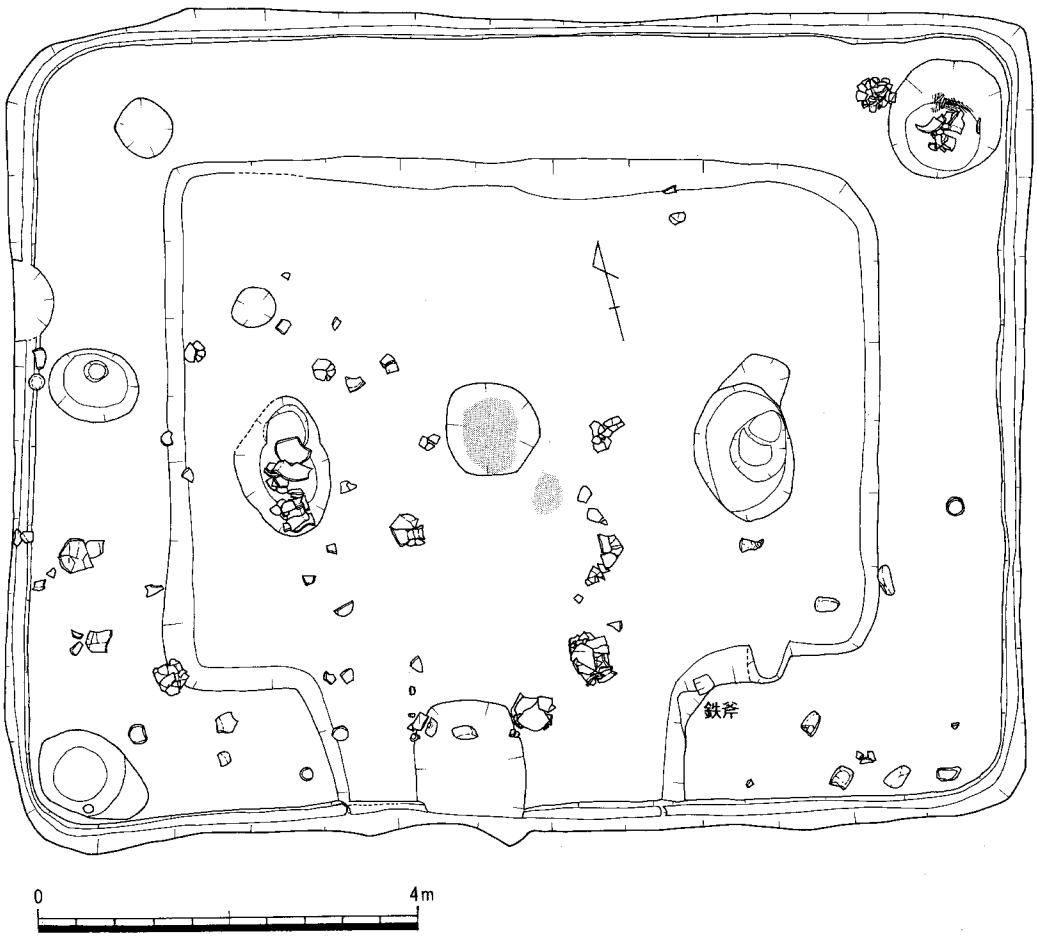


Fig. 25　SC－02 遺物出土状況

② SC－02 下層遺物出土状況（Fig. 25）

本住居址より出土した遺物は土器、鉄器がある。いずれも床面に密着しており、埋土中からの出土はきわめて少ない。大きな破片や完形品が多く、破片も接合によってほぼ完形に復原できる。いずれの遺物も原位置、すなわち据え置かれた状態を示している。火災住居址でないにもかかわらず、このように遺物がきわめて良好な状態で遺存していたことは、驚きである。いかなる状況下において遺物が残ったのか、その理由を推測するのは困難であるが、住居内における間仕切りやその空間の利用方法等を考察する上では好資料である。

住居址内における遺物の出土状況を巨視的にみれば、土器類は各側壁の中軸を結んで四分割した場合の南西部の一区画と、その対角に位置する貯蔵穴に二分して集中分布する。具体的に記すと、南壁に接して掘り込まれたピットの北東部に大鉢と甕形土器各１個がおかれ、北西部に高坏の坏部がある。炉の東側はに壺形土器１個体が破損し、破片として散乱している。西側主柱穴内には甕形土器２個体がすべり落ちた状態で出土した。柱穴内に埋められた状態ではなく、廃屋後、主柱を抜き取った際、そばに据え置かれた土器が落ち込んだものと考えられる。西側の床面からベッド状遺構の上には小型の椀形土器数個体が散乱し、この四分の一の区画内で、土器類が主に使用されたと推測される。ただ、１点のみであるが、東側ベッド状遺構の上に小型の椀形土器１個が完形で存在している。

貯蔵穴内には小型の甕（破損）、高坏各１個体がおかれ、植物の炭化材（カヤか？）が多量に存在した。貯蔵穴のすぐ西のベッド状遺構上には短頸壺が押しつぶされた状態で出土した。

東北の一区画のベッド状遺構から床面にかけては拳大の自然石６個が置かれ、また、南側のベッド状遺構のコーナー部分には鉄斧１点が存在した。この区画では何らかの作業がおこなわれたのではないかと推測されるが、具体的な作業内容は明らかにできない。

③ 下層出土遺物（Fig. 26～28）

SC－02 床面からの出土遺物には土師器、鉄器、自然礫がある。土師器は甕３個、小型甕１個、高坏２個、壺１個、短頸壺１個、大鉢１個、小型鉢～椀12個があり、１住居址における使用土器の構成を知ることのできる貴重な資料である。以下各遺物について詳述する。

Fig. 26－1～4 は甕で、４は小型品である。いずれも口縁部は、くの字に屈曲し、胴部はやや長胴となり底部は丸底となる。１は胴部外面が粗い平行タタキが横位で施され、胴下半部分はタタキの上から棒状のヘラによる削り状のナデが縦位に施される。また口縁部下半には縦位の刷毛目調整がみられる。内面は下から上にかきあげた刷毛目調整。口径17.2㎝、器高26.5㎝、胴部最大径は中位にあり、20.5㎝を測る。２は口縁部がわずかに屈曲し、端部は外反し、丸くおさめる。胴部外面は平行タタキを横位に施し、上半部はその上から縦位の刷毛目調整を加え、

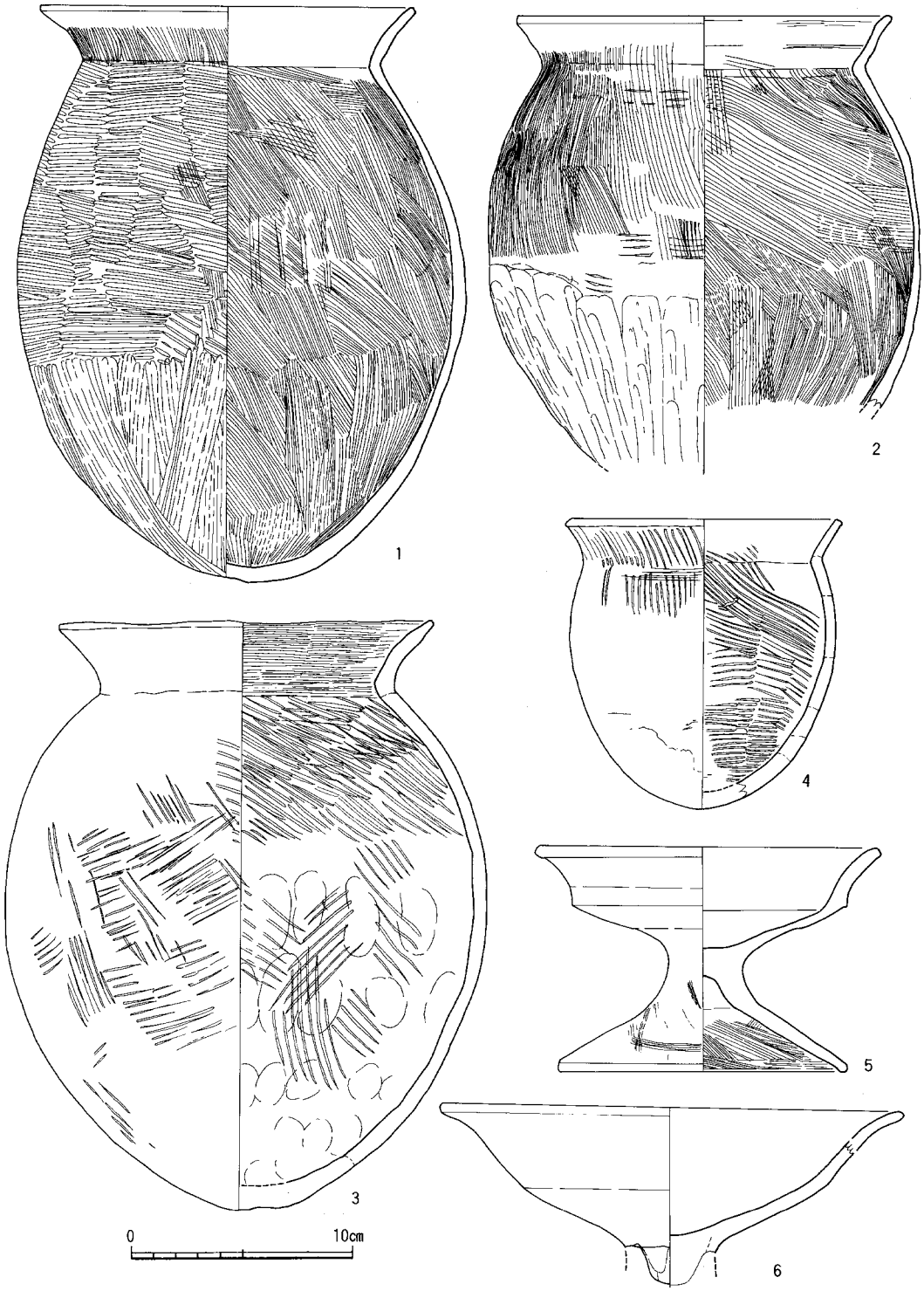


Fig. 26 SC－02 出土遺物実測図Ⅰ

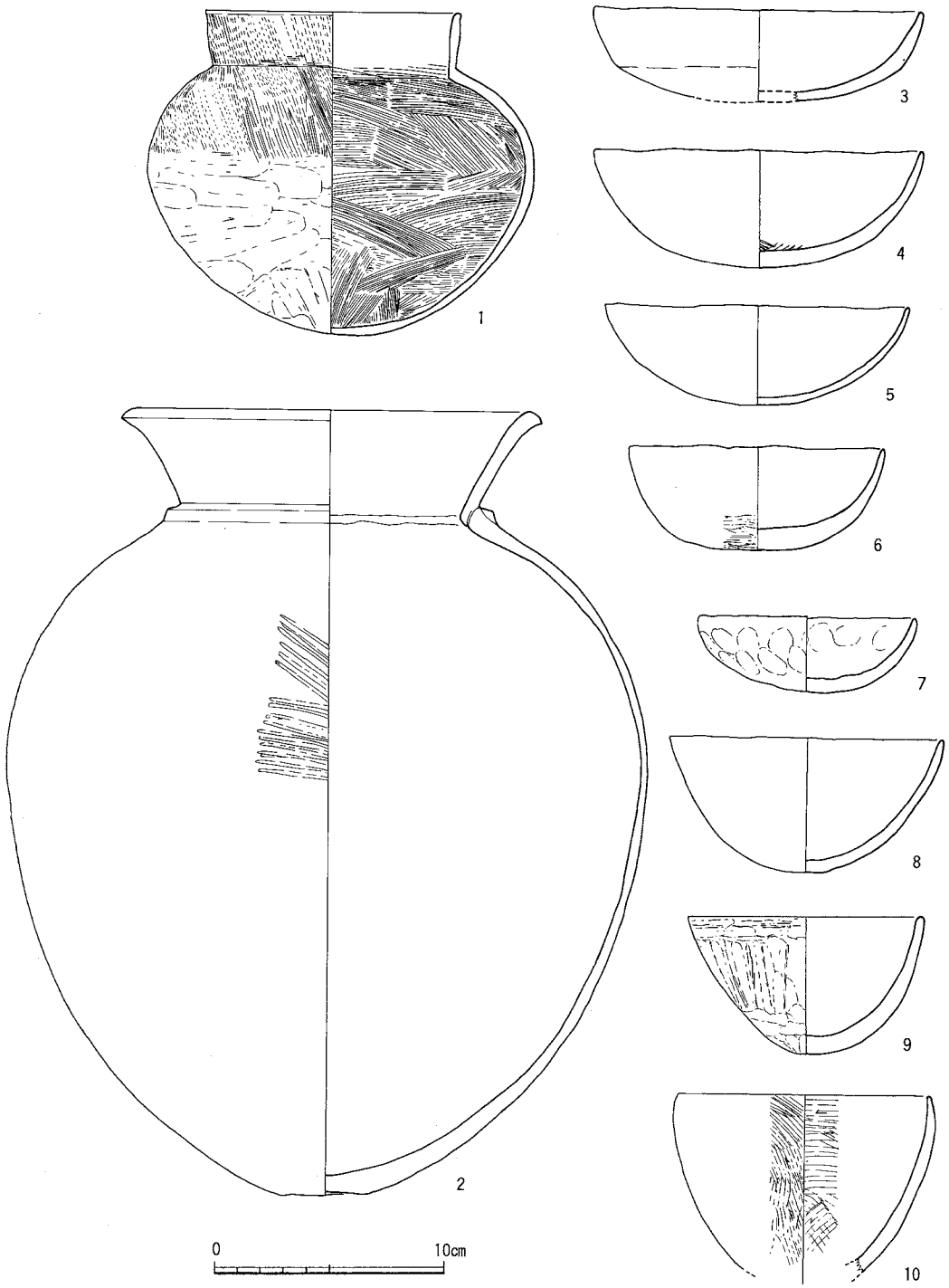


Fig. 27 SC－02 出土遺物実測図Ⅱ

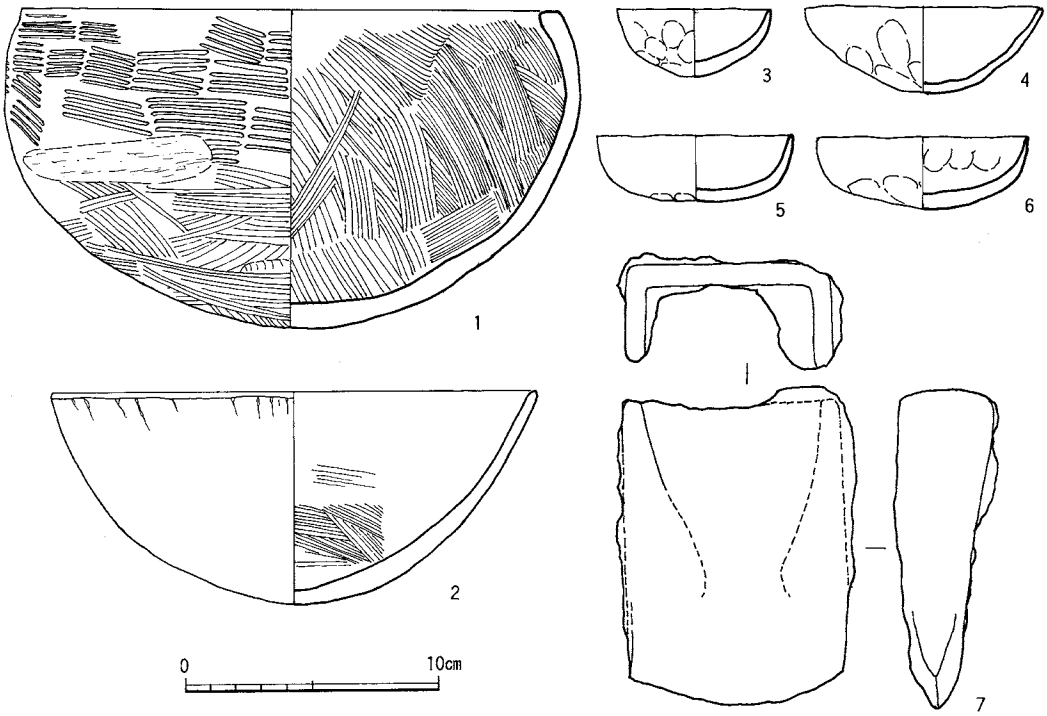


Fig. 28　SC－02 出土遺物実測図Ⅲ

タタキを消している。下半部も同様でヘラ削り状の縦位のナデを施す。口縁部内外面は横ナデ調整。内面は下半部が縦位、上半部が斜位の刷毛目調整である。口径17.1cm、胴部最大径19.7cm、器高は底部を欠き明らかにできないが23cm前後と考えられる。3は胴部外面は平行タタキが横位～縦位に施され、上からナデが加えられる。口縁部内側は横ナデ調整、内面は指おさえの痕跡が顕著に残り、その上から斜位～縦位の粗い刷毛目調整が加えられる。口径17.1cm、器高27.6cm、胴部最大径は中位にあり、22cmを測る。4は底部を欠く。口縁は直線的に外傾し、端部は角ばる。外面は胴上半から口縁にかけて縦位の粗い刷毛目調整。内面は斜位～横位の粗い刷毛目調整。口径12.8cm。復原器高13.4cm、胴部最大径は上位にあり、12.2cm。5、6は高坏、5は完形品である。坏部は外傾しながらゆるやかにたちあがり、中位で鋭く屈曲し、外反する。口縁端部は丸くおさめる。脚は脚筒部が短く裾にむかって大きくひらく、坏部内外面はヘラ研磨で、脚部外面はわずかに刷毛目調整痕がみられ、内面下半は斜位～横位の刷毛目調整。口径15.7cm、器高10.5cm、脚端径13.2cmを測る。1は坏部破片。坏部は中位で屈曲し、口縁部は外反するとみられる。脚部との接合部は粘土の突起がある。ヘラ研磨調整。復原口径21.1cm。Fig. 27－1は短頸壺の完形品である。口縁部は短く直口する。胴部は球状をなし、全体に薄手のつくりで、器壁の厚さは0.3～0.5cm。外面は縦位の細い刷毛目調整で、下半部は上が横方向、

下が縦方向のヘラ削り状のナデ。口縁内側は横ナデ、胴部内面は縦位～斜位の細い刷毛目調整である。口径11.2cm、器高14.5cm、胴部最大径は中位にあり、17.1cmを測る。2は大型壺である。口縁端部はやや肥厚し、角ばる。口縁部と肩部の境に断面三角形の突帯一条をめぐらす。胴部は張るがやや長胴。底はわずかに平底部をもつ。外面上半に平行タタキの痕跡がある。内外面横ナデ調整。口径18.6cm、器高35.1cm、胴部最大径は中位にあり、28.2cmを測る。Fig. 28－1, 2は鉢である。1は半球状をなし、口縁部は内傾する。口縁端部は肥厚し、角ばり、平坦面をつくりだす。外面は横位の平行タタキで、下半部は横位の刷毛目調整。内面は縦位～斜位の刷毛目調整である。口径21.5cm、器高12.9cm。2はボール状をなす。体部は外傾しながらたちあがり、口縁部はやや角ばる。外面はヘラ削り状のヘラナデ調整を横位に施す。内面は斜位～横位の刷毛面調整。口径19.2cm、器高8.4cmを測る。Fig. 27－3～10, Fig. 28－3～6は椀形品である。平皿状に浅いものや、ボール状の深いものがある。3は体部がゆるやかに屈曲してたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。口径14.6cm、器高4.0cm。4、5は同形状をなす。4は内底部は刷毛目調整。4は口径14.7cm、器高5.2cm。5は径13.5cm、器高4.5cm、6はやや深い。口縁端部は尖り気味におさめる。内底部には指圧痕がある。外面下半は刷毛目調整。7は手づくねで、器壁に指の跡が凹凸で残る。口径9.8cm、器高3.4cm。8～10は深いボール状をなす。8は器壁が剥離しており、調整は不明。口径12.2cm、器高6.0cm。9は外面はヘラ削り状のヘラナデ。口縁と底部は横方向、他は縦方向に施される。口径10.5cm、器高6.1cmを測る。10は内外面共に刷毛目調整。外面は縦位～斜位。内面は上半部が横位、下半部が斜位である。口径11.2cm。口縁部がわずかに内傾する。Fig. 28－3～6は手づくね土器である。器面は指おさえ

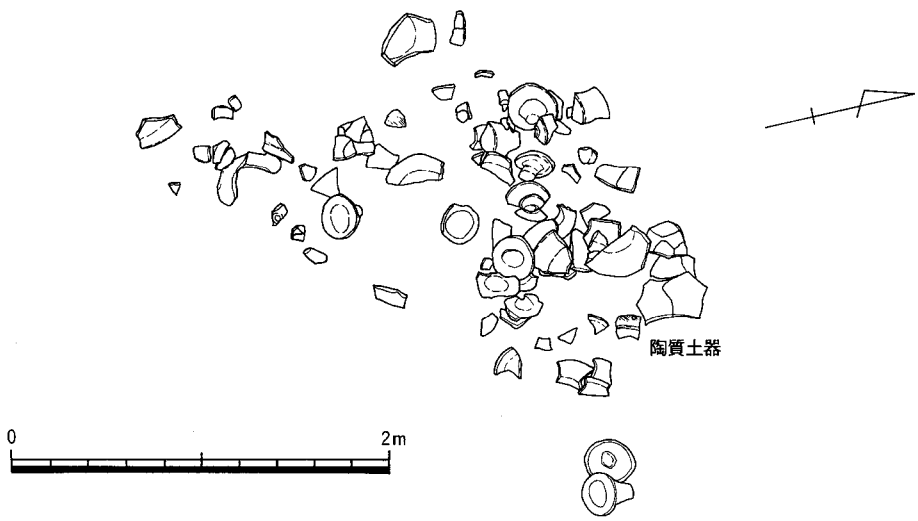


Fig. 29 SC－02 上層遺物出土状況

で凹凸が著しい。3、4は口縁部が開き、5、6はたちあがる。3は口径6.2cm、器高2.8cm。4は口径9.4cm、器高3.4cm。5は口径7.8cm、器高2.7cm、6は口径8.5cm、器高3.0cmを測る。

鉄器は鉄斧1個がある。銹で全形を正確に知ることはできないが鍛造鉄斧と考えられる。長さ12cm、幅8.7cm、袋部は6.5×3.0cmである。

④ 上層遺物出土状況 (Fig. 29)

SC－02の下層である黒褐色粘質土層が堆積した段階、いまだSC－02が埋まり切らずにできた凹地に検出した遺物群である。遺物群は土師器、須恵器、朝鮮陶質土器から構成されており、器種は大部分が高坏で占められ、数点の甕、椀が混在する。遺物は凹みの最も低い部分の3m×1.5mの範囲に集中している。すべてが破片で完形品はないが、いずれも相互間の接合によって完形に近いものが多い。Fig. 29に見るように遺物は凹みに一括投棄された状況であるが、破片が部分的に欠けるものが多くあり、他の場所で割られ、この凹部に捨てられた可能性が強い。なお、器種が高坏によって占められることや、朝鮮陶質土器や初期須恵器を含むことからみて、祭祀に使用された可能性が強いとみられる。

⑤ 上層出土遺物 (Fig. 30, 31)

上層出土の一括遺物には朝鮮陶質土器、初期須恵器、土師器がある。器種として陶質土器は蓋、把手付壺。初期須恵器は高坏、土師器は高坏、壺、椀がある。

Fig. 30－1、2、4は陶質土器。1は蓋の小破片である。復原口径10.7cm。天井部は丸味をもつものであろう。天井部と口縁部の境には鋭い凸線をめぐらす。口縁部は高さ1.5cmで下方にひろがり、端部は丸くおさめる。外面は横ナデ調整で黒灰色をなし、内面は自然釉がかかり灰褐色をなす。胎土には砂を含まず精良。焼成は堅緻である。2は脚付壺で把手がつく。口縁部から胴部にかけての破片と脚部の破片がある。器形はいわゆる脚付の短頸壺で、球形の胴部に内傾しながらたちあがる短い口縁部を有する。口縁端部は尖り気味に丸くおさめる。頸部と肩部の境に1条の凸線、さらに胴中位に1条の凸線をめぐらし肩部に文様帯を区画している。文様は区画された下半部に鋭い沈線で斜格子文が描かれている。胴部から底部にかけて把手が、つけられるが欠失している。脚部は別の遺構（SK－06、07）からの出土であるが、胎土、焼成等から同一固体とみられるものである。脚部は下方にひろがる安定したもので、筒部上半に2条の凸線をめぐらし、凸線間には透し状の小さな孔があるが貫通していない。外面は全体に黄褐色の自然釉が厚くかかっている。内面は白灰色で横ナデ調整。焼成は堅緻で胎土にはほとんど砂粒を含まない。復原口径8.4cm、胴部最大径14.7cm。復原器高17cm前後である。4は棒状の製品。脚部に大きな透し窓をもつ高坏脚部の破片と考えられる。外面には自然釉がかかり、側面はヘラによる3面の削りが明瞭である。上下が欠失していて器形復原は困難であるが、整

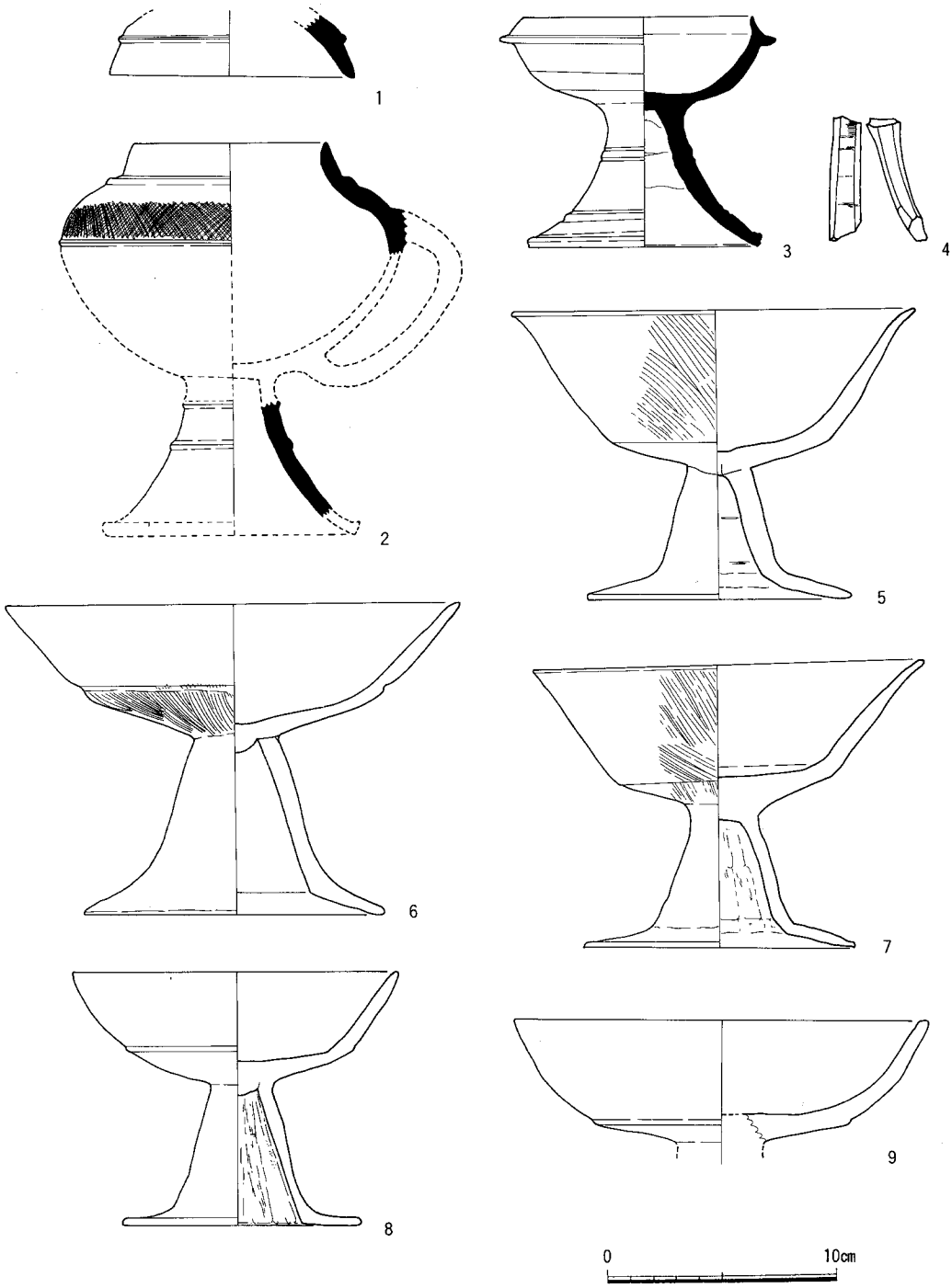


Fig. 30 SC－02 上層出土遺物実測図Ⅰ

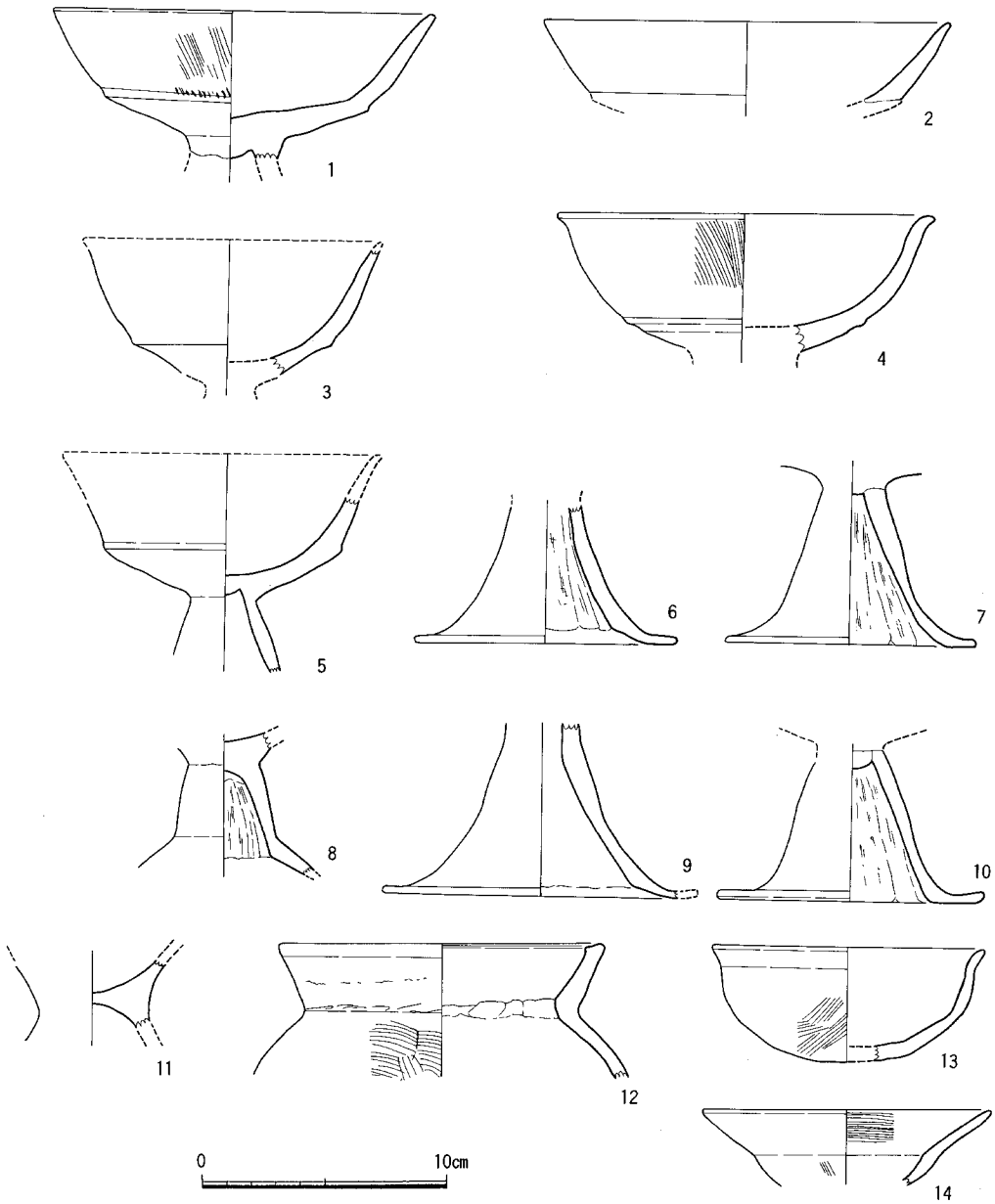


Fig. 31 SC－02 上層出土遺物実測図Ⅱ

形技法や自然釉のあり方から把手とは考え難い。SK－05からの出土であるが、高坏の参考例として本図で説明した。

3は初期須恵器。有蓋高坏であるが、坏部と脚部は離れて出土した。接合で完形品となった。坏部のたちあがりは短く、内傾している。端部は丸くおさめる。受部は下方にさがり、端部は丸い。底部には一部静止ヘラ削りがみられるが、横ナデによって消されている。内底部は不定方向のナデ、外面は横ナデ調整。脚はラッパ状に広がり、脚端部径は口径とほぼ同じで安定感がある。脚筒部には2条1単位の凹線（鈍い削り出し突帯）を二段にめぐらす。焼成は堅緻で、胎土には若干の砂粒を含むが良質。内外面共に青灰色をなす。口径9.9cm、受部径11.9cm、脚端径10.0cm、器高9.9cmを測る。

Fig. 30－5～9は土師器の高坏である。いずれも底部と体部の境で屈曲し、体部は外傾しながらたちあがる。脚部は下半で強く屈曲し、大きく外にひろがる。5は口縁部がさらに外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。外面は斜位の刷毛目調整後、横ナデを加える。内面は刷毛目調整後、研磨を加える。脚部は裾下面は刷毛目調整。脚筒部は内面はヘラ削りを加える。脚端部は丸くおさめる。口径17.3cm、器高12.5cm、脚端径11.4cmを測る。胎土には若干の砂粒を含むが良質。焼成は良好で赤褐色をなす。6は坏部の屈曲部に段がつく。体部は丸味をもってたちあがり端部は丸くおさめる。外底部は刷毛目調整。坏部と脚部の接合部にはしぼりがみられる。脚下半の屈曲はゆるやか。脚筒部内側はヘラ削り調整。胎土には砂粒を含むが良質。焼成はややあまく、黄赤色をなす。口径19.4cm、器高13.4cm、脚端径12.9cm。7は5と同形同大である。坏部外面は斜位の丁寧な刷毛目調整。内面は横位の刷毛目調整後ナデ。脚筒部内面はヘラ削り調整。脚部はヘラナデによって角ばり、粘土が上方にたちあがる。胎土は良質。焼成良好で赤褐色をなす。口径16.8cm、器高12.4cm、脚端径10.5cm。8は坏部の屈曲部に段を形成する。体部は丸味をもってたちあがり、端部は丸くおさめる。坏部と脚部の接合にはしぼりが加えられる。裾部は横にひろがり、端部は丸くおさめる。脚筒部内面は削り調整。胎土、焼成は良好。黄褐色をなす。口径14.0cm、器高11.9cm、脚端径10.3cm。9は坏部の屈曲部に段を形成する。体部は丸味をもってたちあがり、端部は丸くおさめる。器面はあれており、調整痕は明瞭でないがヘラ研磨とみられる。胎土には粗い砂粒を含む。焼成はあまい。黄褐色をなし一部黒斑がある。口径18.8cm。Fig. 31－1～10も高坏で器形は前者同様である。1は脚部を失う。屈曲部には段を形成する。段部に刷毛目調整痕が残る。口縁端部は尖り気味におさめる。内面はヘラ研磨調整。胎土には砂粒を多量に含む。焼成良好。赤褐色をなす。2は屈曲部粘土接合部以下を失う。体部は丸味をもってたちあがり、端部は尖り気味に丸くおさめる。胎土は精良で若干の金雲母を含む。焼成良好、黄褐色をなす。口径16.4cm。3は坏部破片。体部は丸味をもってたちあがる。二次的な加熱で赤桃色に変色している。胎土、焼成は良好。4は坏部屈曲部が突線状の段になる。体部は丸味をもってたちあがり、口縁端部は大きく外反し、丸くおさ

める。外面上半部は縦位の丁寧な刷毛目調整。下半部は刷毛目調整の上にヘラ研磨を加える。内面はあれているため調整痕は不明瞭。胎土は精良、焼成はややあまい。赤褐色をなす。口径15.2cm。5は口縁部と脚下半部を失う。坏部の屈曲部はわずかに段を形成する。坏部と脚部の接合部にはしぼりが加えられる。脚筒部外面は縦位のヘラ研磨、内面はヘラ削り調整。胎土には砂粒を含むが良質。黄褐色をなす。6～10は脚部破片である。脚筒部内面はヘラ削り調整。10は坏部と脚部の接合部にしぼりが加えられる。いずれも胎土には若干の砂粒が混入されるが良質。焼成は良好。黄褐色～赤褐色をなす。脚端径は、6が10.7cm、7が10.2cm、10が10.7cm。11は甕の底部か。12は甕の口縁部、くの字形に屈曲する。口縁部は丸味をもってたちあがり、口縁端部はヘラナデによって平坦で、内側が肥厚する。胴部外面は横位～縦位の刷毛目調整。口縁部内外面は横ナデ調整である。口縁部径13.2cmを測る。胎土には砂粒を含むが良質、焼成

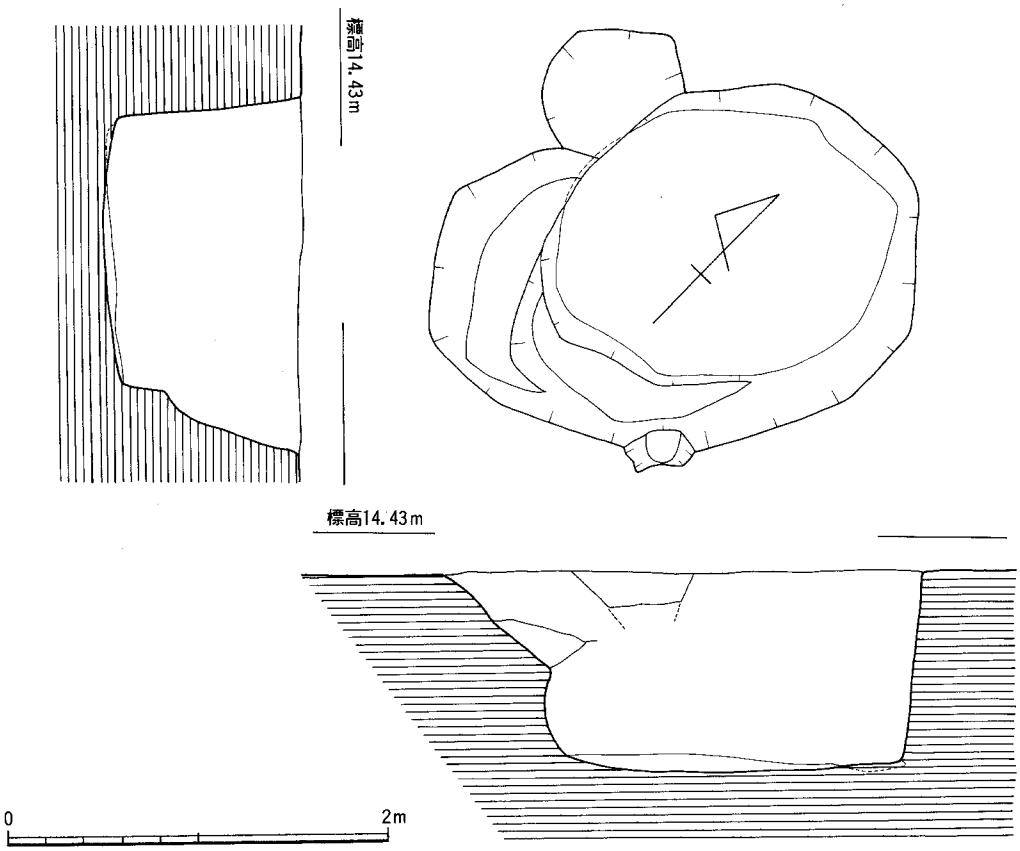


Fig. 32 SK－02 実測図

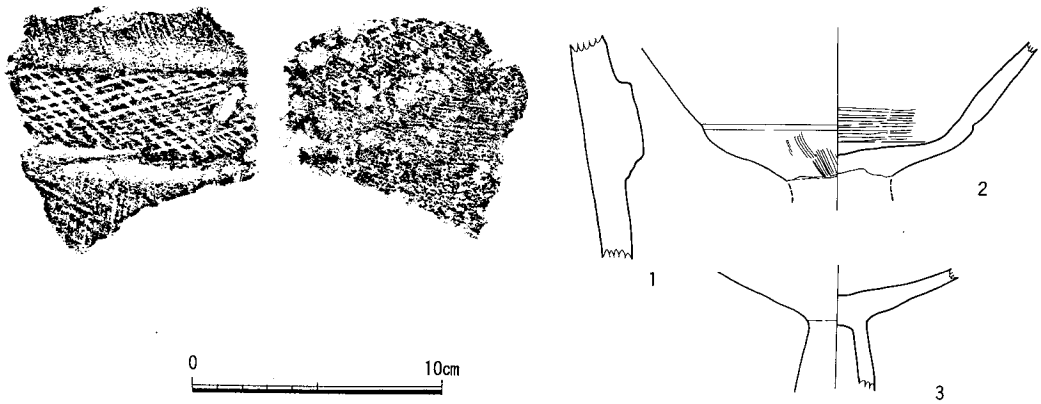


Fig. 33　SK−02 出土遺物実測図

良好、褐色をなす。13は椀形品。体部は丸味をもってたちあがり、口縁部が外反する。端部は丸くおさめる。外面は斜位の刷毛目調整を施す。胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。赤褐色をなす。口径11.0cm、器高4.7cm。14は体部中位でわずかに屈曲し、口縁部は直線的に外にひらく。口縁端部は尖り気味におさめる。内面は横ナデ調整。胎土焼成は良好。赤褐色をなす。口径11.7cm。

(3)　SK−02 と出土遺物

①　**SK−02** (Fig. 32)

調査区の東端近く、SD−04 の西側、約 5 m の地点に検出した土坑である。SK−03 の北西部に接するように掘り込まれている。3 基の土坑が切り合ったような状態を示している。最も大きい遺構は南北径2.2m、東西径1.8mの楕円形プランで、深さ1.05m、底はほぼ平坦である。壁がほぼ垂直に近く、一部袋状をなす部分もある。また、部分的ではあるが二段に掘り込まれた部分もある。南西部には長径1.4m、短径0.5m、深さ0.5mの半円状の土坑が連接しており、さらに北側には長径0.8m、短径0.7m、深さ0.2mの円形の土坑が連接している。この 3 基の土坑の埋土はいずれも黒色粘質土であり、その切り合い関係は明らかにできなかったが、それぞれに深さが異なるので、3 基とも別個の土坑とみた方が良い。

②　**出土遺物** (Fig. 33)

図示できるもの 3 点がある。1 は大型の壺の胴部破片である。幅 3 cm、高さ0.5cm、断面方形の突帯がめぐらされる。突帯の上面には粗い刷毛状の沈線で斜格子の文様が施される。胴部は粗い縦位の刷毛目調整で、一部刷毛目の重なりで斜格子になる部分もある。刷毛目を加える

のは突帯接合後である。内面は横方向の粗い刷毛目調整。器壁は厚く1.3cm前後を測る。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。黄白色をなし、一部黒斑がみられる。弥生時代終末の土器である。混入品とみられる。2、3は高坏である。2は坏部。底部は丸味をもち、体部との境には明瞭な段をつくる。体部はやや外反気味にたちあがる。口縁部を失う。外面の底部は縦位、体部は横位の刷毛目調整後ヘラナデを加える。内面は横方向の刷毛目調整。胎土には粗い砂粒を少量含むが良質。焼成良好。黄赤色をなす。3は脚下半と坏部上半部を失う小型の高坏である。外底部は刷毛目調整。胎土は精良。焼成良好、黄赤色をなす。

(4) SK－05 と出土遺物

① **SK－05** (Fig. 34)

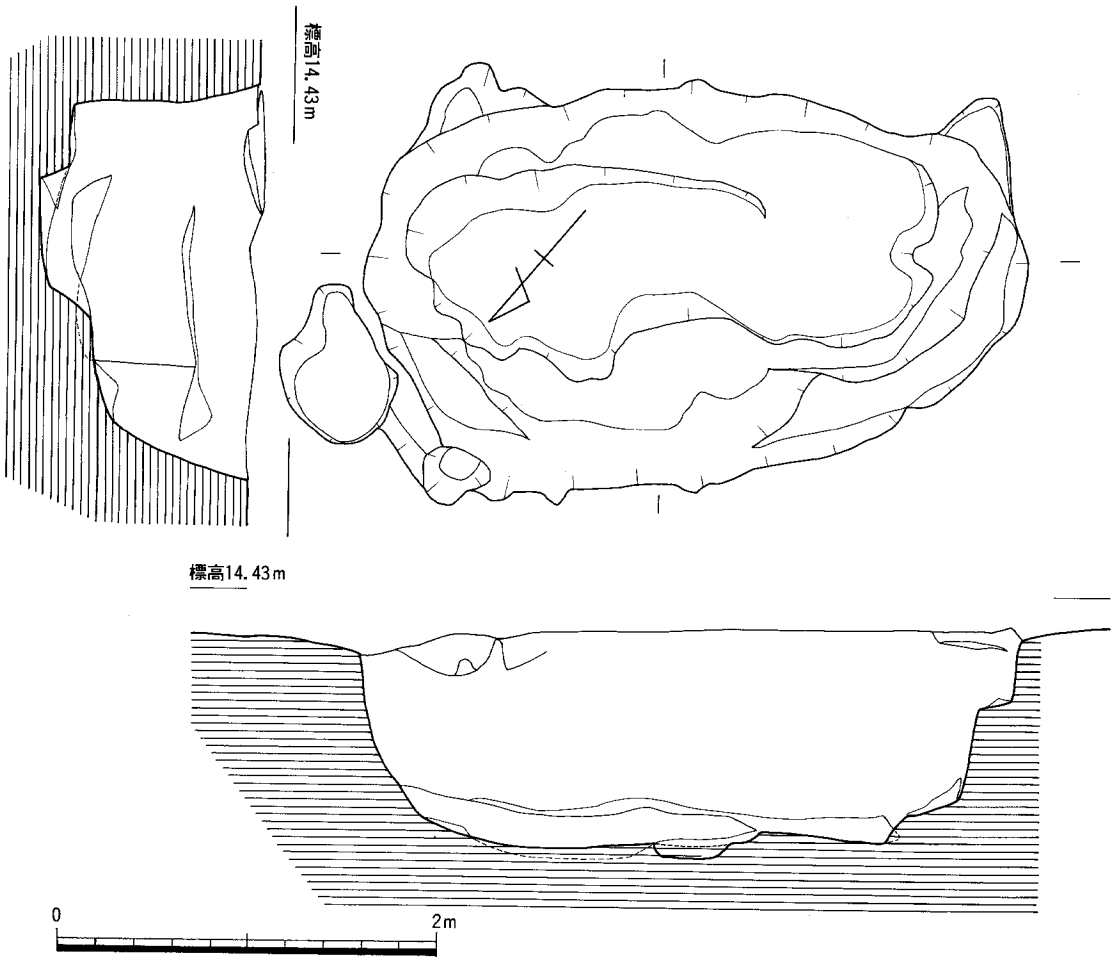


Fig. 34 SK－05 実測図

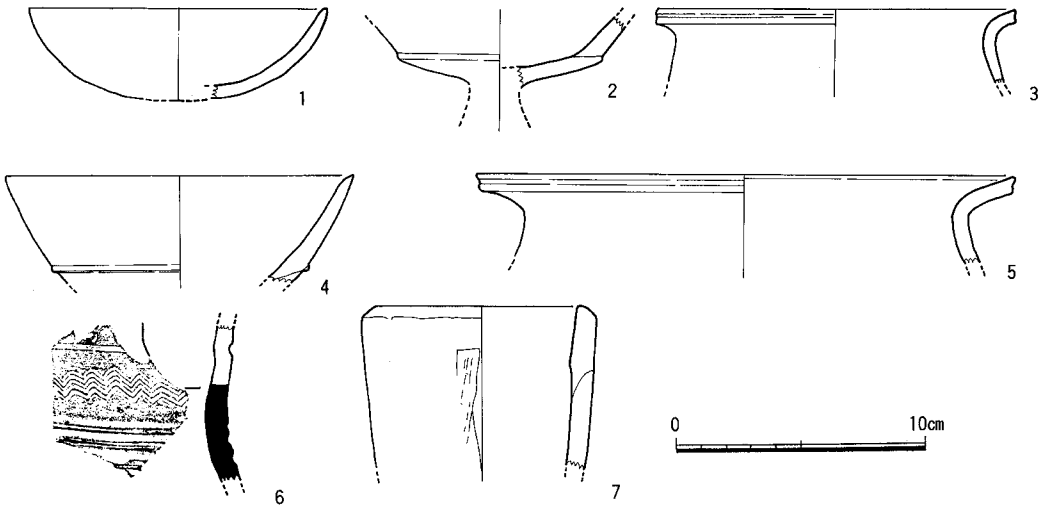


Fig. 35　SK－05 出土遺物実測図

調査区の中央部の北に検出した土坑である。SD－07 の西側約1.3ｍ、SC－01 の東側約4.5ｍ、SK－04 の北側約４ｍの所に位置する。長径2.1ｍの長楕円形プラン。深さは1.15ｍ。壁は傾斜をもって掘り込まれ、南西側と北側の一部は階段状をなす。床は舟底状をなす。埋土は黒色土である。この土坑の使用目的等は不明。

② **出土遺物**（Fig. 35）

図示できるもの７点がある。１～５は土師器、６は須恵器、７は製塩土器と考えられる。

１は椀、半球状をなす。口縁端部は丸くおさめる。胎土には砂粒を含む。焼成良好。内外面はナデ調整。黄褐色をなす。口径16.8㎝、器高3.7㎝。２は高坏。底部と体部の境で屈曲する。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。黄褐色をなす。調整痕等は不明瞭。３は甕。口縁部短く、外反する。口縁端部は角ばり、凹線１条がめぐる。胎土には多量の砂粒が混入。焼成は良好。黄褐色をなす。内外面の調整は不明瞭。復原口径14.2㎝。４は高坏付坏部。屈曲部は突線状をなす。体部は外傾しながら直線的にたちあがり、端部は尖り気味におさめる。内外面はヘラ研磨調整。胎土は砂粒を含むが精良。焼成良好。褐色をなす。復原口径13.7㎝。５は甕。器形は３と類似する。口縁は大きく外反する。端部には凹線１条をめぐらす。胴部はややふくらみをもつとみられる。口縁部内外面は横ナデ調整。胎土は砂粒若干を含むが精良。焼成良好。黄赤色をなす。復原口径21.4㎝、６は須恵器、器台脚部の破片である。文様体には６本単位の櫛描山形文を横位に施す。文様体の上部は凹線１条、下部には凹線４条(凸線３条)をめぐらす。

文様帯上半には円形の透し窓がある。内外面共に横ナデ調整。焼成は堅緻で、胎土に若干の砂粒を混入する。赤灰色をなす。7は製塩土器と考えられる破片である。円筒状をなす。口縁部はヘラで斜に切られる。内面には布痕等はみられない。口径9.2cm。土坑最上部出土。混入か。

(5) SK－06と出土遺物

① SK－06 (Fig. 36)

調査区の中央部よりやや東に片寄った北端に検出した土坑である。一部は調査区外にのびる。SA－01（柵列）と重複関係にありSA－01によって切られ、SD－07の東側2.5mの所にある。長径2.65＋αm、短径1.9mの不整楕円形のプランで、深さ1.05m。底は平坦である。長軸方向はN－9°－Eにとる。

埋土は自然の流れ込みによると考えられ、レンズ状をなしている。第1層、小石混じりの黒褐色砂質土層、厚さ20～40cm。第2層、茶褐色砂質土層、厚さ10～25cm。第3層、黒褐色粘質土層、厚さ15cm前後。第4層、小礫を含む茶褐色粘質土層、厚さ5～25cm。第5層黄茶褐色粘土層、地山のブロック層である。厚さ10cm前後。第6層、小礫や鉄分を含む黒褐色粘質土層、厚さ5cm前後。第7層、茶褐色粘質土層、厚さ5～10cm。第8層、黒褐色粘土層で中に地山である八女粘土層や鳥栖ローム層のブロックを多く含む。

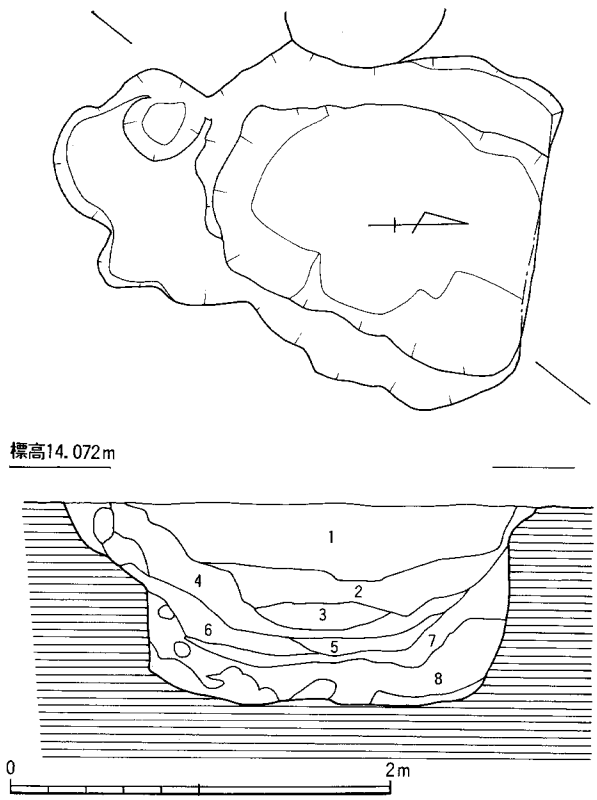


Fig. 36 SK－06実測図

② 出土遺物 (Fig. 37)

図示したのは6点である。弥生式土器、土師器があり、須恵器は第1層に含まれる。1は弥生式土器の壺の底部。磨滅が著しい。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。底部径8.6cm。2～5は土師器。2は平底に

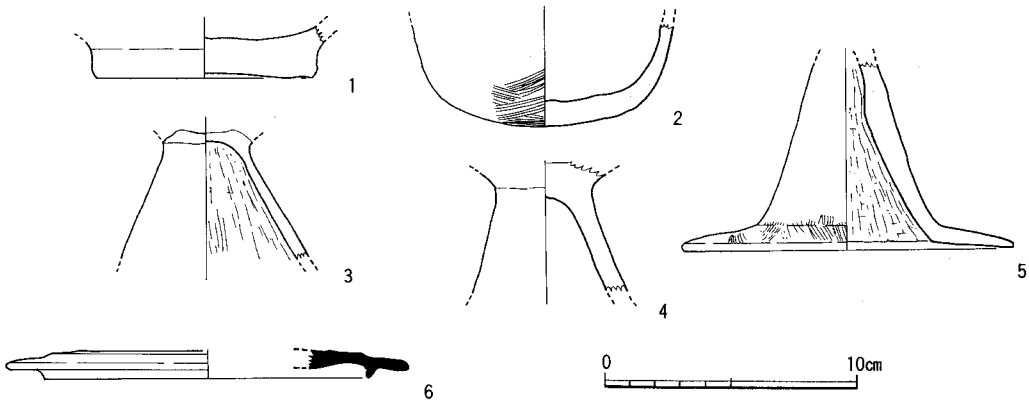


Fig. 37　SK－06 出土遺物実測図

近い丸底。外面は不定方向の刷毛目調整。内面はナデ調整。3～5は高坏脚部。3は脚筒部が外方にひろがる。脚端部は丸くおさめる。外面は刷毛目調整後、ナデを加える。脚筒部内面はヘラ削り調整。いずれも胎土には砂粒を含む。5には金雲母が混入している。焼成は良好。黄褐色をなす。5は脚端径13.0cm。6は須恵器の蓋。内面のかえりは低い。天井部は回転ヘラ削り。口縁部から内面は横ナデ調整。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。灰色をなす。復原口径15.9cm、かえり径12.8cm。

(6)　SK－09 と出土遺物

①　**SK－09** (Fig. 38)

調査区中央部よりやや西に寄った南端部に検出した土坑である。SC－02 の南2.5m、SK－08 の東2.5mの所にある。長径1.95＋αm、短形1.53mの楕円形のプランで、南側は道路によって消失している。深さ10cm。床面は平坦である。床には2個のピットが掘り込まれる。2個のピットは土坑の中央部で東西に相対して存在する。東側ピットは東壁より20cm離れている。径20cm、深さ20cm。西側のピットは西壁に接している。45cm×50cm

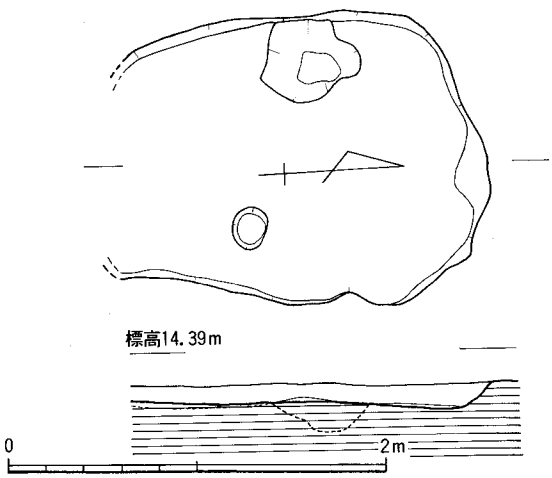


Fig. 38　SK－09 実測図

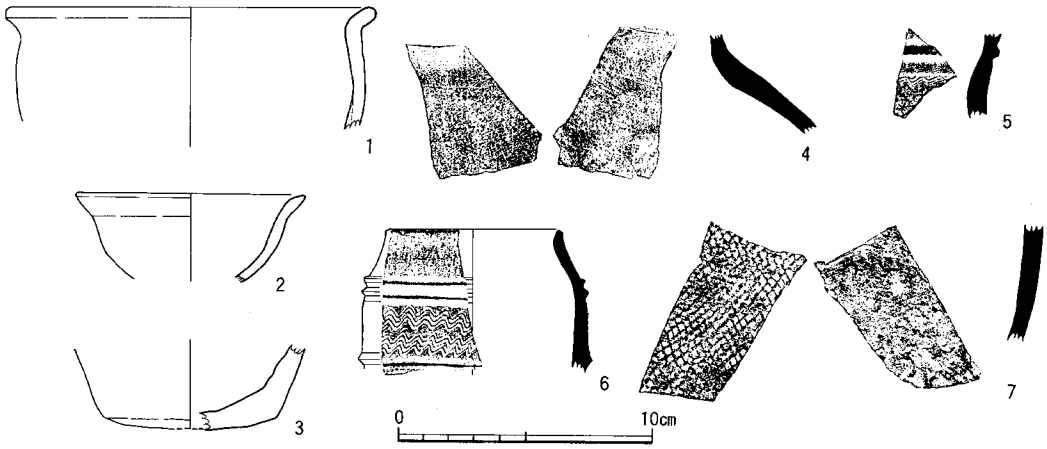


Fig. 39　SK－09 出土遺物実測図

の不整形プランで、深さ25cm、浅い皿状をしている。土坑の性格等については不明。埋土は黒色土である。

② **出土遺物** (Fig. 39)

本土坑出土遺物には土師器、須恵器がある。いずれも小破片となっており、図示できるものは少ない。7点を図示した。

1～3は土師器である。1は小型の甕である。口縁部は短く大きく外反し、端部は丸くおさめる。内外面の状態が悪く、調整痕は不明瞭であるが、外面はナデ、内面はヘラ削りである。胎土には多量の砂粒を含み良くない。焼成は良好。色調は黄褐色～赤褐色をなす。復原口径14.4cm。2は小型の鉢。口縁部はわずかに外反し、口縁部は尖り気味におさめる。内外面共器面調整は不明。胎土には砂粒を含むが良質。焼成良好。黄褐色をなす。復原口径8.9cm。3は平底の底部であるがやや不安定。外面は細い縦位の刷毛目調整。内面は指押えの凹凸がみられる。胎土には多量の砂粒を含む。焼成は良好。色調は黄褐色で、一部に黒斑がある。底部径6.6cm。土師器にはこの他、高坏の破片があるが、図示できない。

4～7は須恵器である。4は壺の頸部から肩部の破片である。外面は横ナデ調整で自然釉がかかる。内面は受け具痕が凹凸に残り、その上から横ナデ調整が加えられる。胎土には白色、赤色、黒色の砂粒を含むが良質。焼成は堅緻で赤褐色～青灰色をなす。5は壺の頸部の小破片、上部に断面カマボコ状の突線をめぐらし、その下に櫛描波状文を施す。内外面共ナデ調整。胎土は4と同様で良質。焼成は堅緻。赤灰色をなす。6は小型の椀。体部は内傾気味にたちあがり、口縁端部は外反し、尖り気味におさめる。体部最大径は中位にある。体部には2条と1条

の断面三角形の突線をめぐらし、三分割し、中位の区画に櫛描波状文をめぐらす。内外面は横ナデ調整。胎土には若干の砂粒を含むが精良。焼成は堅緻で黒灰色をなす。口径6.8cm。7は胴部破片。外面に格子目のタタキ。内面は受け具痕が凹凸に残る。受け具には放射状の刻みがあるようであるが痕跡は不明瞭。目の細い布痕がみられる。受け具にまかれていたのであろうか。胎土には砂粒を若干含むが精良。焼成は堅緻。青灰色をなす。以上の4点は陶質土器の可能性もある。

(7) SK－11と出土遺物

① SK－11 (Fig. 40)

調査区の中央よりやや西に片寄った北端部に位置し、一部は調査区外にのびる。SK－07と重複関係にあり、SK－07に切られている。黒褐色砂質土層中に灰色粘質土のブロックや黄褐色粘質土、茶褐色粘質土のブロックを多く含んで、人為的に埋められた可能性が強い。現状長径2.1m＋α、短径1.1mの楕円形プランをなすが、元来はさらに大きな土坑とみられる。深さ0.9mを測る。

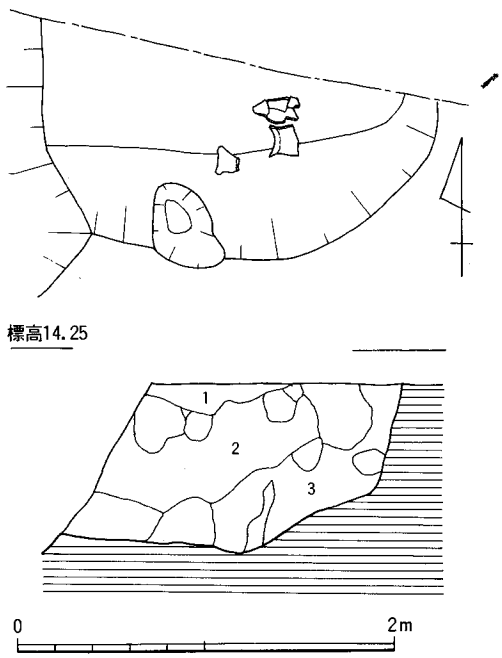


Fig. 40 SK－11実測図

② 出土遺物 (Fig. 41)

床面に密着して2個体の土師器破片が出土した。1は小型の壺。胴部は丸く球状をなすと考えられるが底部を失う。口

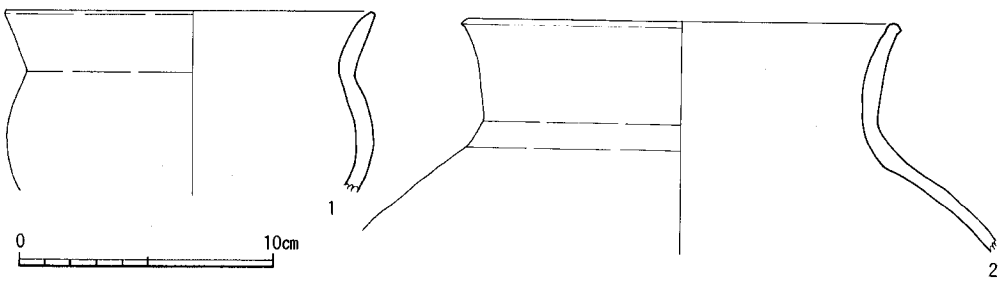


Fig. 41 SK－11出土遺物実測図

縁は外傾しながら直線的にのび、口縁端部は尖り気味におさめる。内外面は保存状態が悪く、調整痕等は不明。胎土には砂粒を含むが良質。焼成は良好。赤褐色をなす。口径14.5cm。2は大型の壺、口縁部は外傾せずにほぼ直立する。口縁端部は角ばる。肩部は張る。内外面の調整は器面が荒れていて不明。胎土は砂粒を含む。焼成はややもろい。白黄色をなす。口径17.4cm。

(8) SD－07 と出土遺物

① SD－07 (Fig. 42)

調査区のほぼ中央部をたちきるように直線的に南北に走る溝である。SA－01、SA－02、SB－02 と重複関係にあり、いずれの遺構にもたち切られている。溝はほぼ直線的で、主軸をN－3°－Wにとる。溝幅1.6～1.8m、深さ40cmで断面形は逆台形をなす。底は平坦で幅1mである。

Fig. 42 に示した断面実測図は、1は SA－01 の柱穴と切り合う部分の図である。2は1より南側6.5mに設定した土層観察のベルトで、検出した溝のほぼ中央部の断面図である。1では SA－01 の中央柱穴との切り合い関係が明瞭である。柱穴には柱痕跡が残っており、径23cm、下端部はやや尖っている。柱痕跡の埋土は掘り方の埋土に比較してやや明るくて粘質土が強い。掘り方埋土は版築状の叩きしめはみられないが固くしまっている。第1層、黒褐色粘質土、第2層がロームが混入した暗黄褐色土、第3層が黒色粘質土となっている。

溝の埋土は自然の流れ込みによる堆積で、3層に分離できる。第1層は黒褐色粘質土層、厚さ20～25cm。第2層はパサパサした黒色土層。厚さ5～10cm。第3層、ローム土を多く混入した暗黄褐色土層、厚さ5～40cm。2の断面も柱穴と切り合い関係にあり、柱穴に切られている。柱穴の埋土は黒褐色粘質土～暗黄褐色粘質土で、上部にはロームの混入が多い。溝の土層堆積

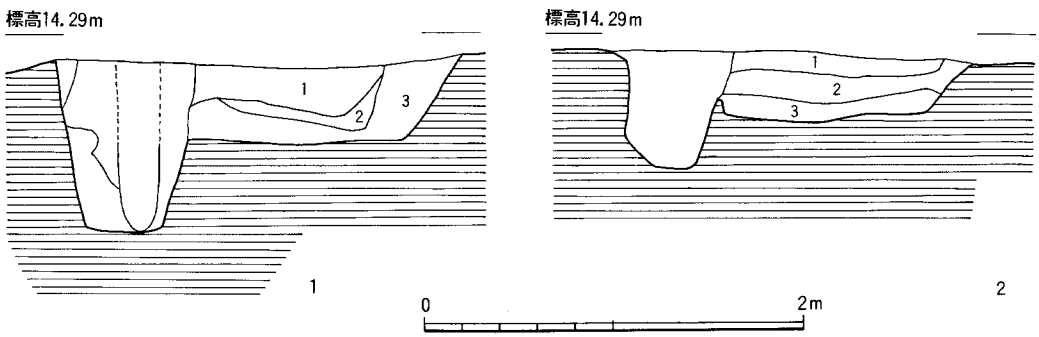


Fig. 42 SD－07 断面実測図

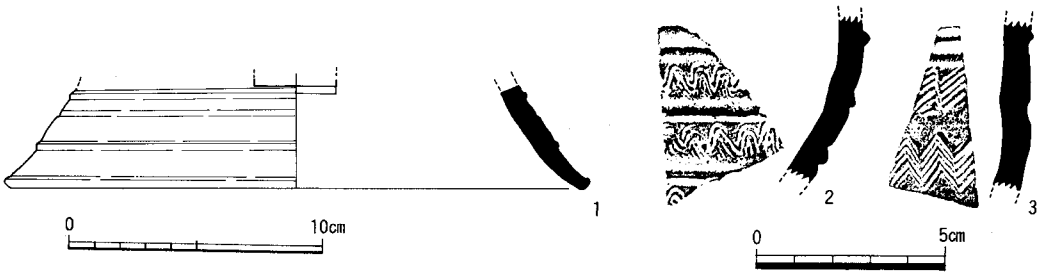


Fig. 43　SD－07 出土遺物実測図

は１と同様である。第１層黒褐色粘質土層、厚さ10cm、第２層、パサパサした黒色土層、厚さ10～15cm。第３層、暗黄褐色土層で厚さ10～15cmである。遺物の出土量は極めて少ないが、古墳時代の遺物に限られている。

② **出土遺物**（Fig. 43）

３点の須恵器を図示した。１は器台の脚端部破片である。脚端部復原径23.4cm、端部は丸くおさめている。裾部には２cmの間隔で断面三角形の凸線２条がめぐり、凸線間に凹線１条をめぐらしている。上の凸線直上には透し窓の痕跡がある。透し窓は幅2.8cmで長方形になると考えられる。内外面は横ナデ調整。胎土には若干の砂粒を含むが良質。焼成は堅緻。外面は黒～黒灰色、内面は黒色をなす。端部径は SA－01 の柱穴掘り方から同一個体が出土している。後述する Fig. 55－10 とも同一個体の可能性がある。２は器台台部破片。断面三角形の凸線３条をめぐらし、文様帯を区画し、上部３段にわたって荒い太目の波状文をめぐらしている。内面には自然釉がかかる。胎土には若干の砂粒を含むが良質。焼成は堅緻。外面は黒色、内面は黒灰色をなす。復原図は後出の Fig. 71－18 に示した。３は小破片。上部に断面三角形の凸線１条をめぐらし、その下に櫛目山形文を２段にわたって施している。内外面は横ナデ調整。胎土には砂粒を含むが良質。焼成は良好。灰色をなす。

５．歴史時代の遺構と遺物

(1)　SA－01、02 と出土遺物

① **SA－01**（Fig. 44・45）

調査区の中央部を北東から南西に切断するように検出した柵列である。３個の柱穴を一組と

して、N－44°－Eに主軸線をとるいわゆる3列の柵列である。SD－07、SK－04、SK－06と重複関係にあり、SD－07、SK－06を切り、SK－04に切られている。すなわち、古墳時代の遺構より新しく、中世末の遺構より古い。柱穴内からは遺物の出土はきわめて少なく、5世紀代の土師器、須恵器がみられるが、柱穴掘り方内からの出土であり、正確な年代を把握することは困難である。5世紀以降の年代が与えられるが中世までは下らないと考えられる。3個1組の柱穴では中央のものが最も大きく径約1m、深さ0.9m、両側の柱穴はやや小さく径0.9～0.7m、深さ0.5mを測る。柱穴に柱痕跡が残るものは少ない。柱痕跡、掘り方の埋土の状況はFig. 42に示したとおりである。3個の柱穴の心・心の各柱間は1m。梁行は2間の2mとなる。桁行柱間は、確認したのが8間の20m。心・心の柱間は2.5mを測る。SA－02は、SA－01の西側柵列より東に4.7m離れて東側柵列があり、SA－01と02は平行している。またSA－01と02の柱すじは一致せず約80cmのずれがある。

② **SA－02** (Fig. 44)

SA－01の東側4.7mにSA－01に平行して検出した柵列である。SA－01同様に3個の柱穴

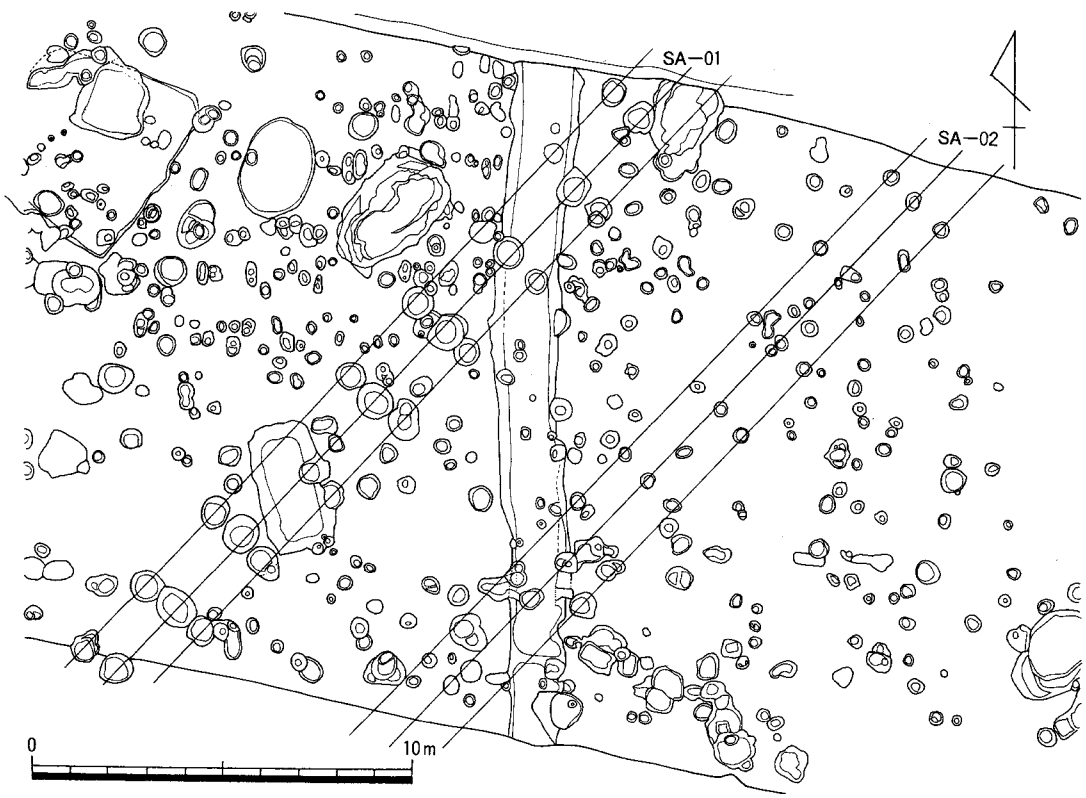


Fig. 44 SA－01・02平面実測図

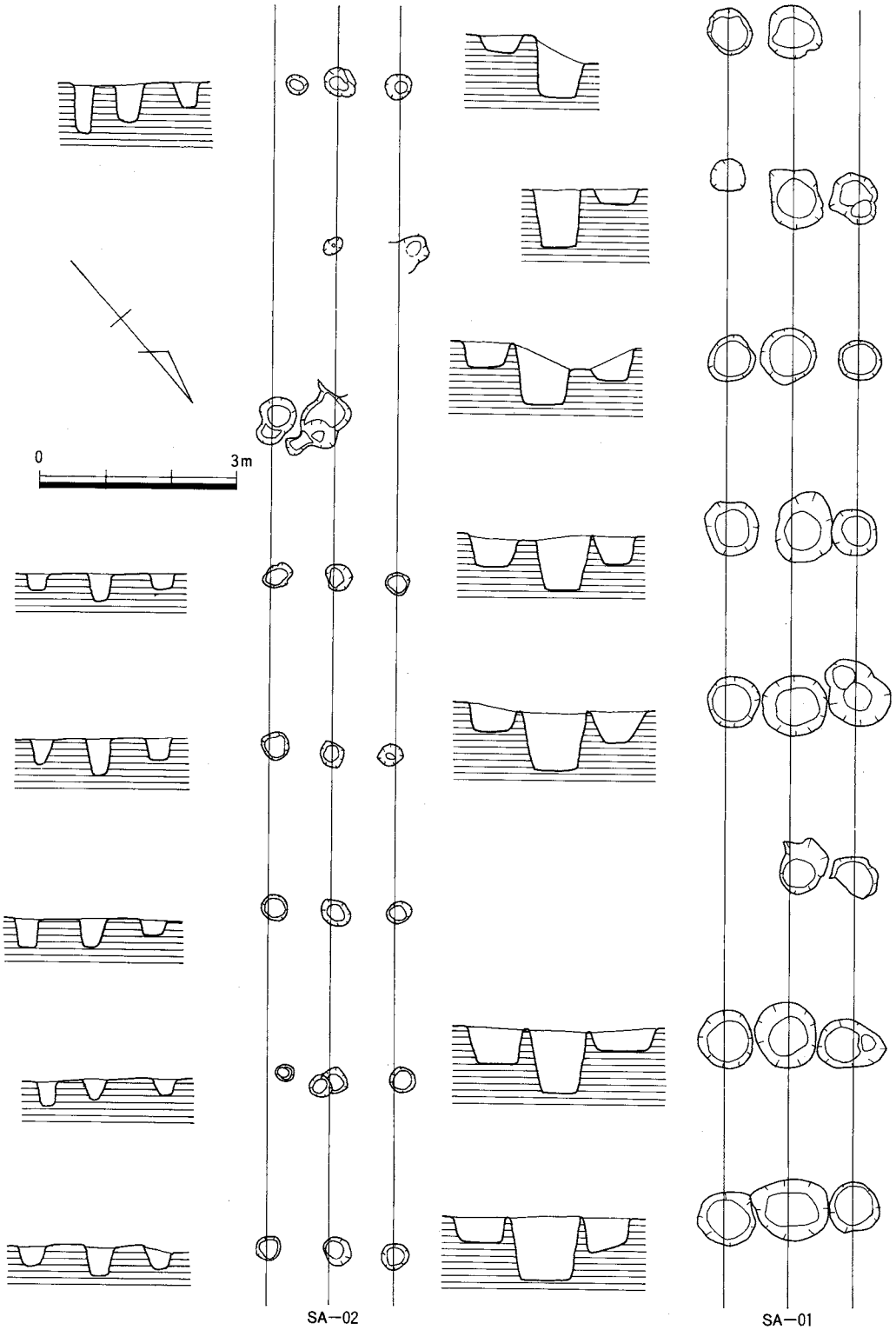


Fig. 45 SA−01・02 実測図

を一組として、N－44°－Eに主軸をとる3列からなる柵列である。SD－07、SB－02と重複関係にあり、SD－07を切っている。SB－02とは直接の切り合い関係がなく、新旧関係は不明。柱穴の大きさはすべてが径40cm前後、深さは中央部の柱穴が深く50～60cm、両側の柱穴はやや浅く30～40cmである。3個の柱穴の心・心の間は1m、桁行2.5mで7間分（17.5m）を検出した。

③ 出土遺物

両柵列の柱穴から出土した遺物はきわめて少ない。須恵器、土師器の小片があり、いずれも掘り方内からの出土で、柵列の時期を直接示すものでない。後節において、表土層出土遺物とあわせて説明を加える。

(2) SD－01と出土遺物

① SD－01 (Fig. 46・47)

調査区の西端部の北側に検出した溝である。溝は調査区の西壁から3mの所で、一旦浅くなり、東と西にそれぞれ深くなる。西側は調査区外に延び、東側は北東方向に約7m延び、そこでゆるやかに屈曲して東に延びるが、溝の約半分は調査区外にあたる。調査区内で検出した溝

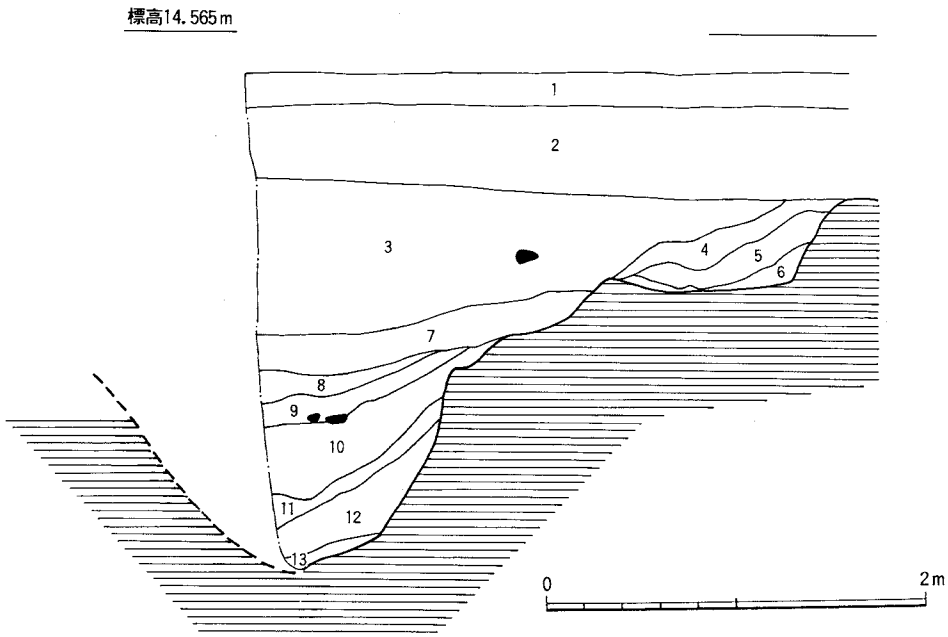


Fig. 46 SD－01断面実測図

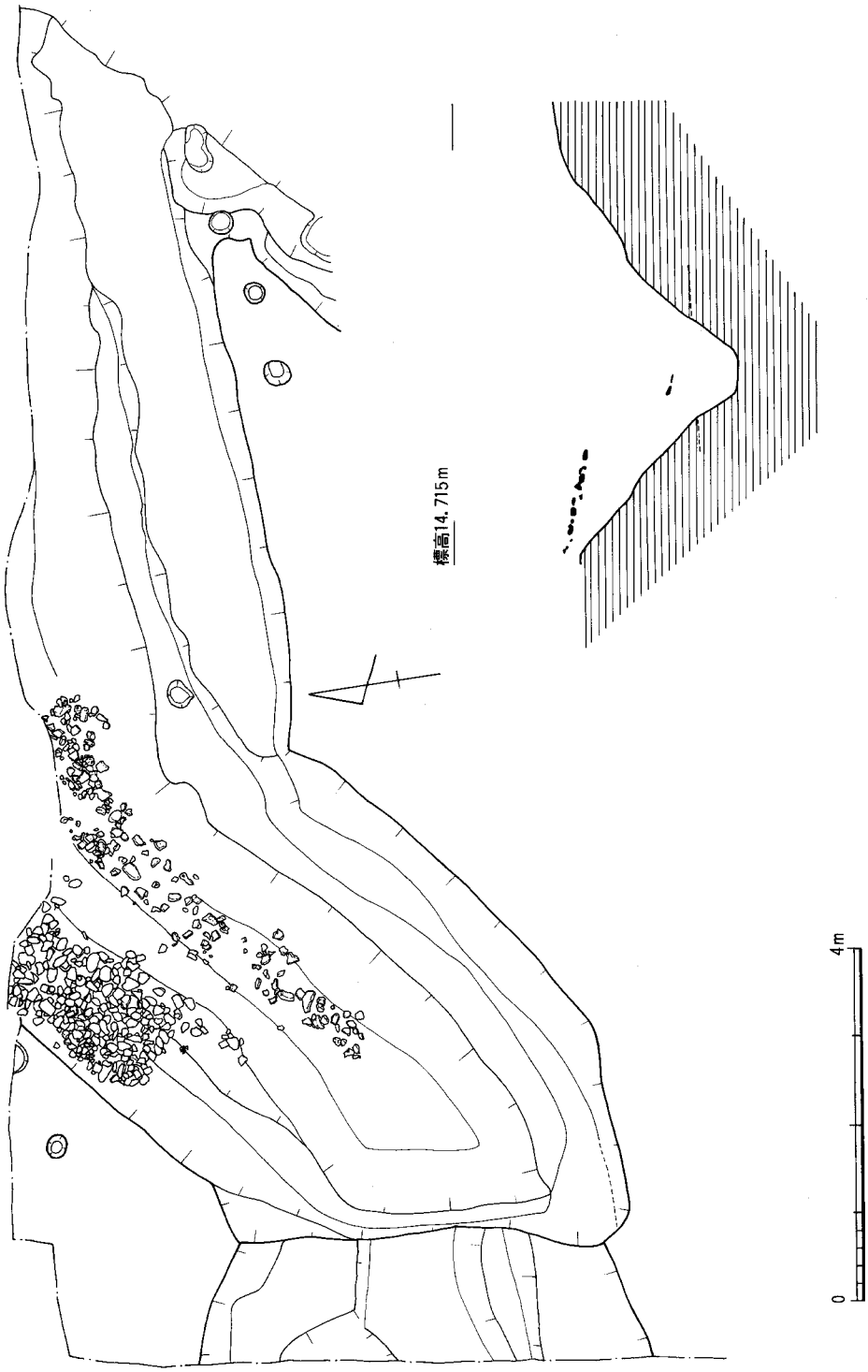


Fig. 47 SD－01 実測図

の長さは約27mである。溝幅は約5m、深さ約2m、溝底は幅約50cmの平坦面があるが、断面形は幅広のV字形をなす。所によっては2段にわたって掘り込まれ、犬走り状の部分が存在する。

溝の埋土状態は Fig. 46 に示すように自然の流れ込みによるものである。第1層、表土層、暗褐色砂質土、厚さ約20cm、現在の耕作土。第2層、黄褐色砂質土層、厚さ40～50cm、中世の包含層、調査区内では地山が SD－01 周辺で低く、この層位はその周辺のみに分布する。遺構はこの下面において検出した。第3層から溝の埋土である。黒褐色粘質土層で土器の細片を多量に含む。また、下部においては若干のロームが混入する。レンズ状の堆積で厚い所で80cmを測る。この層の中位で礫群が検出された。礫群は溝の屈曲部北岸に存在し、その範囲は2.0m×1.2mで溝北岸から溝にかけ円礫を敷きつめたような状態である。礫の中には瓦、須恵器、スラッグ、陶器類、凹石が少なからず混在している。第4～6層は犬走り状をなす部分の土層堆積である。第4層、黒色粘質土層、厚さ10～15cm、第5層、黒褐色粘質土層、厚さ20cm。第6層、ロームを混在した黒褐色粘質土層、厚さ5～10cm。第7層、ロームを混在した暗黄褐色粘質土層、厚さ20cm。第8層、ロームが多量に混在する黄褐色粘質土層、厚さ5～20cm。第9層、黒褐色粘質土層、厚さ10～15cm。この層の下面において、第3層同様の礫群がみられるが、上層ほど密ではなく散在的である。礫に混じり、土器、陶器、茶臼、スラッグ等が出土している。第10層、ローム・ブロックを若干含む暗黄褐色粘質土層、厚さ20～40cm。第11層、黒褐色粘質土層、厚さ10cm。第12層、暗黄褐色粘質土層、厚さ20～40cm。第13層、暗褐色粘質土層、厚さ5cm。溝底の地山は八女粘土層となっている。

なお、SD－01 は SD－03、SK－07 と重複関係にあり、SD－03 を切り SK－07 に切られている。また、SD－02 との間には幅1.5mの陸橋が形成されている。

② 出土遺物 (Fig. 48・49・50)

出土遺物には陶器、青磁器、白磁器、須恵器、土師器、明染、石臼、スラッグ、炉体、磨石、黒曜石、瓦類等がある。磨石、黒曜石、須恵器、土師器は混入品と考えられる。

Fig. 48－1は備前焼の大甕と考えられる。口縁部は丸く肥厚する。胎土には粗い砂粒を多量に含む。内外面共横ナデ調整。口径33cm。2は擂り鉢の底部破片。内外面共横ナデ調整。内面は使用のため磨滅する。底部径11.8cm。3は鉢、須恵質である。口縁部は肥厚し、断面三角形をなす。内外面共に横ナデ調整。胎土には砂粒を含む。焼成良好。口縁部が黒色、他は白灰色をなす。4～8は須恵器。いずれも混入品である。4、5は貼り付けの高台をもつ壺の底部である。高台は高く、端部は角ばっている。外底部から胴部にかけては丁寧なヘラ削り調整。内面は横ナデ調整。内底部は4が不定方向のナデ調整。5がヘラ状のものによる横ナデ調整である。胎土には砂粒を若干混入するが良質、焼成は4がややあまく、5は良好。4は黒灰色、5は白灰色をなす。4は高台径9.8cm、5は14cmを測る大型品である。6は蓋破片である。口縁

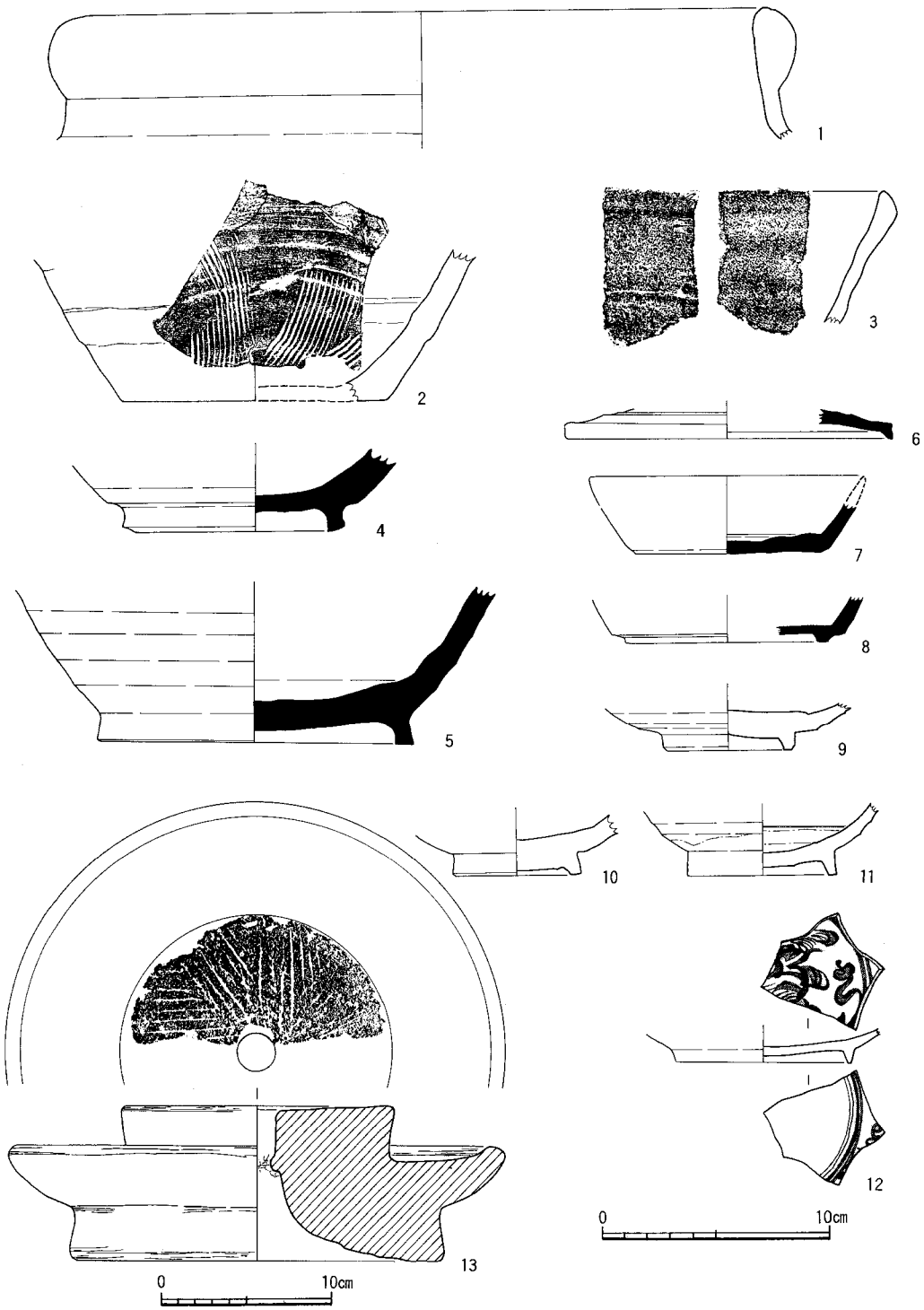


Fig. 48 SD－01 出土遺物実測図Ⅰ

部が嘴状に下に下り、端部は尖り気味におさめる。天井部の約1/2に回転ヘラ削り調整を加える。他は横ナデ調整。復原径15.4cm。胎土、焼成は良好、灰色をなす。7、8は坏。7は平底、8は低い貼り付けの高台をもつ。7は底部は粗いヘラおこし、体部内外面は横ナデ調整。内底部は不定方向のナデ調整。8は底部は粗いヘラ削り、他は横ナデ調整。共に胎土、焼成は良好、灰色をなす。7は底部径8.2cm、8は高台径7.5cmを測る。

9～12は陶磁器である。9は青磁器、削り出しの高台はあまり高くない。見込みには凹線一条がめぐり、見込みの中心には花文が描かれるが不鮮明。底部を除いた全面にオリーブ色の釉をかける。胎土は精良。高台径5.8cm。10は青磁器。高台は削り出しで低い。畳付きは丸味をもつ。底部を除いた全面にオリーブ色の釉がけを行う。胎土には若干の砂粒を含む。内底部には使用による磨耗がみられる。高台径5.8cm。11は白磁器。高台は削り出しで高い。体部下半はヘラ削り調整。内面見込みの部分は一部輪状に露胎となる。内面と下面上半部にやや濁った白釉をかける。高台径6.6cm。胎土白色で精良。12は皿。高台は低く、端部は尖り気味である。畳付きを除いた両面に施釉され、内外面には花文の染付がある。明染。高台径7.8cm。

13は茶臼の下臼である。ほぼ1/4を残す。受皿径29.4cm、擦面径16cm、厚さ9.1cm。芯棒孔径2.2cmを測る。側面、受皿部は敲打によって丁寧に仕上げる。目は8分画7副溝式、擦り目は1.5mm幅で、6mm間隔で彫られている。底はノミ痕が顕著である。石材は安山岩を利用している。

Fig. 49 は石硯。(長) 方形をなすと考えられ、その一角を残している。硯に使用された部分は円形ないしは楕円形で、中央部にむかってわずかに高くなっているので、中央部を陸とし、周辺部が海となっていたのであろう。硯の周辺には山水画的な絵がレリーフ状に彫刻されている。角の部分に岩山が彫りこまれ岩山からのぞくように人物像がある。人物は頭に髷を結い、あご髭をのばしている。目・鼻・口・耳共に丁寧に彫り出されている。人物の後は青海波文が彫り込まれる。厚さ2.4cm。あずき色の凝灰岩質の石を利用している。

Fig. 50 は瓦類である。上層、下層の礫群に混じってかなりの量が出土している。1は軒丸瓦、巴文と珠文を配する。巴文は長く、それぞれが合致し、圏線をつくる。珠文は37個前後と考えられる。縁は狭く高い。胎土には粗い砂粒を多量に混入している。瓦当面径12.7cm前後。2、4は平瓦。やや大型で厚手(2)と小型で薄手(4)がある。2は厚さ2.0cm、

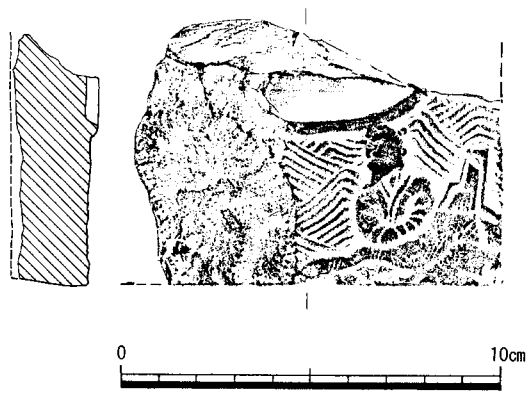


Fig. 49 SD－01 出土遺物（硯）実測図Ⅱ

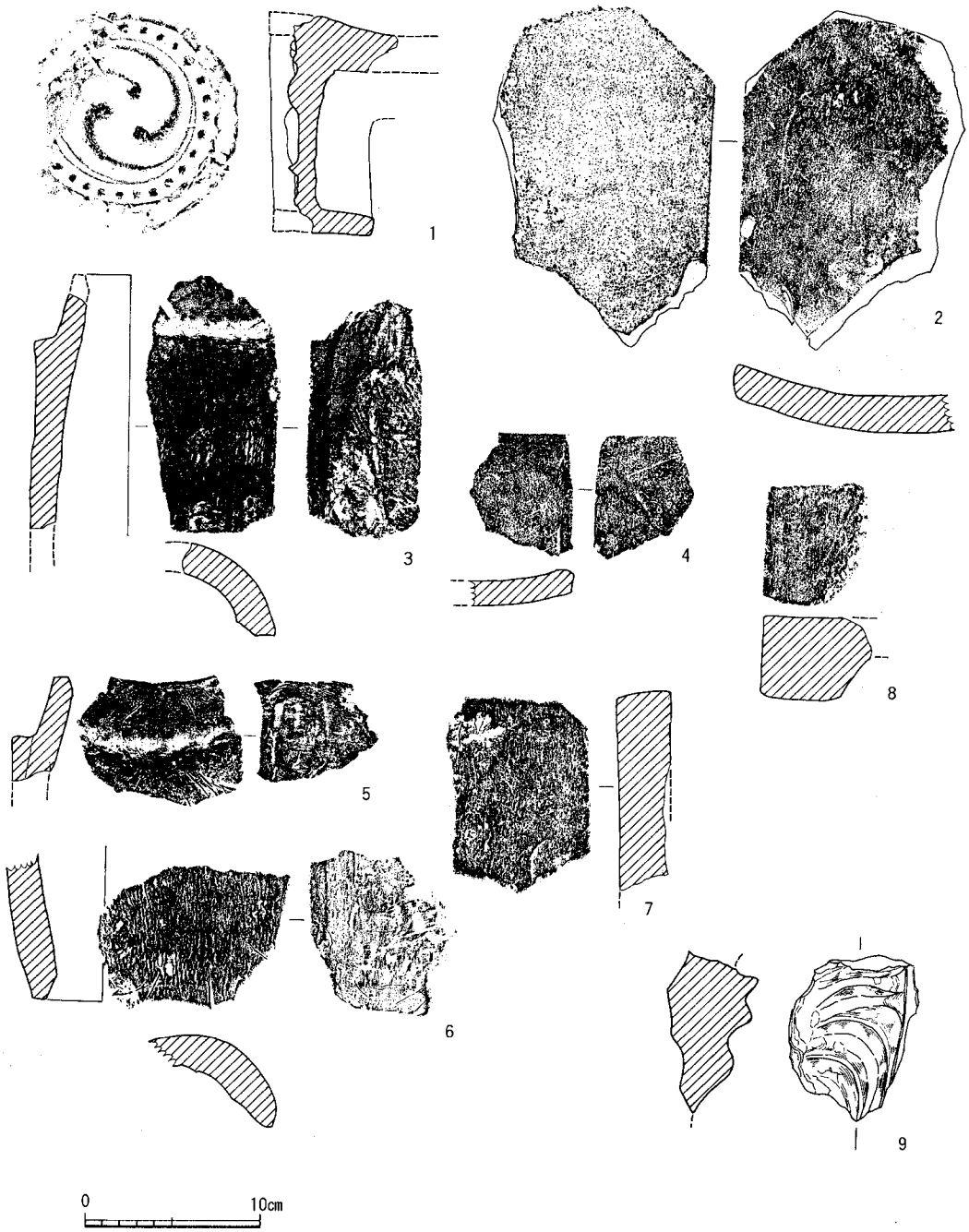


Fig. 50 SD－01 出土遺物実測図Ⅲ

4は1.5cm。表裏共ヘラ調整。3、5、6は丸瓦。3、5は玉縁部。6は筒部後端部の破片である。5は玉縁長4.0cm。3、6の背面には縄目のタタキ痕が残る。谷面は蓆(?)の圧痕がある。小口内側と周辺部はヘラ削りによって面とりを行っている。7は塼、厚さ3.2cm。8、9は鬼瓦の破片である。瓦類にはいずれも胎土に粗い砂粒を含む。焼成はややあまい。

(3) SD－02と出土遺物

① SD－02 (Fig. 51)

調査区の西端部の南側に検出した溝である。SD－03、SK－11・12と重複関係にあり、いずれもSD－02が切っている。溝は主軸方向をN－23°－Wにとり、北側はSD－01と約1m離れた地点より始まり、南側は調査区外にのびる。SD－01と同時期で、機能的には同じで、区画割りの溝と考えられる。SD－01との間に幅1mの陸橋を形成する。

溝幅2.6m、検出した長さは約11m。深さ1.25mで断面はV字形をしている。埋土は自然の流れ込みによるものである。第1層はロームの小塊を多量に含んだ暗褐色土層、厚さ65cm。第2層はローム塊を多量に含んだ黄褐色粘質土層、厚さ10～15cm。第3層は黄褐色粘質土のブロック、第4層は茶褐色ロームのブロック層、第5層はローム塊を少量含んだ暗褐色粘質土層、厚さ10cm。第6層、暗褐色粘質土層、厚さ35cm。第6層の上面には円礫群が存在する。

円礫群は、Fig. 52に示したように溝底に敷きつめられたような状態を示している。これらの円礫群に混じって、陶器、白磁器、青磁器、天目、須恵器、土器、スラッグ、炉壁、瓦類が存在する。SD－01の礫群ときわめてよく類似している。

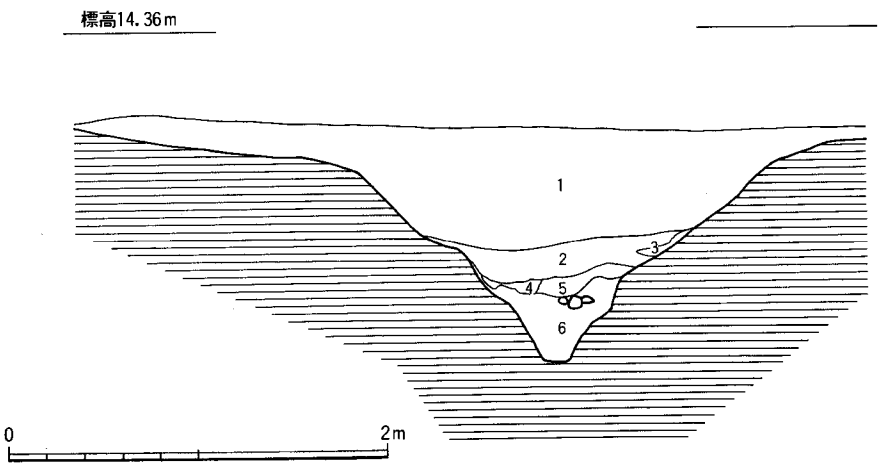


Fig. 51 SD－02断面実測図

② **出土遺物** (Fig. 53)

1は青白磁の皿と考えられる。削り出しの小さな低い高台をもつ。体部外面はヘラ削り。見込みに圏線一条をめぐらす。内面から外面上半に青白釉をかける。高台径4.4cm。胎土は白色で若干の砂粒を含む。2、3は白磁の碗底部である。2は削り出しの高台で、高台内側の削りは粗雑で荒々しい。見込みには段をもつ。内底部の調整もヘラで行い粗雑。内面に白釉を厚くかけ、外底部には釉はかからない。胎土には黒色の砂粒を多く含む。高台径5.7cm。3は体部がややひらく。高台は低い貼り付け高台。高台内側に糸切り痕が残り、上からナデが加えられている。外面高台より上から内面にかけて白釉がかけられる。高台径5.1cm。4は壺の底部である。平底でヘラ削りによって調整される。外面下部もヘラ削り調整。底部より4～5cm上まで天目釉がかかる。内面にも一部流れた状態で厚く釉がかかる。胎土には白色と黒色の砂粒が多量に混入されている。底部径10.8cmを測る。

5～7は瓦。5は平瓦、表はヘラ削り状のナデ、圧痕状の沈線がある。裏面には縁に沿って幅1.8cmの縁取りがみられる。周辺は丁寧なヘラ切り。厚さ2cm。6、7は丸瓦、筒部後端部から玉縁にかけての破片。玉縁長3.0cm。7は筒部前端部破片。共に筒部背面には縄目のタタキ痕、谷部には細い横方向の紐状の圧痕を残す。周辺部はケズリによって面取りされている。6～7は共に胎土には砂粒を多く含む。黄褐色をなす。

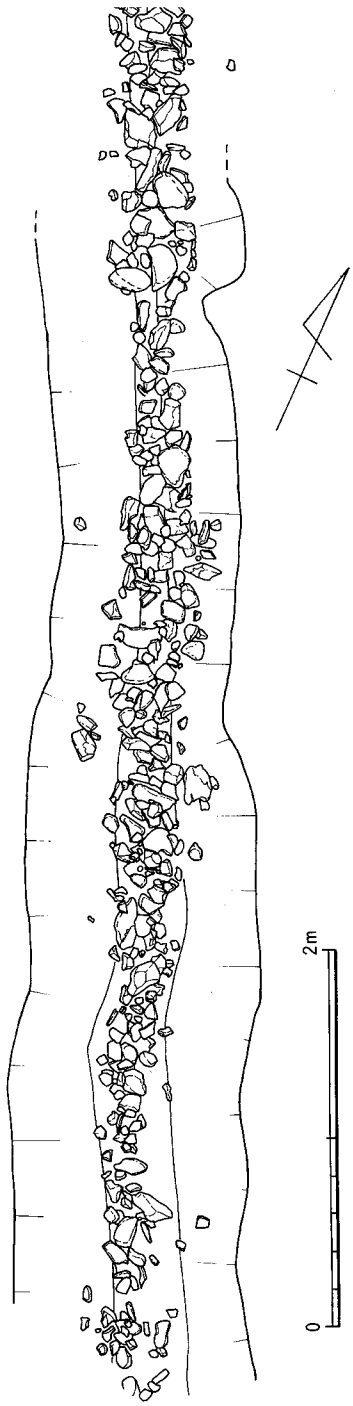


Fig. 52 SD－02 平面実測図

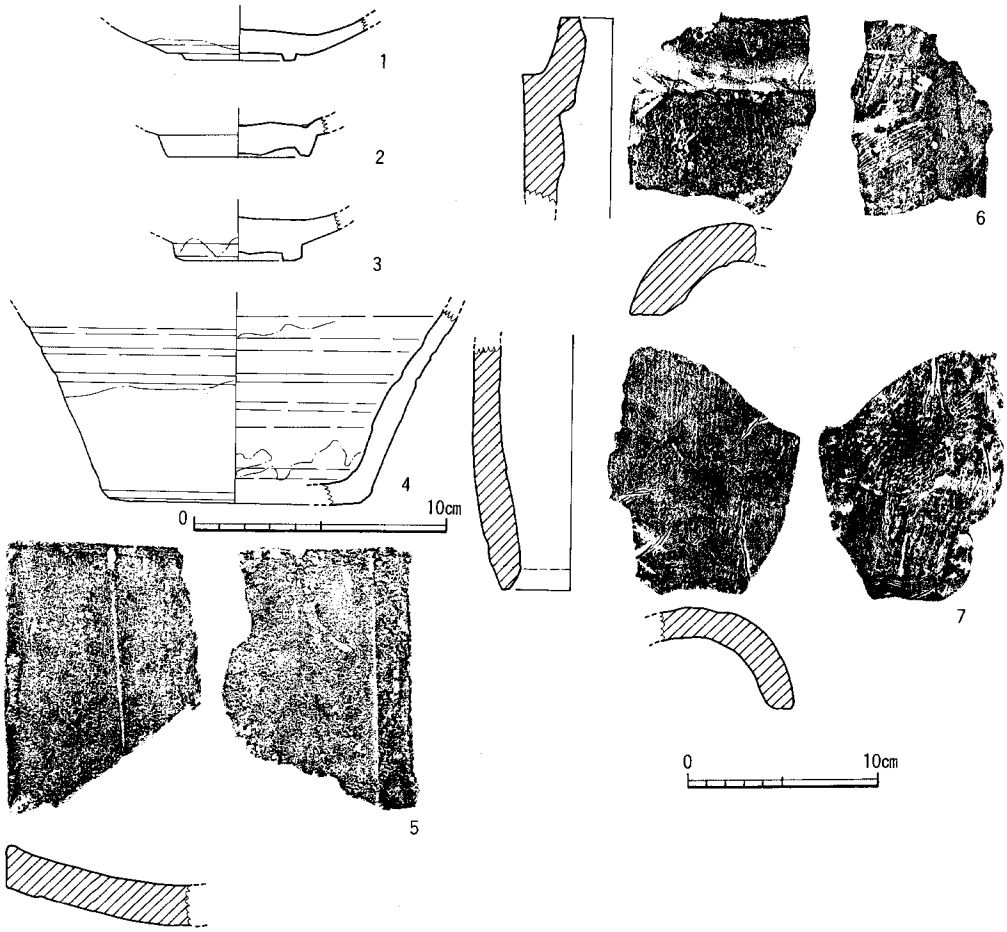


Fig. 53 SD－02 出土遺物実測図

(4) SD－05 と出土遺物

① **SD－05** (Fig. 54)

調査区の東端近くに検出した溝である。調査区に対角線状に存在し、北側、東側は調査区外にのびている。溝は２本に分かれ、検出した溝中央部に掘り残しがあり、幅約１ｍの陸橋がつくり出されている。SK－01、SD－04 と重複関係にある。SK－01 とは接するような関係にあるが、わずかに切られている。SD－04 は完全に埋った後、その上に SD－05 が掘り込まれたような状態を示している。

溝は全体的には若干弧を描くような方向を示すが、陸橋を境として、北、南側の溝はそれぞれは直線的である。北側溝は主軸方向Ｎ－11°－Ｗ、南側溝は主軸方向Ｎ－27°－Ｗをとる。北

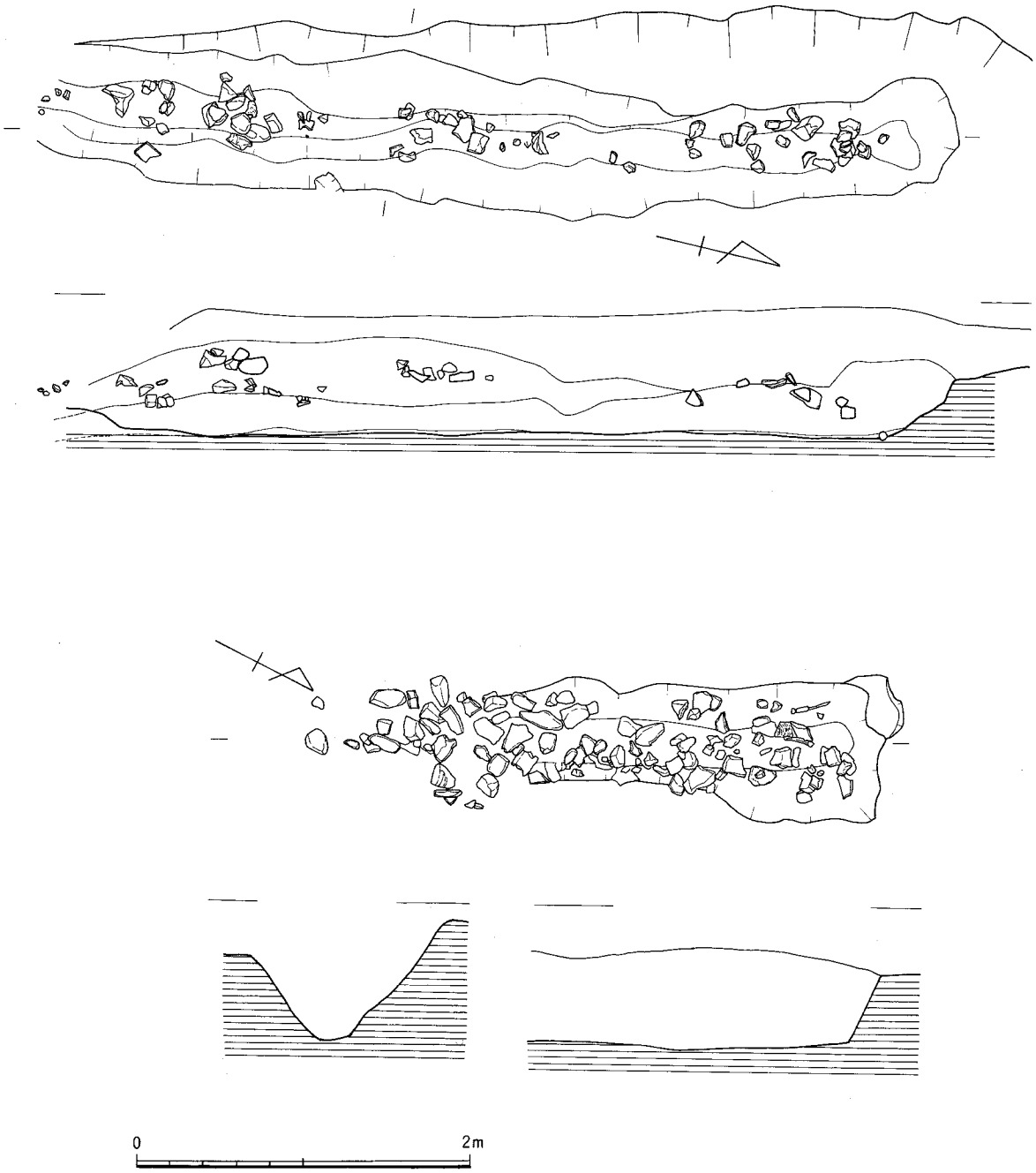


Fig. 54 SD－05 実測図

側溝は幅0.6～1.0m、長さ5.5m、深さ0.7m、底面は若干平坦面をもつが、断面V字形をなす。埋土は黄色のローム小塊を多く含んだ黒色粘質土層で埋っている。溝の埋土中位には礫や遺物（須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、青・白磁器、瓦類、スラッグ）を比較的多く含んでいるが、SD－02 のように敷きつめたような状態ではない。南側溝も北側溝と類似している。幅0.5～0.9m、長さ3.5m、深さ約0.6m。断面形態、埋土の状態は北側溝と同様である。埋土中の礫群は北側溝より若干多いが、SD－02 程ではない。出土遺物も北側溝同様で、須恵器、土師器、陶磁器、瓦類がある。SD－04 の埋土部分は、識別が困難で明瞭には検出できなかった。

② **出土遺物** (Fig. 55)

SD－05 から出土した遺物には、須恵器、土師器、陶器、瓦質土器、瓦、スラッグ等がある。須恵器、土師器は細片で混入品である。図示できるものは少ない。

1 は中国産の陶器大甕である。口縁部は短く外反し肥厚する。口縁端部は方形で、凹線 1 条をめぐらす。内側には蓋受けの段をつくり出している。頸部は短く、肩が張る。口縁端部と蓋受けの部分は無釉で、他は淡黄緑色の釉がかけられる。体部内面はやや細い同心円の受け具痕が残る。胎土には砂粒を含み、褐色をなす。復原口径43.6cmを測る。2 は土師質土器の火舎。口縁は肥厚し、上端部は平坦である。口縁下には刺突による文様が等間隔で施される。体部はややふくらみをもつ。体部内面は指おさえの上に横位の刷毛目調整を施す。胎土には砂粒を若干含む。二次的に火を受けていて黄赤色をなす。復原口径29.5cm。3 は瓦質土器の湯釜。体部下半部を欠いている。体部は球形をなし、肩部に縦耳がつき、車輪文の型押しの文様が等間隔でつけられる。頸部は強いナデによって凹み、口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。肩部内面は指おさえの調整で指紋が残っている。他は横ナデ調整。胎土は良質、黒灰色をなす。復原口径16.2cm。4 も火舎の体部破片とみられる。小さい断面三角形の突帯 1 条をめぐらす。突帯の直上には型押しの文様を等間隔に配する。直下には縦の細い沈線が等間隔でいれられている。内面は横位の刷毛目調整。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒が混じっている。焼成は良好。灰黄色をなす。5 は土師器、高台は外に張る。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好、赤褐色をなす。混入品とみられる。6 は土師器坏。底部は糸切り。体部は外傾しながら直線的にたちあがる。体部中位の 2 ケ所に焼成後穿孔の小さな孔がある。内外面は横ナデ調整。胎土には砂粒を含む。焼成良好、黄赤色をなす。

7 ～ 9 は瓦。7 、8 は丸瓦、9 は平瓦である。7 は筒後端部。玉縁は長さ3.5cm。8 は筒中位の破片である。共に筒部背面には縄目のタタキ痕が残る。谷部には細い平行した紐状の圧痕がみられる。9 は表裏共にヘラナデ調整。厚さ2.0cm。側面はヘラで面取りがおこなわれる。瓦は胎土には粗い砂粒を多く含む。白黄色～黄灰色をなす。

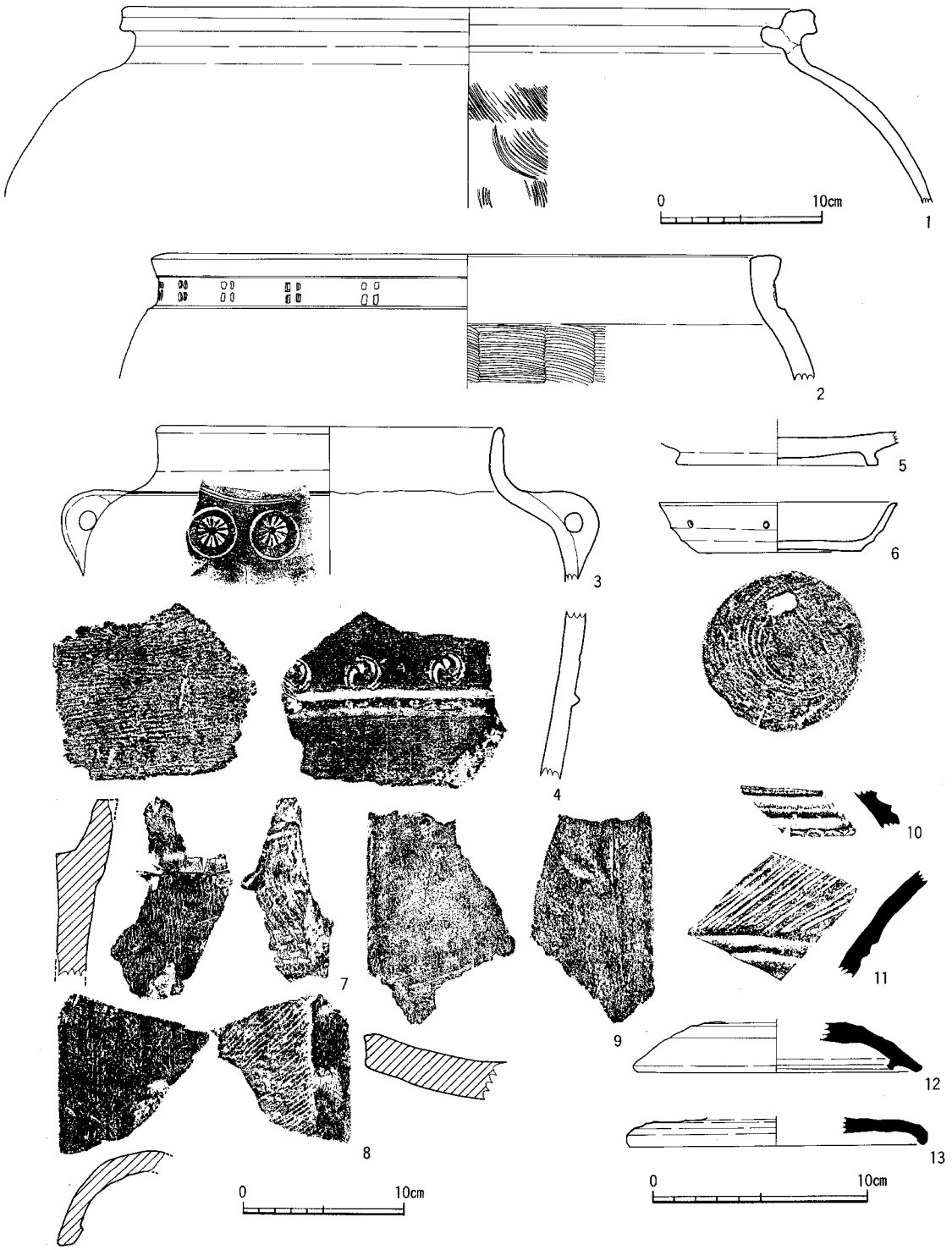


Fig. 55 SD－05・06 出土遺物実測図

(5) SD－06 と出土遺物

① SD－06 (Fig. 56)

調査区の東端に検出した溝である。SD－05 の西側約 2 m～ 4 m離れて、調査区中央部から始まり、南から北に走る。SK－10 と重複し SK－10 に切られている。溝幅1.25m～1.5m、長さ8.9m、深さ 5 ～11cmときわめて浅い。溝底は平坦で幅1.0m～1.3m。断面逆台形をなす。埋土は黒色粘質土層。埋土中より若干の須恵器、土師器、礫が出土しているが、埋土状態等からみて遺物は混入した可能性が強い。

② 出土遺物 (Fig. 55)

弥生式土器、土師器、須恵器、土製品、スラッグ等があり、その大部分は小片で、混入したものである。10～13はいずれも須恵器である。10、11は初期須恵器の器台の破片。10は断面三角形の突線 2 条をめぐらし、その下に波状文を入れるが小破片。11は突線 2 条をめぐらし、その上部は斜めの沈線を平行して入れる。共に胎土には砂粒を多く含む。焼成は堅緻。10は青灰色、11は黒灰色である。12、13は共に蓋。12は口縁端部は丸くおさめる。天井部は約1/2の範囲が回転ヘラ削り。内面のかえりは低く、端部は平坦に仕上げている。他は横ナデ調整。口径3.6cm。13は口縁が下方に屈曲する。端部は丸くおさめている。内外面共に横ナデ調整。口径14.0cm。共に胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好。12は赤灰色、13は灰色をなす。

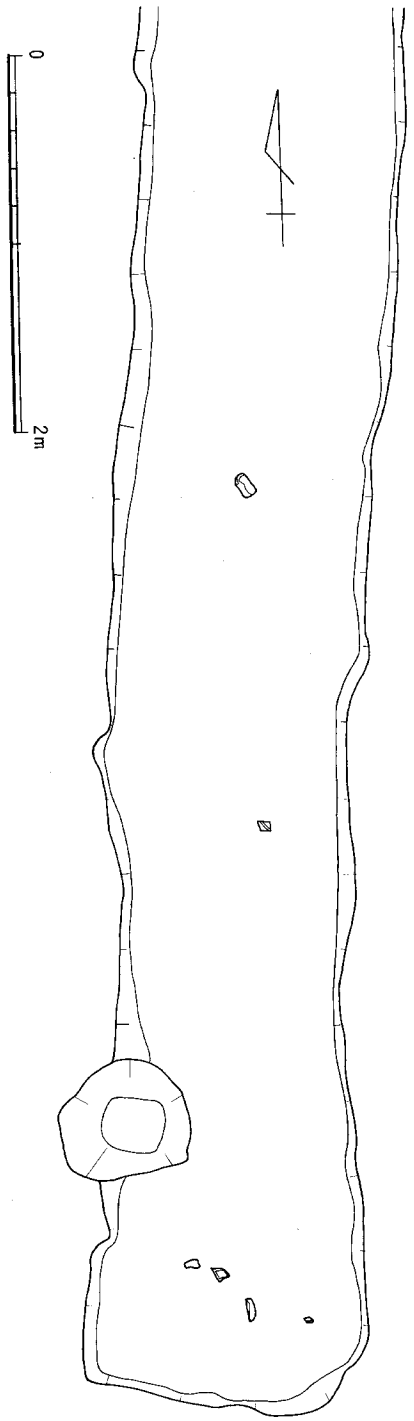


Fig. 56 SD－06 実測図

(6) SD－08 と出土遺物

① SD－08 (Fig. 57)

調査区の東端部に検出した溝状の遺構である。SD－05 の西側 1 m～2.5m、SD－06 の東約1.5mに位置し、調査区の北側から始まり、北から南に走る。SD－06 とほぼ平行している。SD－04 と重複関係にあり、SD－04 を切っているが、SD－04 の埋土に切り込まれた部分は明瞭でなく検出していない。

溝は幅0.65～1.1m、検出長7.3m、深さは17～57cmであるが、溝底は場所によって大きく異なり、土坑状をなす部分もある。溝というよりは土坑が連なったような状態を示している。埋土は黒色粘質土で、中より若干の遺物が出土している。

② 出土遺物

出土遺物は極めて少い。須恵器、土師器の小片があるが図示できるものはない。

出土遺物の最も新しいもの、埋土の状態から時期は中世に比定できる。

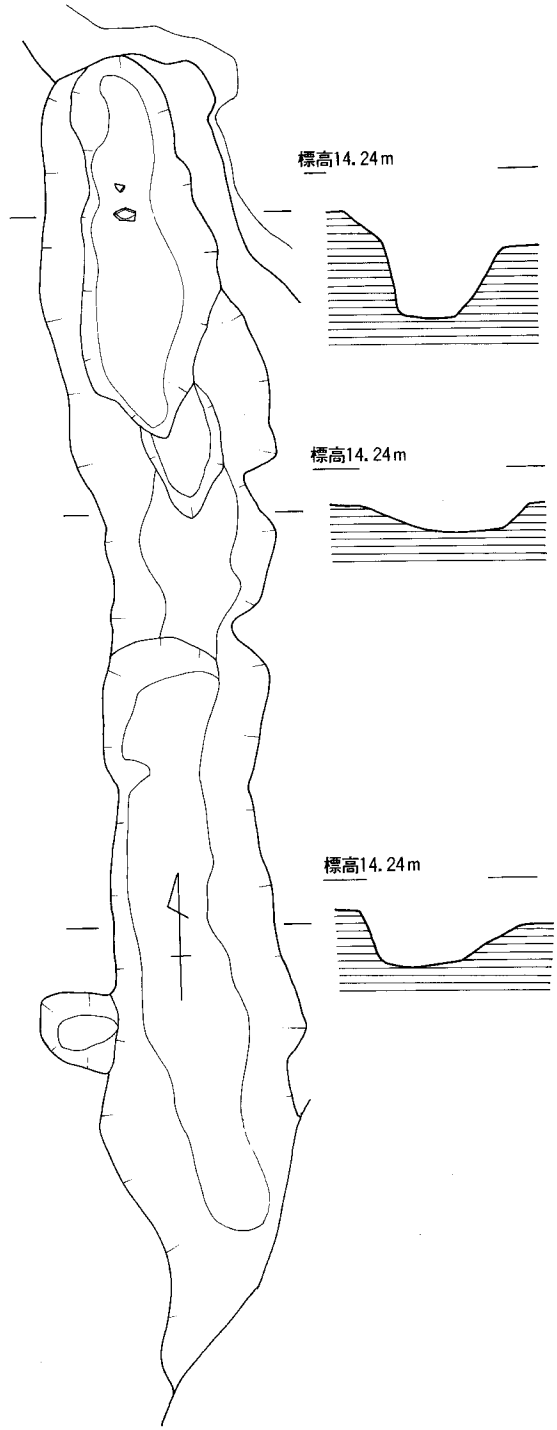


Fig. 57 SD－08 実測図

(7) SK－01 と出土遺物

① SK－01 (Fig. 58)

調査区の東端部の北壁に接して検出した土坑である。SK－10、SD－05 と重複関係にあり、SD－05 を切り、SK－10 に切られている。土坑は北側が調査区外にのびるために、その全形を知ることはできない。確認した部分では主軸方向は N－1°－E で、長さは2.3m、幅1.36mの隅丸の方形プランをなしている。深さ0.95m、底は平坦である。壁は南側はゆるやかな傾斜をもつが、東、西の側壁は急傾斜で掘り込まれている。

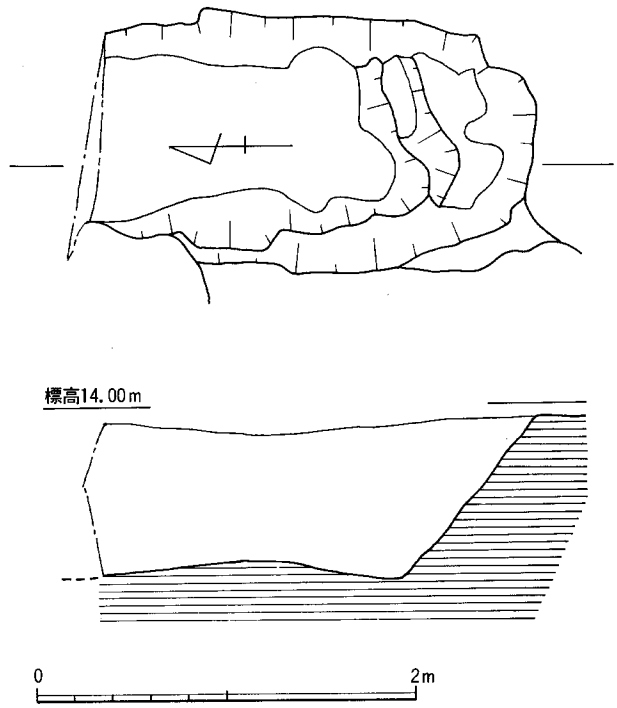


Fig. 58 SK－01 実測図

② 出土遺物 (Fig. 59)

弥生式土器、土師器、須恵器、瓦質土器、フイゴ羽口、スラッグ等があるが、弥生式土器、須恵器、土師器は後世の混入品である。遺溝の時期は瓦質土器、フイゴ羽口の示す年代である。

1、2は弥生式土器。1は壺形土器の底部。円盤貼り付け状をなし、前期初頭の土器と考えられる。全体に磨滅がひどく、調整等は不明。胎土は精良。黒黄色をなす。底部径7.2cm。2は後期後半の壺形土器。貼り付け突帯である。突帯幅4.0cm、高さ0.9cm。突帯の上には沈線で斜格子が描かれる。3～5は土師器。3は壺。3は口縁部がやや膨らみながらたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。口縁内外面は横ナデ調整。復原口径15.8cm。4は口縁部が大きく外反する。端部は丸くおさめる。器面が荒れ、調整痕は不明。口径15.9cm。5は椀。口縁部は内傾する。端部は尖り気味に丸くおさめる。外面は横方向のヘラ研磨、内面はヘラ削りである。口径13.0cmを測る。土師器はいずれも胎土に砂粒を含む。焼成は良い。3は黄赤色。4、5は赤褐色である。

6～12は須恵器。6は無蓋高坏の坏部。底部と体部との境に段をもつ。体部はやや丸味をもってたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内外面共横ナデ調整。内面には自然釉がガラス状になって付着している。口径10.4cm。胎土には砂粒を含むが良質、焼成堅緻で灰色をなす。7は器台破片。一部コンパス文様がある。外面には黒色顔料が塗られる。胎土精良、焼成堅緻、

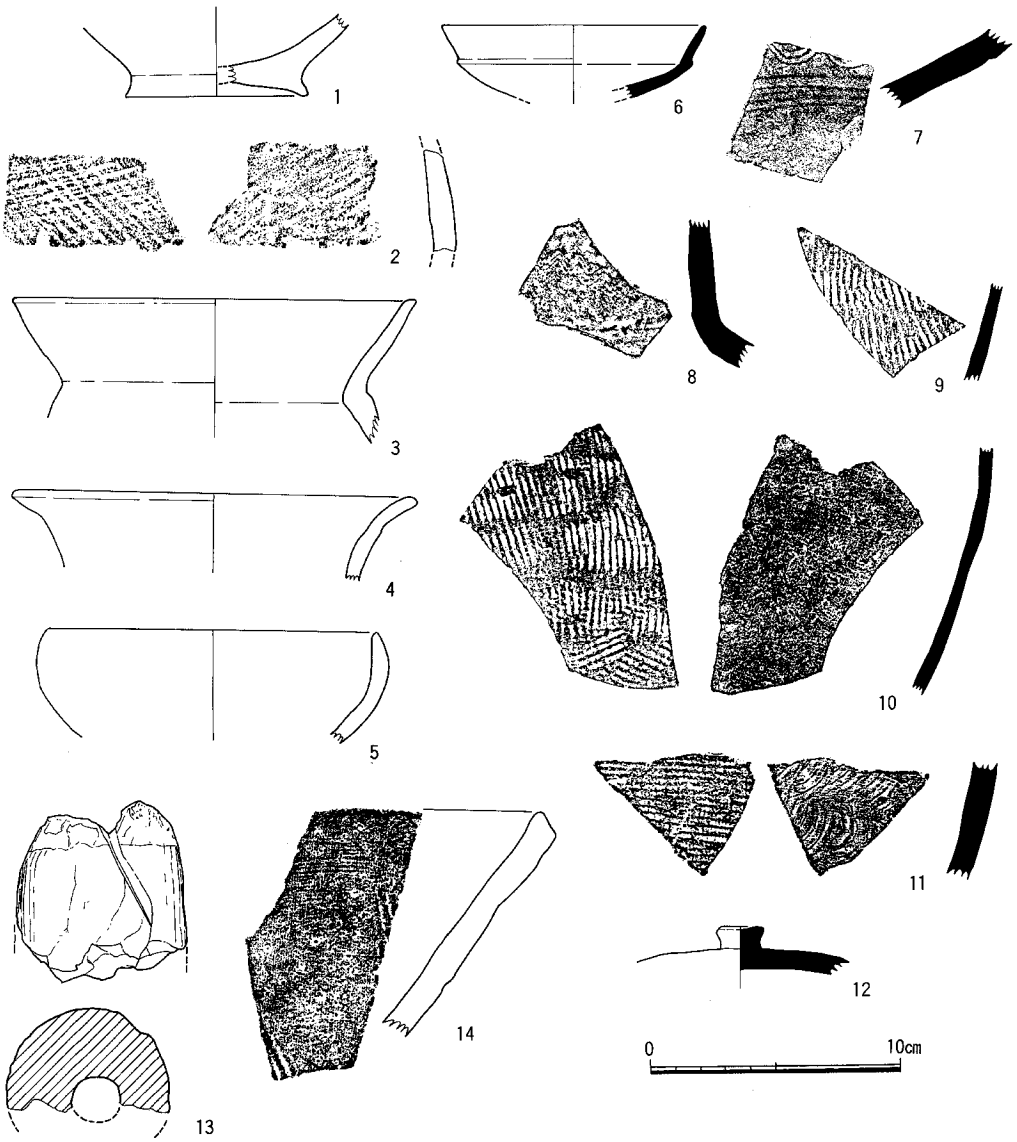


Fig. 59 SK－01 出土遺物実測図

黒色をなす。8は壺頸部破片、頸部には櫛描波状文がある。胎土、焼成は前者と同様。黒灰色をなす。9～11は胴部破片。9、10は同一個体。外面に擬格子のタタキ、内面は横ナデによって受け具痕が消される。11は外面に擬格子のタタキ、内面は同心円の受け具痕が残る。共に胎

土には若干の砂粒を混入。焼成は9、10は良好で、11はあまい。9、10は青灰色、11は黒色～灰色をなす。12は蓋。ボタン状のつまみがつく。内外面共横ナデ調整である。胎土は良質、焼成良好、黒灰色をなす。

14は土師質の擂鉢。体部は外傾しながら直線的にのびる。外面は指による調整で凹凸がある。内面は横方向の丁寧な刷毛目調整後、間隔をおいて、擂鉢の溝を入れる。胎土には砂粒を混入。焼成はややあまい。白黄色をなす。13はフイゴ羽口、先端部の破片。外面先端部は溶解しガラス状をなす。径6.5cm。孔径1.9cmを測る。

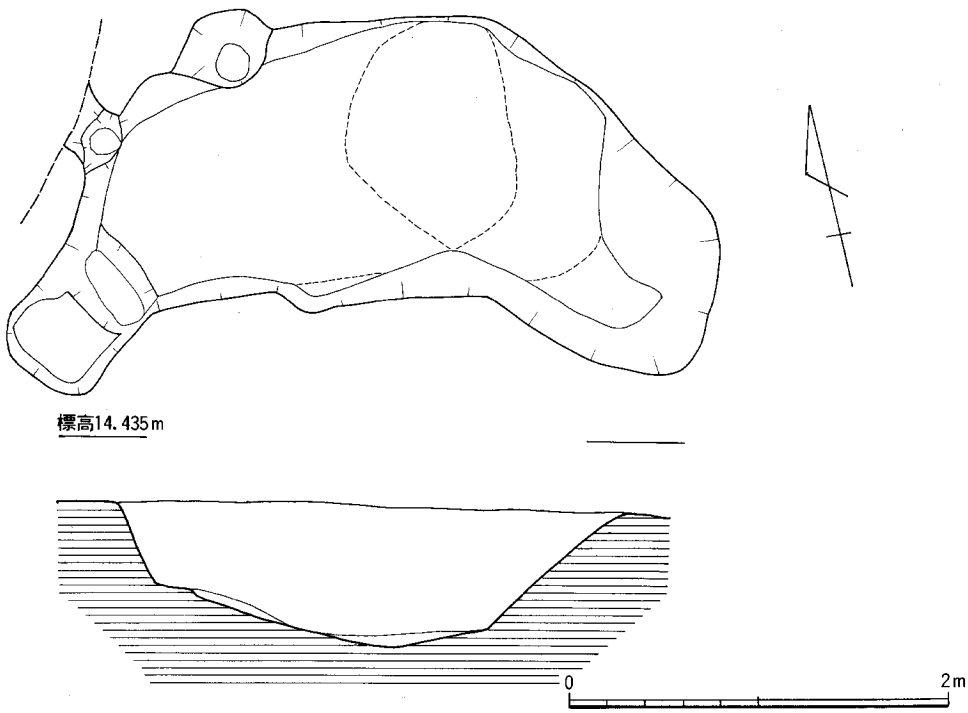


Fig. 60 SK－03 実測図

(8) SK－03 と出土遺物

① **SK－03** (Fig. 60)

調査区の東端、SD－04 の西約1.5m、SK－02 のすぐ南東部に検出した土坑である。現状では、直径3.8m、短径1.5mの不整長楕円形プランをしているが、発掘所見からは２個の長方形土坑の切り合いと思われる。深さに若干の違いがあるが、両者の新旧関係は明らかにできない。復原される土坑は東側が長径2.3m前後、短径1.2mの楕円形プランで、深さ73cm。西側が長径2.4m、短径1.5mの長方形プランで深さ54cmである。

② **出土遺物**

須恵器、土師器、瓦、中世土器の細片が、ごく少量存在するが、図化できるものはない。遺

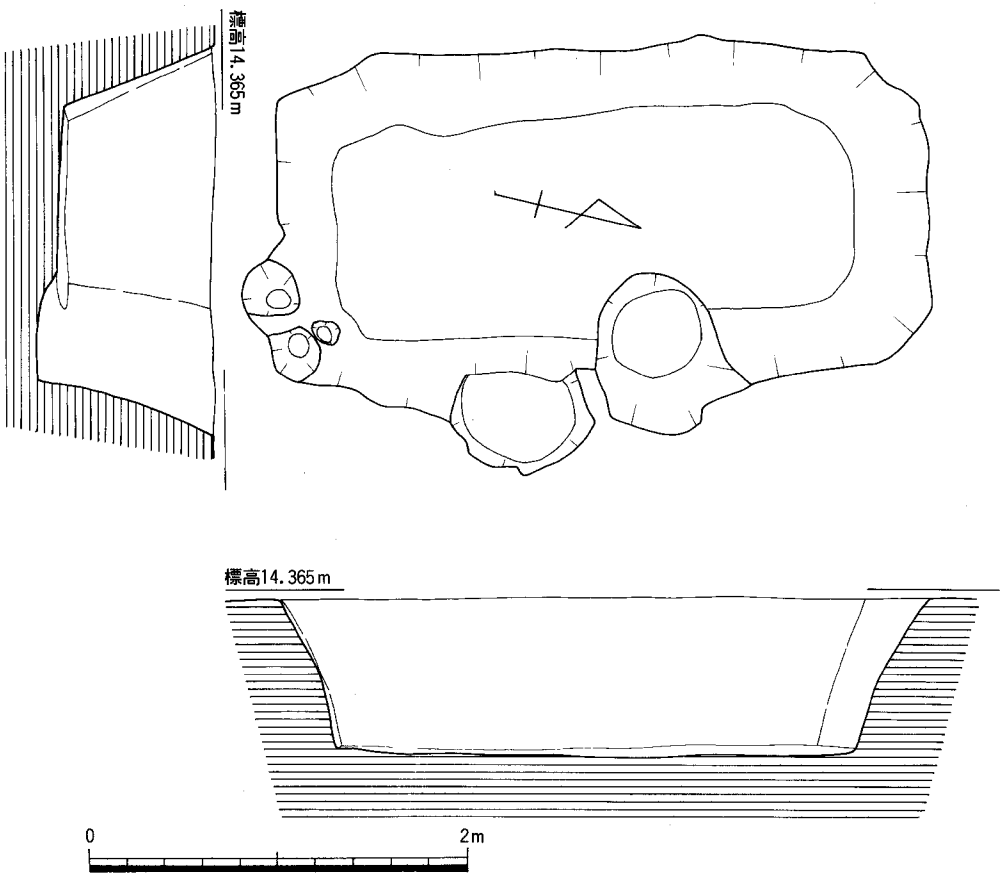


Fig. 61 SK－04 実測図

構の時期は中世末頃か。

(9) SK－04 と出土遺物

① SK－04 (Fig. 61)

調査区の中央部に検出した土坑である。SA－01 と重複関係にあり、SA－01 の柱穴を切っているので、SA－01 より新しいことがわかる。隅丸長方形に掘りこまれた端正な土坑である。長径3.48m、短径1.80m、深さ0.84mを測る。内からは石臼をはじめとして、多量の遺物が出土している。意識的に投げこまれた状態を示している。

② 出土遺物 (Fig. 62・63・64)

土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、石臼、板碑等がある。須恵器、土師器は後世の混入品。石臼、板碑がまとまって捨てられているのは注目される。

1は瓦質土器の擂鉢。外部は大きく外傾し、口縁部は内側に肥厚し、三角形に突出する。内面には5条の溝がある。胎土には砂粒を含む。黒灰色をなす。復原口径26.6cm。2～5は土師質の鉢形土器である。2は口縁端がやや肥厚し、横ナデによって平坦になる。外面は指おさえの調整で凹凸がある。下部にススが付着する。胎土は赤色鉱物の砂粒を含むが精良、焼成はややあまい。赤褐色をなす。復原口径24.0cm。3、体部は外傾しながら直線的にたちあがり、口縁部でやや内傾する。口縁端部は平坦で浅い凹線1条がめぐる。体部中位に断面三角形の低い突帯1条がめぐる。外面は指おさえの調整で凹凸が著しい。突帯付近より下にススが付着する。内面は横方向の刷毛目調整。胎土には石英、長石、金雲母の砂粒を含む。焼成は良好、黄褐色をなす。復原口径24.6cm。4、5は底部破片。4は外面に指おさえの凹凸がある。器壁は2次的に火を受け赤変する。5は体部から底部にかけて刷毛目調整。共に胎土には砂粒を含んでいる。9は瓦質土器の湯釜の下半部破片。体部中位に幅2.0cmのツバをもつ。ツバにはススが付着している。外面は横ナデ調整。内面は横方向の刷毛目調整である。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好、黒灰色をなす。

6は陶器。全面にやや青味をもった白釉をかけるが、一部、露胎のままの部分もある。胎土は精良。赤橙色をなす、見込みには重ね焼きの目跡1ヶ所が残っている。高台は低い。径4.4cm。

7は須恵器。口縁は大きく外反し、端部に太い凹線を入れる。内外面は横ナデ調整。胎土には若干の砂粒を混入する。焼成は堅緻。黒灰色をなす。

8は土師器の椀。体部はふくらみをもってたちあがり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面の調整は不明。復原口径14.2cm。胎土には砂粒を含む。焼成は良く、赤褐色をなす。

Fig. 63－1～4, Fig. 64－1, 2 は石臼。Fig. 63－1～3 は茶臼、4 は挽き臼とみられる。1 は上臼で約1/4が現存する。上縁復原径19.5cm。上縁幅2.9cm、くぼみの深さ2.4cm。供給孔径3.0cm、ふくみは0.4cm、高さ11cmを測る。臼の目は八分画六溝式であるが、磨滅し不明瞭。挽木の打込孔は1.9cm×2.1cmの方形、深さ4.6cm。打込孔の周辺には方形の二段の装飾がつく。安山岩製。2 は打込孔周辺部を残す小破片である。上縁復原径16.6cm。上縁幅2.3cm。くぼみは現状

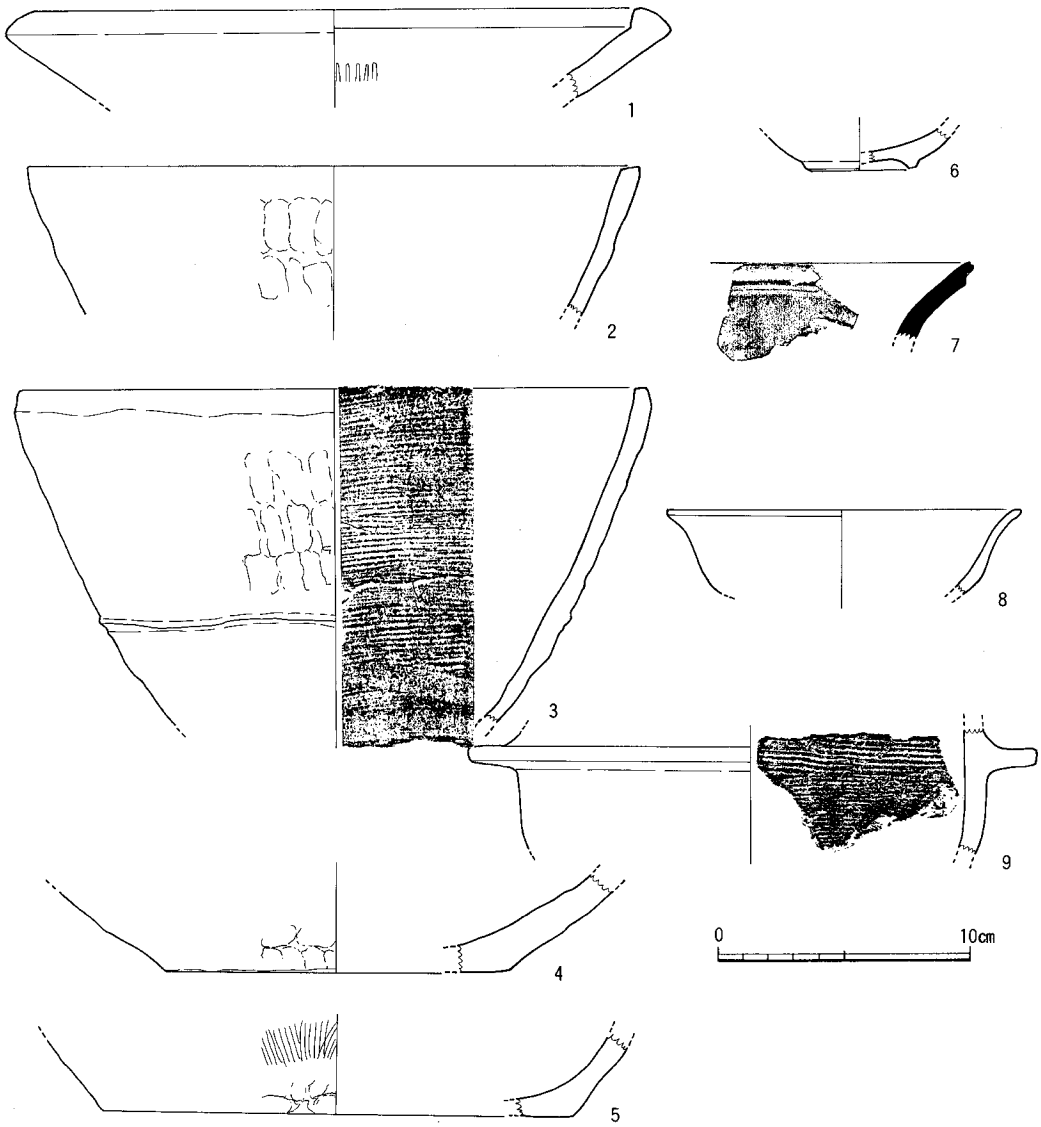


Fig. 62 SK－04 出土遺物実測図Ⅰ

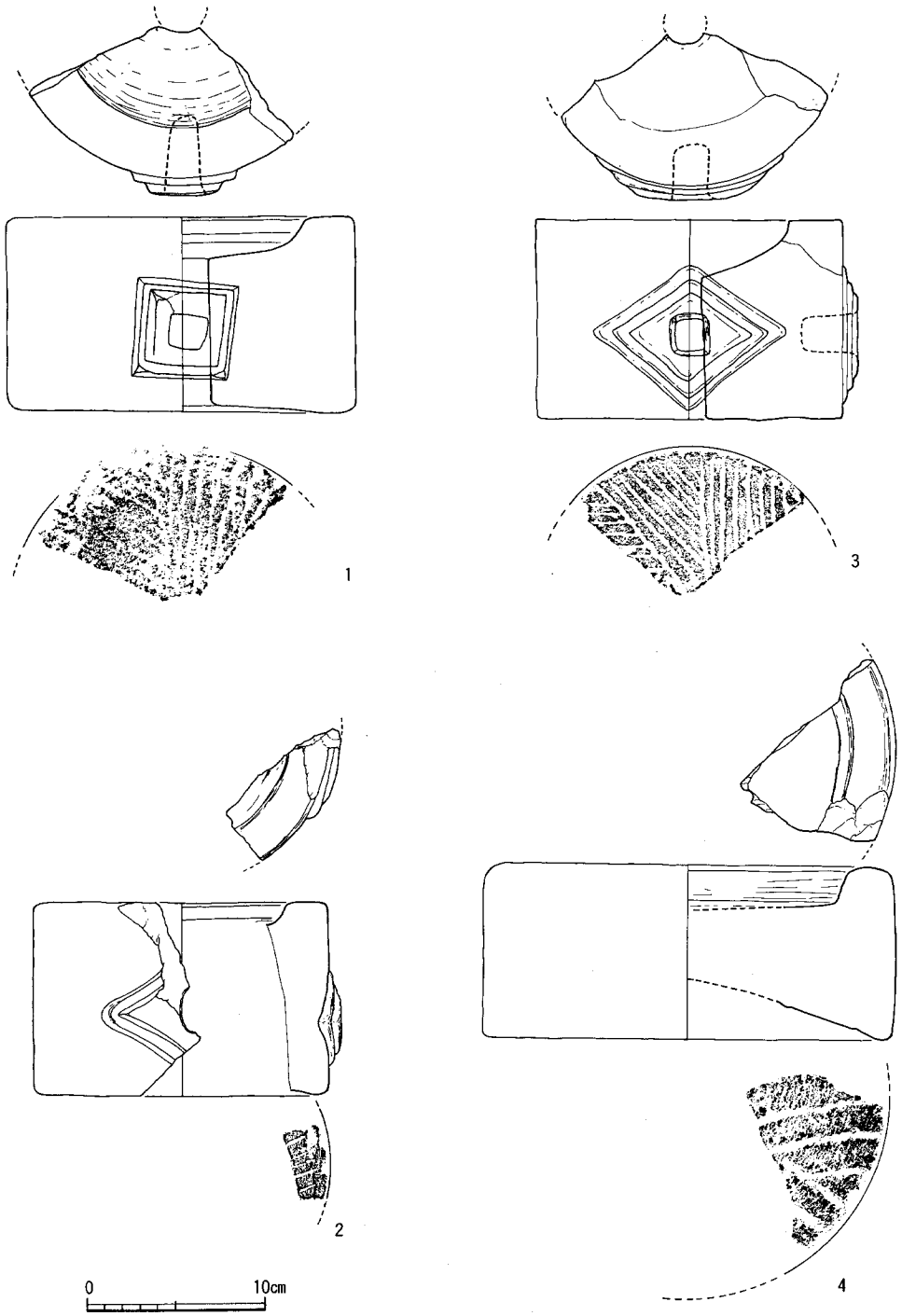


Fig. 63 SK－04 出土遺物実測図Ⅱ

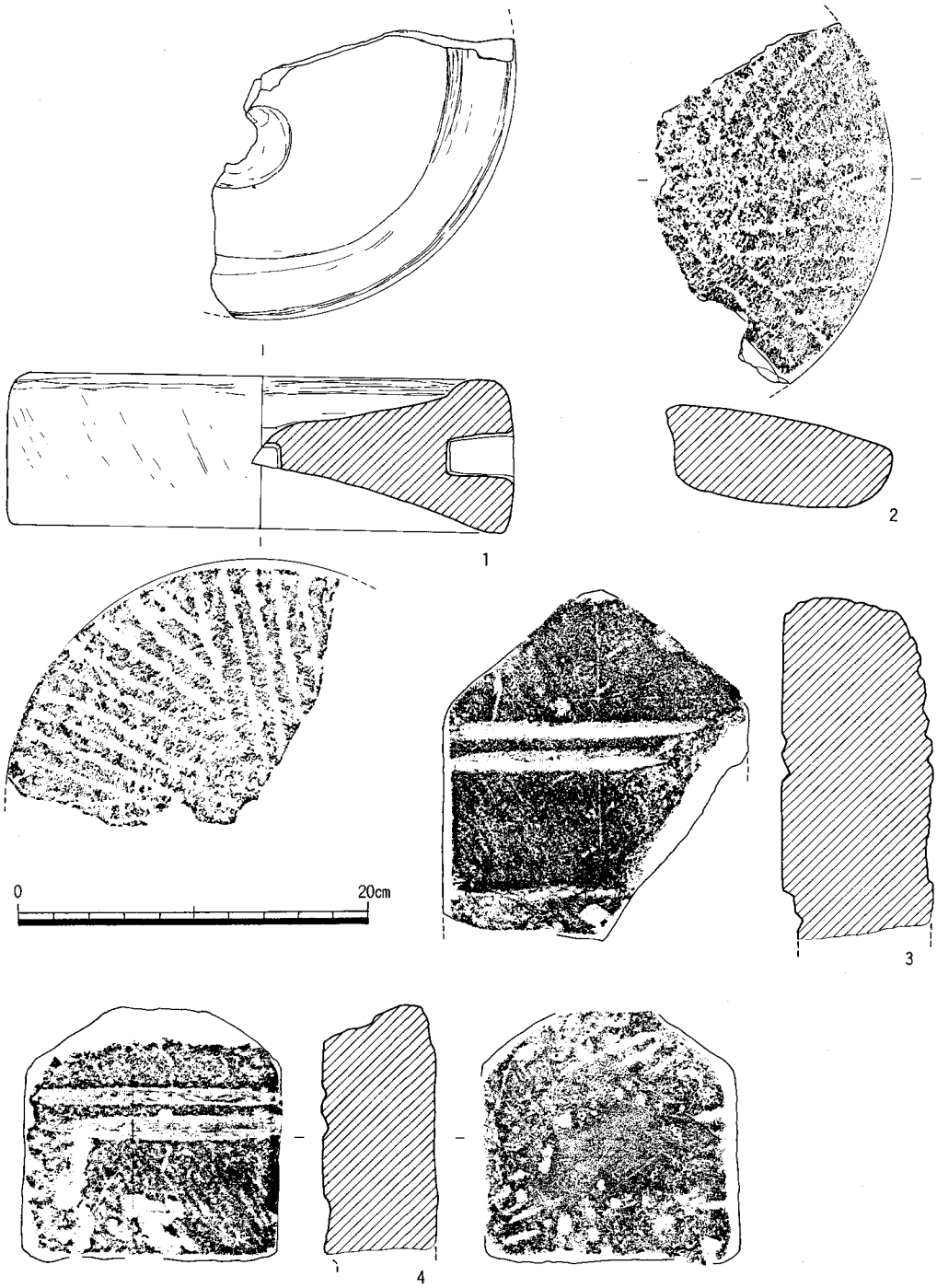


Fig. 64 SK－04 出土遺物実測図Ⅲ

で1.3cmの深さ。ふくみは0.3cm以上、高さ11cmを測る。臼目は不明であるが八分画六溝式とみられる。打込孔は楕円形ないしは円形とみられる。打込孔の周囲には菱形文様が二段につけられている。砂岩利用。3は径17.2cm。上縁を欠失するが、幅3cm前後、くぼみの深さ3.7cm前後と推測される。供給孔径2.2cm前後、高さ11.4cm前後とみられる。臼目は八分画七溝式、挽木の打込孔は2.2cm×2.4cmの隅丸方形、深さ3.2cm。打込孔の周囲には菱形文様が三段につけられている。安山岩利用。4は上縁径23.2cm、上縁幅2.5cm、上面が丸くなる。くぼみの深さ2.3cm前後、ふくみが大きく上臼の高さが9cm～8cmと片寄りがある。臼目は不明であるが、溝は幅広で深い。集石岩利用。Fig. 64－1, 2は挽臼。3、4は板碑である。1は上臼、上縁径29.2cm、上縁幅3.5cmで上端部は丸くなる。くぼみの深さ2.8cm、供給孔はロート状をなし、上縁径約6cm～4cmの楕円形、下端径3cmの円形に復原できる。軸受孔はわずかに残るが形態不明、ふくみは2cm以上。高さは9cm～7cmで片寄りがみられ、挽木の打込み付近が最も磨滅している。打込孔は2.5cmの方形と考えられ、深さ3.9cm。臼目は六分画八溝式、溝間1.5cm。安山岩を利用。2は下臼、ふくみは2.6cmで、1と対になる可能性もある。径29.2cm前後、高さ5.9cm～5cm、芯棒孔2cm前後と考えられる。臼目は六分画六溝式、安山岩を利用する。1、2共よく使用され、磨滅が著しい。

3は山形、二条線、額部と身部の一部を残す。二条線は薬研彫。身部に梵字の一部がある。表、側面はノミで丁寧に仕上げられる。裏面は粗いノミ痕のままである。表の山形部には中心線と横の細い沈線の区画線がみられる。現存部の長さ20cm、厚さ8.7cm、4は頂部の山形と身部を失う。二条線は薬研彫。表、側面はノミで丁寧に仕上げる。裏面は粗いノミ痕が残るが、後に石皿に再利用されている。共に砂岩を使用しているが、4は二次的に火を受けている。

⑽ SK－07と出土遺物

① SK－07 (Fig. 65)

調査区中央部よりやや西側に片寄った北壁に接して検出した土坑である。SC－02の北約5m、SC－01の西約5mの所に位置する。SD－01、SK－11と重複関係にあり、いずれもSK－07が切っている。北側が調査区外にのびているために全形は明らかにできないが、長径5.25m、短径3.0m＋αの楕円形プランをなすとみられる。深さは1.65m。

埋土は自然の流れ込みによるものであるが、土層はブロック層を多く含んでいるので、人為的に埋めた可能性もある。第1層、茶褐色砂質土層、礫や土器片を含む。厚さ10～30cm。第2層、黒褐色砂質土層、厚さ40～60cm。第3層、黒褐色粘質土層、厚さ10～40cm。第1～3層は凹凸が激しく、黒褐色粘質混砂土、黒色粘質土、黒褐色粘質土のブロックを多く含むなど自然

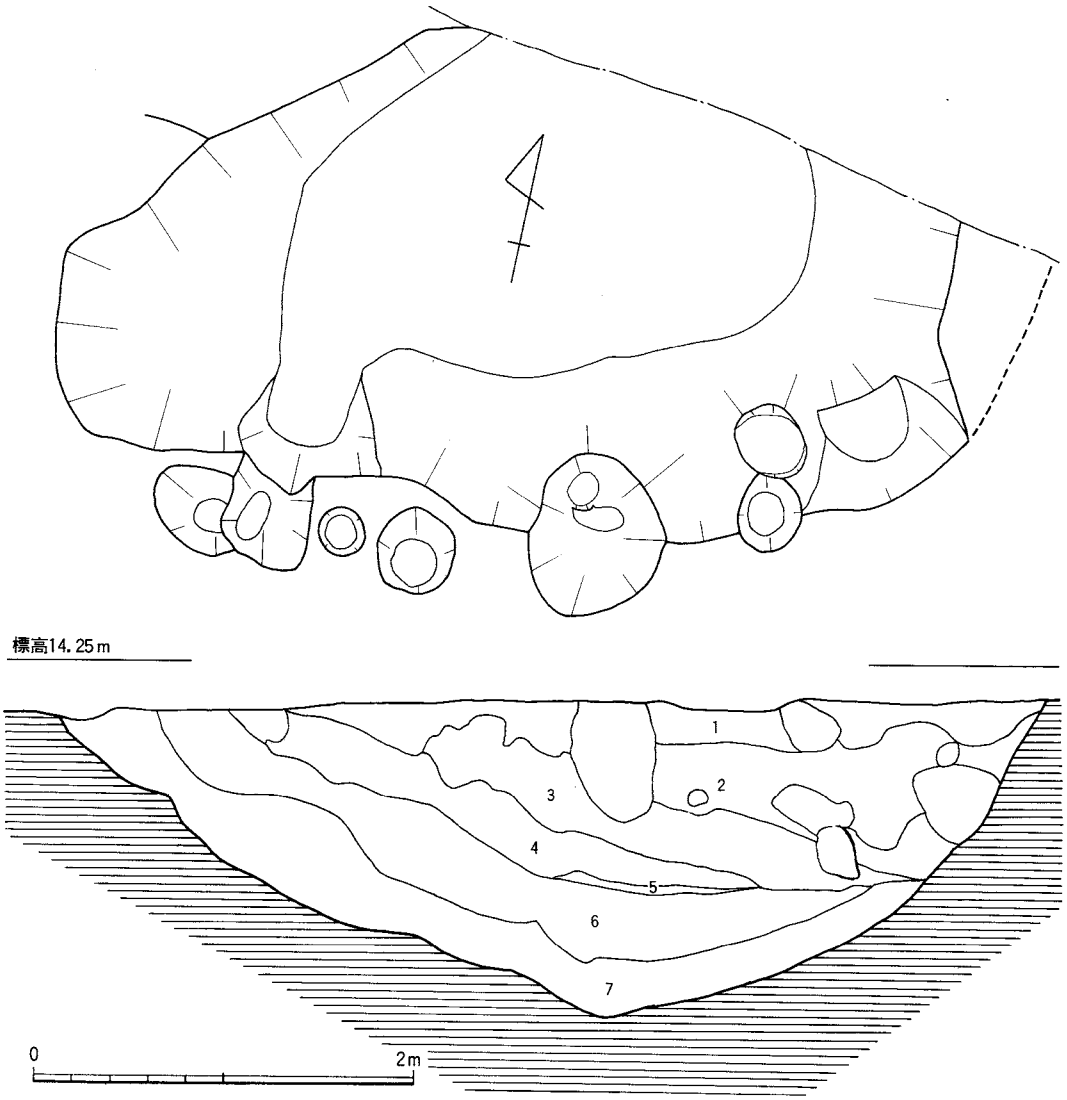


Fig. 65 SK－07 実測図

の土層堆積としては不自然である。第４層、灰色砂質土小ブロックを含んだ黒褐色粘質土層、厚さ20cm。第５層、黄褐色粘質土層、厚さ20～40cm。第７層、黄褐色粘質土層、厚さ20～50cmとなっている。

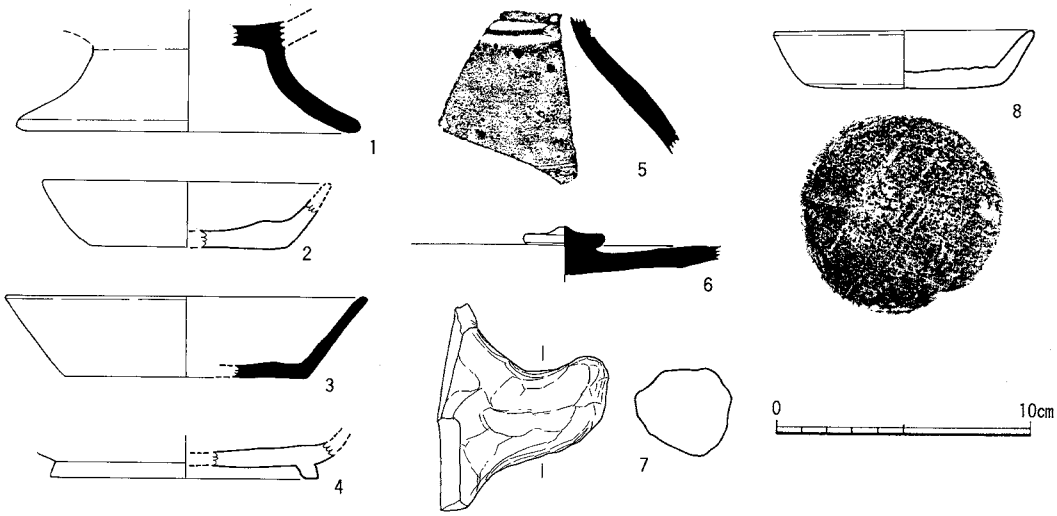


Fig. 66　SK－07 出土遺物実測図

② **出土遺物** (Fig. 66)

土師器、須恵器がある。一部は後世の混入である。1、3、5、6は須恵器、2、4、7、8は土師器である。

1は壺形土器の脚台。脚は低く大きく外にひらく。脚端部は丸くおさめる。内外面は横ナデ調整。胎土、焼成は良好。黒灰色をなす。脚端径13.5cm。3は坏、体部は外傾しながら直線的にたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。器壁は荒れていて内外面の調整痕は不明。胎土にやや粗い砂粒を含む。焼成はあまく、黄灰色をなす。口径14.1cm、器高3.2cmを測る。5は壺の頸部から肩部にかけての破片。頸部に削り出しの突線一条、胴部に細い沈線一条がめぐる。内外面とも横ナデ調整。胎土に若干の砂粒を含むが精良。焼成は堅緻で、外面は黒灰色、内面は灰色をなす。6は蓋。天井部に擬宝珠形のつまみをつける。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデ調整である。胎土には粗い砂粒を含む。焼成良好。青灰色をなす。

2、8は坏。体部はやや丸味をもってたちあがる。口縁端部は丸くおさめる。両者共、器面が荒れていて調整痕は不明。8は外底部に板目圧痕がある。胎土は良質、焼成はややあまい。黄赤色をなす。底部径は2が7.8cm、8が7.6cmを測る。4は高台付坏。高台は貼り付けでやや外にはる。外底部はヘラ削り、内面はヘラ研磨調整。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良く、赤褐色をなす。高台径10.5cm。7は把手。指による調整痕が凹凸で残る。端部はやや上向きになる。把手径3.7cm。把手の取り付けは器壁に孔を穿ち、さし込む方法をとり、その痕跡は明

瞭である。器内面は縦方向のヘラ削り調整である。胎土には粗い砂粒を含む。焼成は良く、赤褐色をなす。

(11) SK－08 と出土遺物

① SK－08 (Fig. 67)

調査区中央部よりやや西側に片寄った南端部に検出した土坑である。SC－02 の南約 3 m、SK－09 の西側約 2.5m の所に位置している。土坑は調査区外にのびているが、道路によって破壊されている。現存する土坑は長径 2.57m、短径1.55m＋α の方形プランをなす。深さ10～12cm、底は平坦である。底に柱穴 2 個と溝状の攪乱部があるが、この土坑とは無関係とみられる。

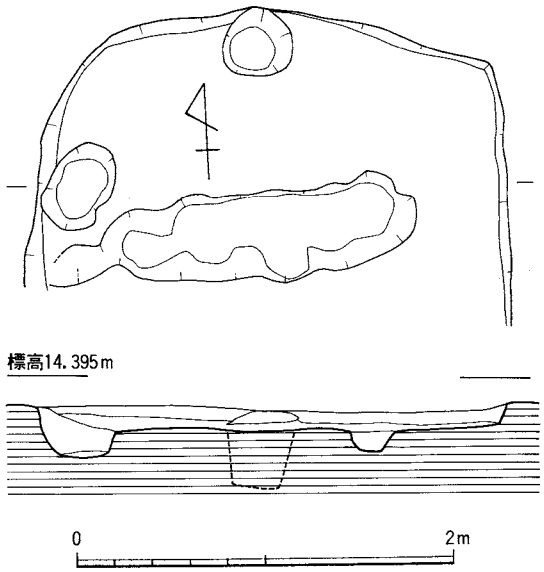


Fig. 67 SK－08 実測図

② 出土遺物

遺構の残存状態が良くなく浅いために出土遺物は極めて少ない。土師器、青磁器の小片、スラッグがあるが、いずれも図示できない。青磁器からみて、この遺構の年代は中世末に比定できる。

(12) SK－10 と出土遺物

① SK－10 (Fig. 68)

調査区の東端部、北壁に接して検出した土坑で、大部分は調査区外にのびる。SK－01 と SD－06 と重複関係にあり、いずれの遺構も SK－10 に切られている。土坑は現状で長さ0.8m＋α、幅1.25m の楕円形をなすと考えられる。深さ約0.9m を測る。

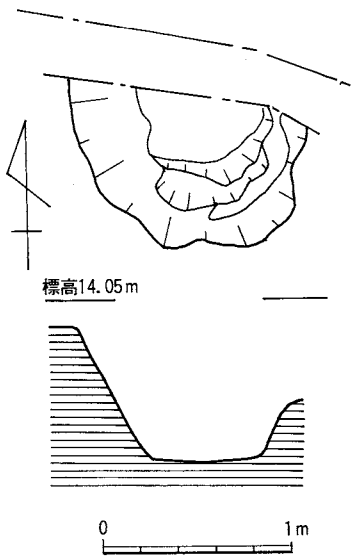


Fig. 68 SK－10 実測図

② 出土遺物

出土遺物は土器小片が数点のみで、いずれも図示できない。遺構の切り合い関係からは最も新しい遺構である。

(13) SK－12・13 (Fig. 69)

調査区の西端部の南端に検出した土坑である。SD－02・03 と重複関係にあり、共に SK－12・13 が切っている。

SK－12 は主軸を N－22°－W にとる。長さ1.7m、幅0.9mの不整長方形プランで、深さ0.7m。上半部はゆるやかな傾斜で掘り込まれるが、下半部は急傾斜で、箱形をなす。底は長さ0.9m、幅0.35～0.6mの不整長方形プランをなす。

SK－13 は SK－12 の南側に接するようにして存在し、大部分は南側壁にのびていて全形を知ることはできない。現状で長さ0.8m、幅0.8mを測るが不整の長方形プランをなすと考えられる。深さ0.56m。底面は平坦である。

いずれの土坑からも遺物の出土はなく、時期の判別は困難であるが、切り合い関係からは最も新しい遺構の一つである。

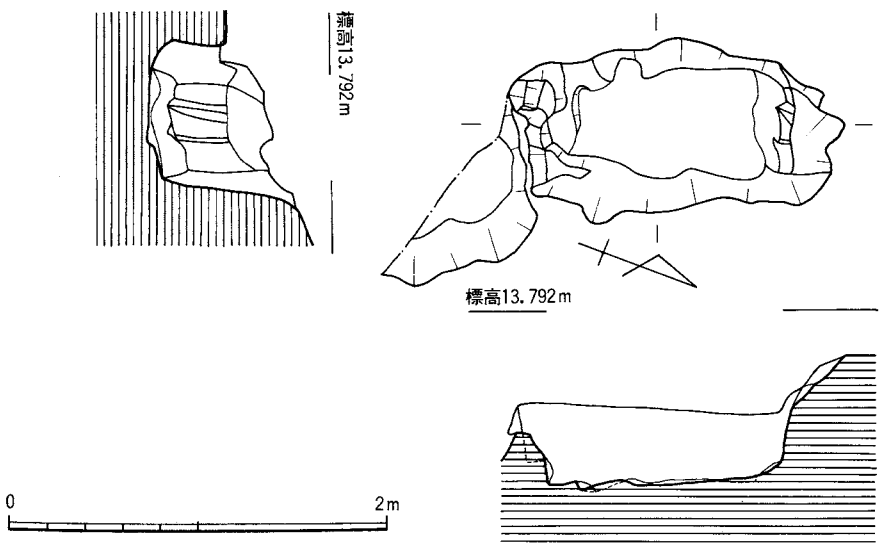


Fig. 69 SK－12・13 実測図

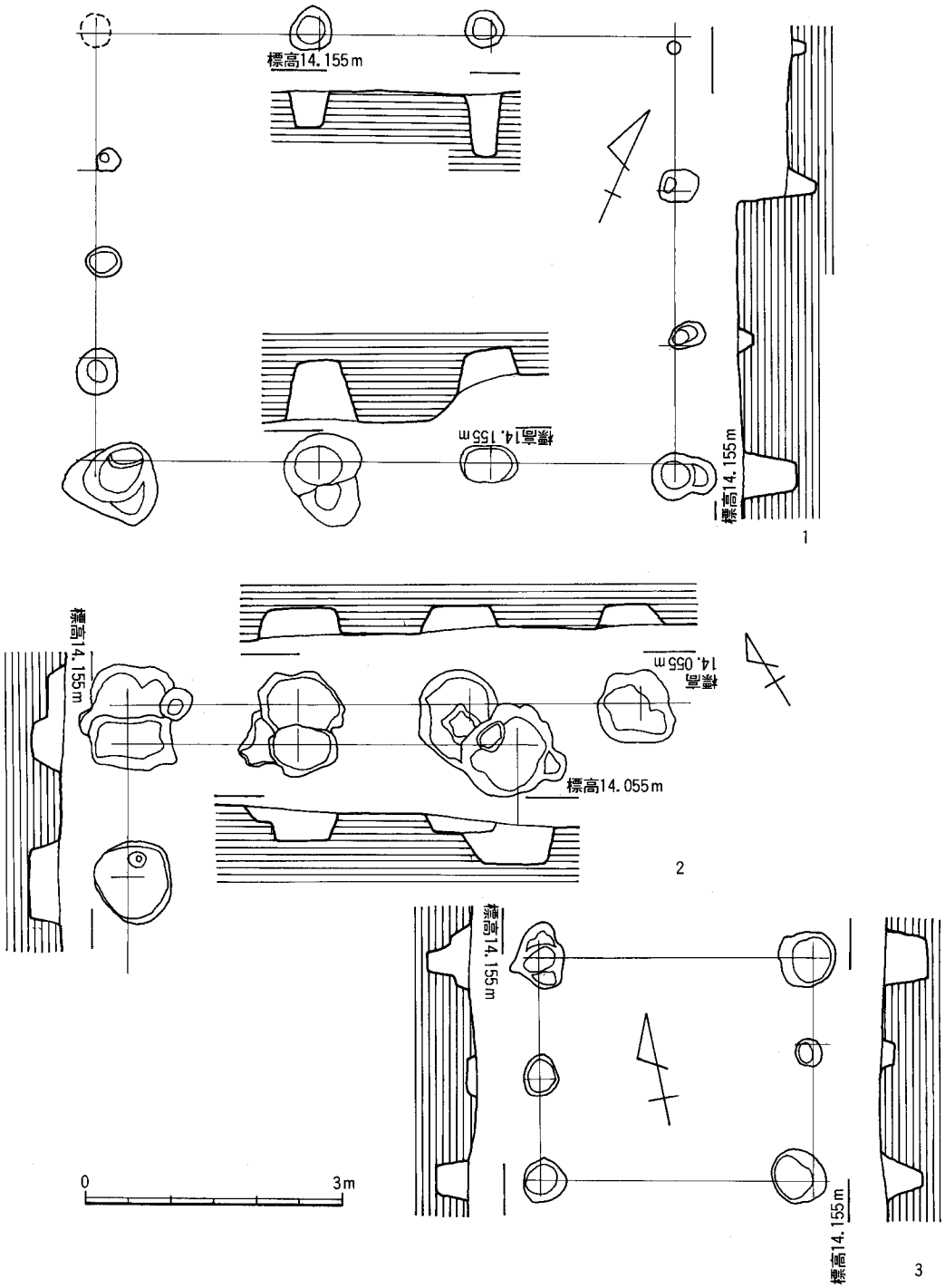


Fig. 70　SB－01～03 実測図

⑭ 掘立柱建物（Fig. 70）

調査区内からは多数の柱穴と考えられるピットを検出したが、組み合うものが少なく、掘立柱建物として確認したのは次の３棟である。

① SB－01（Fig. 70－1）

調査区の中央部に確認した掘立柱建物である。SA－01・02, SD－07, SK－04 と重複関係にあり、SA－01・02, SD－07 を切っているが SK－04 との切り合い関係は明らかでない。梁行３間、桁行３間の建物で主軸方向を N－67°－E にとる。梁行5.4m、柱間1.8m、桁行6.8m、柱間1.3m、柱穴は径20～80cm、深さ40～80cmである。

② SB－02（Fig. 70－2）

調査区の東側南端に確認した掘立柱建物で大部分は調査区外にのびる。SD－07 と重複関係にあり、SD－07 を切っている。東側柱穴に重複がみられ、建て替えが考えられる。先行する建物は梁行２間（４m）以上、桁行４間（８m）以上、主軸方向を N－31°－W にとる。梁の柱間２m、桁の柱間２mである。後続建物が桁行が２間まで確認できるのみである。柱穴は径１m前後、深さ30cmである。

③ SB－03（Fig. 70－3）

調査区東側中央部に検出した掘立柱建物である。梁行１間（３m）、桁行(2.6m)で主軸方向を N－80°－W にとる。桁の柱間は2.4mと2.2mである。柱穴は径40～60cm、深さ50cmである。

⑮ ピットおよび表土層出土遺物（Fig. 71・72）

弥生式土器、土師器、須恵器、青磁器、陶器、瓦質土器、土師質土器、スラッグ、玉類、土錘、石器、黒曜石片等多種におよんでいる。図化できるものは多くないが、Fig. 71・72 に示した。特に注目される遺物として、陶質土器、初期須恵器がある。遺構から遊離した遺物が多いが、これは、この時期の遺構が浅かったか、あるいはその使用法に大きく起因していると考えられる。なお、補遺として、他の遺構の遺物も収録した。

Fig. 71 は陶質土器および初期須恵器である。１、２、６、10、12は壺の口頸部破片である。１は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。口縁直下に細い突線１条がめぐる。突線の下には櫛描波状文が描かれる。内外面は横ナデ調整。SD－01 上層出土。２も１と同様の形態を示すが突線は２条あり、下の突線下に櫛描波状文が施される。SK－6 付近のピット出土。６は口縁端部を欠失する。口縁下に２条の突線をめぐらし、突線間、その下に櫛描波状文を施す。10

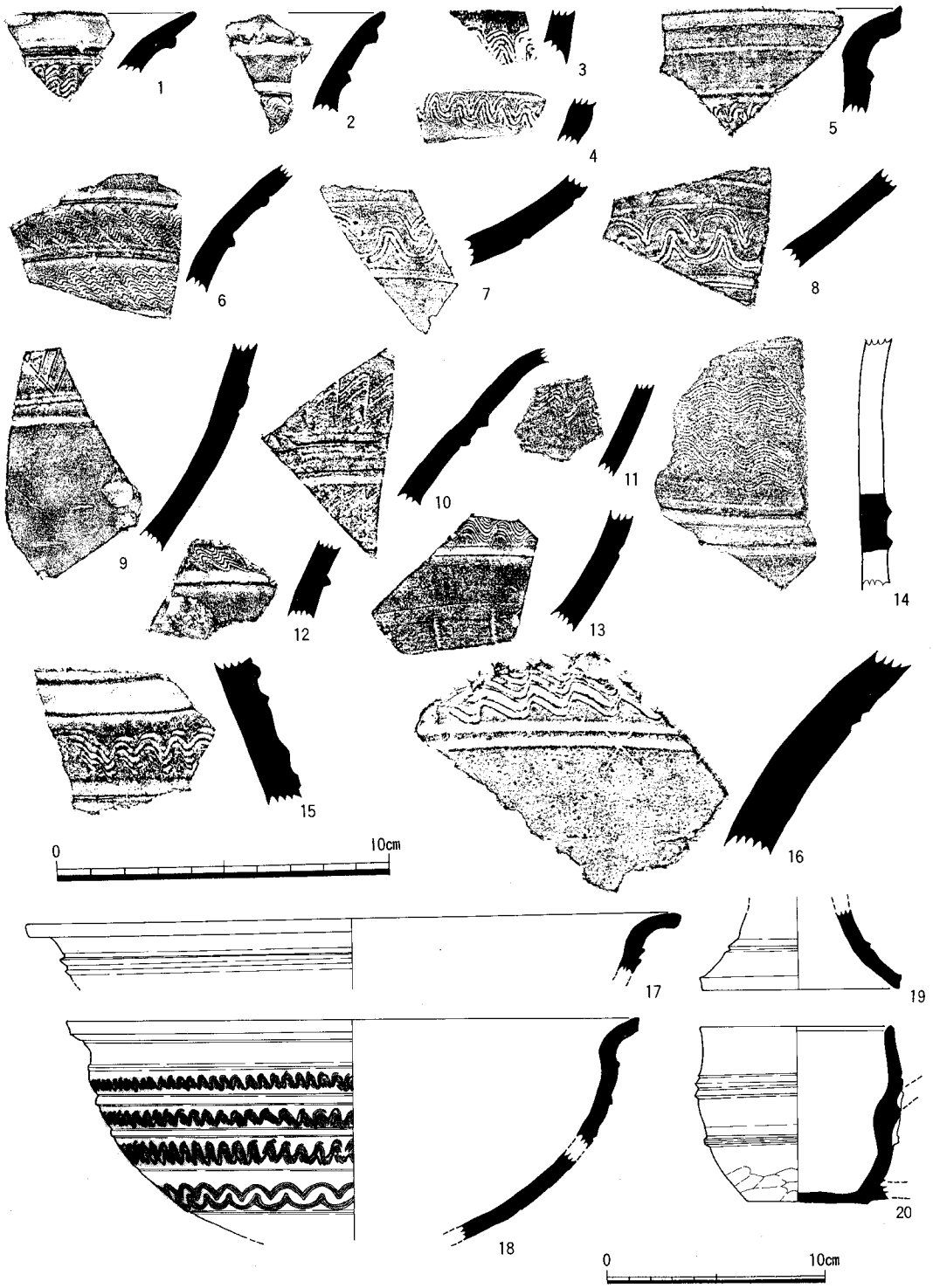


Fig. 71　ピット・表土層出土遺物実測図Ⅰ

は頸部が大きく外傾し、口縁部は外反するが、端部を失う。頸部中位と考えられる位置に２条の突線をめぐらし、その上下に櫛描波状文をめぐらす。SK－05 出土。12は突線１条をめぐらし、その上に櫛描波状文を施す。SD－07 中央部付近のピット出土。これらの土器の内側にはいずれも自然釉がかかる。胎土には若干の砂粒を含むが精良。焼成は堅緻。11は黒色、他は灰色～黒灰色である。３～５、７～９、17は器台の台部である。５、17は口縁部、他は体部破片。14、15は器台脚部破片。３、４はやや大きい櫛描波状文を入れる。５は口縁部が外反し、端部は上端がつまみあげられる。口縁下に凹線、突線各１条をめぐらす。突線下には３、４同様の波状文が施される。７、８は凹線２条がめぐらされ、その間にコンパス文様で２本単位の連続円弧文が上下相対して施される。以上は胎土、焼成、文様等から同一個体と考えられ、いずれも表土層より出土。同様のものは SK－01、SD－07 にて出土している。これらを復原したのが18である。９は幅広の突線１条をめぐらし、その上に細沈線に三角文が入れられる。胎土は精良、焼成は堅緻。内面は灰をかぶり、外面は黒色の顔料が塗られ黒色をなす。14は脚筒部。突線２条をめぐらし、突線の上には２段にわたって櫛描波状文を入れる。また、その上下に長方形の透し窓を入れている。胎土に砂粒を混入。焼成は堅緻で灰黒色をなす。復原径14.2cm。復原図は Fig. 72－15 である。表土層出土。15は脚の下半部破片。上部に２条、下に１条の突線をめぐらし、突線間にやや粗な櫛描波状文を描く。胎土には粗い砂粒を多く含む。焼成は堅緻、青灰色をなす。SD－05 出土。17は台部口縁部。口縁は大きく外反し、端部は丸くおさめる。口縁下に２条の突線をめぐらす。外面は黒色、内面は灰かぶりのため黄灰色をなす。胎土には砂粒を多く含む。焼成は堅緻。表土層出土。11は櫛描波状文を施す。SD－01 出土。13は壺胴部破片。凹線１条をめぐらし、上位に櫛描波状文、下位に櫛歯文を等間隔で施す。内外面共横ナデ調整であるが、外面にはタタキ痕が残る。SK－04 付近のピット出土。16は大壺の頸部。凹線２条をめぐらし、上に太い櫛描波状文を施す。凹線と重複してＸ印のヘラ記号がみられる。胎土に砂粒を含む。焼成は堅緻、灰黒色をなす。19は高坏の脚部破片。ラッパ状にひろがり、端部とその上位に突線をめぐらす。内外面共横ナデ調整。20は把手つきの椀。体部はややふくらみをもってたちあがり、口頸部はわずかに内傾する。胴中位には２条と１条の突線がめぐる。体部内外面は横ナデ調整。外面下半は静止ヘラ削りがみられる。体部にヘラ記号がある。19、20は共に胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良好。灰色をなす。共に表土層出土。19は脚端径9.0cm。20は口径9.0cm。底部径5.4cm、器高8.0cm。

Fig. 72－１～３、14～17は初期須恵器。１、２は坏蓋。１は天井部と体部の境に鋭い段をもつ。口縁端部はわずかに外にはり、端部は平坦である。内外面共横ナデ調整。口径13.0cm。２は天井部。体部との境に鋭い段がある。天井部の大部分は丁寧な回転ヘラ削り。天井部内面は横ナデ調整。３は壺の頸部。鋭い突線をめぐらし、口縁部は外反する。突線下には細い櫛描波状文を施す。１～３は表土層出土。14～17は器台。14は台部の口縁部。口縁は外反し、端部は

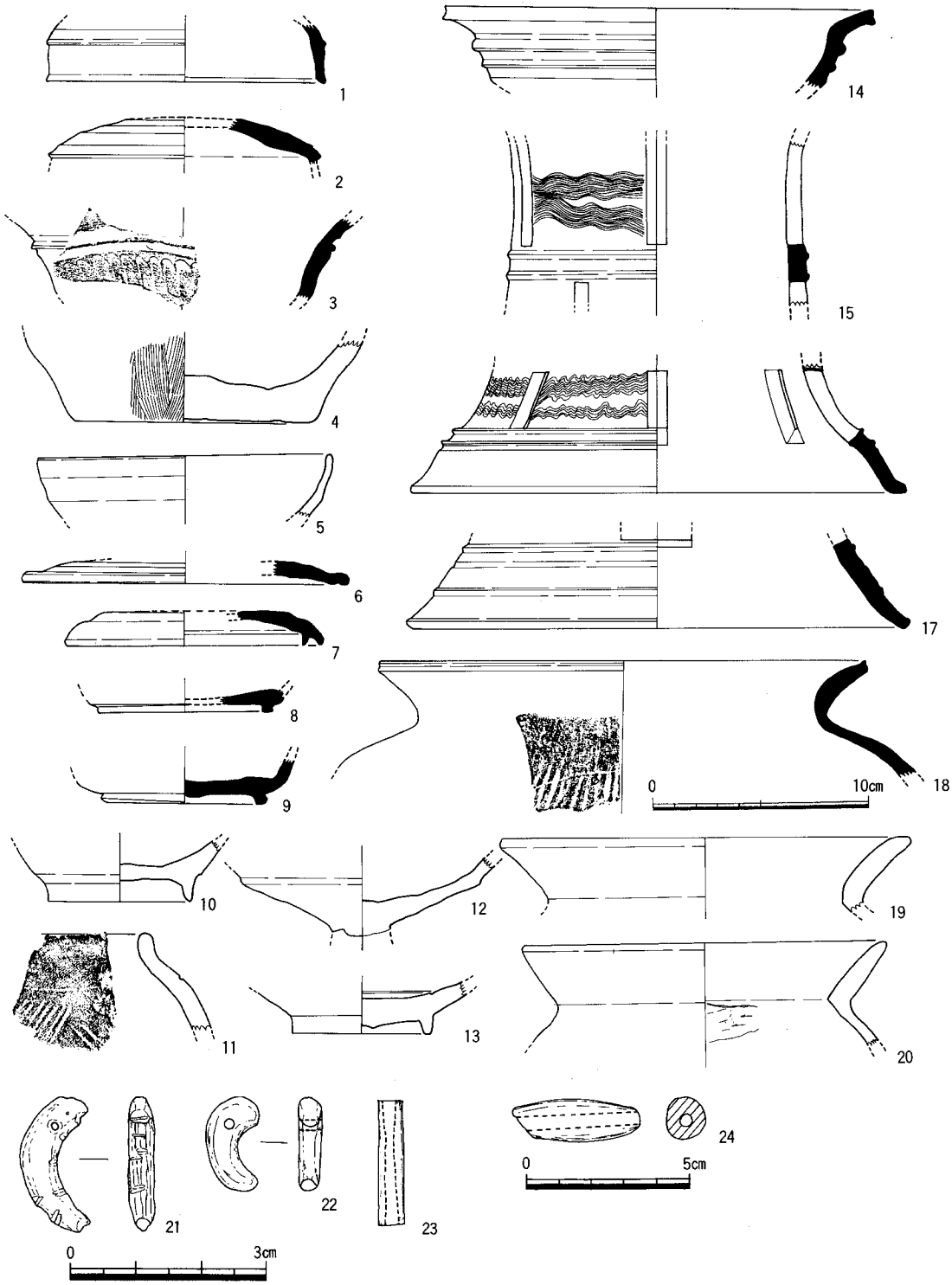


Fig. 72 ピット・表土層出土遺物実測図Ⅱ

角ばる。口縁下に２条の突線をめぐらす。SK－06 付近のピットより出土。口径20.0cm。16は脚部。突線２条をめぐらし上部に長方形の透し窓を入れる。脚端径23.2cm。17も脚端部、突線、凹線各１条をめぐらす。脚端径23.6cm。SK－05 付近のピット出土。いずれも胎土に砂粒を含むが精良。焼成は堅緻で灰黒色をなす。

４は弥生式土器底部。外面は縦位の刷毛目調整。内底部には指の圧痕が顕著である。胎土に砂粒を含む。焼成良好、黄褐色をなす。底部径11.2cm。５は陶器、体部は丸味をもってたちあがる。内面と外面の上半部に褐釉をかける。口径13.8cm。６～９は須恵器。６、７は蓋。６は口縁がわずかに下方にのびる。７は内側のかえりは低い。天井部のヘラ削りの範囲は1/2の範囲である。６は口径15.4cm、７は口径12.2cm。８、９は坏、高台は低い。高台径は８が8.2cm。９が7.8cm。いずれも表土層出土。10は土師器坏、高台はやや高く端部は尖る。体部は外傾しながらたちあがる。高台径6.8cm。SC－02 付近のピット出土。11は瓦質土器。湯釜口縁部破片。口縁部は短く直立する。頸部に１条の沈線をめぐらし、その下位に沈線型押しで文様をつける。胎土は精良。焼成は良く、黄灰色をなす。12は土師器高坏坏部。坏部は体部中位で屈曲する。13は白磁器、高台は削り出し。見込みに沈線をめぐらす。釉は灰白色、高台径6.6cm。表土層出土。19、20は土師器甕、口縁部はくの字に外反する。20は内面ヘラ削り。19は口径19.4cm、20は17.2cm。

21、22は勾玉、23は管玉・いずれも滑石製。21にはネズミのかじり痕がある。長さ2.1cm、22は長さ1.4cm、23は長さ1.9cm、径0.4cm、孔径0.2cm。表土層出土。

24は土錘、小型の管状土錘で一端を欠いている。

6．第６次調査区のまとめ

第６次調査区において検出した遺構、遺物は、旧石器、弥生、古墳、古代、中世の各時期にわたっている。遺構、遺物を時代ごとに整理すると以下のようになる。

時　代	遺　構	遺　物
旧石器時代	集石遺構	剝片尖頭器、ナイフ形石器、スクレイパー
弥生時代	Ｖ字溝２	弥生式土器、磨製石鏃、打製石鏃、磨製石斧
古墳時代	住居址２、土坑５	土師器、須恵器、鉄斧、磨石、台石
	溝１、祭祀土坑１	陶質土器、有孔円盤、勾玉、管玉、タコ壺
古　代	柵列２、土坑	土師器、須恵器、製塩土器
中　世	溝	青磁器、白磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、石臼、板碑、フイゴ羽口、スラッグ

各時期それぞれに注目される成果をあげたが、特に注目される成果について若干のまとめを行い、終りにかえたい。

(1) 旧石器時代

有田・小田部の台地からは、これまでも旧石器時代の遺物が散発的に採集されていたが包含層が確認されたのは本調査区がはじめてである。包含層は表土層下のローム層の最上部約20cmの間である。地質学的な調査は経ていないが、新期ローム層中と考えられる。出土した石器は剝片尖頭器、1点、九州型ナイフ形石器、8点、スクレイパー、2点と、そのほとんどが石器で、剝片、砕片はきわめて少ない。集石遺構は、石の集中はやや粗であるが、2ヶ所にみられる。福岡市域で、集石遺構が検出されたのも本遺跡がはじめてである。包含層のあり方として良好な状態とはいいがたいが、集石と石器のみからなる遺跡のあり方は、特徴的で注目されるところである。最近、有田の南東に位置する油山山麓でも、柏原C遺跡など、有田第6次調査区同様に、数点の石器のみが出土する遺跡が確認されていることは遺跡のあり方として注意する必要がある。市内では、旧石器時代の遺跡の調査例は少なく、博多区諸岡遺跡、那珂遺跡群、西区吉武高木遺跡群など数ヶ所にとどまっている。遺跡の分布をはじめ、そのあり方、石器構成など、未解決の問題が山積みしており、今後の調査研究に期待される。

(2) 弥生時代

有田遺跡は福岡平野の板付遺跡と共に、弥生時代の最も古い環濠の一つが存在することで有名である。弥生時代の初頭期においては、有田遺跡が早良平野の中心的集落であったことは衆目の一致するところであろう。今次調査区で検出した弥生時代の遺構は、SD－03、SD－04の2本の濠である。

SD－03は掘り直しがあるために遺物の量が極端に少なく、掘削時期の決定は困難であるが、前期初頭にのぼる可能性は強い。SD－04は出土遺物から、前期前半に位置づけられ、有田の環濠に後続する遺構であることは明らかである。SD－03は第96次調査で延長部が確認され、現存長約40mを測るが、全体的平面プランについては明らかでない。SD－04は第28次調査区で、SD－04の東岸部が検出され、第7次調査で、SD－04の東側に対応すると考えられる濠が検出されている。SD－04から第7次調査区SD－02までの濠心心間の距離は75mを測り、SD－04は板付遺跡のような卵形のプランをなし、規模もほぼ同様とみられる。しかし、SD－04、第7次調査区SD－02は同一の濠ではなく、二重になる別の濠とみる見解もあり、今後の調査による検討がまたれる。いずれにしても、弥生時代開始期から前期の間に有田台地中央部に数ヶ所の環濠が掘削された可能性があり、その展開のあり方は注目される。

SD－04の底面近くで出土した弥生式土器の一括遺物にも注意しておきたい。大部分が完形

に復原でき、形、その他の観察が容易である。壺形土器が圧倒的に多く器種構成の上ではやや難点があるが、板付Ⅱａ式土器の単純期遺物として貴重である。小型壺は板付Ⅰ式土器の特徴を強く受けつぎ、大差ない。底部を欠いていて、底部がやや高くなるなどの小さな変化は追及できないが、小壺のみがその使用目的のために残存形態として残るのか、今後の問題としておきたい。いずれにしてもこの小壺の存在は共伴する他の土器が古相を示していることを有弁に語っている。大壺は板付Ⅰ式との形態差は大きくなっている。底部は円盤貼り付け状の形態を残すが、脱皮しつつある。板付Ⅰ式土器に比較し、頸部がやや短くなる。口縁部は粘土貼り付けによる肥厚、段の形成はより顕著になるものと、不明瞭になる二方向を示す。また口縁部がより外反度をます。口縁端部に沈線がはいり、次の段階の土器への萌芽があるものもある。胴部と頸部の境の段は不明瞭になりつつあり、沈線の条数が増える傾向にある。胴部文様は重弧文、山形文、格子目文等が存在するが、板付Ⅰ式土器にみられる八字形文や有軸羽状文などは存在しない。甕形土器はわずか１点であり、傾向を把握するのは困難である。口縁端部の刻み目はやや下端に片寄りをみせ、胴部にふくらみがみられるなど、従来の板付Ⅱ式土器と大差ない。これらの土器に夜臼系の土器が混在するのは前段階同様であるが、その割合は極端に低くなる。大壺の形態は非常に類似し、差は口縁部の肥厚、段の有無のみとなる。甕形土器は刻目突帯文土器であることは変わりないが、突帯は断面三角形でやや大きくなり、口縁端に貼りつけられ、端部には平坦面が形成される。刻目も浅くなり、突帯の1/3程度でとどまっている。器面の条痕調整はない。伴出例は極微量である。

北部九州でも類例の少ない板付Ⅱａ式土器の一括遺物が把握できたことは、弥生時代の展開を考察する上できわめて注目される。

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居址２基、溝１条である。また、弥生時代の溝が凹みとして残存しており、その埋土よりも古墳時代の遺物が多量に出土している。

SC－02 は火災住居ではないが、何らかの理由により、遺物が極めて良好な状態で原位置に現存していて、住居址内の間取りについて有効な情報を提供してくれた点は注目される。今後同様遺構の集成を行えば、当該地域の間取りの傾向や目的、あるいは地域的傾向が把握される可能性は強い。また、同住居址上層の土師器高坏、陶質土器、初期須恵器の一括遺物や、表土層、ピットから出土した陶質土器、初期須恵器、勾玉、管玉は祭祀用遺物とみられる。何に対する祭祀であったかは手がかりはないが注目されよう。特に本調査区で目立った陶質土器や初期須恵器は、調査当時は類例が少なく注目されたが、これらの遺物が祭祀と強く結びついていた可能性が強い。器種として器台、高坏が多い。製作地など秘められた問題は多い。

(4) 古　代

注目される遺構として柵列２条（１条は３列組合せ）がある。西側柵列がSA－01、東側柵列がSA－02とした。柱穴掘り方から出土した遺物は、いずれも古墳時代に限られているが、周辺の調査例からみて、古代の柵列の可能性が強い。両者は4.7m離れて平行している。柱穴掘り方はSA－01が大きいが、規模は同じである。SA－01の柱痕跡は径20cmと大きい。

第６次調査区と同様の柵列が検出されている調査区を周辺に探すと、第66次調査区の柵列がある。第６次調査区と第66次調査区は直線距離にして25mしか離れておらず、両者は無関係ではなかろう。柵列の方向が直交する関係にあることからすれば、両者が組み合って１つの区画をつくり出していることが想定できる。近接する調査区を総合的に検討し、その規模等を復原してみたい。

SA－01と第66次調査区柵列とが組み合うと想定した場合、SA－02はその区画の内側に平行して走る２重の柵列になるとみられるが、第66次調査区の柵列内側（南側）には、同様の遺構は検出されていない。このことからSA－01、02は１つの区画を二重に囲む柵列でないことは明らかで、SA－02と第66次調査区柵列が組み合い、SA－01は別の区画をつくり出す柵列とみる方が妥当性がある。しかし、SA－01、02が平行していることからすれば、両区画は一定の企画性のもとに作られた可能性が強い。

では、SA－01、02、第66次調査区柵列と区画される規模はどのようなものであろうか。SA－02と第66次調査区柵列の組み合せからコーナーの一角が押えられることになる。SA－01はSA－02と平行しており、企画性があることを考慮すれば、SA－01と組み合う北側柵列は第66次調査区柵列の延長線上に想定することが、より可能性が高い。ちなみに、SA－01の延長線上45mに、第83次調査区が位置しているが、この調査区に同様の柵列は検出されていない。少なくともSA－01はこの地点までは延びないことが明らかであり、先の想定がより強化される。南側はSA－01、02の延長線は共に第87次調査区にあたるが、いずれの柵列も検出されていない。よって、SA－01、02は共に第87次調査区より北側にコーナーが存在することになる。ただし、SA－01のコーナーが北によってくれば、当然本調査区内の南西コーナー付近に柵列遺構が検出されるはずであるが、検出されていない。そうすれば、コーナーの位置は第87次調査区外のすぐ北、先に想定した北側柵列とのコーナーから56.7mの地点に求められる。このようにして求めた南側柵列の延長線は、第77次調査区につきあたるが、同調査区にも柵列遺構は未検出であり、想定したコーナーから48mより未満であれば、第19次調査区ないしは本調査区内に柵列遺構が検出されているはずであり、南西コーナーは48m以上52m未満の所に求められる。よって、SA－01によって区画される規模は南北約57m、東西約50mの半町四方が想定できる。また、SA－02は現認できる東西長55m以上、南北長約57mで同様に半町四方の区画を

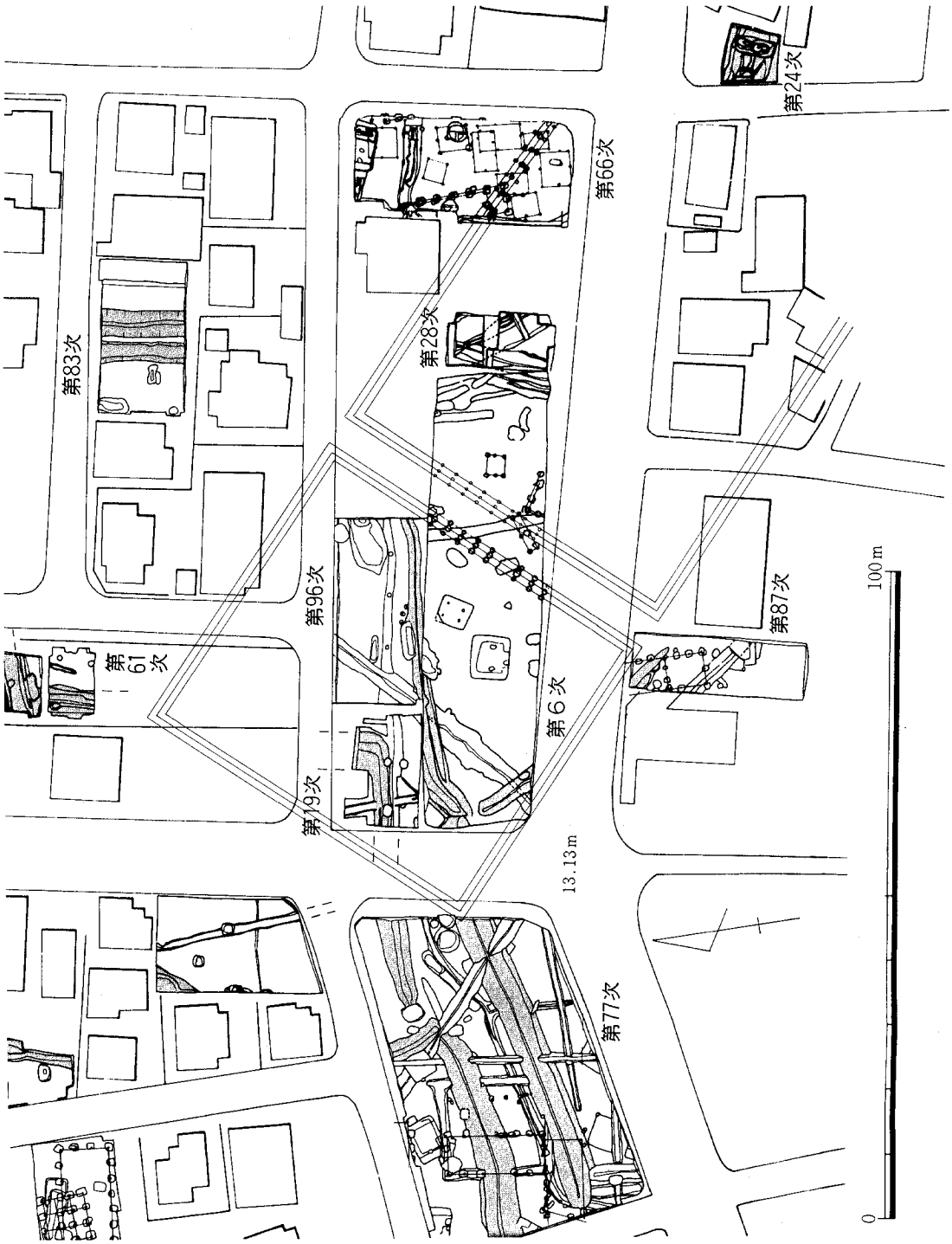


Fig. 73　柵列復原図

想定できる。SA－01 によって区画される区画内にあたる第19次、62次、96次調査区、SA－02 によって区画される区画内にあたる第 6 次、28次、66次調査区内において、柵列と同時期と推定される遺構の発見はなく、この区画がどのような目的によって作られたのか判断材料はない。時期を含めて、改めて検討する予定である。

第４章　第50次調査

１．調査地区の地形と概要

発掘調査地の地番は福岡市早良区小田部３丁目６－２・11－２番地である。調査対象面積は182㎡である。発掘調査は専用住宅建設に伴うもので、昭和56年６月10日～６月17日まで実施した。

この地域は昭和52年以来、既に６ヵ所の発掘調査を行っており、弥生時代前期から室町時代までの集落・館跡などを検出している。隣接する第11・93次調査では、室町時代の遺構を中心として、弥生時代から古墳時代の Pit が集中している。現在の標高は約9.8ｍを測る。

調査区は台地北側の八ッ手状に開析された谷の、谷頭付近に位置する。当該地は昭和40年代の区画整理の影響を受けていないが、旧小田部集落内にあることから、削平が著しい。表土の除去後にはローム層が存在する。遺構はこの上面で検出した。遺構面は谷斜面に相当するため東側へ傾斜しており、東側には暗茶褐色粘質土が厚く堆積している。

Fig. 74　第50次調査地点位置図（縮尺1/300）

遺構は中世の溝・井戸の他、時期不明の土壙がある。遺物には戦国時代の瓦質土器の他、李朝陶器などが出土した。

2．遺構各説

(1) 土壙（Fig. 76, PL. 26）

遺物が出土していないため時期が不明な土壙2を検出した。いずれもローム層上面に掘り込

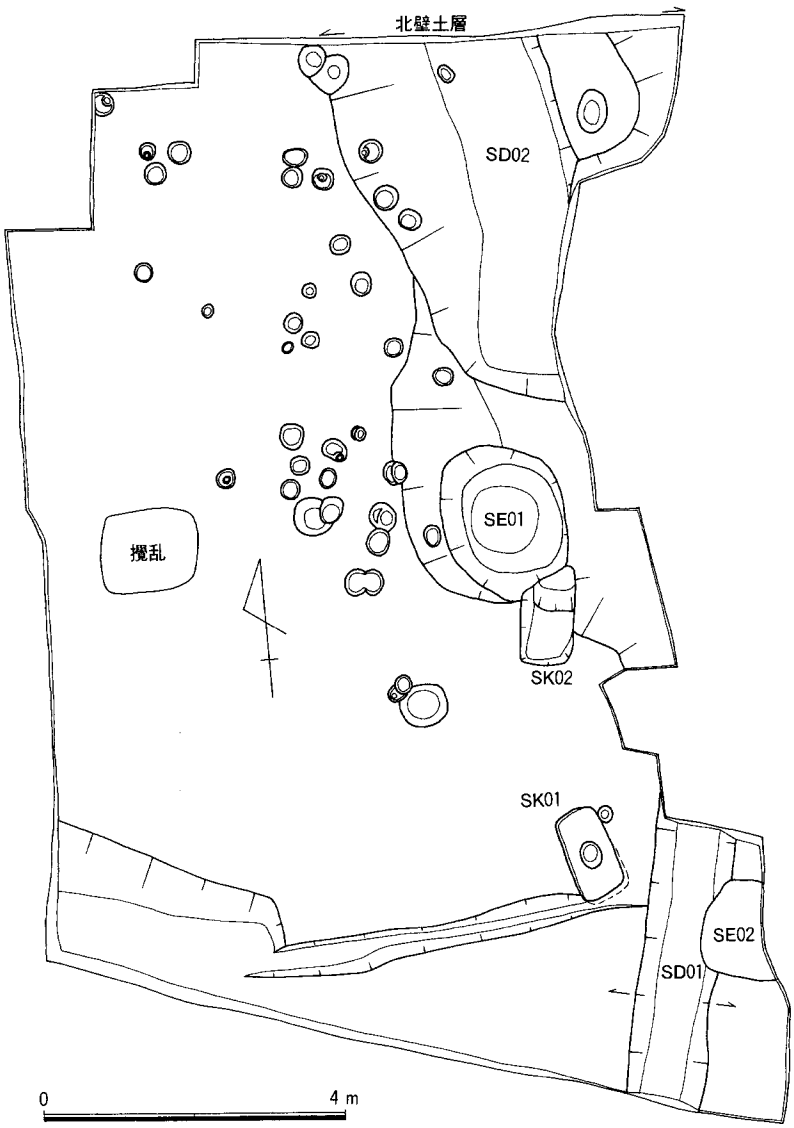


Fig. 75 第50次調査遺構配置図（縮尺1/100）

まれており、SK02 は井戸に切られる。

SK01 上面は削平を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は壁が袋状を呈したフラスコ形である。現存長118cm、底面の長さ116cm、幅64cm、深さ55.5cmを測る。底面には径35cm、深さ55cmを測る Pit が穿たれている。覆土は暗茶色粘質土と黒褐色粘質土を主体としている。縄文時代の落し穴であろうか。

SK02 井戸に切られており、全体形は不明である。平面形は隅丸長方形を、断面形は摺鉢状を呈している。現存長は120cm、幅71cm、最大の深さ36.5cmを測る。覆土は茶褐色粘質土・灰褐色粘質土を主体としており、有田遺跡における中世後半期の遺構の覆土と共通している。

(2) 井戸 (Fig. 76. PL. 26)

SE01 調査区の東側緩斜面に位置している。素掘りの井戸で、井戸上面の平面形は楕円形を呈している。井戸上面での径は1.6～2m、深さは2.45mを測る。井戸の中程の壁には袋部を作っており、喫水線を示すものと考えられる。井戸底部は浅い摺鉢状を呈しており、底面の西側約半分には、長さ20cm大の礫が半環状に並べられている。これは木桶等の井筒を固定したものと考えられる。井戸の覆土は茶褐色粘質土を主体としており、井戸上部から瓦質土器、土師質土器の鍋や青磁が出土しているので、15～16世紀の年代が考えられる。

(3) 溝 (Fig. 27, PL. 27)

調査区の東側において、南北方向の溝を2条検出した。いずれも谷の主軸に沿っており、排水的役目をもったものと考えられる。

SD01 調査区の境界に位置しているため3.7mまでの長さを確認するにとどまった大略南北方向の溝で、断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は95cm、底面の幅は65cmを測る。覆土は茶褐色粘質土又は八女粘土を含んだ茶褐色粘質土を主体としており、中世後半期の遺構と考えられる。

SD02 SD01 と同じく、調査区の東側境界に位置するため、長さ4.9mまでしか確認できていない。主軸が磁北から約22度ほど西に振れた溝で、断面形は摺鉢状を呈している。溝幅は2.2m、深さ91cmを測る。覆土は茶褐色粘質土を主体とするもので、中世後半期以降の時期が考えられる。

3. 遺物各説

(1) 井戸 SE01 出土遺物 (Fig. 78, PL. 28)

白磁・碗（1） 高台径7.0cmを測り、高台畳付きは尖っている。釉は内外面に厚目に施されるが、高台部分はカキ取られる。釉の色は灰色を帯びた透明釉で、胎土は灰白色である。焼成は良好である。

瓦質土器・足鍋（2） 破片のため口径は不明である。口縁部は外反し、口縁端部を内側へ折り曲げている。体部内面はヨコハケ調整、口縁部の内外面及び、外面はヨコナデ調整である。

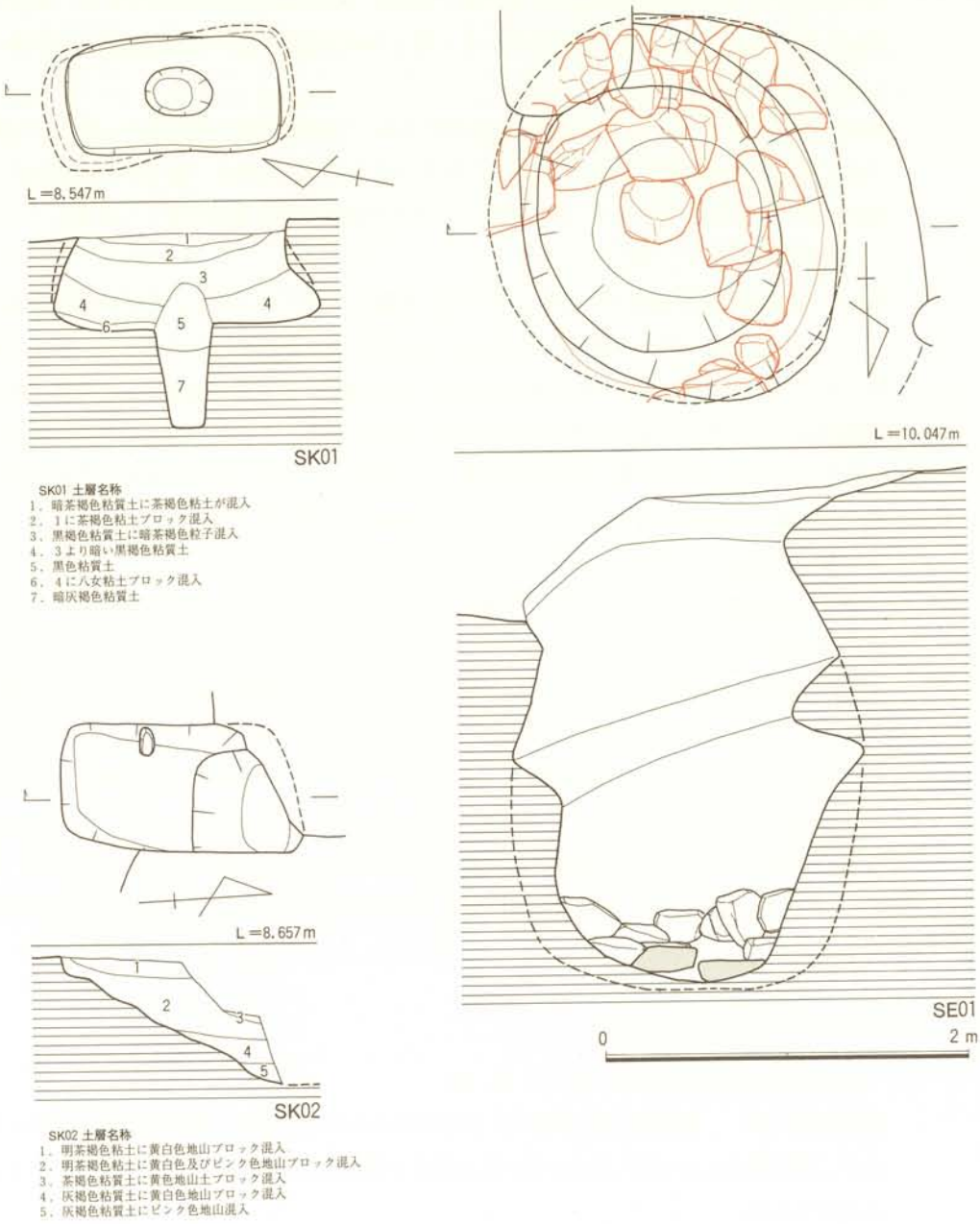


Fig. 76　土壙 SK01・02、井戸 SE01 実測図（縮尺1/40）

胎土に微砂を含み、焼成は良好である。内外面は灰色を呈する。

土師質土器・鍋（3）　破片のため口径は不明である。口縁部と体部との境は、内面に緩い段を有している。口縁部と体部内面はヨコハケ調整で、体部外面はハケ調整である。内外面は暗褐色を呈する。

打製石鏃（7）　黒曜石製の未製品である。縦長の剝片を利用しており、片面には打瀘を残している。片面は縁辺のみ押圧剝離の調整で、形を整えているが、抉入部は未調整である。現存長は2.8cm、基部の幅1.5cmを測る。

(2) 溝 SD01 出土遺物（Fig. 78, PL. 28.）

陶器・皿（4）　李朝陶器で、高台は蛇ノ目状を呈している。口径9.8cm、高さ2.85cm、高台径3.6cmを測る。釉は緑灰色を呈し、高台部外面まで施されている。口縁部は釉をかき取っている。胎土は灰色を呈する。焼成は良好である。

瓦質土器・鉢（5・6）　5は破片のため口径は不明。口縁端部は指ナデによって沈線状に窪みをもうける。内外面共に磨滅している。内外面共に黄白色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。6は瓦質土器の鉢と考えられる。口縁部は段をもって強く立ち上がり、口縁端部を水平に仕上げる。内面はナデ調整、外面には刺突文を施す。胎土は緻密である。焼成は良好。2次的に火を受けているため褐色に赤変している。

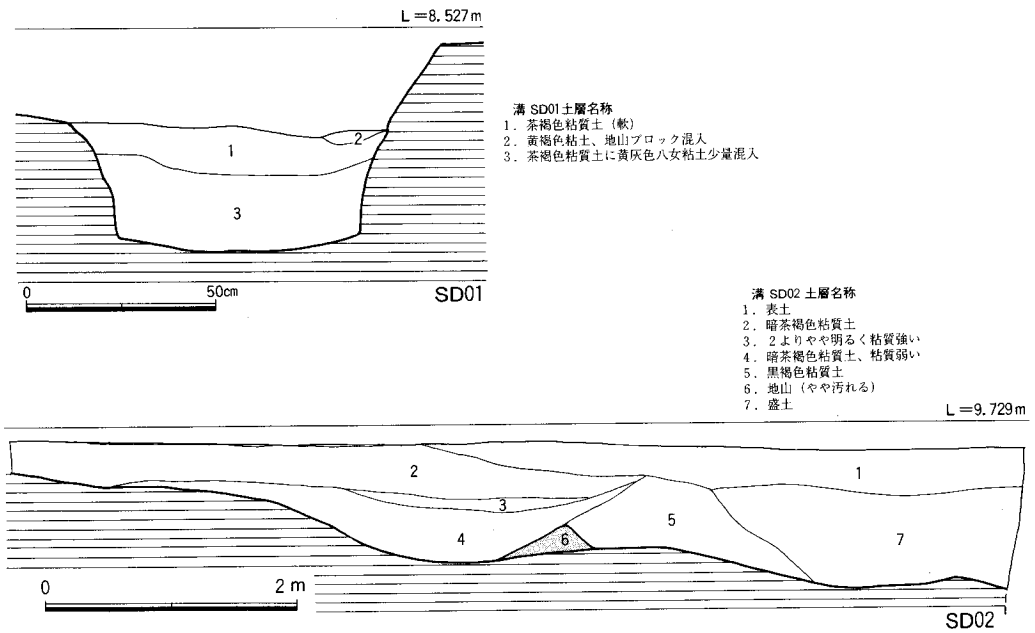


Fig. 77　溝 SD01・02 土層断面実測図（縮尺1/20・1/60）

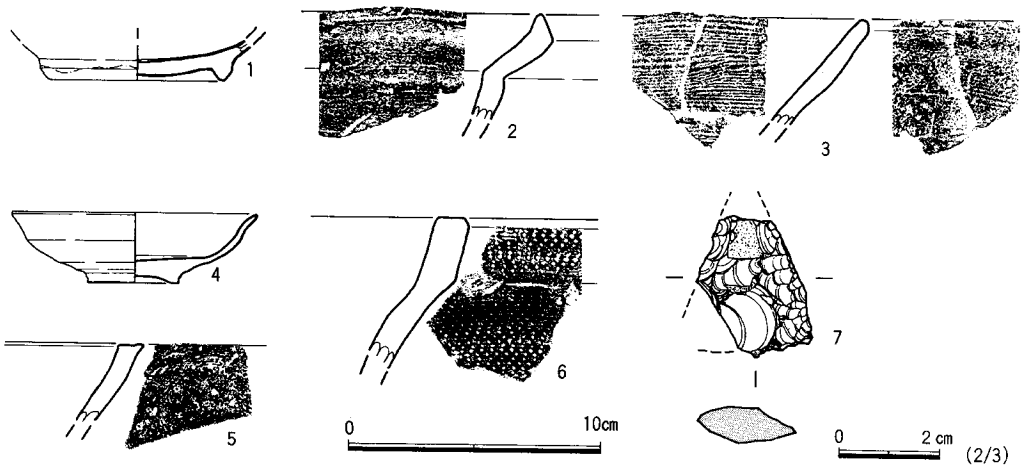


Fig. 78　出土遺物実測図（縮尺1/3・2/3）

4．まとめ

当該地は、谷頭に位置し、遺構があまり存在していない地域と考えられていたが、中世の遺構、及び Pit 群を検出することができた。

土壙 SK01 は、覆土が黒褐色粘質土を主体としていることから、中世以前の時期が考えられる。床面に Pit をもつ構造から、縄文時代の落とし穴の構造に似ている。

中世後半期の遺構としては、土壙 SK02、井戸 SE01、溝 SD01･02 で構成されるが、溝 SD02 は断面形が箱形の溝であり。南北方向に主軸をとることから、東側の谷地形を利用した方形区画の居館を形成する溝と考えられる。その内側に作られた井戸 SE01 の底面には環状の礫が配置されるが、これらは木桶を支える構造物と考えられる。溝 SD02 は浅い落ち込み状を呈していることから溝としたが、東側の谷へ階段状に落ち込んでいる状況から、その構造について再検討を要する。又、溝 SD01との関係はあきらかにすることはできなかった。

遺構の時期については遺物が細片のため判断しようがないが、明の白磁皿、李朝の皿等から15～16世紀の所産と考えられる。

第５章　第58次調査

１．調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区南庄１丁目185・186番地に所在し、調査対象面積は333㎡である。専用住宅建設に伴い、発掘調査を昭和56年10月２日～10月20日まで実施した。

有田・小田部の台地は北西、北東方向から浅い谷が深く切り込み、八ッ手状の台地を形成している。当該地周辺の発掘調査なりは少なく、７ヶ所が実施されているにすぎない。当該地は台地の北東側に位置する幅広い舌状台地のほぼ中央に在って、第76次調査が東側に隣接している。この地域は古くからの集落のため昭和40年代の区域整理から除外されている。当該地の周囲には住宅が建て込んでおり、残土の処理方法が大きな問題であったが、原因者(事業主)との協議の結果、全ての排土を調査区域外に持ち出し、投棄することになった。現標高は9.1ｍを測り、道路面と同高を示している。

当該地周辺の調査では、弥生時代から中世末までの遺構を検出しており、第76次調査では古墳時代住居跡、奈良～平安時代の掘立柱建物、溝を検出している。遺構面までの深さは約20㎝であったが、攪乱が著しいため一律に約40㎝の深さに掘り下げた。遺構面はローム層である。

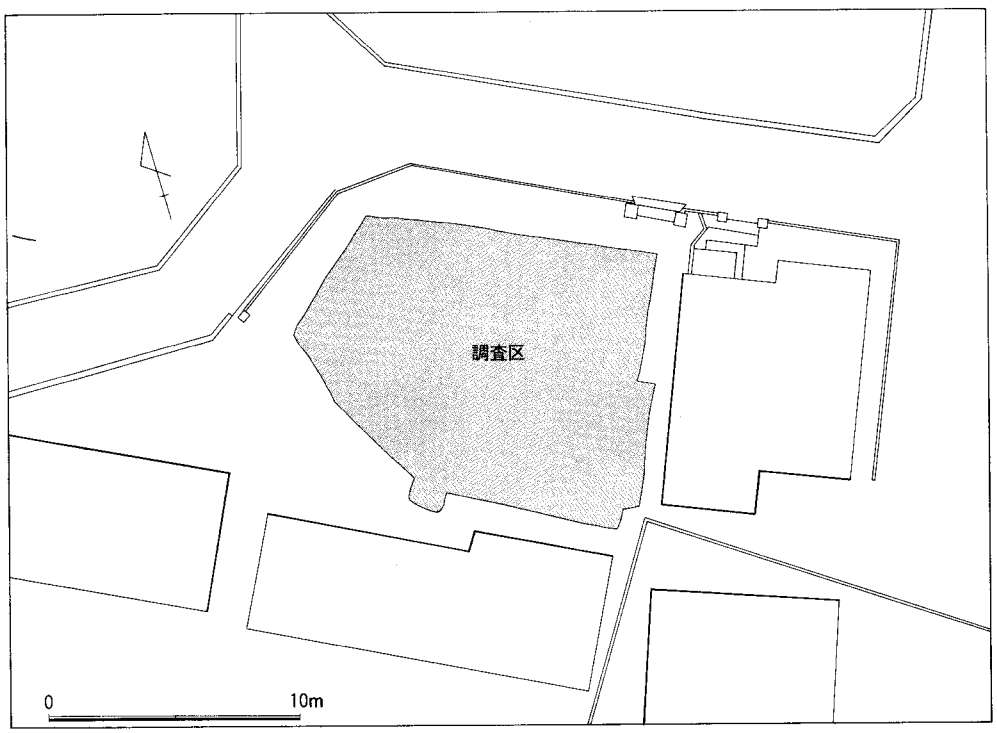


Fig. 79　第58次調査地点位置図（縮尺1/300）

遺構は弥生時代の竪穴住居跡2軒の他、土壙3を検出した。遺物は弥生式土器、須恵器、土師器、磨製石剣片、投弾などが出土した。

2．遺構各説

(1) 竪穴住居跡 (Fig. 81, PL. 29)

遺構面が削平を受けているため、住居跡の遺存状態は悪い。SC02は壁が遺存していなかっ

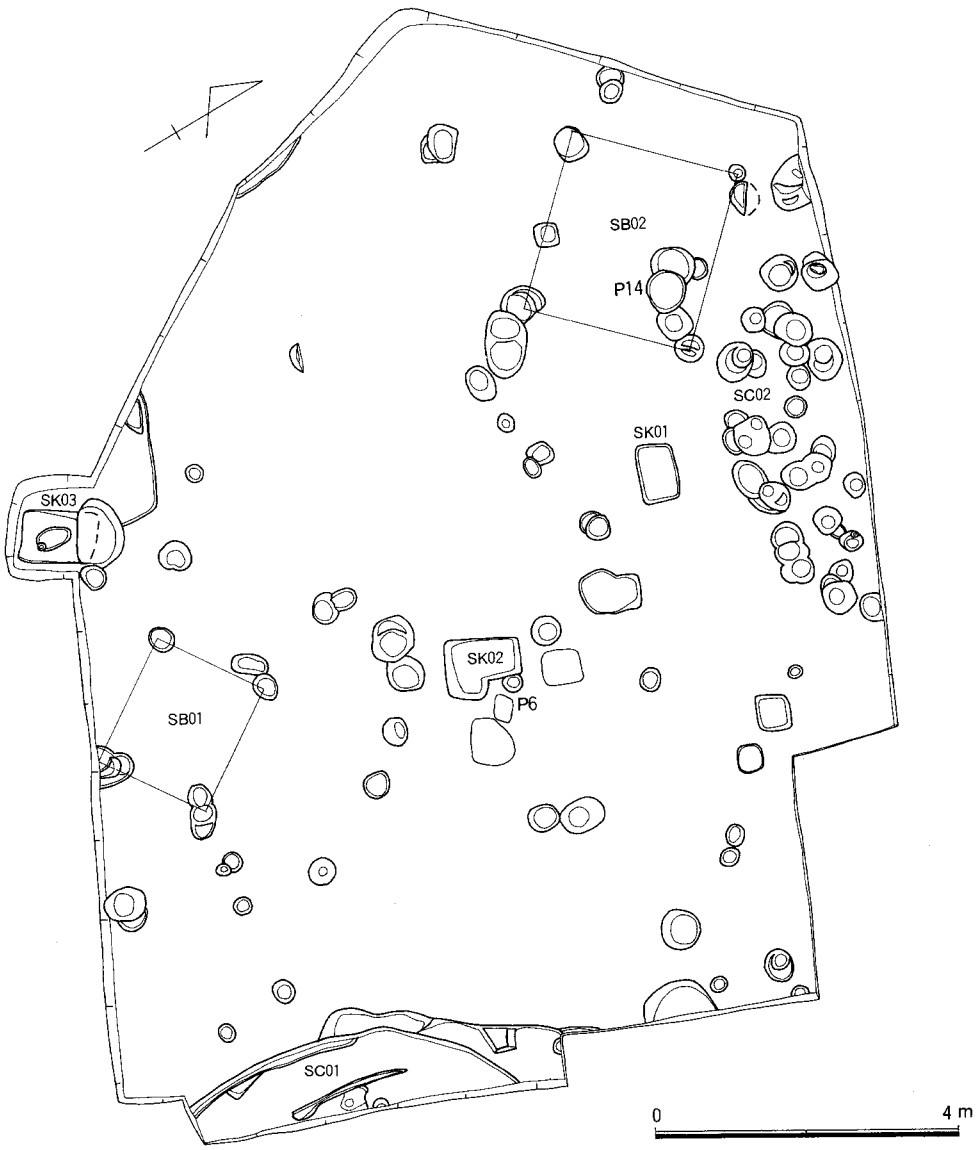


Fig. 80 第58次調査遺構配置図（縮尺1/100）

たが、柱穴群が環状に並ぶところから住居跡と認定した。

SC01　調査区東側の境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は円形を呈するものと考えられる。削平が著しく、壁の遺存状態は悪い。現状で確認した最大幅は2.2m、壁の高さは50cmである。住居跡の復原径は7～8cmと考えられる。住居跡の壁の内側40～70cmのところには幅10cmを測る弧形の溝が設けられている。柱穴は2ヶ所検出した。柱穴 P1 の深さは約30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土である。覆土からは弥生時代中期の土器片の他、磨製石剣の切先部分、砥石が出土した。

SC02　壁は削平を受けているが、Pit 群が環状に配置されているので、円形住居跡と判断した。柱穴は切合い関係が著しいことから、数度の建替えが行われたことが考えられる。柱穴の掘方径は30～60cm、深さは57.4～88.5cmを測り、柱痕は直径18～20cmを測る。柱穴は Fig. 82 の復

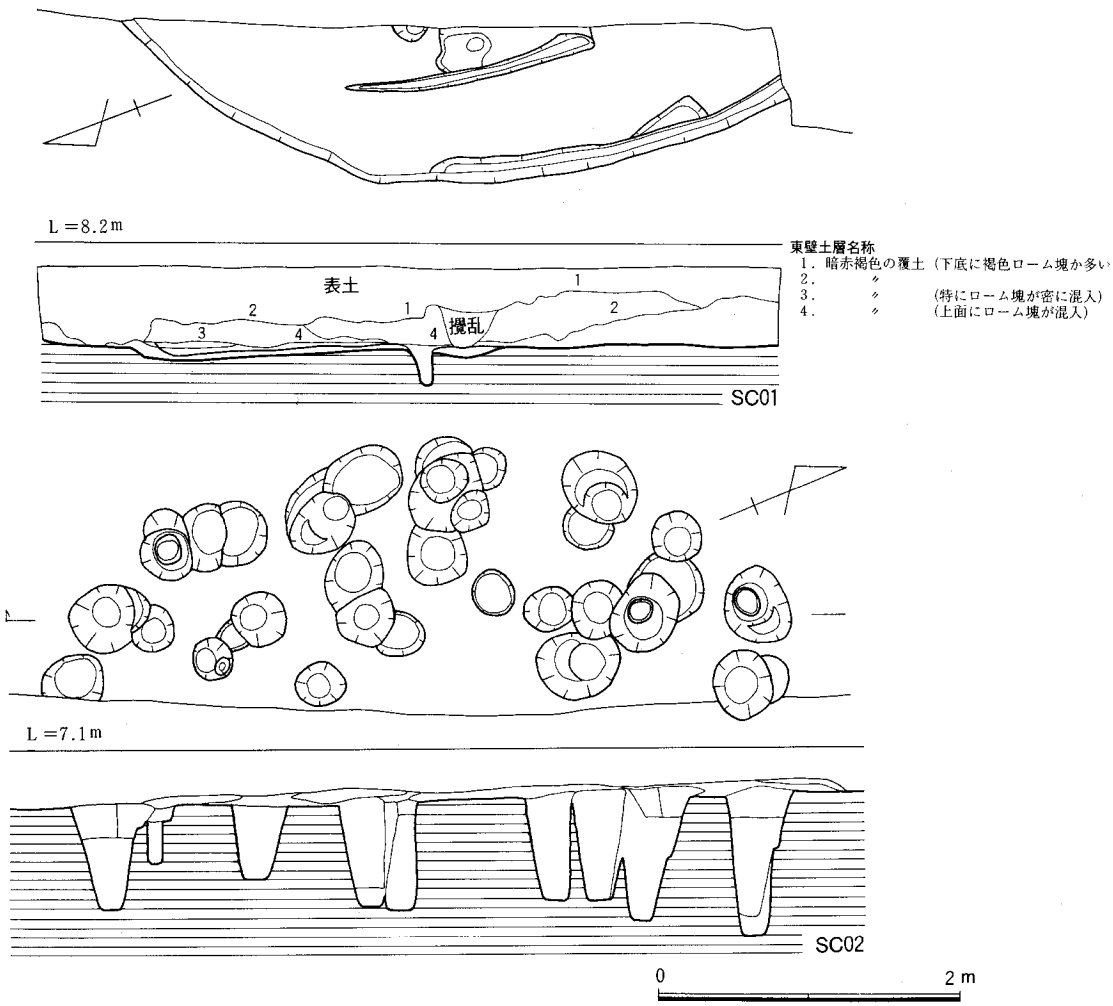


Fig. 81　住居跡 SC01・02 実測図（縮尺1/50）

原図でみれば、切合い関係から３グループに分離できる。すなわち、Ａグループは最も新しく掘られた柱穴である。P1～P13が相当する。P1～P9 は側柱を構成するものと考えられ、柱穴間の平均は約80cmを測る。P15～P24 はＡグループは切られている柱穴である。若干バラつきはあるものの、P15～P19 は環状に巡っている。柱穴間の平均は約119cmである。最も古い柱穴はＣグループの P25～P34 の柱穴と考えられる。環状に並ぶ側柱の柱穴を結ぶ線で直径を割出すと、各々、Ａグループは約6.3ｍ、Ｂグループは約5.4ｍ、Ｃグループ約5.4ｍを測る。新しくなるほど住居跡の規模が大きくなる傾向にあり、Ａグループは側柱から周壁までの間壁を１ｍ以内と想定すれば、直径８ｍを超える住居跡を復原することができる。

(2) 土壙 (Fig. 83, PL. 30)

４ヶ所の土壙を検出したが、その内の１ヶ所は攪乱壙である。

SK01 平面形は隅丸長方形を呈し、断面形の壁は大略真直ぐに立っている。長軸の長さは77cm、幅は53cm、深さは26cmを測る。

SK02 攪乱壙によって一部損傷しているが、平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈している。長軸の長さは102cm、幅は84cm、深さは33cmを測る。

SK03 南側の境界地に位置しているため、調査区を一部拡張して土壙全体形の把握に努めた。土壙の北側は攪乱壙によって破損している。土壙の現存長は74cm、幅は63cm、深さは54cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、土壙の壁は真直ぐ立ち上がっている。覆土は黒褐色粘質土を主体としている。遺物は弥生時代中期の土器片が出土している。

(3) 掘立柱建物 (Fig. 83)

竪穴住居跡に伴うと考えられる掘立柱建物を２棟検出した。規模が１間×１間の建物と、１間×２間の建物である。

SB01 梁行１間、桁行１間の建物で、梁間は1.5ｍ、桁間は1.85ｍを測る。柱穴径は32～42cmを、深さは18～72cmを測る。

SB02 梁行１間、桁行２間の建物で、梁間は2.26ｍ、桁間は2.46ｍ、桁間平均は1.23ｍを測る。柱穴径34～55cm、深さ17～39cmを測る。

３．遺物各説

(1) 住居跡 SC01 出土遺物(Fig. 84, PL. 31)

覆土からは多数の土器片が出土したが、実測可能なものが少ない。弥生時代中期中頃から後半の土器である。

石製品・磨製石剣（８） 全体に風化磨滅しており、両面の鎬は明瞭ではないが、

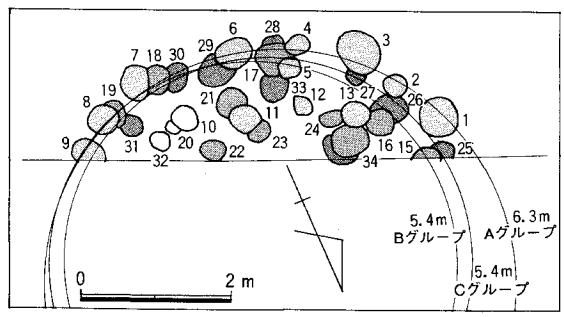


Fig. 82 住居跡 SC02 復原図(縮尺1/100)

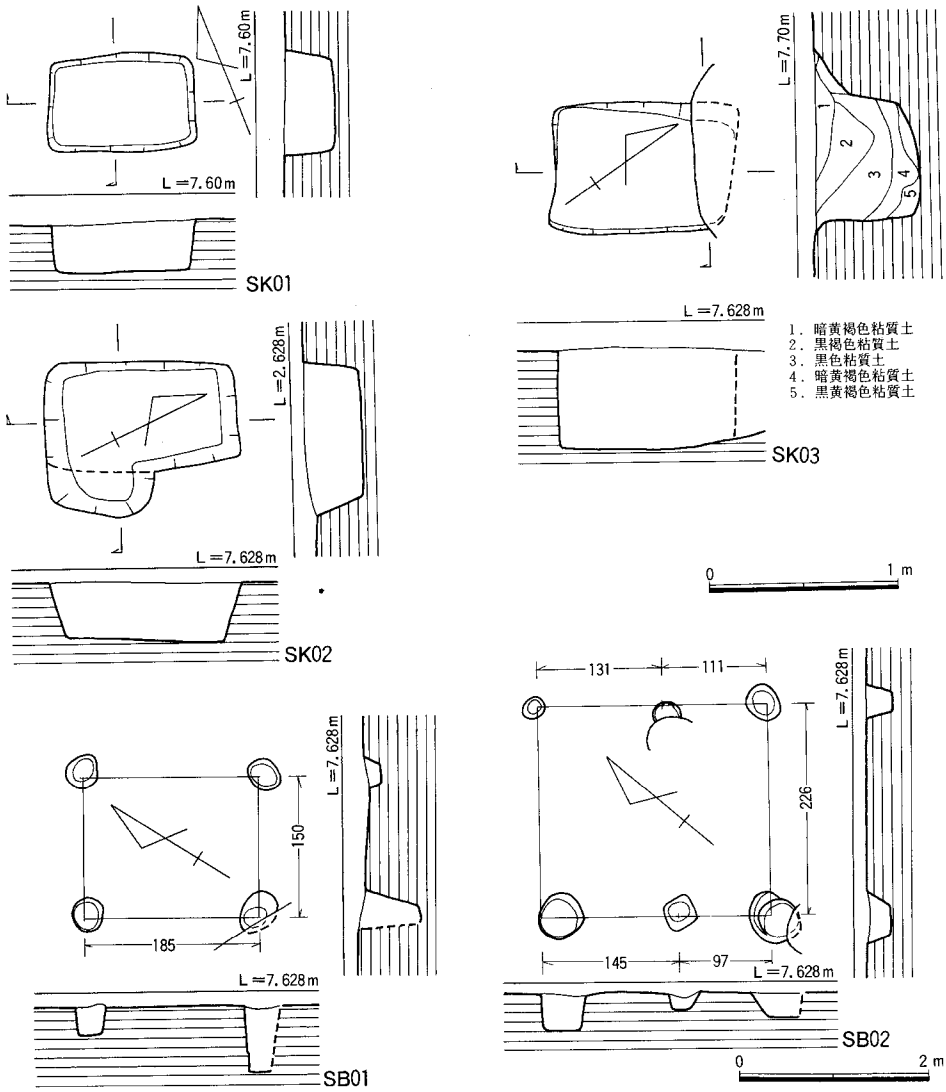


Fig. 83 土壙 SK 01・03、掘立柱建物 SB 01・02 実測図（縮尺1/40・1/80）

片面は鎬の痕跡が残っている。現存長4.1cm、最大幅３cm、厚さ0.4cmを測る。石材は頁岩質である。

砥石（９） 砂岩製である。長さ9.6cm、最大幅3.3cm、厚さ3.4cmを測る。砥面は４面を利用しており、使用頻度が高いため中窪みとなっている。

(2) 土壙 SK03 出土遺物（Fig. 84, PL. 31）

弥生式土器・甕（１・２） 逆Ｌ字形の口縁部を有した甕形土器片である。いずれも磨滅が著しい。２の外面にはタテハケ調整を施している。１の外面には三角突帯を施している。いずれも黄褐色を呈する。弥生時代中期中頃～後半の所産である。

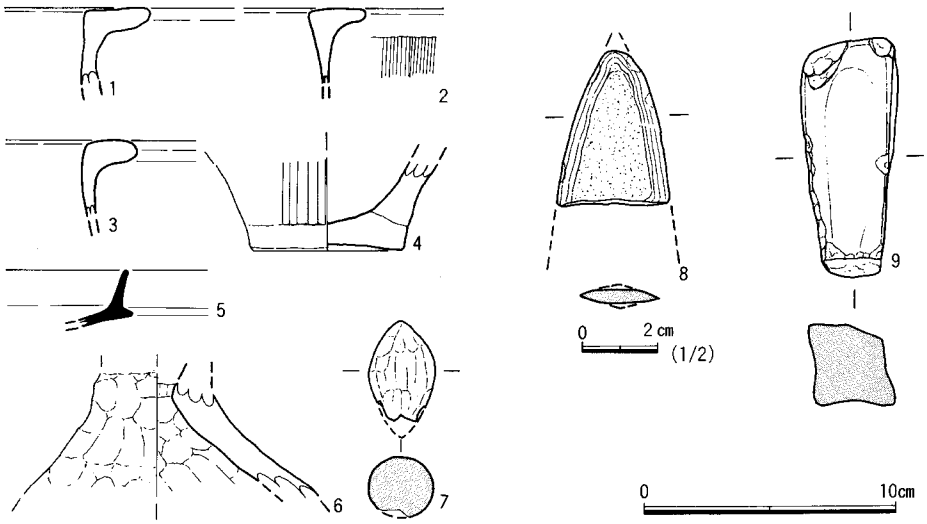


Fig. 84　出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3）

(3)　**Pit 出土遺物**（Fig. 84, PL. 31）

弥生式土器（3・4）　3は P6 出土。逆L字形口縁の甕形土器片であるが、口縁端部は丸みをもっている。内外面は磨滅している。胎土に砂粒を含み、黄褐色を呈する。4は P14 出土。甕の底部で、若干、上げ底気味である。内外面は磨滅しているが、外面にタテ方向のハケ調整がある。胎土に砂粒を含んでいる。2次的に火を受けており、淡褐色を呈する。

須恵器・坏（5）　P14 出土である。坏身の破片で、立ち上がり部分の長さは1.5cmを測る。焼成は良好で、灰色を呈する。

土師器・高坏（6）　P14 出土。坏部及び、脚裾部分を欠損している。器壁が厚く、外面の調整は粗い。内外面に指圧調整痕が残る。焼成は軟質で、内面は黒色、外面は暗褐色を呈する。

土製品・投弾（7）　P14 出土である。弥生時代の投弾で、現存長4.8cm、最大径2.65cmを測る。外面はナデ調整で、焼成は軟質である。黒褐色を呈する。

4．まとめ

南庄地域の発掘調査例は少なく、遺跡の内容については実体が不明な点が多かったが、今回の調査では弥生時代には既に集落が形成されることが判明した。検出した竪穴住居跡の遺存状況は悪いが、復原すれば直径8mを超える規模であり、複数の建替えを行うなど定着性が強いことが伺える。又、これらの住居跡には1間×1間、もしくは1間×2間の掘立柱建物が伴っており、高床倉庫と考えられる。

当該地は幅約300mを測る舌状台地のほぼ中央で、標高9m前後を測る高所に位置しているところから、当該地を中心とした地域が弥生時代集落の核をなすものと考えられる。

第６章　第61次調査

１．調査地区の地形と概要

当該地は福岡市早良区有田２丁目21－２番地に所在し、調査対象面積は187㎡である。

有田地区の最高所は標高15ｍを測り、平坦部を形成するが、北の方向から谷が深く切り込むために、幅150ｍ、標高12ｍ前後を測るくびれ部を形成する。この周辺の発掘調査は進んでおり、近接する調査例は50数ヵ所に及び、弥生時代～戦国時代に亘る遺構を検出している。当該地に隣接する第19・47・83・96次調査では、戦国時代の濠を中心にして、弥生時代からの遺構を検出しており、当該地も同様な遺構の存在が予想された。倉庫の改築中に遺構を発見したため、事業主より不時発見届け出が提出された。発掘調査を昭和56年11月21日～12月13日迄実施した。

既に外周工事や棟上げ工事が完了していたため、倉庫内部に限られた調査となった。このため発掘調査は２区に分けて行い、排土は調査区外へ搬出した。表土は盛土で、遺構面までの深さは約30～80㎝である。遺構は標高約11ｍ前後を測るローム層上に形成されるが、昭和41年～43年の区画整理による削平が著しく、遺存状態は悪い。

遺構は戦国時代の濠２条を検出した。遺物には中国青磁・白磁の他、国産陶器、瓦質土器、土師質土器、瓦類、石製品などがある。

２．遺構各説

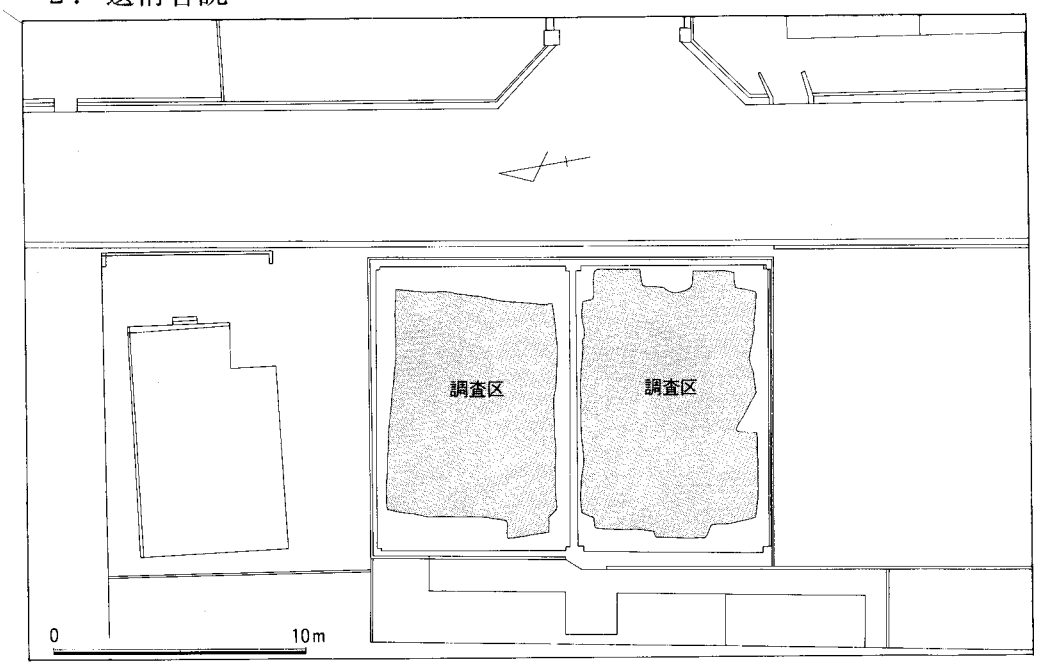


Fig. 85　第61次調査地点位置図（縮尺1/300）

(1) **土壙** (Fig. 87, PL. 35)

SK01 濠 SD01 によって土壙の東側が切られており、全体形は不明である。現存長は1.6m、現存の幅は0.95m、深さ0.55mを測り、平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈している。内部の下位に礫が投棄されていた。礫群内から平瓦、石臼、砥石などが出土した。

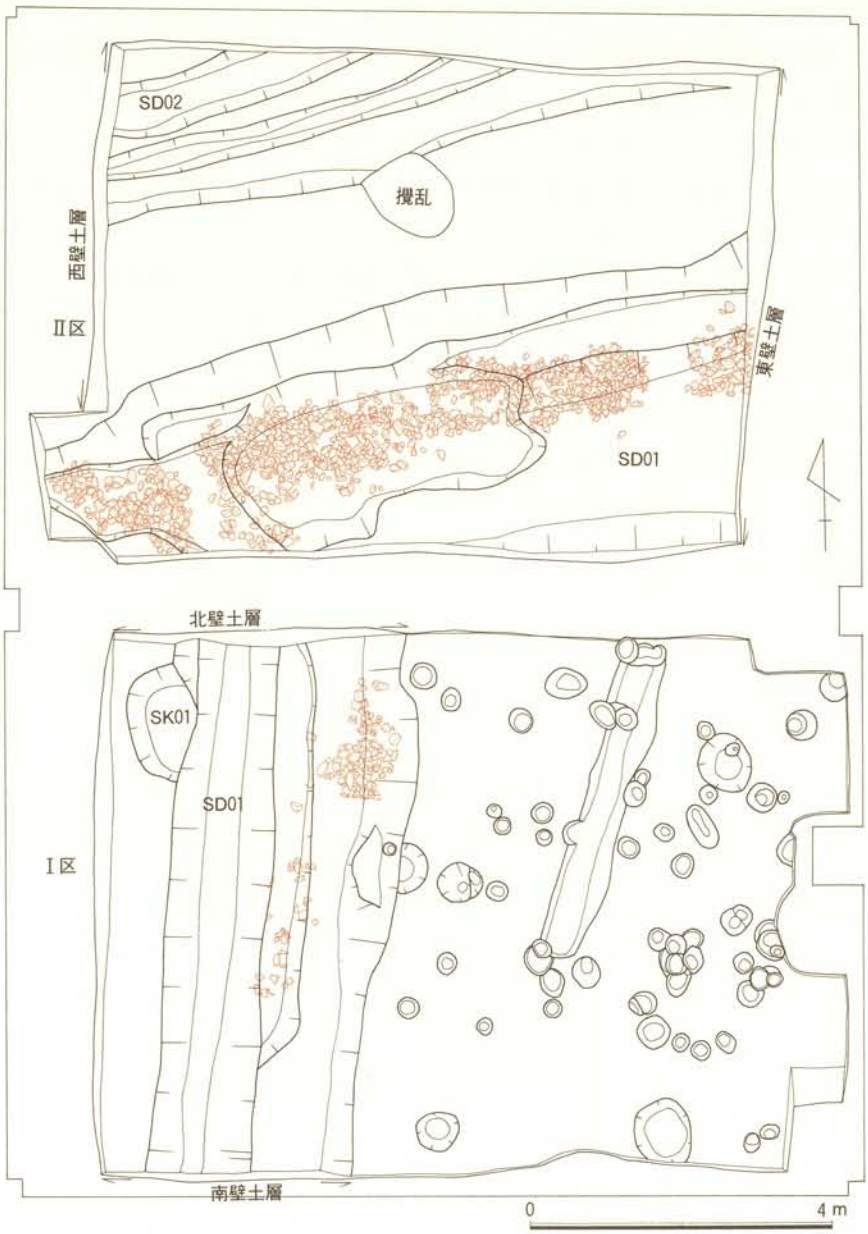


Fig. 86 第61次調査遺構配置図（縮尺1/100）

(2) **溝** (Fig. 88, PL. 33・34)

SD01 南北方向から東西方向に矩形に曲がる溝である。溝の幅は3.6～4ｍを測り、深さは1.4～1.7ｍである。溝は2段掘りになっており、下位の断面形は逆梯形状を呈している。東西方向の溝底には長さ4.2cm、幅2.0cm、深さ15cmを測る浅い土壙があり、この上部には8～22cm大の礫が投棄されていた。礫群の高さは、溝底から約10～20cm上位にある。東西方向の溝は更に西へ伸びることが予想されるので、SD01は溝の交点の状況を示していることが考えられる。覆土は灰褐色粘質土と茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は溝内からは土師器皿、中国白磁、青磁、瓦質土器、土師質土器、備前摺鉢、平瓦、丸瓦、滑石製品が出土している。

SD02 調査区の北側に位置し、東西方向の浅い溝である。溝幅は1.7～2ｍ、深さ0.7ｍを測る。覆土は八女粘土のブロックを含んだ茶褐色粘質土である。

遺物は軒丸瓦、陶器甕、瓦質土器火舎、砥石が出土した。

3．遺物各説

(1) **包含層出土遺物** (Fig. 89, PL. 36)

土製品・土錘（1） 管状土錘で、一部を欠損している。現存長7.3cm、最大径3.35cm、孔径1.1cmを測る。胎土に砂粒が多く、又、暗褐色土の粒子を含む。黒斑をもち、暗い黄土色を呈する。

(2) **土壙 SK01 出土遺物** (Fig. 89, PL. 37)

土壙内に投棄されていた礫群内より検出した。

瓦類・平瓦（2・3） 2・3の現存長は18.5, 16.1cm、現存幅は13.9, 14.5cmを測る。谷部の後端部は端2.5～3cmのヘラ削りを行う。瓦の厚さは1.2～1.6cmである。側縁及び、小口はヘラ削り後、ナデ調整を施している。背部の表面には離れ砂が付着している。2は黒灰色、3は灰白色を呈し、焼成は良好である。

石製品・石臼（4） 遺存状態は悪く、約1/4片である。茶臼の上臼と考えられ、擦り合わせ面の復原径は15cm、現存の高さ10.1cm、芯棒孔径1.4cmを測る。把手孔周囲の装飾は三段重ねの菱形文である。擦目は分割主溝8本、副溝5本で、逆時計回りに施している。受け皿部分は、破損しているが浅い皿状に削り込んでいる。石材は砂岩で、表面は風化磨滅している。

砥石（5） 長さ8cm、幅7.9cm、厚さ3.2cmを測る。一部を欠損している。扁平な四角形の立方体に成形し、片

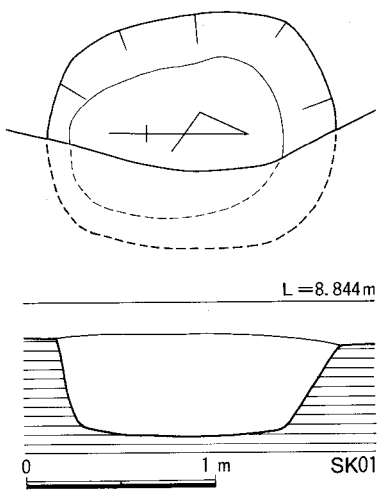


Fig. 87 土壙 SK01 実測図 (縮尺1/40)

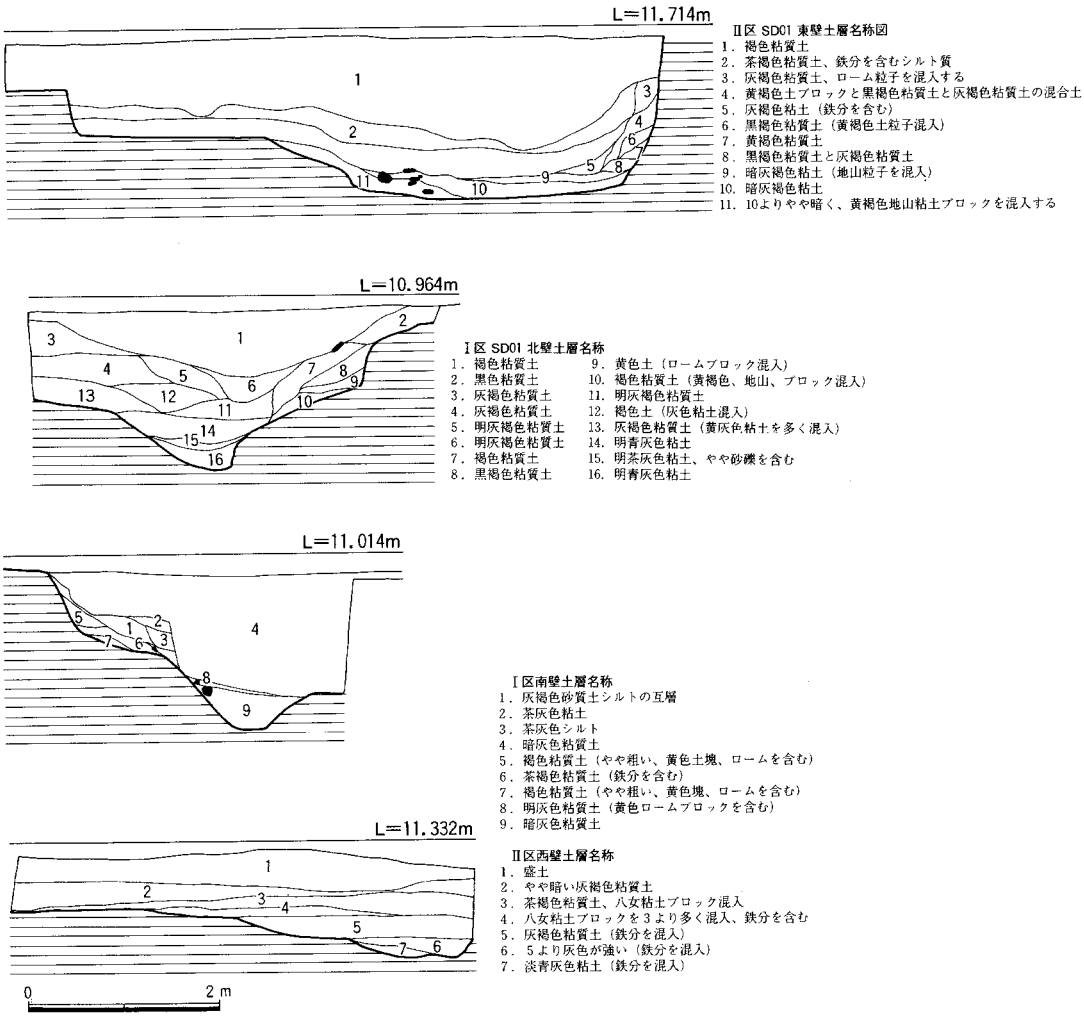


Fig. 88　調査区土層図（縮尺1/80）

面と左側面を砥面として利用する。材質は砂岩である。

(3)　溝 SD01 出土遺物（Fig. 90, PL. 38）

（礫群内出土）

土師器・皿（1・2・3）　口径は、1が6.8cm、3が8.2cm、器高は、1が1.5cm、3が1.9cm、2の底径は6.2cmを測る。2の器壁は厚く、0.8cmを測る。いずれも糸切り底である。1は、胎土に褐色土の粒子と砂粒を含み、淡褐色を呈している。2は胎土に砂粒を多く含み、2次的な火のため褐色を呈する。3は胎土は緻密で、灰白色を呈する。

白磁・碗（4・5・6・7）　いずれも中国舶載の白磁碗で、6は玉縁口縁のⅣ類、5は端反

り口縁のⅤ類である。高台径は、5が6.4cm、6が7.2cm、7が4.8cmである。4は高台径4.4cmを測り、厚目に透明釉を高台外面まで施す。外底部と高台内側には鉄銹を塗布している。胎土は緻密で、灰白色を呈する。7は口径16.6cm、器高5.85cmを測る。端反りの口縁部をもったⅨ類と考えられるが、高台が低く、蛇ノ目状を呈している。釉は薄目で、体部外面の下位まで施す。内底に輪状の沈線と、その内側に蓮花文のスタンプを施す。

青磁・碗（8・9）　いずれも中国舶載の青磁碗で、明代である。高台径は、8が7.2cm、9は6.0cmを測る。釉は厚目で、8は内底まで、9は畳付まで施す。8の内底は輪状に拭き取っている。釉色は、8が暗緑灰色、9が淡青緑色で、焼成は良好。9の外底は2次的な火のため赤変しており、胎土には微砂を多く含む。

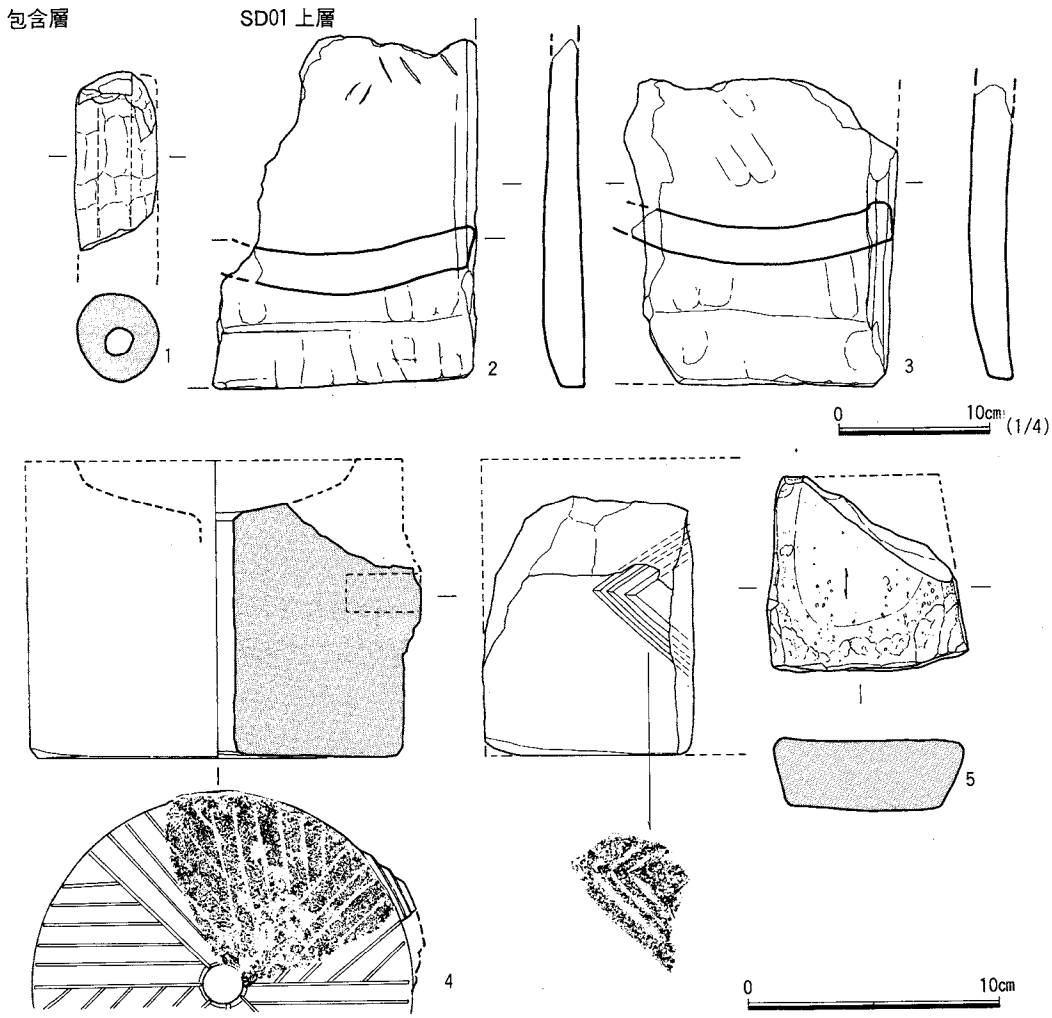


Fig. 89　包含層及び土溝 SD01 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）

土師質土器・鍋（10）　口縁部は内弯気味に外反し、内面の体部との境には段を有している。内面はヨコハケ調整、外面はナデ調整である。外面には煤が付着している。胎土に砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。磨滅が著しい。

瓦質土器・摺鉢（11～15）　11の口縁部は内弯させている。13・14の口縁端部は両側につまみ出して平坦部を形成している。11の内面はヨコハケ調整で、下し目は4本単位である。13の内面は細かいヨコハケ調整で、外面はタテハケ調整である。内面の下し目は6本単位で、幅広い。14の内外面は磨滅している。いずれも胎土に砂粒を含み、11は灰白色、13は暗灰黄色、14は黄褐色を呈する。13・14は二次的な火を受けている。13の内外面には煤が付着しており、又、下部が赤変しているところから、鍋として利用したことが考えられる。12・15は摺鉢の底部で、15の外面は細かいタテハケ調整、内面は磨滅している。12の内外面は磨滅しているが、内面のみは使用によるもので、5本単位の下し目が消えている。ヨコハケ調整である。15は灰黄色、12は暗灰色を呈する。12は大内系の摺鉢である。

鉢（18）　瓦質土器であるが二次的な火のため赤変している。脚部片であろう。逆載頭三角形状を呈している。内側には底部との貼付部分が残っている。外面の縁辺に沿って菊花文のスタンプを連続させる。表面は磨滅しており、調整は不明。胎土に砂粒を含む。

備前焼・摺鉢（16・17）　16の内外面はヨコナデ調整で、6本単位の下し目を施す。17は口縁部が強く立ち上がる。外面には沈線もなく、内外面共にヨコナデ調整である。いずれも胎土に砂粒を含み、16は茶褐色、17は灰褐色を呈する。備前Ⅴ期の所産であろう。

土師器・高坏（19）　脚部分で、筒部が膨らんでいる。内外面ともに磨滅している。

器台（20）　鼓形器台で、脚部と口縁部を欠いている。外面はナデ調整。胎土に砂粒を含み、灰黄色を呈する。

（溝底出土）（Fig. 91, PL. 38）

土師器・皿（21・22）　口径は、21が6.0cm、22が9cm、器高は、21が1.2cm、22が1.5cmを測る。いずれも糸切り底である。胎土に微砂を含み、21は暗灰色、22は褐色を呈する。

坏（23・24）　口径は、23が13.6cm、24が15.4cm、器高は、23が2.7cm、24が2.8cmを測る。23の胎土は精微である。胎土に砂粒を含み、23は淡黄灰色、24は灰褐色を呈する。

青磁・碗（25～29）　明代の青磁で、高台径は、25が5.6cm、26が5.8cm、27が4.4cm、28が6.0cm、29が5.8cmである。25をのぞいて釉は厚目で、高台内側まで施される。25・28・29の内底にはスタンプが施され、29は花弁文である。釉は、25が灰緑色、26・28がくすんだ灰緑色、27が緑灰色、29は淡緑色である。26は2次的に火を受けている。

染付・皿（30）　明代の染付で、碁笥底の皿である。内面見込みと外面には圏線を、内底に文様を施す。釉は透明釉で、胎土は灰白色を呈する。

土師質土器・鍋（31・32・33）　いずれも口縁部は内弯し、体部との境は内面に段を有する。

SD01 礫中

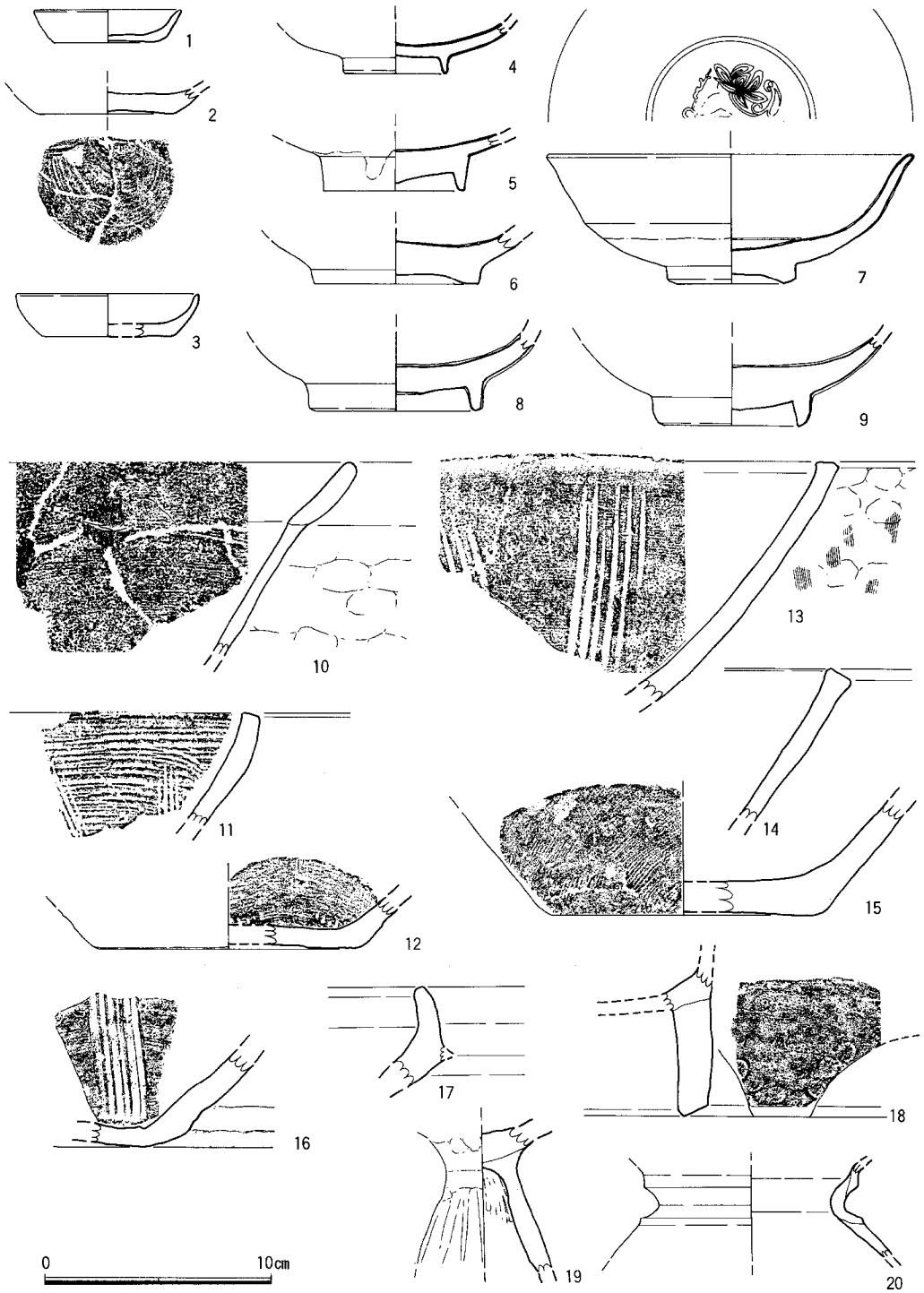


Fig. 90 溝 SD01 出土遺物実測図①（縮尺1/3）

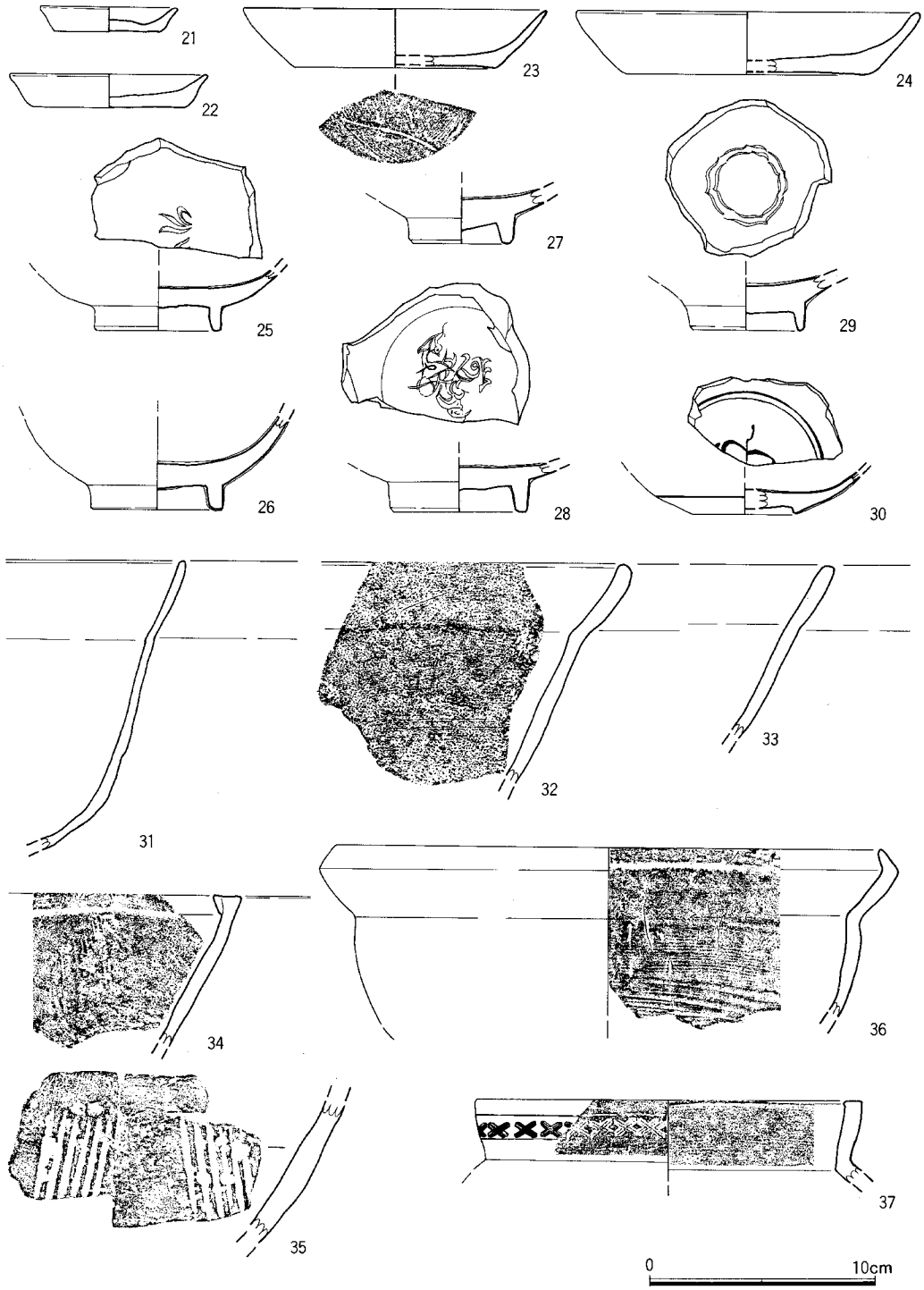


Fig. 91　溝 SD01 出土遺物実測図②（縮尺1/3）

32・33の内面はヨコハケ調整である。胎土に砂粒を含み、31は暗灰褐色、32は褐色、33は灰黄色を呈し、いずれも外面に煤が付着している。

瓦質土器・摺鉢（34・35）　34は口縁端部の内側に突帯を貼付けている。内面の調整はヨコハケ調整で、下し目の単位は11本である。35は二次的な火のため褐色に赤変している。下し目は6本単位で、深く幅広い。いずれも内外面は磨滅している。34は灰黒色を呈する。

足鍋（36）　口縁部は内弯気味に外反し、端部を内側へ折り曲げている。口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はヨコハケ調整である。外面に指頭圧痕が残る。黒灰色を呈する。

湯釜（37）　口縁部分で、口径17.2cmを測る。内面はヨコハケ調整、外面はヨコナデ調整を行い、外面に筋違い文のスタンプを施す。内外面は黒灰色を呈し、胎土は緻密である。

火舎（38・39）　平面形が箱型の火舎で、口縁部分である。端部は逆L字型を呈し、平坦面を形成する。38の外面には筋違い文を、39の外面には斜格子文のスタンプを施す。内外面は磨滅しており、38は灰色、39は暗灰色を呈する。いずれも胎土に砂粒を含む。

風炉（42）　復原口径34cmを測る。口縁部はくの字形に立ち上がり、端部は外側へつまみ出している。端部上面には長さ7cmの釜受けを貼付する。頸部に低い突帯を施す。口縁部の外面には5重の筋違い文をスタンプしている。体部の上位にヘラ切りによる透しを設ける。内外面は磨滅しており、灰褐色を呈する。胎土は精緻である。

滑石製品・石鍋（40・41）　外面に小さな三角突帯を形成する。41の外面にはタテ長の削り痕が残る。いずれも内面調整は丁寧である。40の外面には煤が付着している。40は暗灰色、41は灰色を呈する。

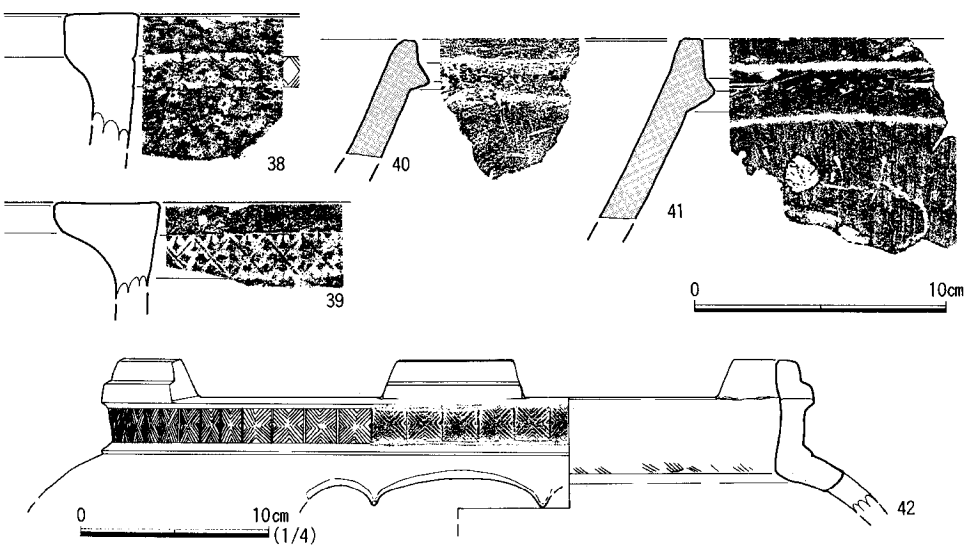


Fig. 92　溝 SD01 出土遺物実測図③（縮尺1/3・1/4）

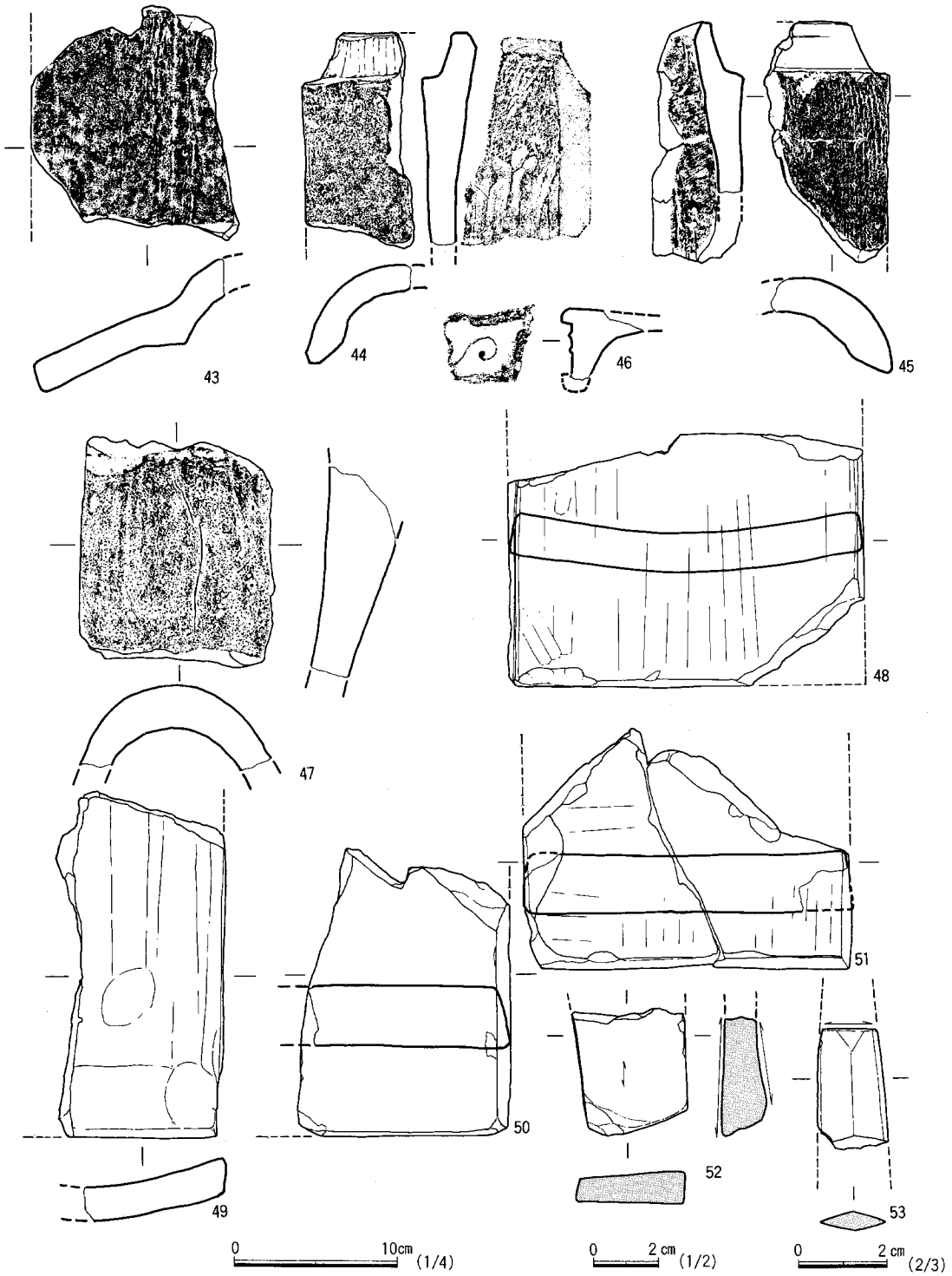


Fig. 93 溝 SD01 出土遺物実測図④（縮尺1/4・1/2・2/3）

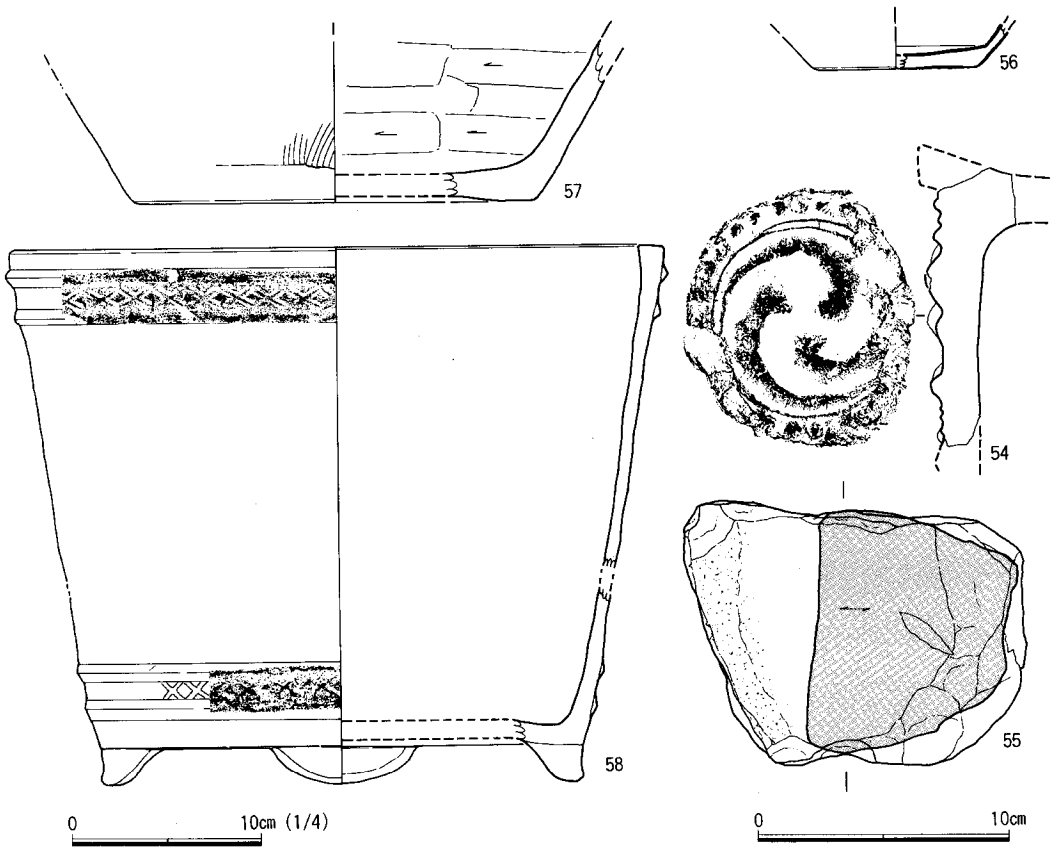


Fig. 94　溝 SD01・02 出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）

瓦類　溝内の覆土・礫群・溝底から多量の瓦が出土した。平瓦の総数は184点、丸瓦の総数は63点、道具瓦４点、瓦塼６点である。

道具瓦（43・47）　43は伏間瓦、47は熨斗瓦である。43の背部には縄目の叩き痕がある。47の背部はヘラナデ調整が施される。胎土に砂粒を含み、二次的な火のため、43は黄灰色、47は一部が赤変する。他は黒灰色である。

丸瓦（44・45）　いずれも大部分を欠損している。背部に縄目叩き痕、谷部に糸切り痕が残る。44は糸切り後、ヘラ削りを施す。縁辺はヘラ削り調整である。44は黒灰色、45は２次的な火のため褐灰色を呈する。胎土に砂粒が多い。

平瓦（48・49）　溝の下層から出土。48は前端部分で、復原幅は21.6を測る。49は前端部分で、谷部の端部には幅4.5cmのヘラ削りを施す。背部には離れ砂が付着している。胎土に多くの砂を含み、内外面は黒色を呈する。48は背部・谷部とも丁寧なナデ調整で、黒色のいぶしが施される。49に比べ、胎土に砂粒を含まず、緻密であることや厚さが2.2cmであること、更に面取りや離れ砂が付着していないことから、近世的な瓦と考えられる。

軒平瓦（46）　瓦当の縁は高く、6㎜を測る。文様は均整唐草文であろう。

瓦塼（50・51）　溝下層から出土。方形塼で、51の幅は20.2㎝、厚さは、50・51共に3.6㎝である。側辺は斜めに切り落としている。50の両面には離れ砂が付着している。51は丁寧なナデ仕上げである。灰黒色を呈している。

石器・砥石（52）　溝の上層から出土。一部を欠いている。長方形状に面取りしており、両面と側面の4面を砥面として利用する。細粒の砂岩である。

(2) 溝 SD02 出土遺物（Fig. 94, PL. 39）

白磁・皿（56）　中国舶載の皿で、底径は6.6㎝を測る。やや厚目の透明釉を外底部まで施すが、外底部は拭き取っている。胎土は灰白色である。

陶器・甕（57）　素焼きの甕で、底径は21.4㎝を測る。内外面はヨコナデ調整、外底部はナデ調整である。褐色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。

瓦質土器・火舎（58）　復原口径34㎝、器高28.9㎝を測る。底部に4ヵ所の足が付く。口縁部は肥厚する。口縁部と体部下位の外面に各々二重の山形突帯を貼付し、突帯の間には筋違い文をスタンプする。内外面は磨滅している。胎土に砂粒を多く含み、灰黄色を呈する。

瓦類・軒丸瓦（54）　瓦当部分である。右巻きの三巴文で、巴文の頭は大きく、尾は他の尾に接するため圏線状を呈する。珠文は30個前後の数であろう。灰黒色を呈する。

石製品・砥石（55）　粒子の粗い砂岩である。全体に大雑把な面取りで、一面のみを砥面している。最大の長さ13.7㎝、厚さ9.7㎝を測る。

4．まとめ

当該地は有田地区における台地の最高所に位置するが、この周辺では従来の調査によって、中世後半期の濠が曲輪を形成していることが判明している。この曲輪群は東西約300ｍ、南北約250ｍの範囲に拡がるものであるが、台地の最南端に位置する「小田辺城」との関連は今をもって明らかではない。又、同じく中世の文書において有田地区にあったといわれる「堀の内城」が、「小田辺城」を指すのか、或いは別の城を指すのかさえ現状では不明であるが、小田辺城、堀の内域の両城と、この曲輪群との関係は、非常に緊密なものと考えられる。

当該地で検出した溝 SD01 は東西方向の溝と南北方向の溝がＴ字形に合体した溝である。南北方向の溝は、断面形が2段掘りのＶ字型を呈しており、南側の第19次調査で検出した溝 SD02 の連続するものである。第19次調査の SD02 からは中世瓦が多量に出土し、この時期の瓦の編年を決める重要な資料となったが、これらの瓦は博多遺跡群の調査においても最近出土例が増えており、中世博多との関連も注目される。当該地の調査でも同様に平瓦、丸瓦が多量に出土しているが、第77次・第47次調査では瓦の出土が非常に少ないことなどから、瓦が出土する地域が限定される。すなわち、第6・19・61・83次調査等に限定して出土することから、

この地域において瓦葺き建物が存在し、且つ、鬼瓦の出土は、主殿的な主要建物が存在したものと考えられる。

時期については、中世後半期の編年作業が進んでいない段階においては明確ではないが、明青磁を中心として、明染付皿、備前焼摺鉢等の器形により、15世紀後半から16世紀代の幅を与えておきたい。

第７章　第65次調査

１．調査地区の地形と概要

調査地区は福岡市早良区有田２丁目７－10に所在する。調査対象面積は251㎡である。専用住宅建設に伴い、発掘調査を昭和57年４月22日～４月26日の期間に実施した。

当該地は有田・小田部台地の南東側斜面に立地し、台地の東側は金屑川によって開削されている。現在の標高は約６ｍを測るが、旧耕作土の上には約50㎝の盛土が行われている。遺構面は、地表面からの深さ約95㎝において検出した。堆積状況は１層が盛土（客土）、２層が旧耕作土、３層が茶褐色粘質土、４層が黒褐色粘質土、５層が暗褐色粘質土、６層が青灰色粘土を混入した黒褐色粘質土、７層が暗灰色粘質土、８層が灰褐色粘質土の層序となっており、４・５層からは弥生時代中期後から後期の土器を中心にして、多量に土器を出土しする。９層は灰褐色粘質土層で、遺構が掘り込まれており、遺構面として把握できる。

遺構は時期不明の土壙３を検出した。遺物は弥生時代から中世までの土師器、須恵器が出土している。

２．遺構各説

遺構面は平坦面を形成しており、標高は4.6㎝を測る。検出した遺構は土壙３であった。い

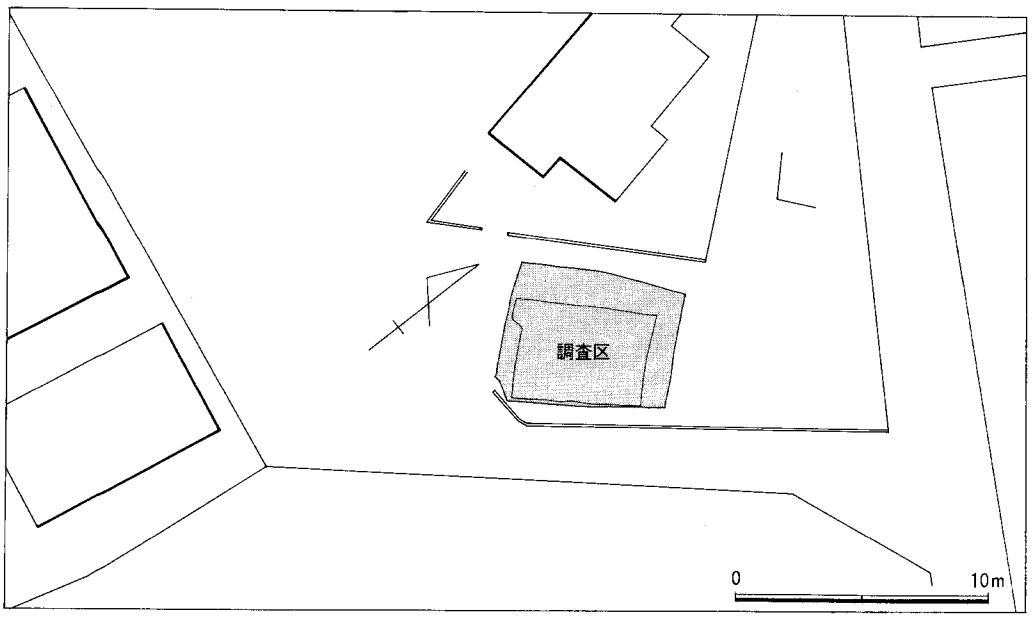


Fig. 95　第65次調査地点位置図（縮尺1/300）

ずれも灰褐色粘質土から掘り込んでいるが、出土遺物は細片のため時期の手がかりにならない。

(1) **土壙** (Fig.17, PL. 41)

SK01 調査区の東側境界地に位置するため全体形は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ、断面形は逆梯形状である。土壙の現存長は75cm、幅は85cm、深さ31cmを測る。

SK02 平面形は不整楕円形を、断面形は逆梯形である。長軸の長さ112cm、幅78cm、深さ33cmを測る。

SK03 平面形は楕円形、断面形は逆梯形を呈し、長軸の長さ66cm、幅43cm、深さ9.8cmを測る。

3. 遺物各説

(1) **包含層出土遺物** (Fig. 98・99, PL. 41)

第4・5層から多くの遺物が出土した。特に弥生式土器が多く出土し、全体の8割程度を占める。その他には古墳時代の須恵器、土師器、古代瓦片、明の染付、糸切り底の土師器皿などが出土している。

弥生式土器 (1～14・27・30・33) 第4・5層からは1～14、第5層からは27・30、その他の層から33が出土した。1～5・27は甕形土器で、くの字形の口縁部で、6の口縁部は強く内弯し、端部を丸く形成する。頸部は三角突帯を巡らしている。5・33は鋤形の口縁部の甕で、7は袋状口縁部の壺である。9～14は底部で、14の体部は内弯し、丸味をもつ。8の外面は粗

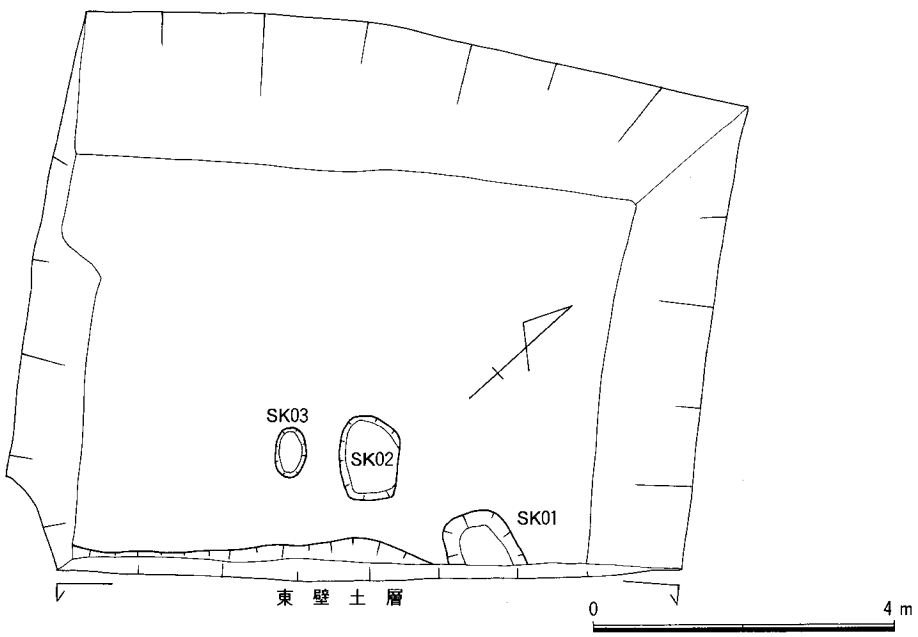


Fig. 96 第65次調査遺構配置図 (縮尺1/100)

目のタテハケ調整、９の外面は丁寧なナデ調整を施している。１～４・８～13は中期後半、６・７・14・30は後期初頭から前半の所産である。

土師器・皿（16・17）　第４・５層から出土。口縁部を欠いているため口径は不明である。いずれも糸切り底で、底径は各々、4.6cm、5.8cmである。

甕（28）　第５層から出土。口縁部はくの字形を呈し、体部内面はヘラケズリを施す。内外面は磨滅している。

甑（19）　第４・５層から出土。把手部分のみで、断面形は楕円形を呈している。

鼓形器台（18）　第４・５層から出土。口縁部と脚裾部を欠損している。内外面共にヨコナデ調整であるが、口縁部の外面の一部にタテハケ痕が残る。

須恵器・坏蓋（29）　第５層から出土。復原口径10.0cmを測る。口縁部内側のかえしは低く、0.6cmを測る。内外面はナデ調整で、灰青色を呈する。

甕（20・21・22）　第４・５層から出土。外面に平行叩き、内面は、20が青海波、21が平行叩きである。22は平底で、外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整である。

壺（24）　第４・５層から出土。外面に平行叩き、内面は細い青海波の叩きを施す。古式の須恵器で、胎土は精製され、薄灰青色を呈する。

染付・碗（32）　第４・５層から出土。明代の染付碗の破片で、外面に如意頭文を施す。内面

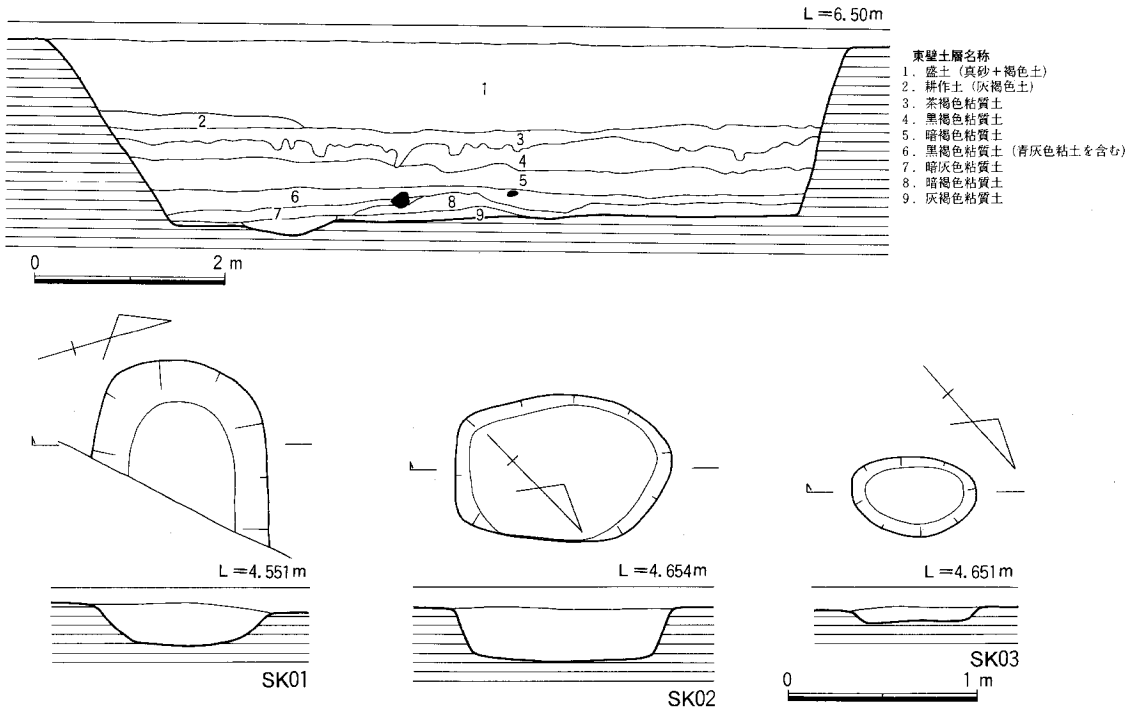


Fig. 97　調査区東壁土層断面図及び土壙 SK01～03 実測図（縮尺1/80・1/40）

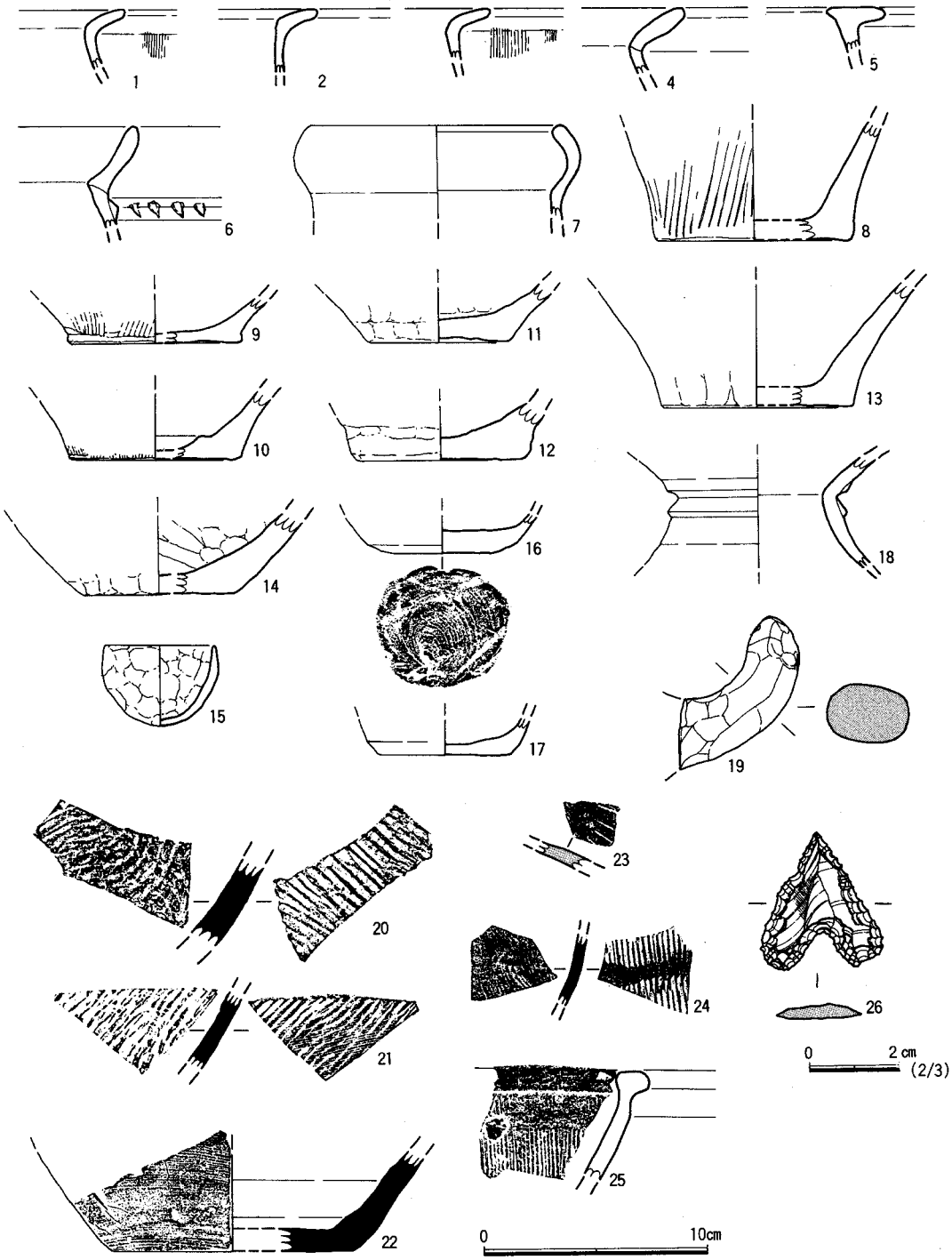


Fig. 98 出土遺物実測図（縮尺1/3・2/3）

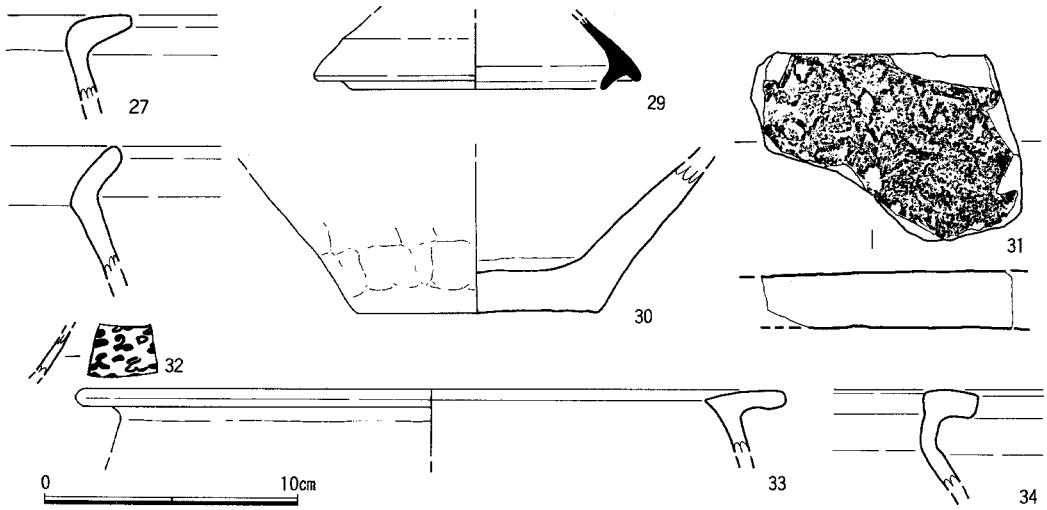


Fig. 99　出土遺物実測図（縮尺1/3）

は無文である。

陶質土器（23）　第４・５層から出土。壺の破片で、肩部の外面に放射状にヘラ描きの沈線を施す。胎土に砂粒を含み、灰青色を呈する。

陶器・摺鉢（25）　包含層から出土。玉縁状の口縁部を形成し、内面に下し目を施すが、口縁部はヨコナデ消しである。内外面は釉は黒褐色を呈している。胎土は黒灰色である。福岡産か。

甕（34）　包含層から出土。逆Ｌ字形の口縁部で、頸部と肩部の境に段をもっている。

瓦（31）　包含層から出土。平瓦で、背部に斜格子目の叩きを施す。内面はナデ調整で、側面はヘラ削り調整である。胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。

４．まとめ

当該地は有田台地の南東側縁辺に位置し、標高6.5ｍを測る。従来の調査では、遺跡の存在しないと考えられていた地域でもある。当該地の南に接している第74次調査では、標高7.1ｍの高さに台地を削平整地して、弥生時代から中世までの集落が形成されている。当時においては、有田台地の周辺が低い低湿地であったことを考え合わせると、台地縁辺の低斜面においても、集落を営むことが可能であったと考えられる。又、台地東側には金屑川に流下していることは、博多湾岸、もしくは上流域との交易を可能にしたものと考えられる。

当該地においては第74次調査よりも低地に位置しているが、台地の利用が、目的に合わせて時代・時期の変遷においてどう変化してゆくのか、興味がもたれる。

第８章　第67次調査

１．調査地区の地形と概要

調査地区は福岡市早良区小田部１丁目171・172－２に所在する。調査対象面積は802㎡である。共同住宅建設に伴い、昭和57年５月25日～６月18日の期間に実施した。

当該地は有田・小田部台地の北側に位置し、北方向に伸びる舌状台地の基部に立地する。標高は約８ｍを測る。地目は畑である。周辺では、第80・98・114次調査などが実施されており、弥生時代～古墳時代の住居跡の他、掘立柱建物や中世の火葬墓などを発見している。遺構はローム層上面で確認できるが、昭和40年代の区画整理によって、著しい削平を受けているため、調査区の南側約半分には遺構が存在しない。遺構は古墳時代の竪穴住居跡１軒、古墳時代～平安時代の掘立柱建物６棟、奈良時代の製鉄遺構２、時期不明の土壙３を検出した。遺物には古墳時代～奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

２．遺構各説

(1)　**住居跡**（Fig. 102,　PL. 43）

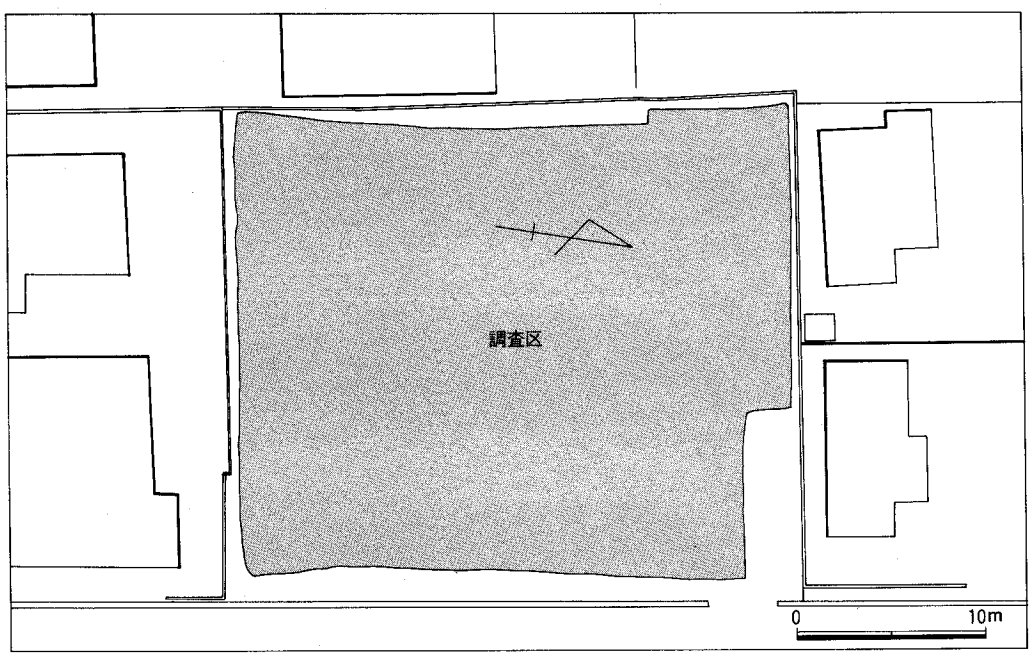


Fig. 100　第67次調査地点位置図（縮尺1/400）

SC01　古墳時代の住居跡で、平面形は方形を呈している。東側境界地にあるため規模は不明である。南北の長さは約７ｍを測る。周壁は削平を受けているが、周溝が一部遺存している。周７溝幅は16～20cm、深さ60～70cmを測る。溝底には100～130cmの間隔をすべて柱穴が設けられる。P1～P11 までの柱穴の径は22～33cm、深さ68cmを測る。屋根の垂木を支える側柱と考えられる。主柱は P12・13 で、径は40cm，44cm、深さ37cm，47cmを測る。主柱は４本と考えられる。

(2)　土壙（Fig. 103，PL. 43～45）

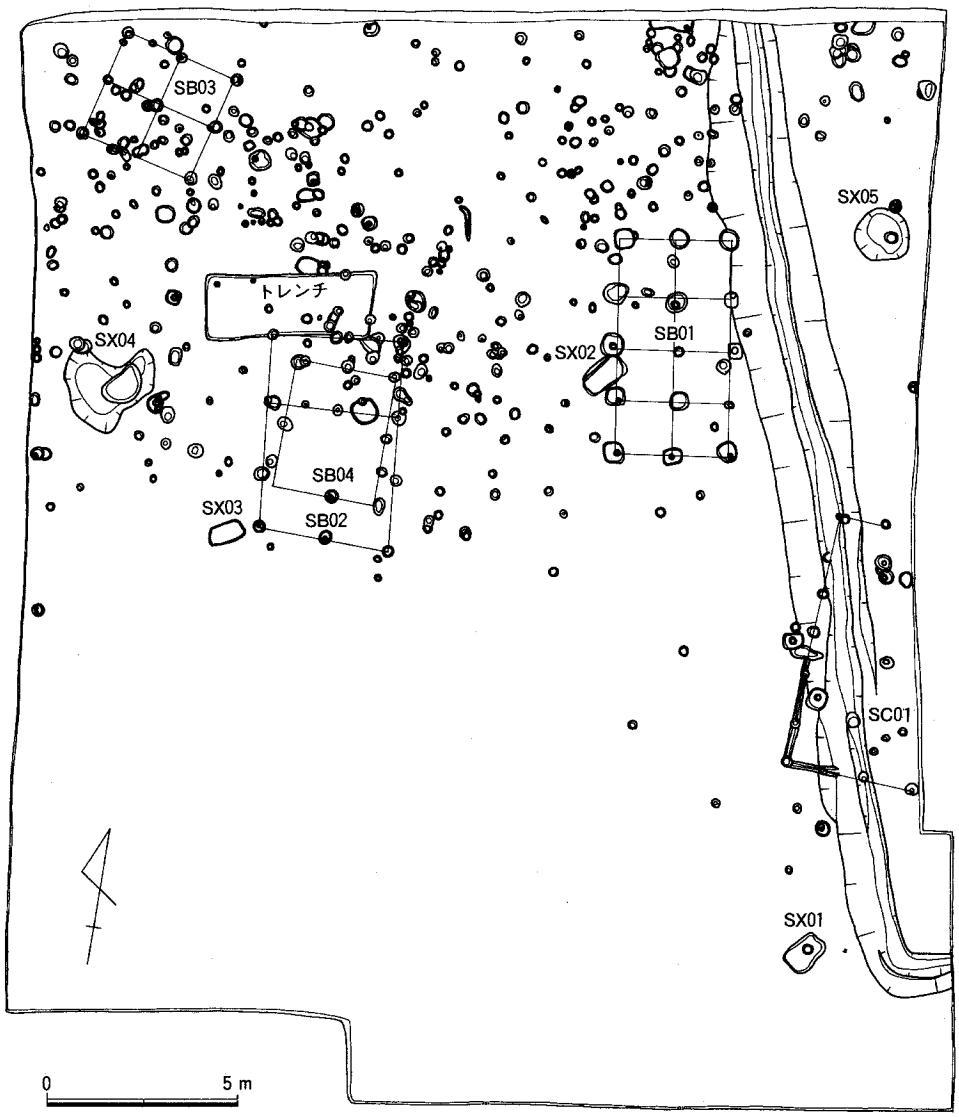


Fig. 101　第67次調査遺構配置図（縮尺1/200）

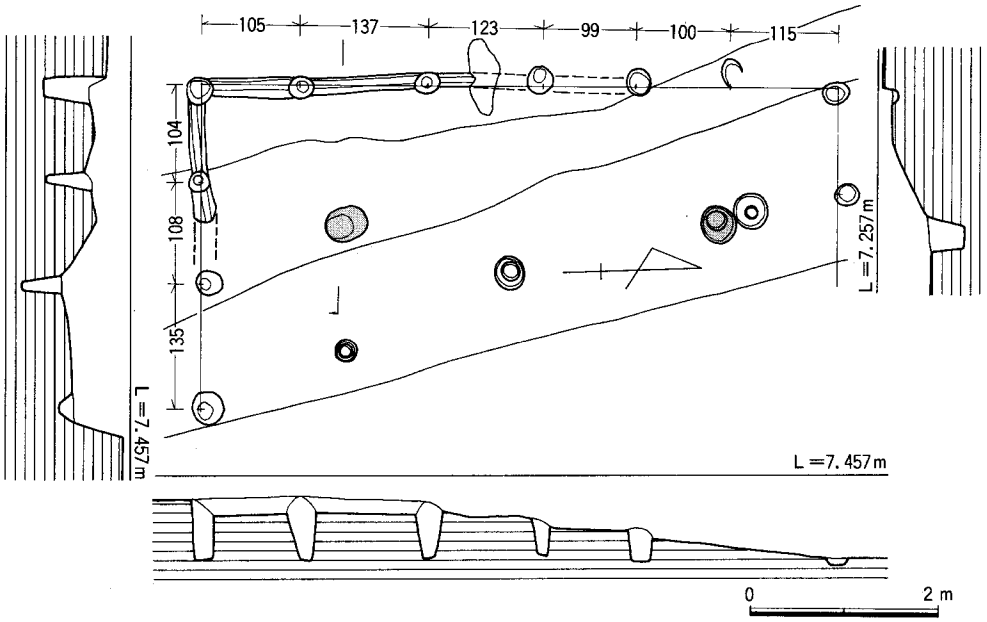


Fig. 102　住居跡 SC01 実測図（縮尺1/40）

SX01　平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形を呈する。主軸の長さは104cm、幅は72cm、深さは24cmを測る。底面の北よりに Pit が存在し、直径35cm、深さ47cmを測る。

SX02　平面形は長方形を呈するが、断面形は両小口部分の壁の上部がすぼまった台形状を呈する。土壙上面の長さは115cm、幅69cm、深さ97cmを測り、底面の長さは124cm、幅62cmを測る。遺物の出土はない。

SX03　平面形は隅丸長方形で、断面形は小口部分が袋状を呈している。底面の東側に寄って Pit が設けられている。径は24cm、深さ46cmを測る。SK01 同様の機能をもつものである。

SX04　製鉄遺構である。平面形は不整形を呈し、断面形は逆梯形である。最大の長さ244cm、幅149cm、深さ13cmを測る。土壙の覆土には鉄滓が捨てられており、その範囲の長さは43cm、幅30cmである。又、周辺からは奈良時代の須恵器、土師器片が数多く出土した。

SX05　平面形は不整円形を呈し、断面形は摺鉢状である。最大径は145cm、深さ33cmを測る。

(3)　掘立柱建物（Fig. 104・105, PL. 45～48）

SB01（Fig. 104）　梁行２間、桁行４間の総柱建物で、主軸は略北方向である。上部は削平を受けているため遺存状態は悪い。柱穴の掘り方の平面形は隅丸方形、又は不整円形を呈している。梁間は平均で1.53m、桁間は平均で1.45mである。掘り方の長軸の長さ、又は長径は27～62cm、柱痕径は42cm前後を測る。柱穴から奈良時代の須恵器坏の口縁部が出土している。

SB02（Fig. 104）　梁行２間、桁行３間の側柱建物で、主軸は略北方向である。梁間の平均は約1.75cm、桁間の平均は約1.8cmを測る。柱穴の掘り方は不整円形を呈し、径は30～46cm、柱

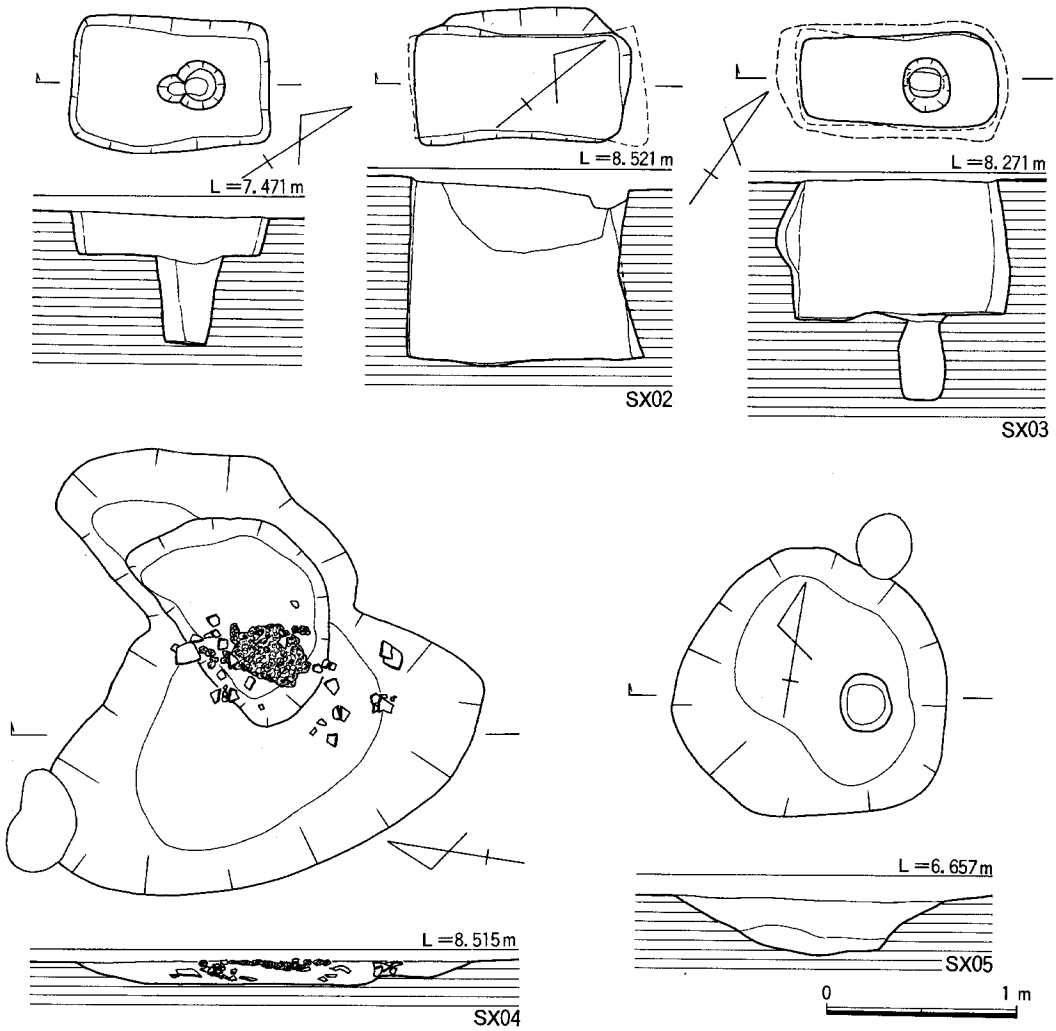


Fig. 103 SX01～05 実測図（縮尺1/40）

根痕径は20cmを測る。

SB03（Fig. 104） 梁行２間、桁行２間の総柱建物で、主軸は北西方向である。梁間の平均は約1.45m、桁間の平均は約1.59mを測る。柱穴の掘り方の平面形は不整円形を呈し、径は24～37cm、深さ20～42cmを測る。

SB04（Fig. 104） 梁行２間、桁行２間の側柱建物で、主軸方向は磁北より東へ振っている。梁間の平均は約1.33m、桁間の平均は約1.8mを測る。柱穴の掘り方の平面形は不整円形を呈し、径は28～42cm、深さ18cmを測る。

SB05（Fig. 105） 梁行２間、桁行３間の側柱建物で、主軸方向は略北にとる。梁間の平均は約

1.75m、桁間の平均は約2.1mである。著しく削平を受けているため柱穴の遺存状態は悪い。柱穴の掘り方の平面形は隅丸方形、又は隅丸長方形を呈し、長さは32～43cm、柱痕径は32cmを測る。

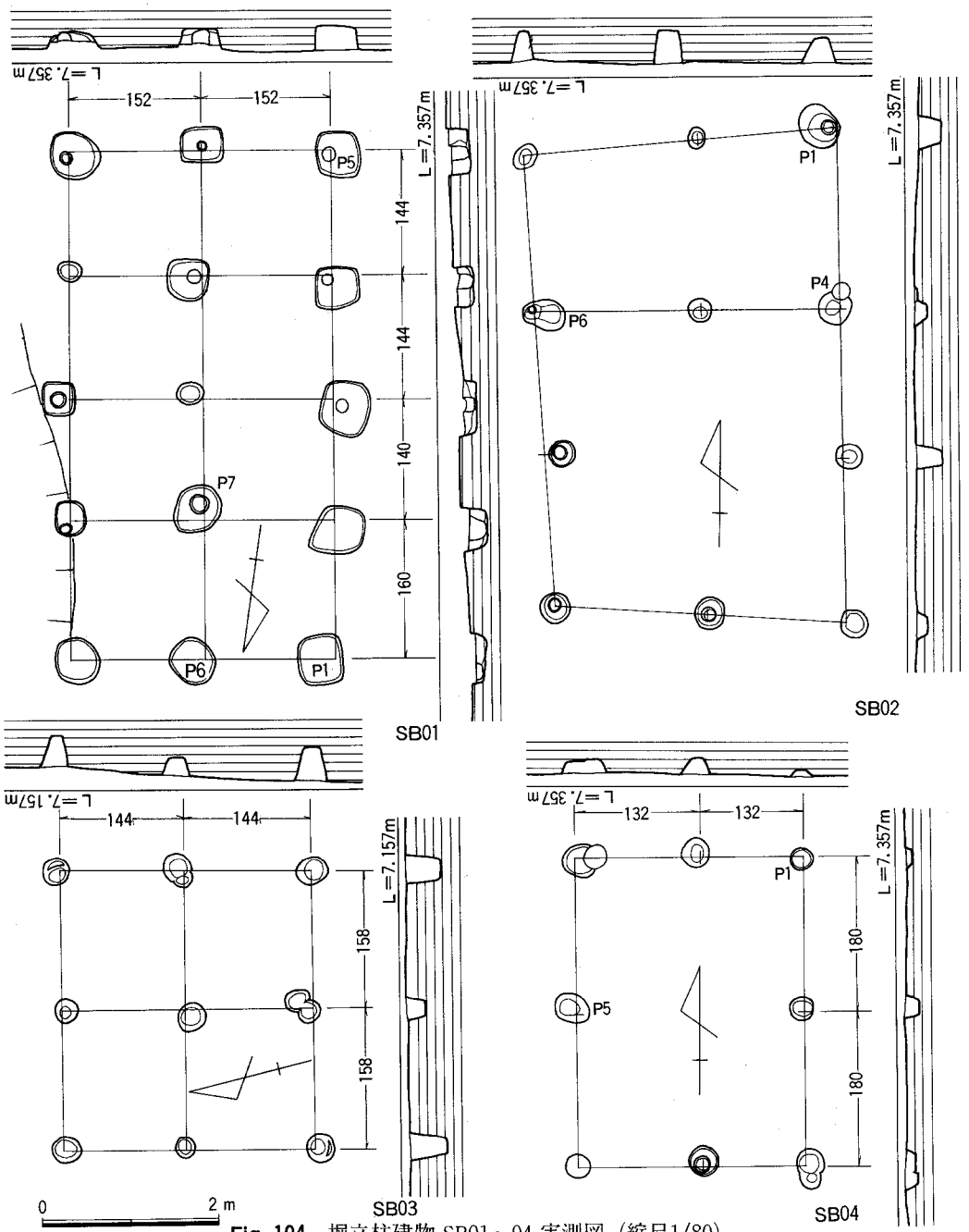


Fig. 104 掘立柱建物 SB01～04 実測図（縮尺1/80）

3．遺物各説

(1) 製鉄遺構 SX04 出土遺物 (Fig. 106, PL. 49)

土師器・甕（1・2）　復原口径は、1が31.8cm、2が26.6cmである。口縁部はくの字形を呈している。体部の内面はタテ方向のヘラケズリ調整、2の外面はタテハケ調整である。内外面は磨滅している。胎土に砂粒を含み、灰褐色を呈する。

鉢（3）　口縁部はくの字形で、体部は浅い半球体である。口縁部の内面はヨコ方向のハケ調整、外面はタテハケ調整の後に、ヨコナデ消しである。体部内面は斜め方向のヘラ削りである。胎土に砂粒を含み、暗灰黄色を呈する。

須恵器・蓋（4・5）　4は坏蓋で、復原口径は14.6cmを測る。口縁端部を内側へ小さく折り曲げて平坦面を形成する。5は皿と考えられる。復原口径は13.8cmを測り、体部と口縁部の境は強い段を有している。

坏身（6）　外底部の内側に高台を貼付ている。復原の高台径は9.8cmを測る。

壺（7）　丸底の底部の内外面はナデ調整、体部外面は細かい格子面叩きである。内面はヨコナデ調整である。

甕（8・9）　8の外面は格子目叩き、内面は平行叩きの後に青海波の叩きを残している。9はやや丸味をもった4本単位の平行叩きを内外面に施す。黒灰色及び、暗茶灰色を呈する。

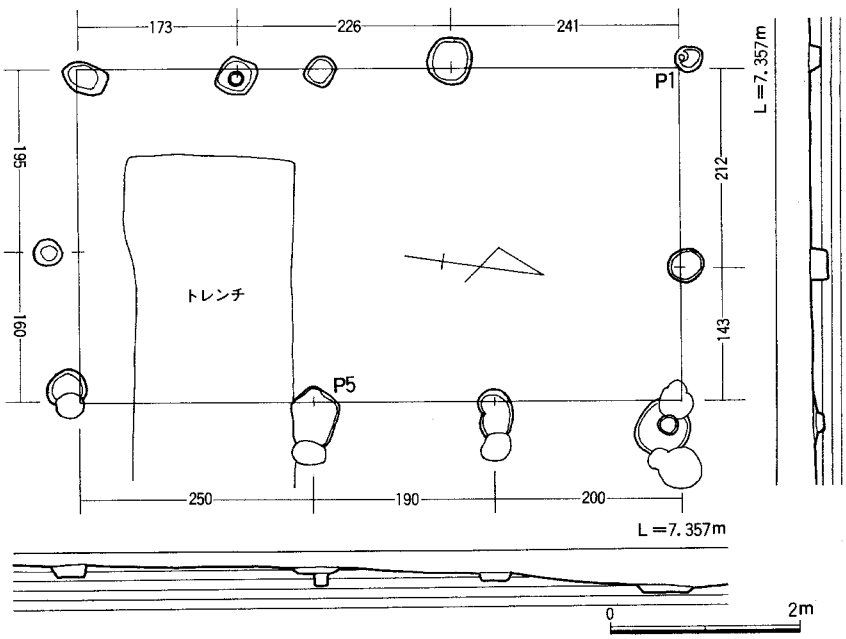


Fig. 105　掘立柱建物 SB05 実測図（縮尺1/80）

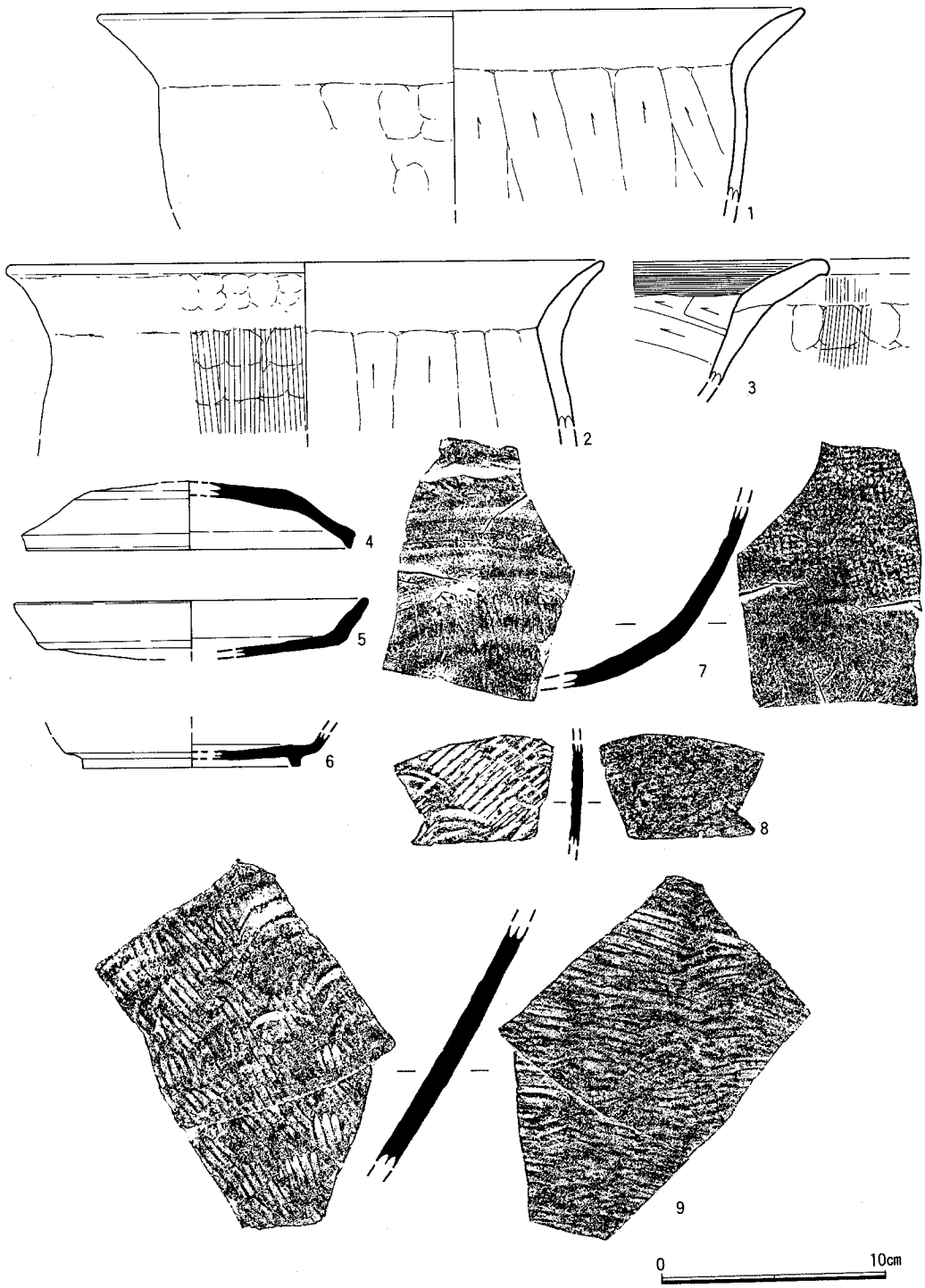


Fig. 106 出土遺物実測図（縮尺1/3）

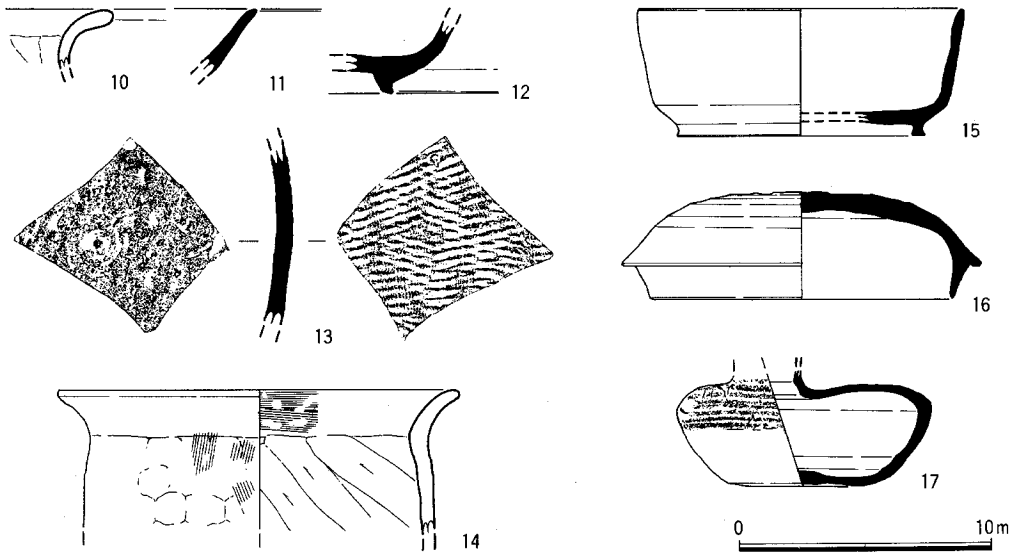


Fig. 107 出土遺物実測図（縮尺1/3）

(2) Pit 出土遺物 (Fig. 107, PL. 50)

須恵器・坏身 (11・12・15)　11はSB01－P1 出土。12は P7, 15 はP12 出土。12・15は体部と底部の境付近に高い高台を貼付ける。12の高台は外へ張っている。15の口径は13.0cm、器高51cmを測る。12・14は淡灰褐色を呈する。

坏蓋 (16)　復原口径12.2cm、器高4.3cmを測る。蓋受け部は小さく、立ち上がり部分の高さは1.3cmを測る。天井部外面のヘラケズリは時計廻りの方向である。

土師器・甕 (10・14)　10は P4, 14 は P25 出土。10の口縁部は丸味をもって外反する。14の口縁部は緩やかに外反し、内面はヨコハケ調整、胴部内面はナナメ方向のヘラ削り、外面はタテハケである。いずれも磨滅が著しい。

(3) 表土出土遺物 (Fig. 107, PL. 50)

須恵器・平瓶 (17)　口縁部は欠損している。最大胴径は10.2cm、体部の器高は4.1cmを測る。底部は平底に近い。頸部に歪みがある。肩部はヨコ方向のカキ目を施す。胎土に砂粒を含む。焼成良好。暗灰青色を呈する。

4．まとめ

当該地周辺では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡や、中世の墓地などが検出されている。今回の調査は舌状台地の中央に位置することから、弥生時代～古墳時代の集落が検出できることを期待したが、削平が著しく、南側半分の地域には遺構が存在しないという結果となった。

遺構の時期は、出土した遺物より6世紀前半から11世紀代の幅をもち、主要な遺構は8世紀代を中心としている。古墳時代の住居跡SC01は、周壁が全て削平されていたにもかかわらず、屋根構造を知る手懸かりを得た。住居跡は遺存した周溝の長さから、一辺が約7mを測る規模で、大略方形プランと考えられる。周壁の内側には周溝が全周するものと考えられるが、この周溝内には、直径が20～30cmを測る柱穴が当間隔に配置され、その深さは60～70cmを測る。柱穴の位置、深さから考えれば、屋根の垂木を受ける軒桁を支える側柱と考えられる。このような例は珍しく、西区所在の野方遺跡において弥生時代後期の住居跡の周壁外周に側柱をもつ例がみられただけである。こうした構造は規模を大きくし、且つ、空間を広くとることを可能にしたものと考えられる。残念ながら遺物が出土していないため、時代・時期の判断が難しいところだが、一応、古墳時代以降と考えておきたい。

掘立柱建物は5棟検出した。SB01は2間×4間、SB02・05は2間×3間の規模をもち、SB01は総柱建物、SB05も一部の柱穴が不足しているが総柱建物と考えられる。この3棟の建物は主軸方向に大略北にとった建物であるが、CB02・05は切り合い関係にある。SB01・05は建物規模や柱穴の大きさも相似しており、これらの建物が同時に存在した可能性は大きい。

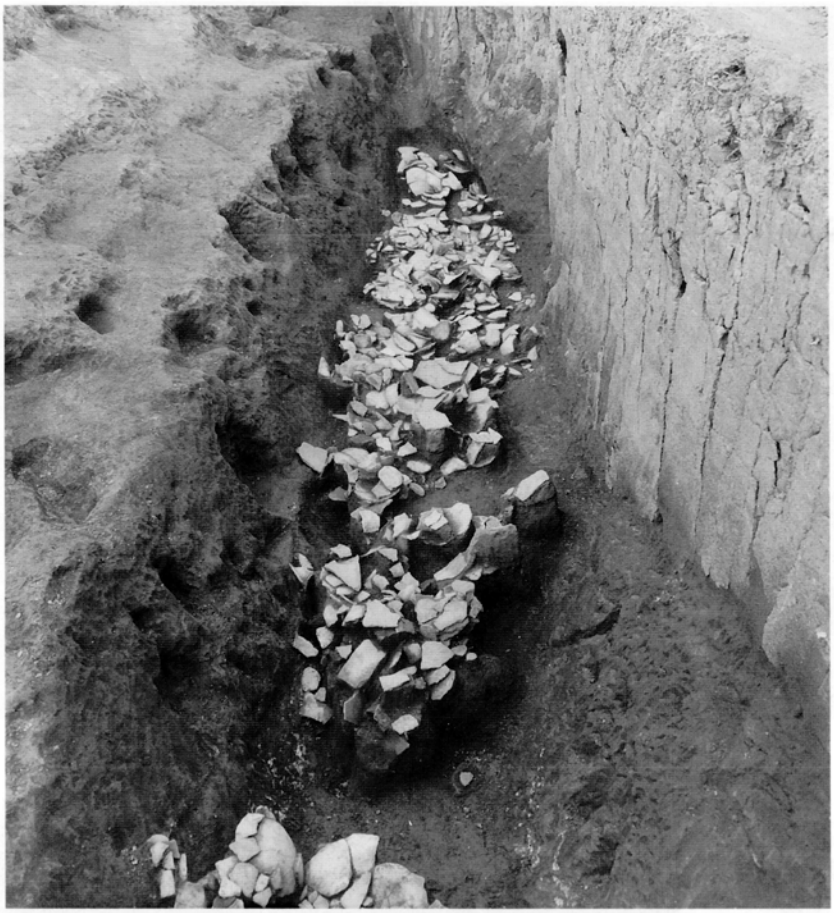
柱穴からの出土遺物が少ないため建築時期の判断の問題が残るが、SB02－P6の柱穴からは土師器皿が出土しており、11世紀以降の時期が考えられる。SB01－P1・7の柱穴からは須恵器坏片が出土しており、器形から奈良～平安時代に相当する。これは、土壙SX04の時期に相当するものと考えられる。SB04－P5の柱穴からは、奈良～平安時代の甕片が出土している。SB05－P5の柱穴からは鉄滓が出土している。以上のことから、これらの建物のうちSB04・05は、土壙SX04と同時期の7世紀後半～8世紀前半代を与えることができる。土壙SX04が鉄滓の投棄土壙であることから、上記の建物が製鉄に関係した倉庫的な建物と考えられる。

図　版

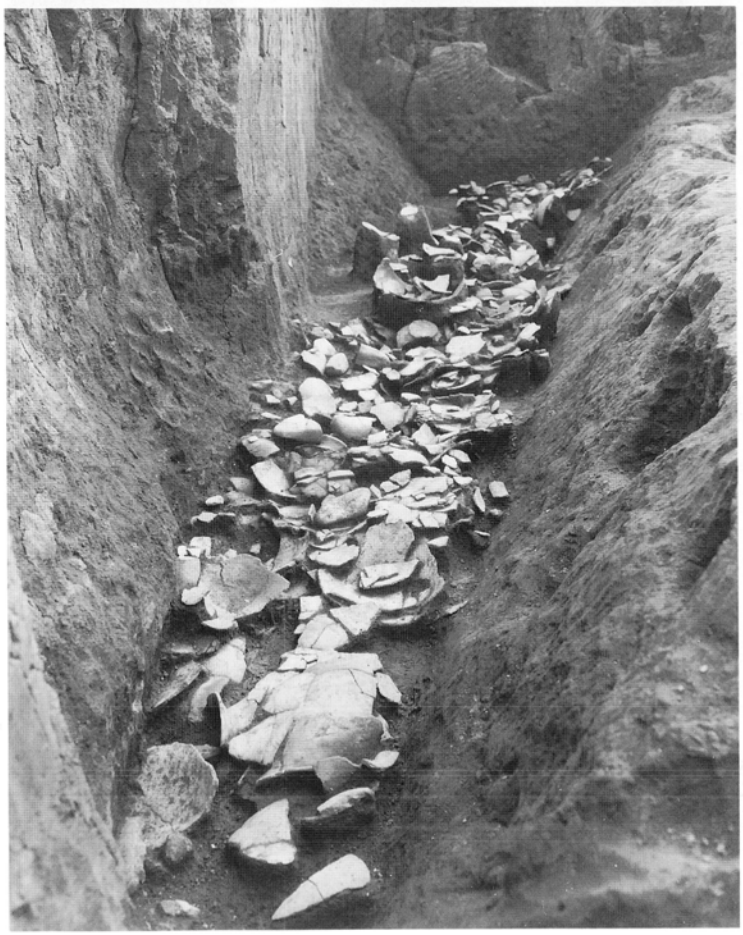
PLATES

(1)　有田６次調査区全景（東から）

(2)　有田６次調査区西半部（東から）



有田6次調査区　SD－04 全景（上）南から　（下）北から



有田６次調査区

SD－04 遺物出土状況

（上）西から

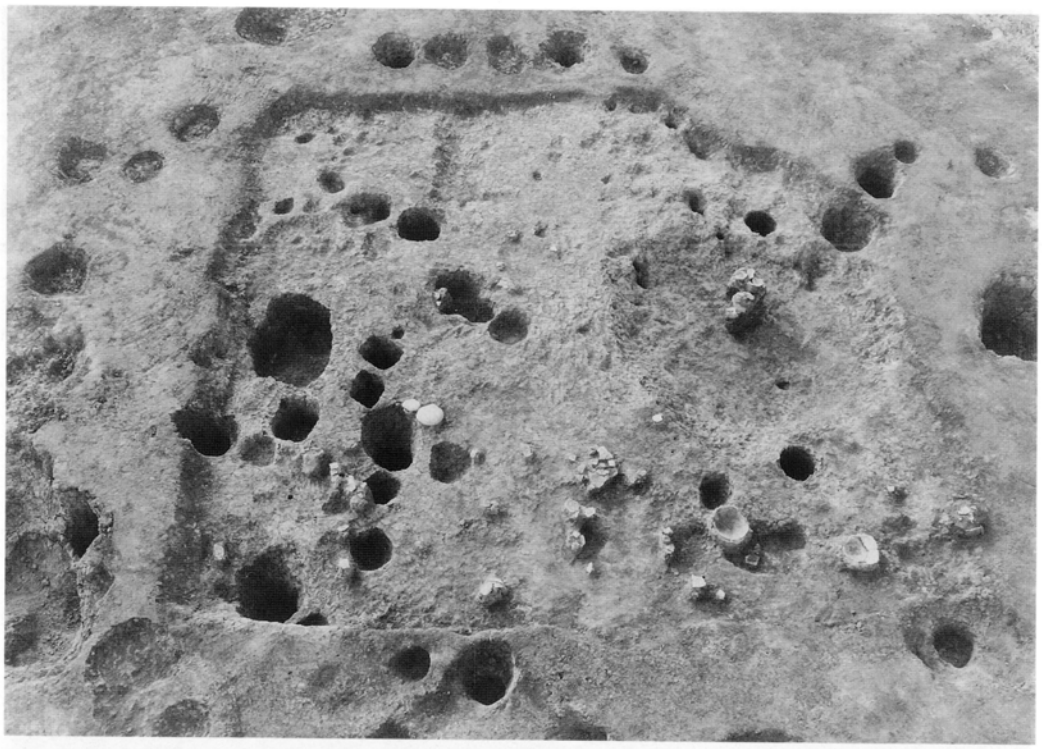
（下）北から

有田6次調査区　SD－04 遺物出土状況近景

(上) 南端部　(下) 北端部

(1)　有田６次調査区　SD－03・SC－02 発掘状況

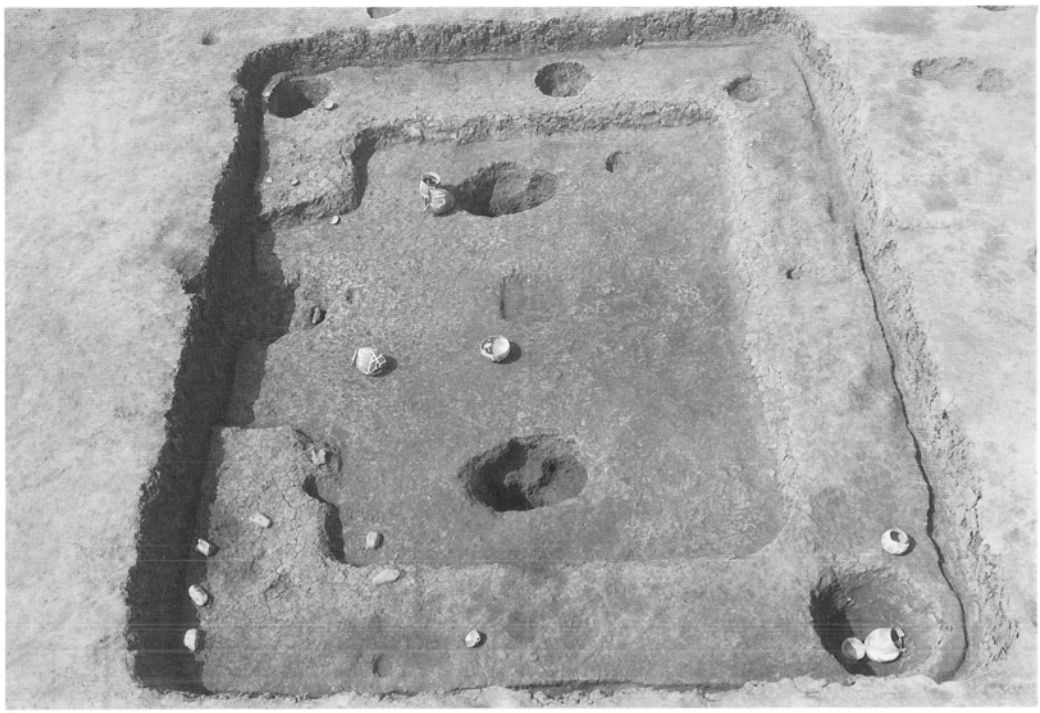
(2)　有田６次調査区　SD－03 断面



(1) 有田 6 次調査区　SC－01 遺物出土状況（南から）

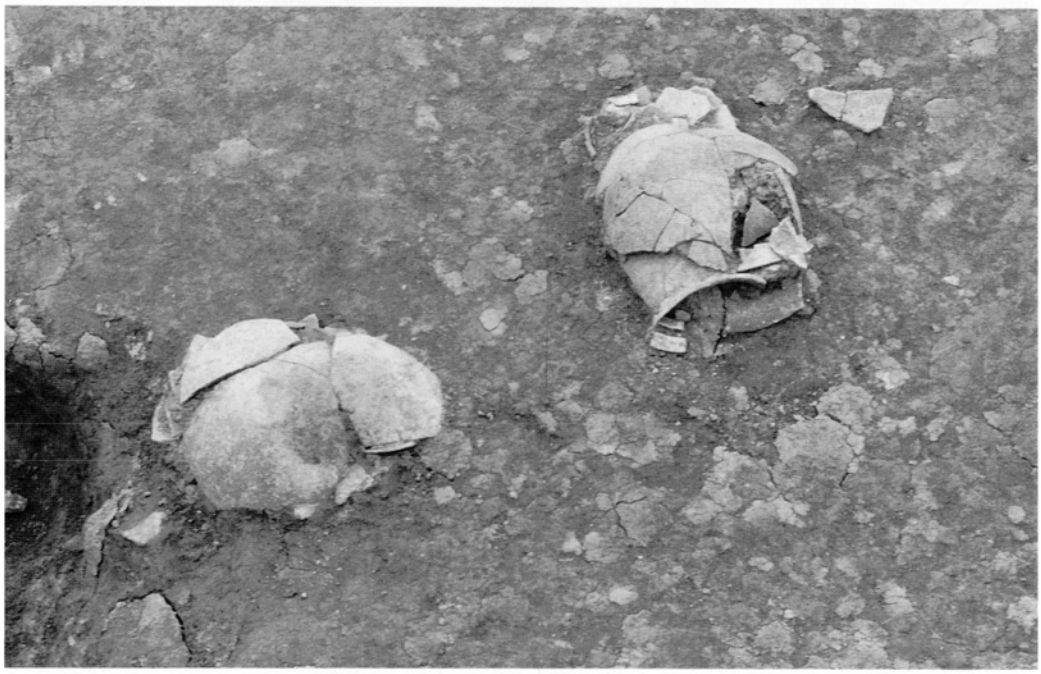
(2) 有田 6 次調査区　SC－01 完掘状況（北から）

(1)　有田 6 次調査区　SC－02 遺物出土状況（東から）



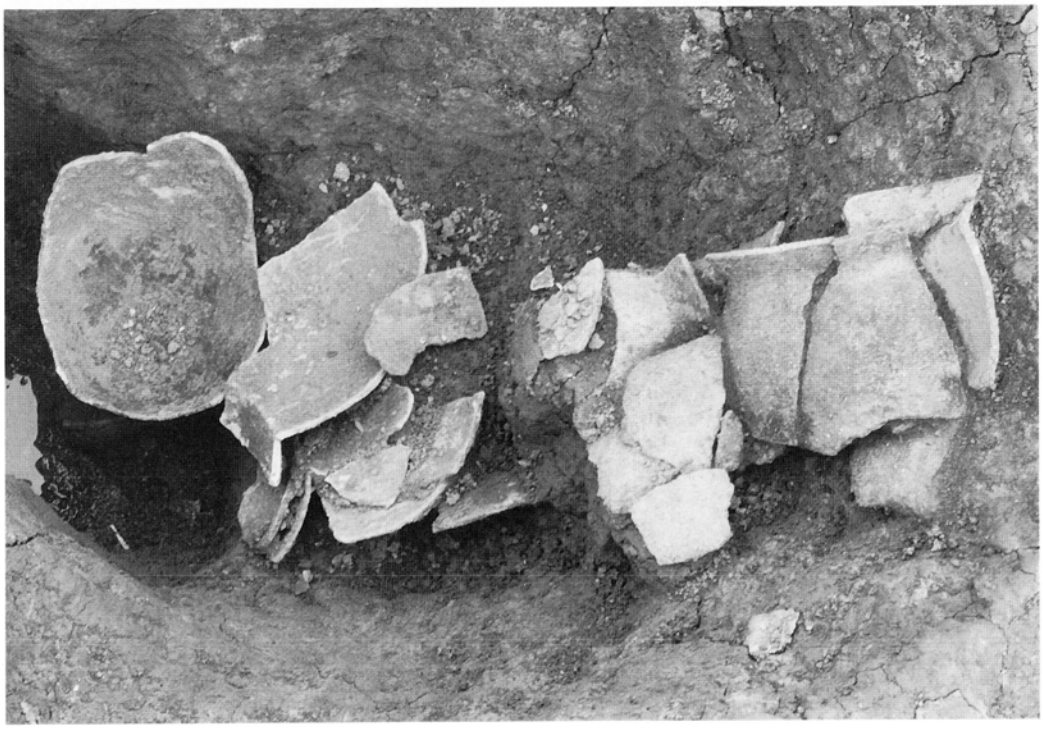
(2)　有田 6 次調査区　SC－02 遺物出土状況（復原）東から

(1)　有田 6 次調査区　SC－02 床面遺物出土状況近景



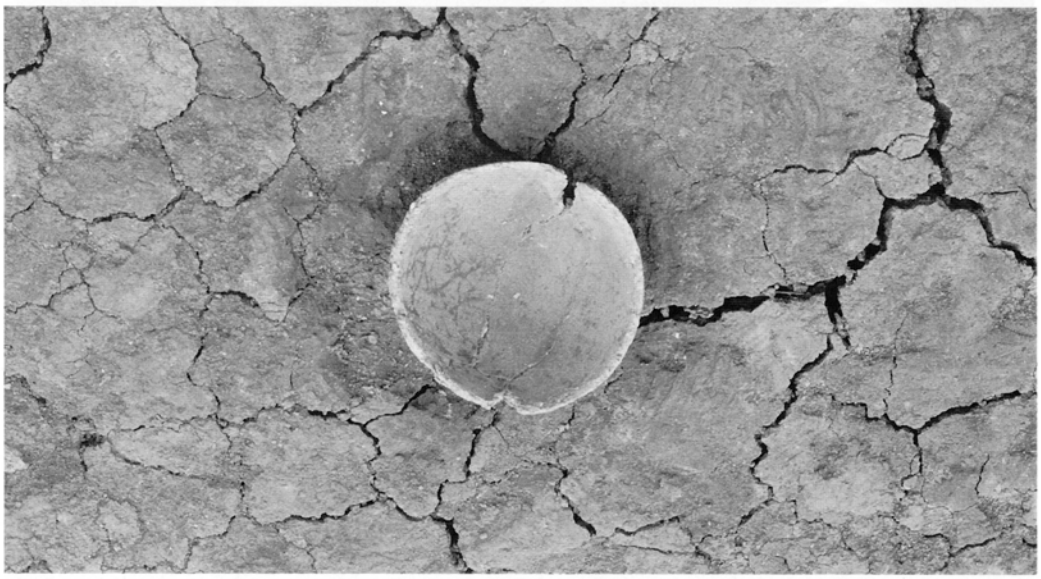
(2)　有田 6 次調査区　SC－02 床面遺物出土状況近景

(1)　有田 6 次調査区　SC－02 床面遺物出土状況



(2)　有田 6 次調査区　SC－02 西主柱穴遺物出土状況

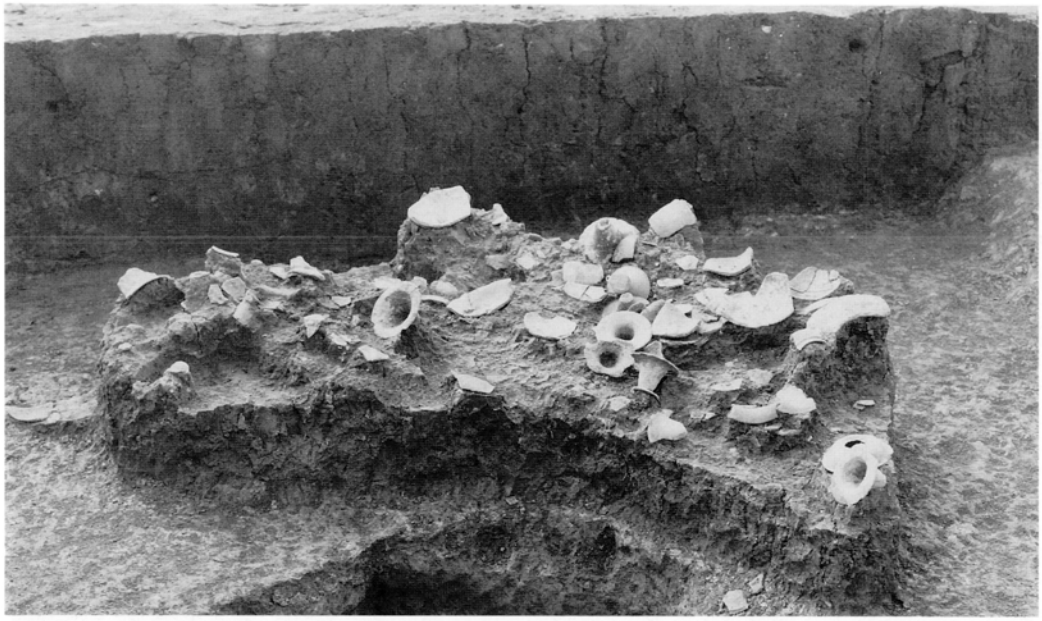
(1)　有田６次調査区　SC－02 北東コーナー貯蔵穴遺物出土状況



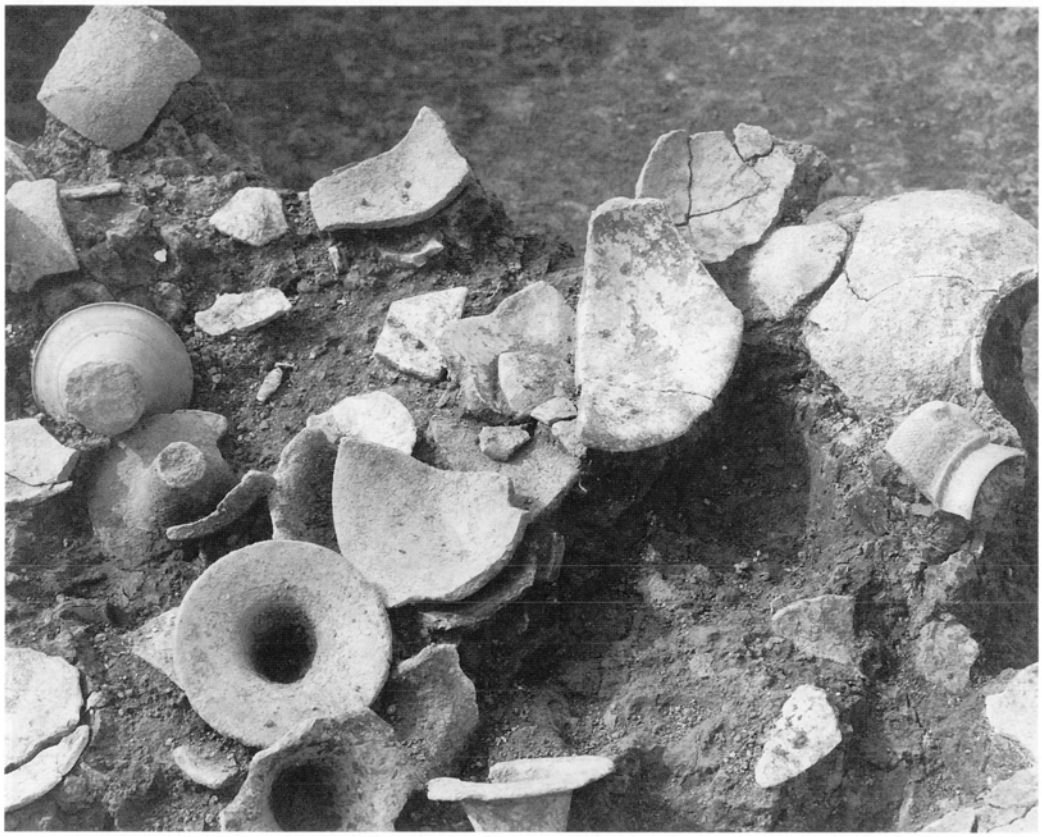
(2)　有田６次調査区　SC－02 ベッド床面遺物出土状況

(1)　有田６次調査区　SC－02 床面遺物出土状況（北東から）

(2)　有田６次調査区　SC－02 完掘状況（東から）

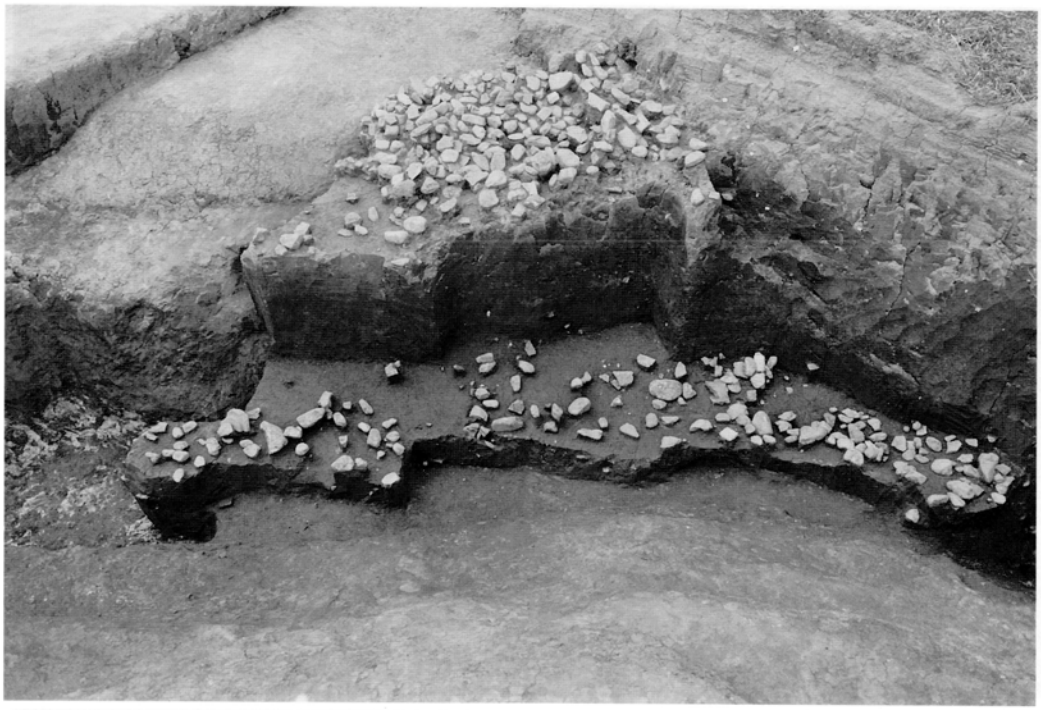


(1)　有田６次調査区　SC－02 上層祭祀遺物出土状況



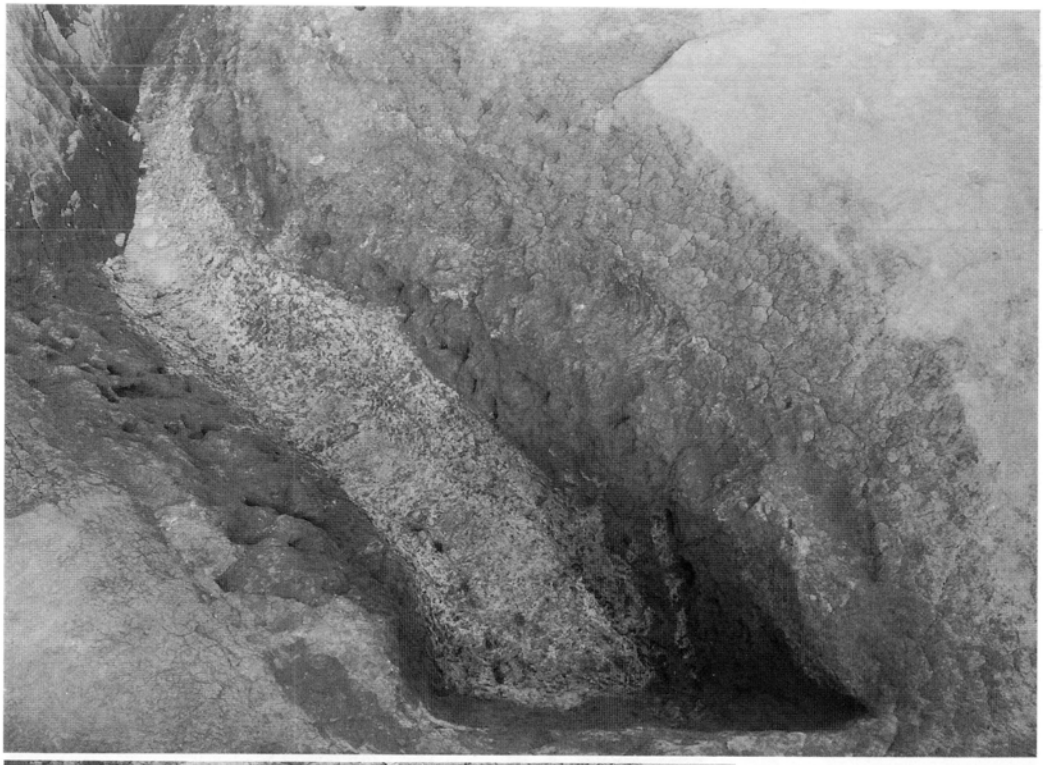
(2)　有田６次調査区　SC－02 上層祭祀遺物出土状況近景

有田６次調査区　SC－02 上層祭祀遺物出土状況



(1) 有田６次調査区　SD－01 全景

(2) 有田６次調査区　SD－01 集石



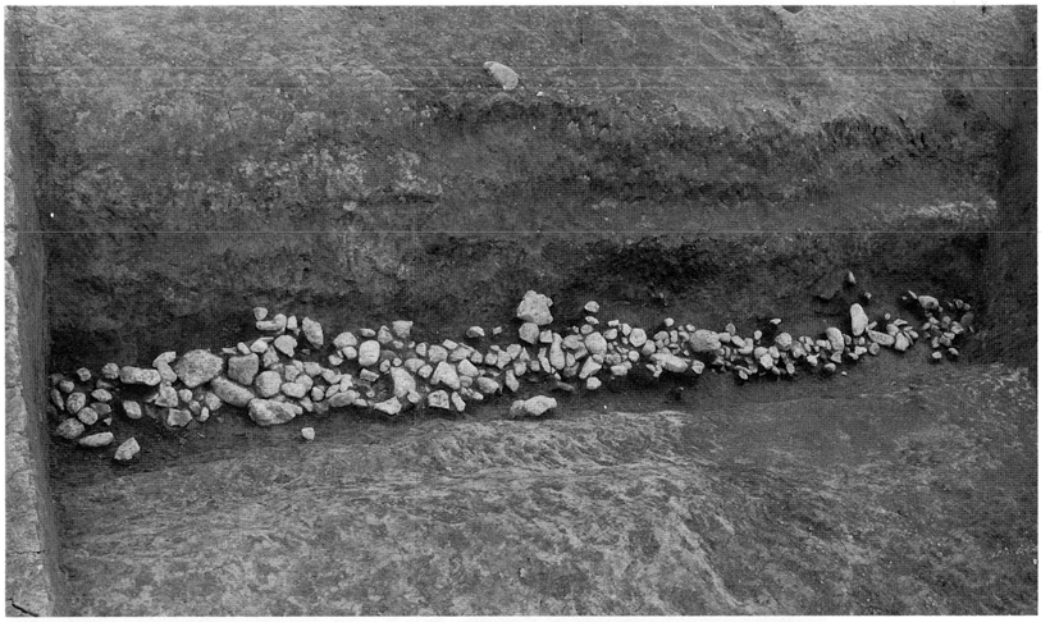
有田 6 次調査区

(上) SD－01 完掘状況

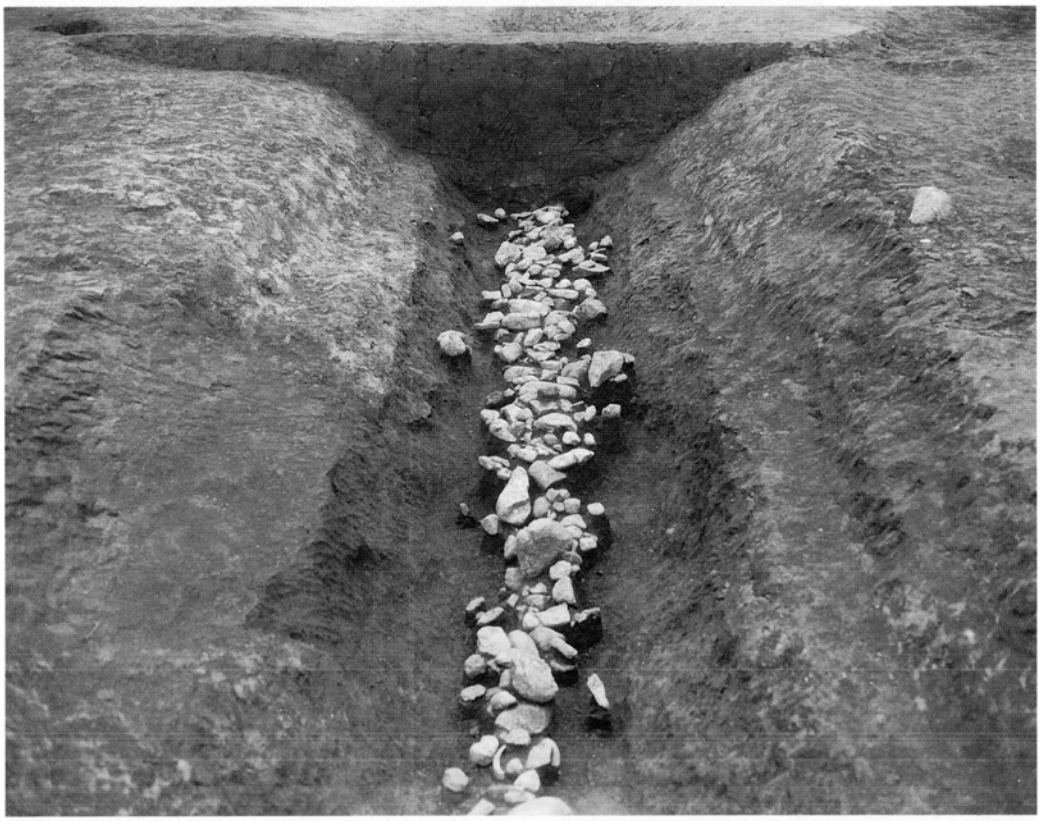
(下) SD－05

(1)　有田６次調査区　SD－01 集石と断面

(2)　有田６次調査区　SD－01 遺物出土状況



(1)　有田６次調査区　SD－02（西から）



(2)　有田６次調査区　SD－02（南から）

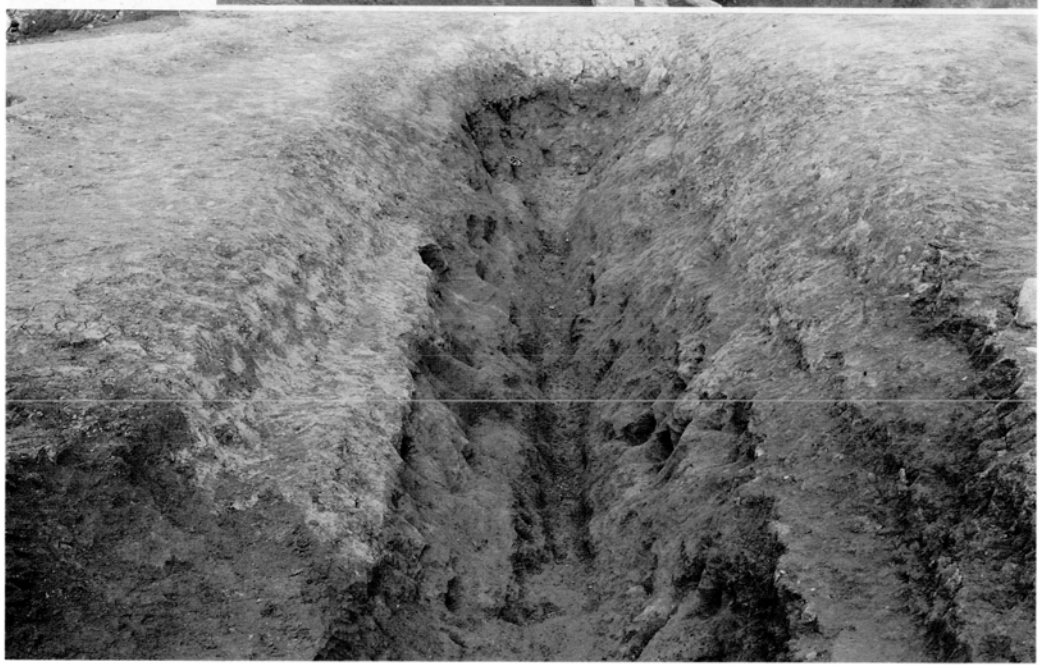
有田6次調査区

(上) SD－02

集石状況

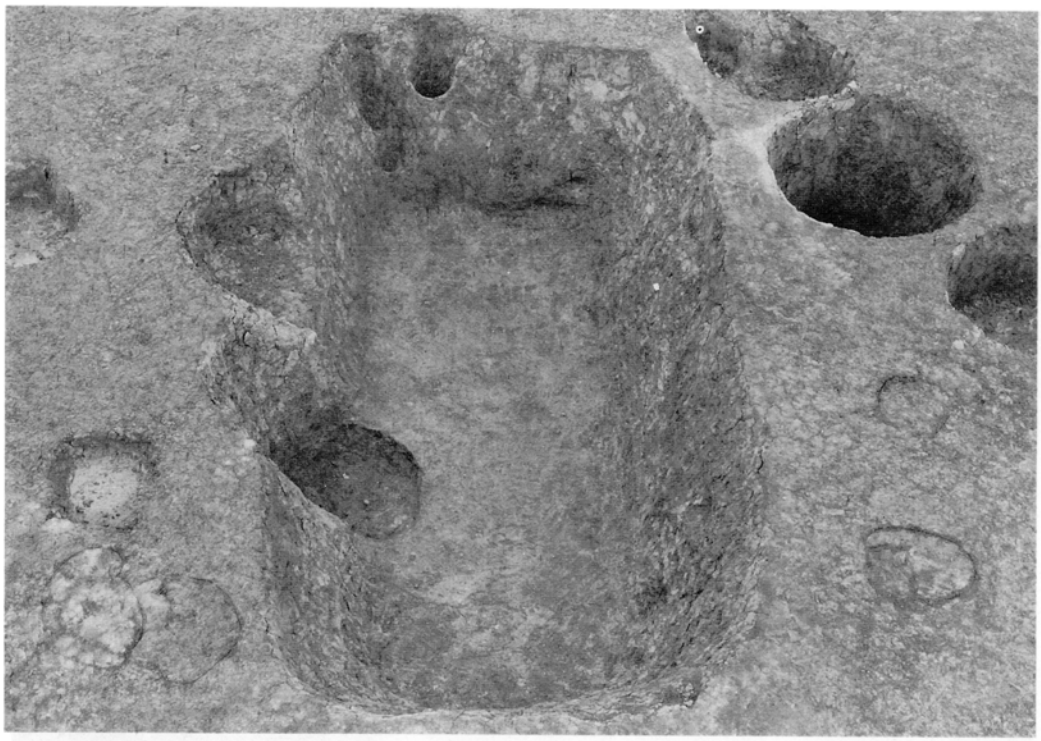
(下) SD－02

完掘状況

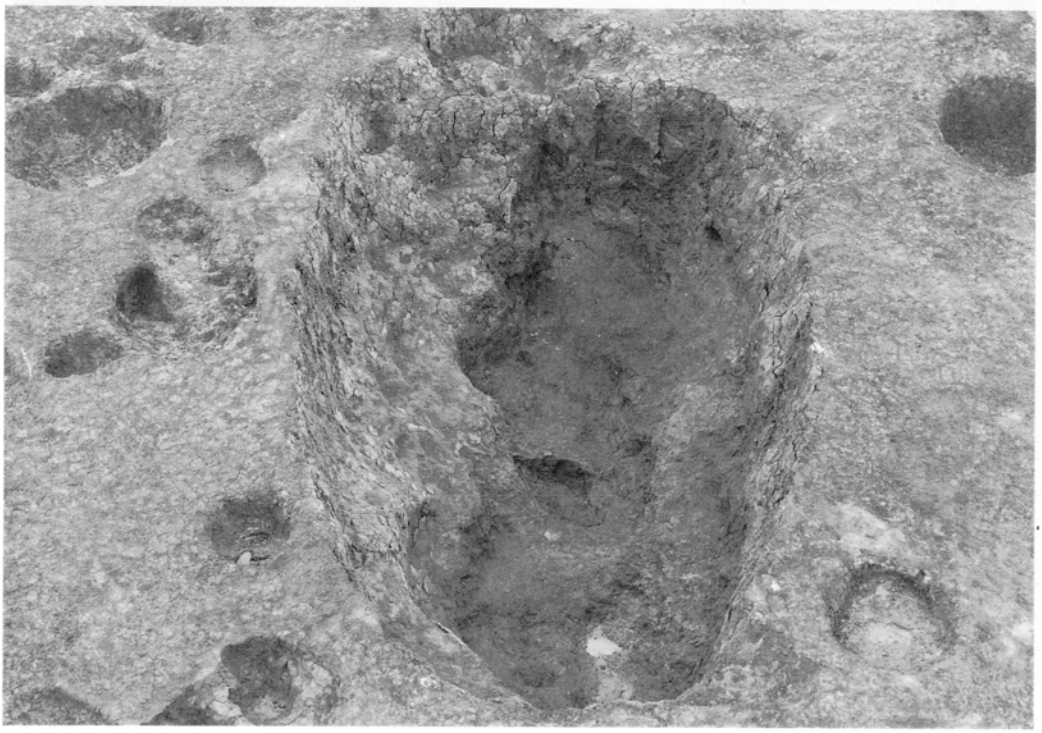


(1)　有田 6 次調査区　SD－02 陸橋部

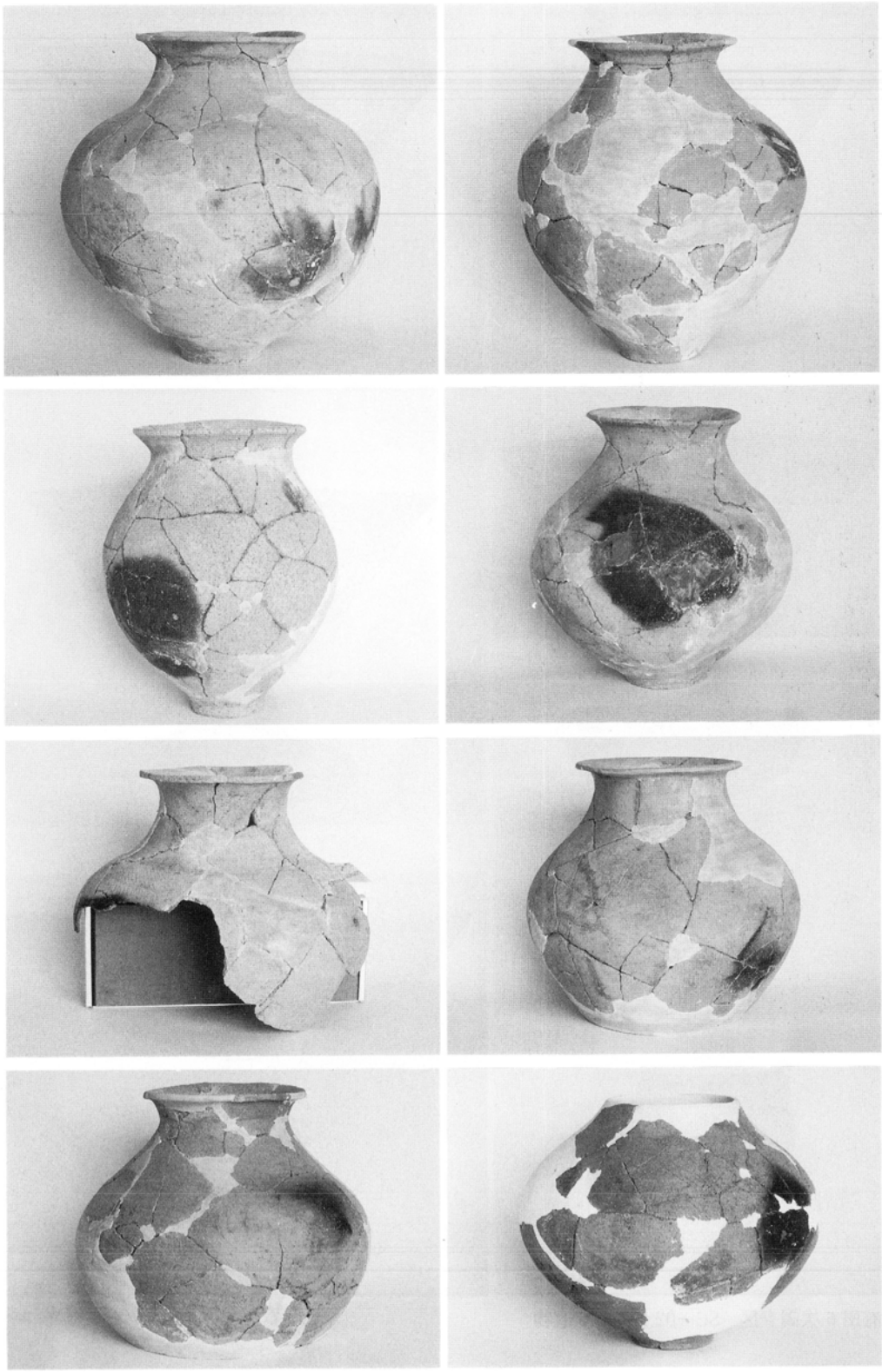
(2)　有田 6 次調査区　SD－02 断面



(1)　有田６次調査区　SK－04



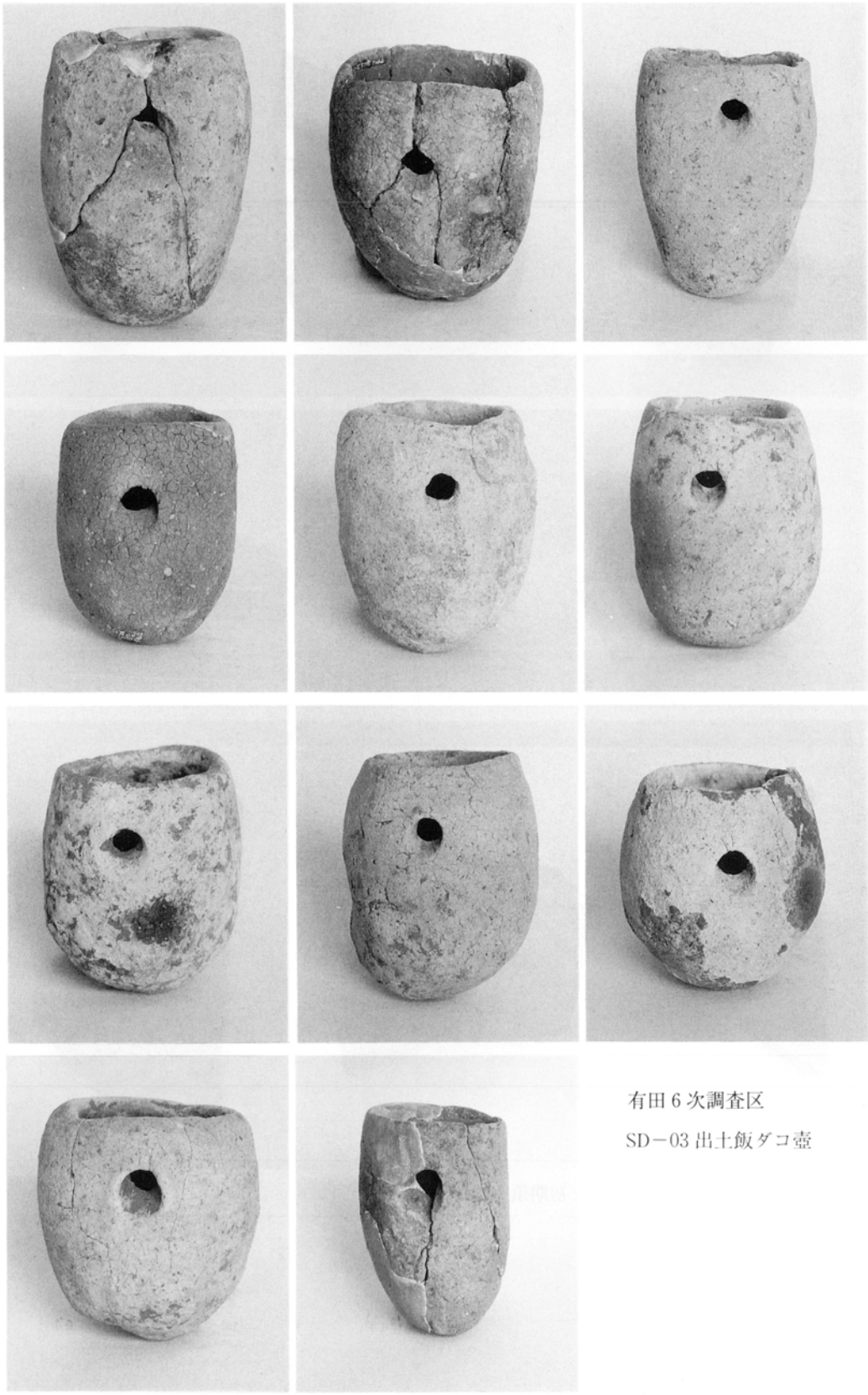
(2)　有田６次調査区　SK－05



有田 6 次調査区　SD－04 出土遺物

有田６次調査区　SC－02土層出土遺物

有田６次調査区出土・陶質土器と初期須恵器



有田６次調査区

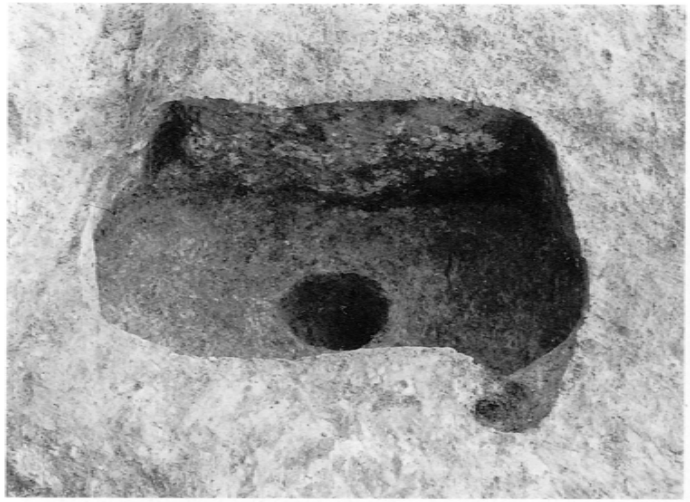
SD－03 出土飯ダコ壺

(1)　第50次調査全景（南東から）

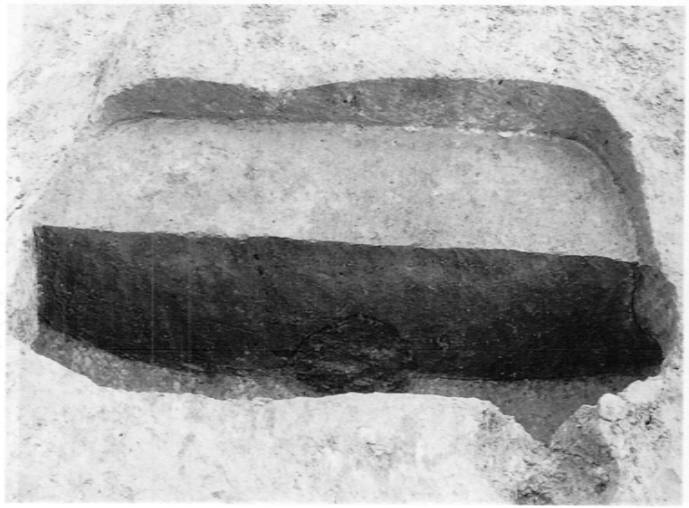
(2)　第50次調査全景（北から）

(1) 井戸 SE01（西から）

(2) 井戸 SE01 完掘状態

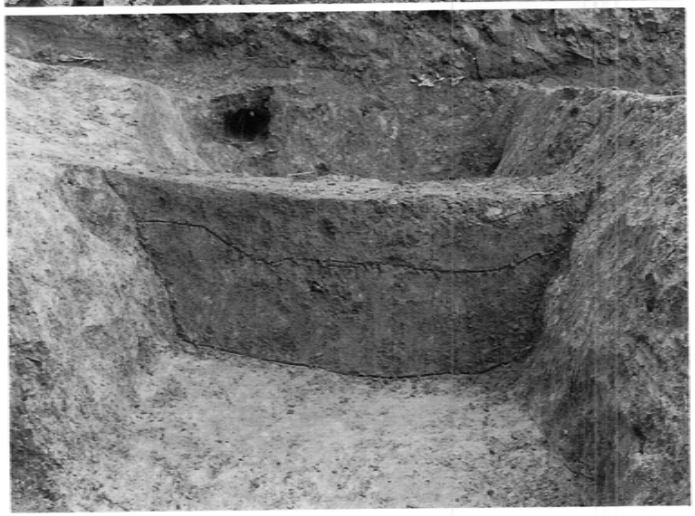


(3) 土壙 SK01 完掘状態（北東から）



(4) 土壙 SK01 土層（北東から）

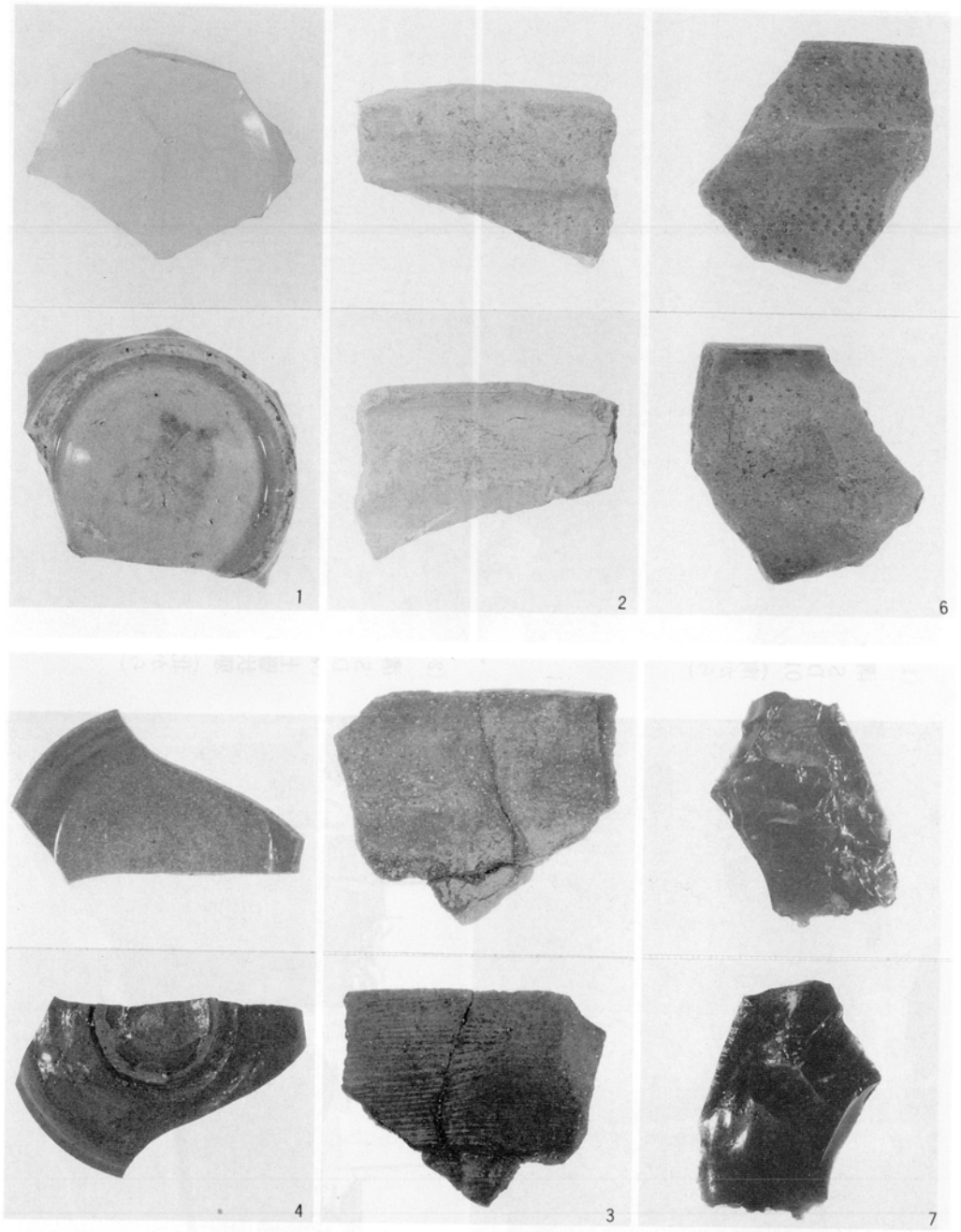
(1) 溝 SD01（南から）



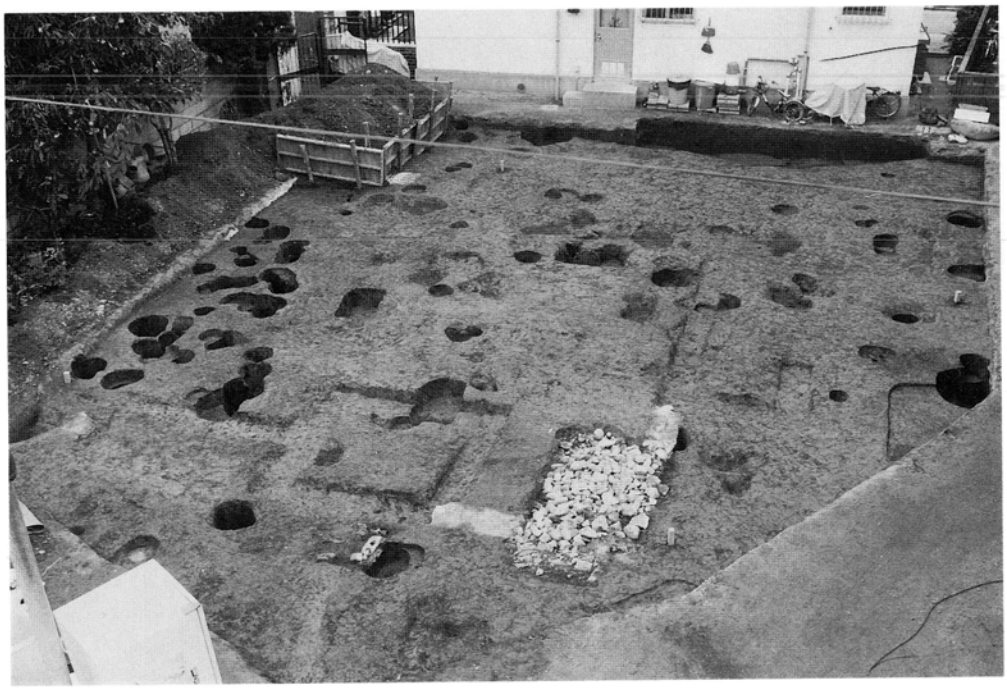
(2) 溝 SD01 土層状態（北から）

(3) 溝 SD02（北から）

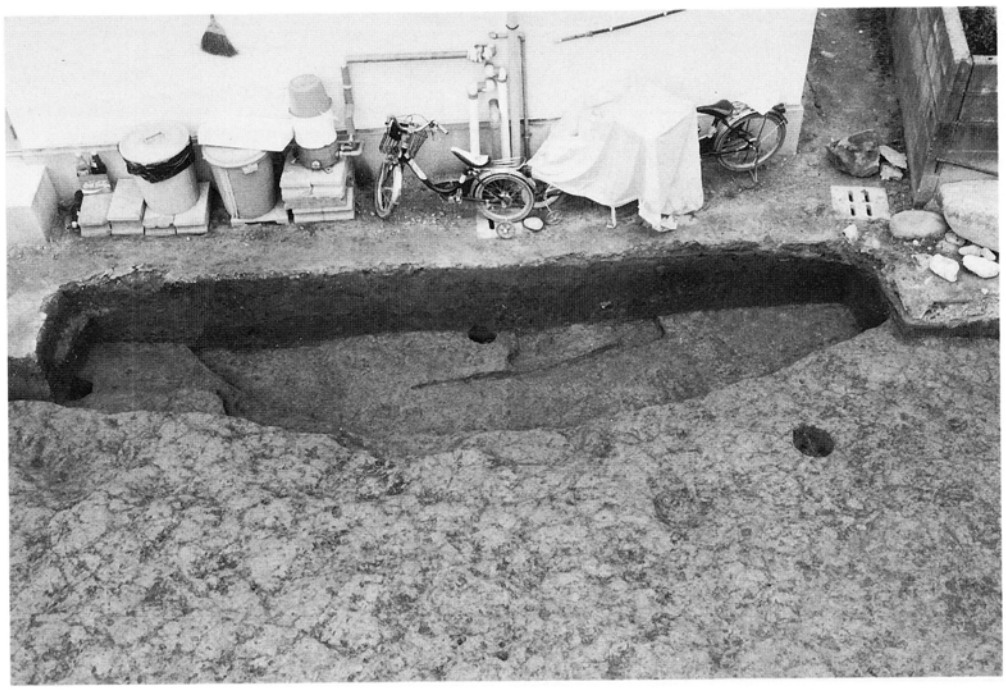
(4) 調査地区全景（北から）



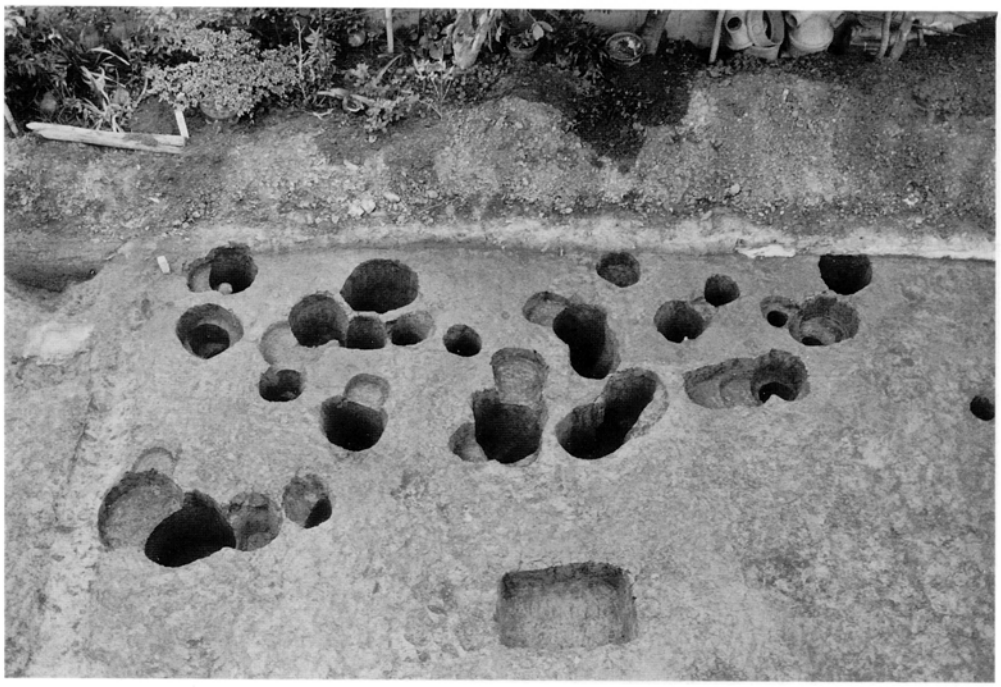
第50次調査出土遺物　　数字は実測図番号に一致する



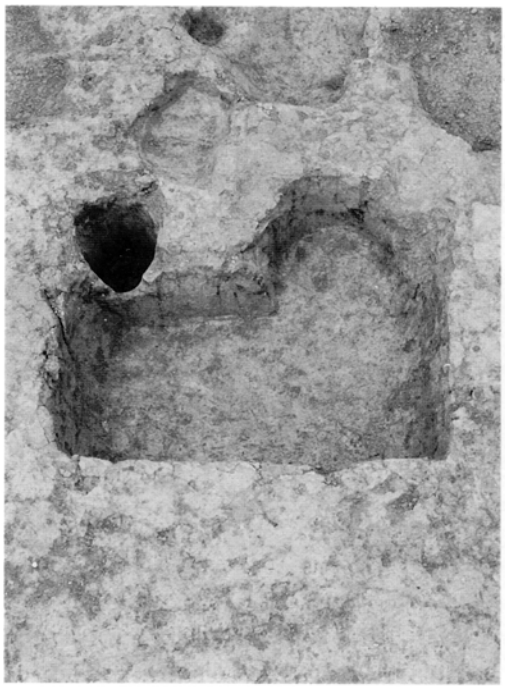
(1) 第58次調査全景（西から）



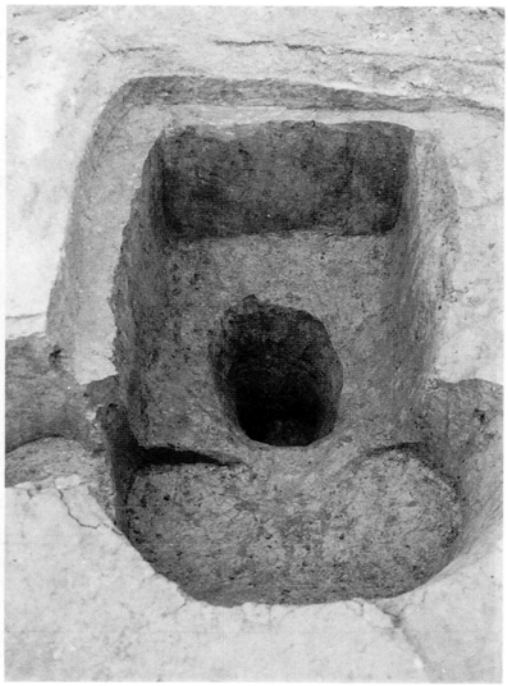
(2) 住居跡 SC01（北西から）



(1) 住居跡 SC02（南西から）



(2) 土壙 SK02（北西から）

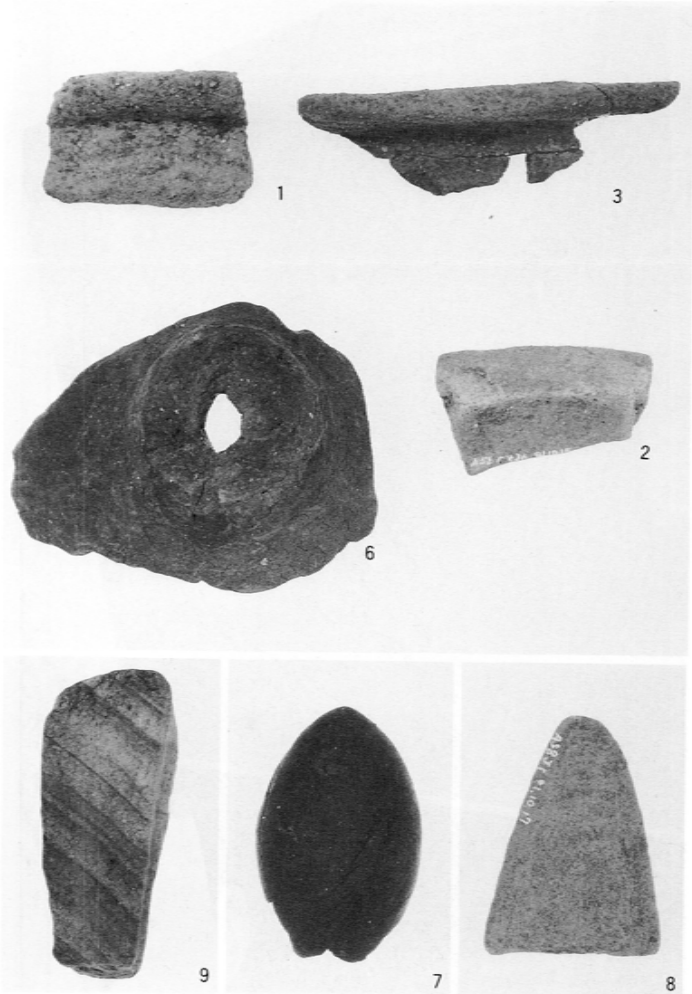


(3) 土壙 SK03 完掘状態（北西から）

(1) 作業風景

(2) 調査前全景（西から）

(3) 第58次調査出土遺物　数字は実測図番号に一致する



(1)第61次調査Ⅰ区全景（北から）

(2)第61次調査Ⅱ区全景（北東から）

(1) 溝 SD01（東から）

(2) 溝 SD01 完掘状態（東から）

(3) 溝 SD01 I区北壁土層状態（南から）

(4) 溝 SD01 東壁土層状態（西から）

(1) 溝 SD01（北から）

(2) 溝 SD01 完掘状態（北から）

(3) I区 溝 SD01 南壁土層状態（北から）

(4) 作業風景

(1) 溝ＳＤ01内礫群出土状態（北西から）

(2) 溝ＳＤ01内風炉出土状態

(3) 土壙ＳＫ01（東から）

(4) 土壙ＳＫ01内礫出土状態（西から）

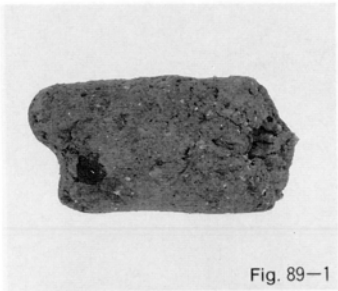


Fig. 89—1

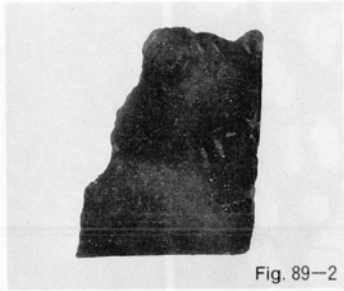


Fig. 89—2

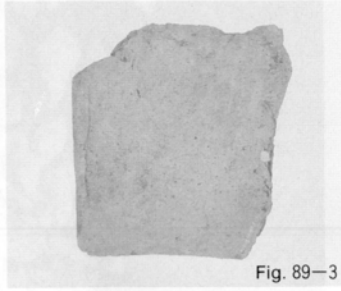


Fig. 89—3

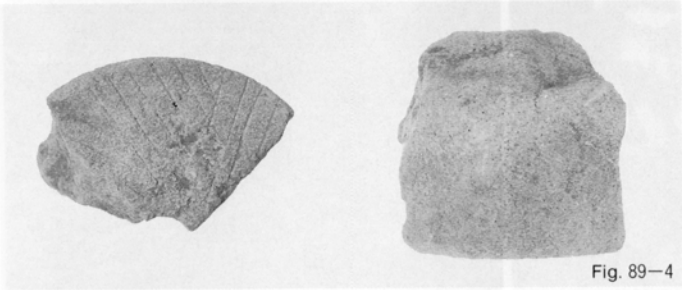


Fig. 89—4

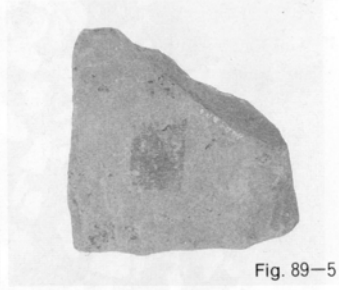


Fig. 89—5

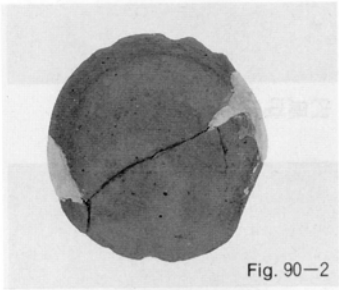
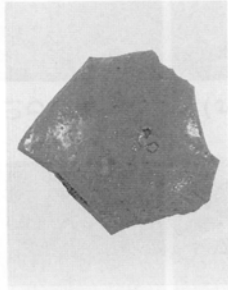
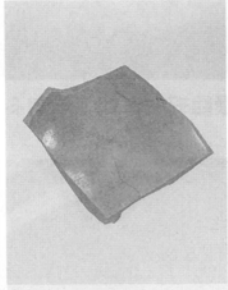
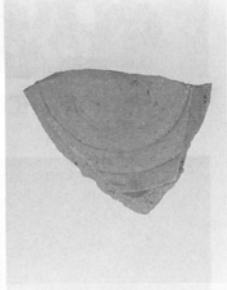


Fig. 90—2







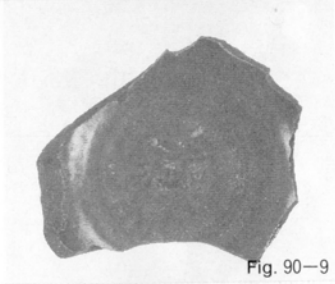


Fig. 90—9

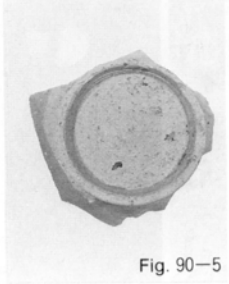


Fig. 90—5

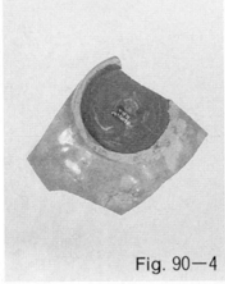


Fig. 90—4

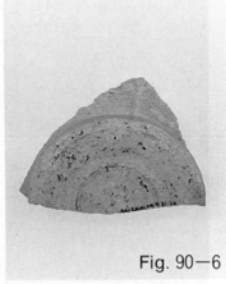


Fig. 90—6

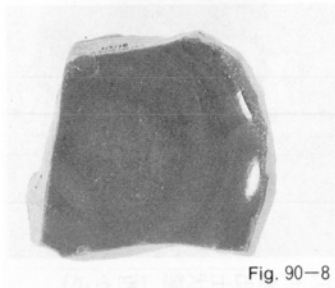


Fig. 90—8

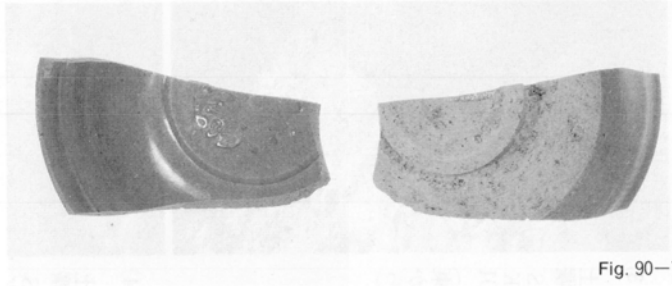
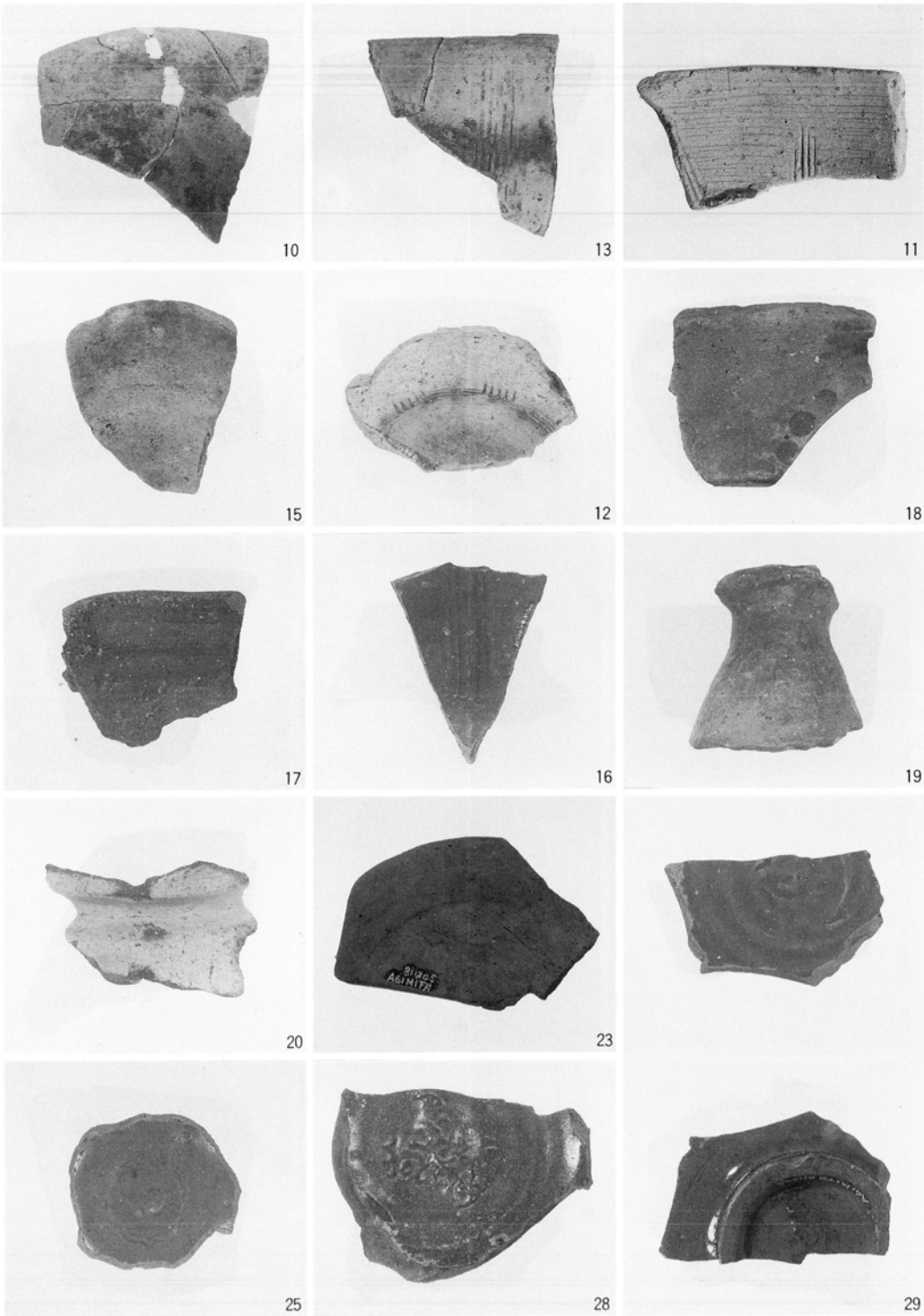


Fig. 90—7

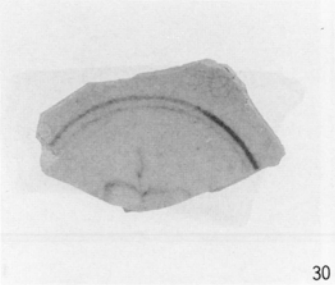
第61次調査出土遺物 ①

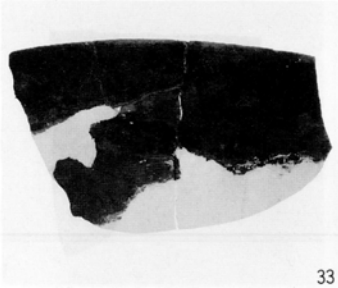
数字は実測図番号に一致する



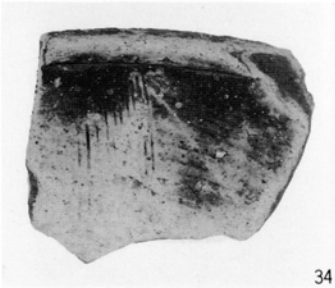
第61次調査出土遺物 ②

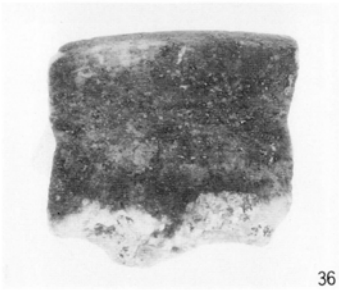
数字は実測図番号に一致する

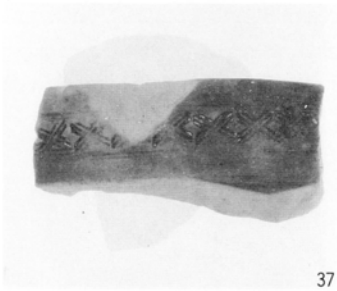

30

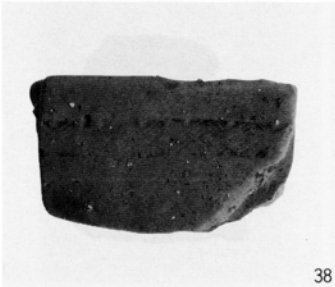

33

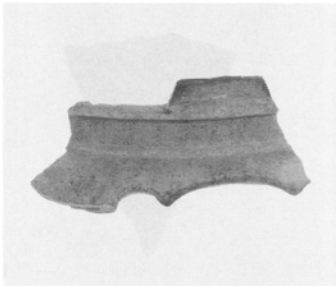
35


34

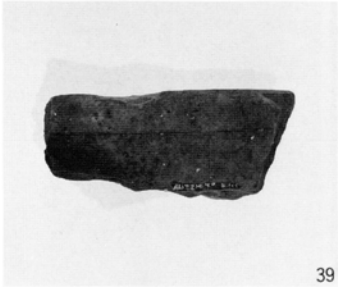

36

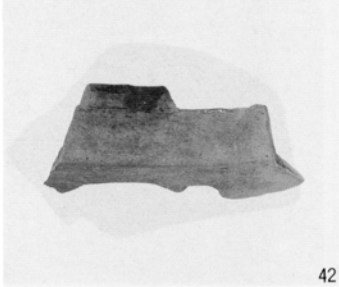

37


38

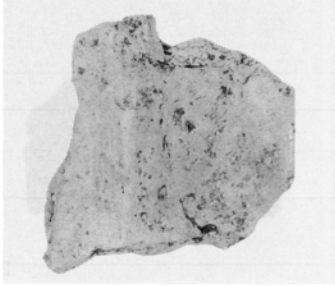


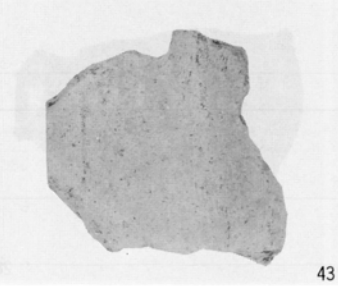
40


39


42

41

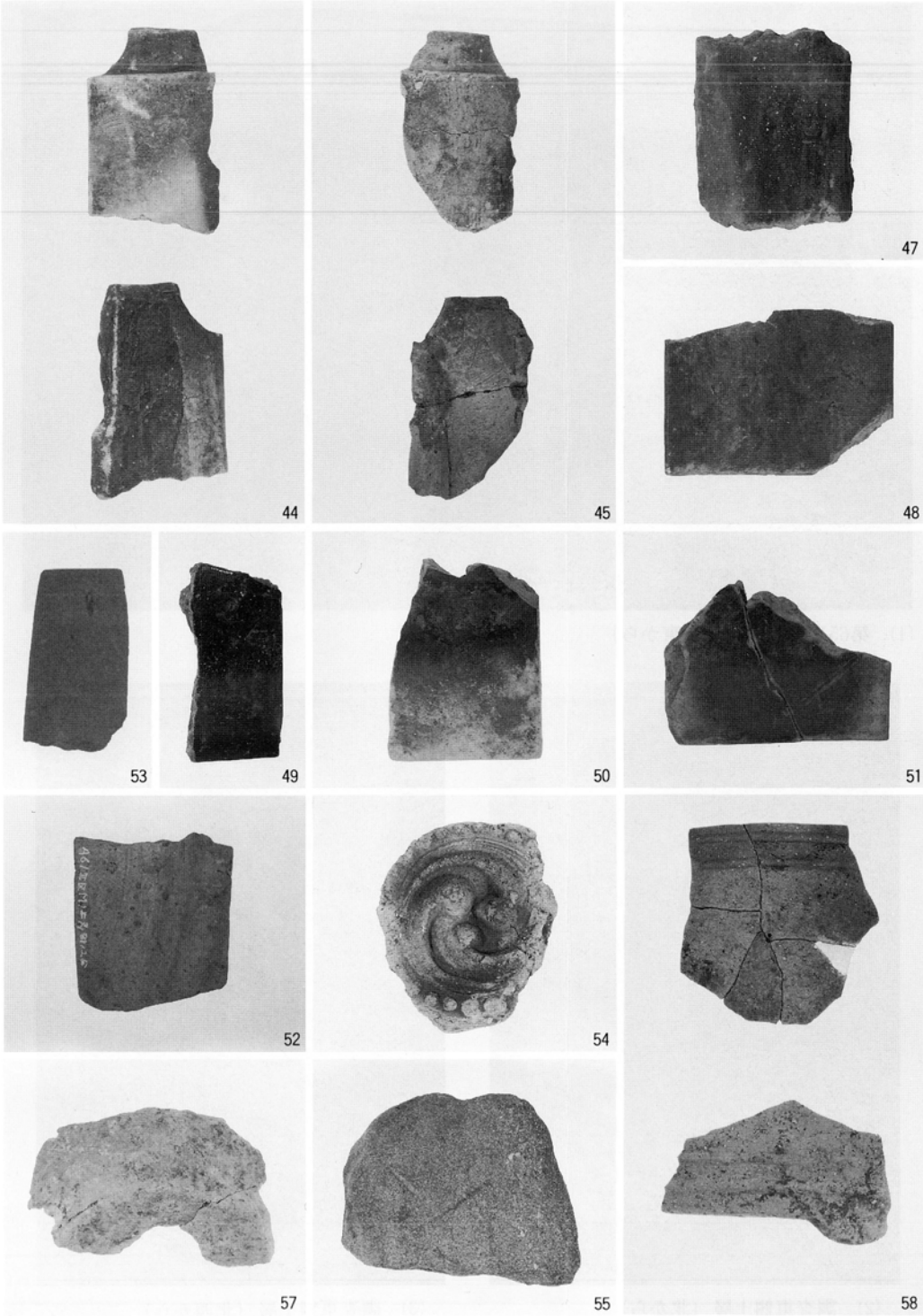



43

46

第61次調査出土遺物 ③

数字は実測図番号に一致する

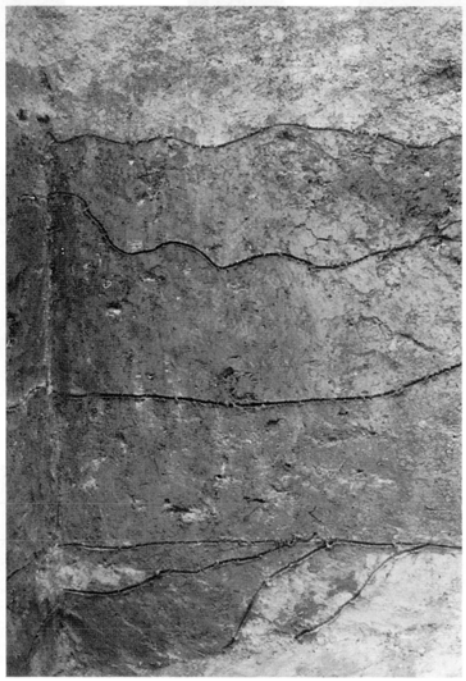


第61次調査出土遺物 ④

数字は実測図番号に一致する

(1) 第65次調査全景（北東から）

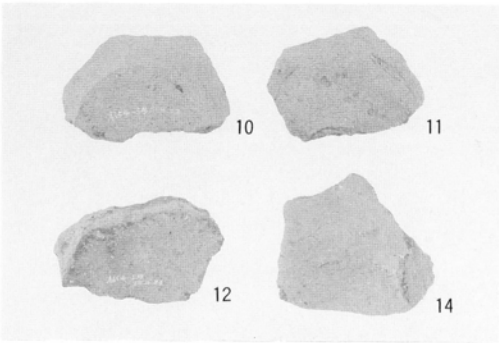
(2) 調査東側土層（北から）

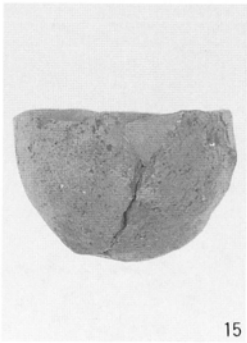


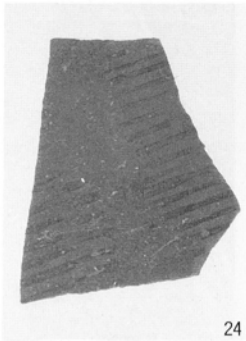
(3) 調査東側土層（北西から）

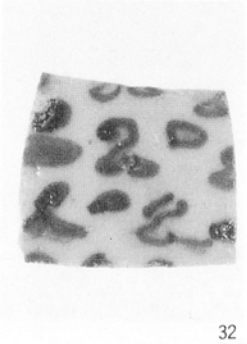
(1) SK01（北西から）

(2) SK02（北東から）





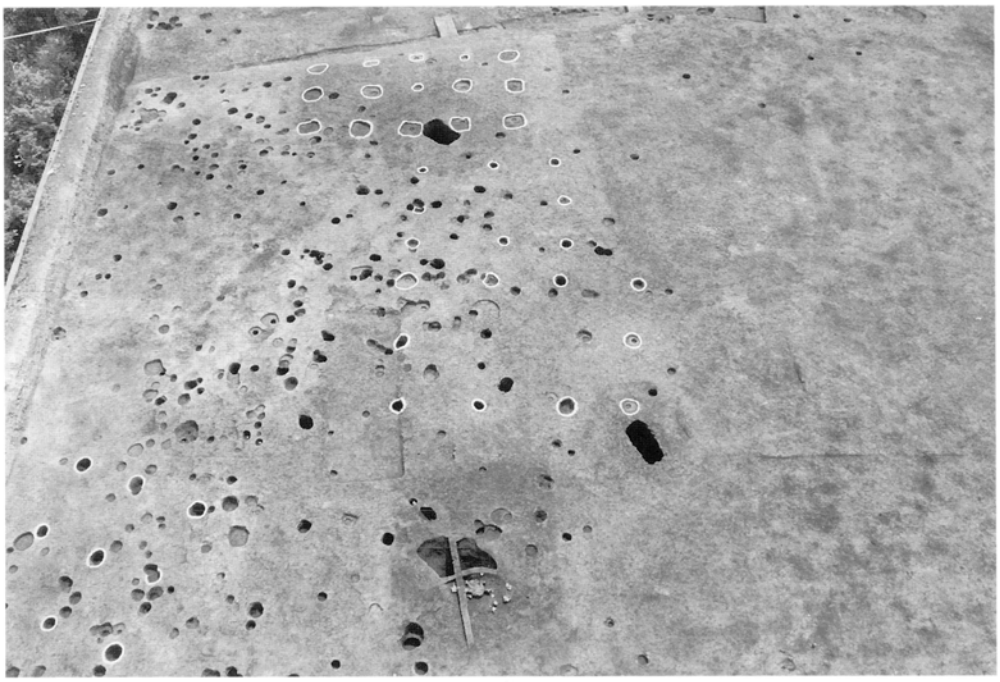




(3) 第65次調査出土遺物

数字は実測図番号に一致する

(1)　第67次調査全景（西から）



(2)　第67次調査全景（西から）

(1) 住居跡 SC01（北から）

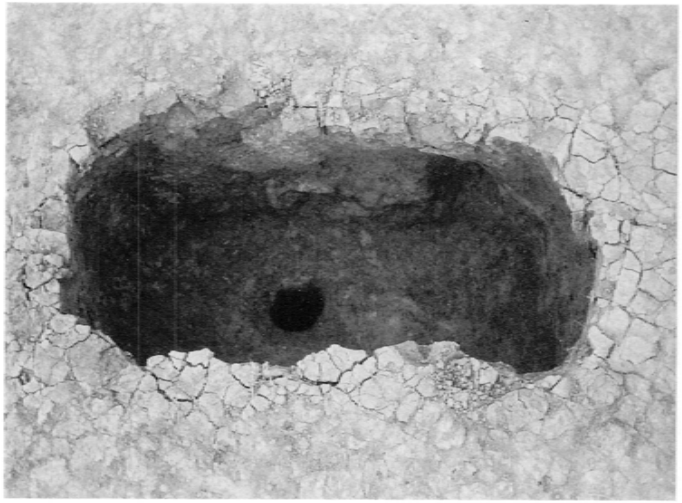
(2) 住居跡 SC01（南から）

(3) 土壙 SX01（北から）

(4) 土壙 SX01 完掘状態（北から）

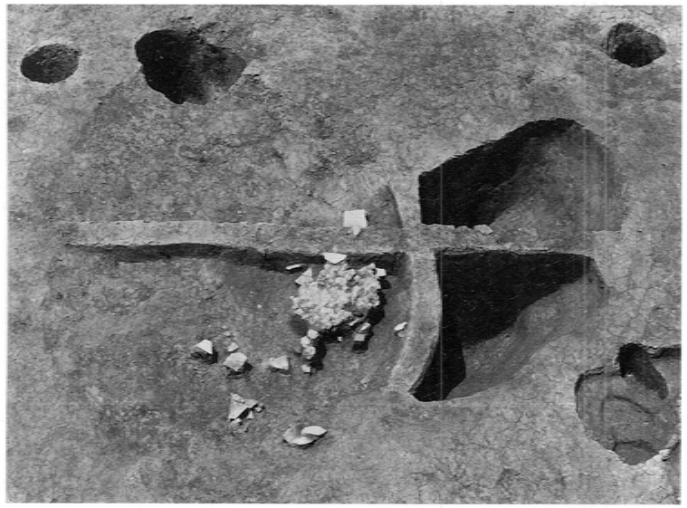
(1) 土壙 SX02（北西から）

(2) 土壙 SX02（南西から）

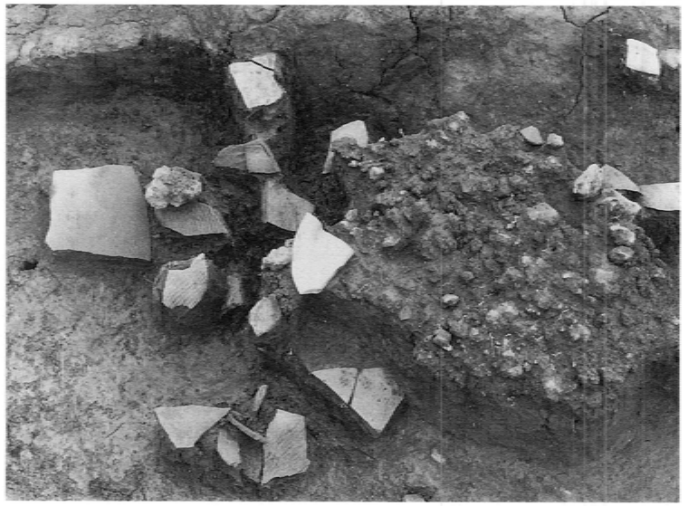


(3) 土壙 SX03（北西から）

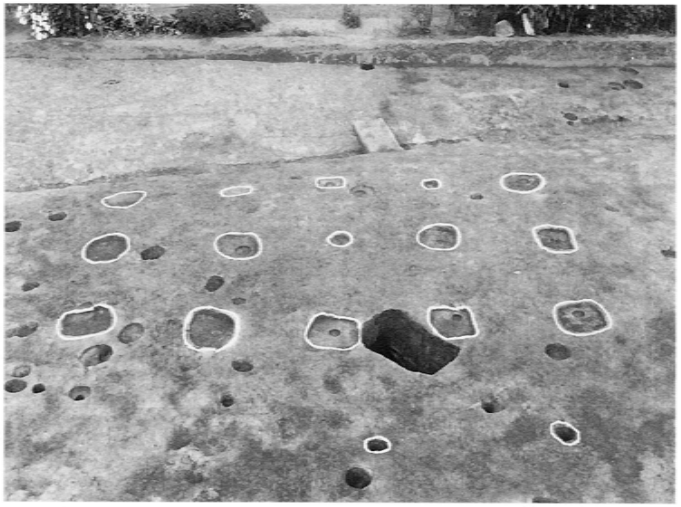
(4) 土壙 SX05（北から）



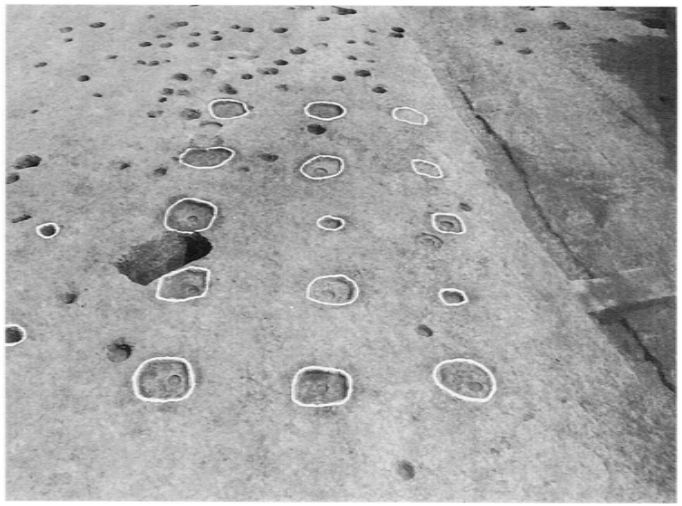
(1) 土壙 SX04（南から）



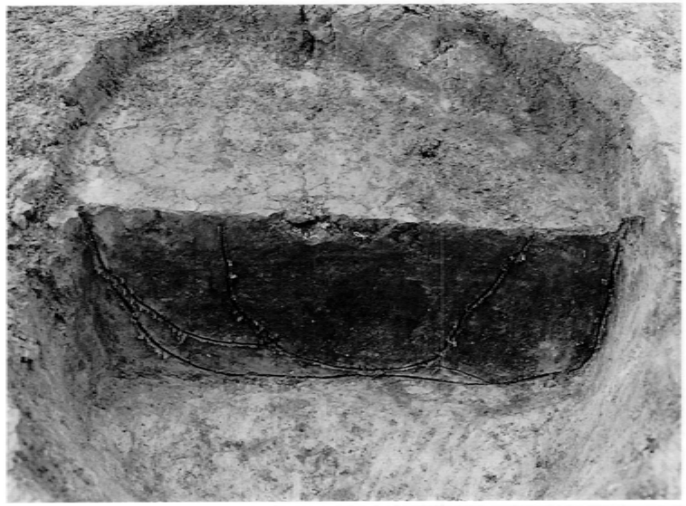
(2) 土壙 SX04 内遺物出土状態（西から）



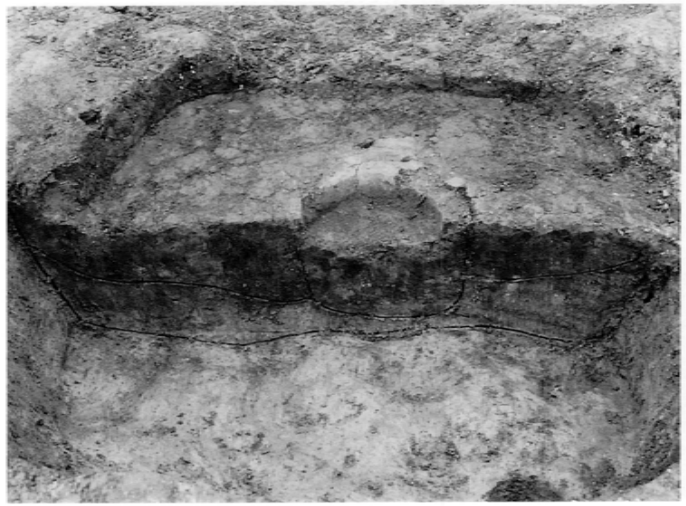
(3) 掘立柱建物 SB01（西から）



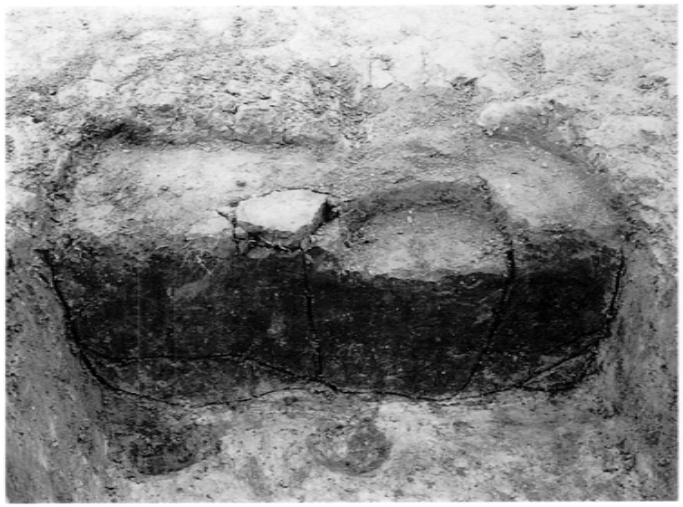
(4) 掘立柱建物 SB01（南から）



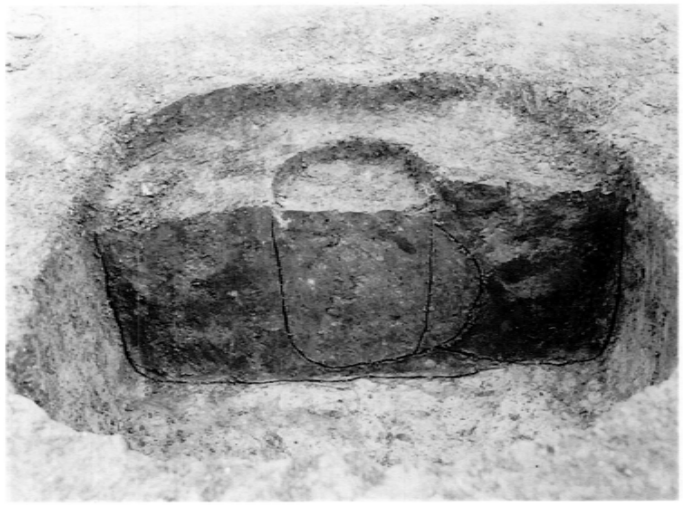
(1) SB01—2 柱穴断面土層状態（西から）



(2) SB01—3 柱穴断面土層状態（西から）

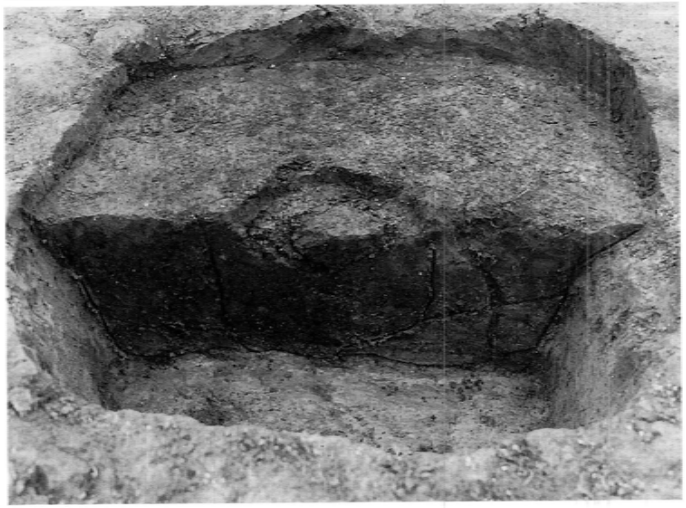


(3) SB01—4 柱穴断面土層状態（西から）



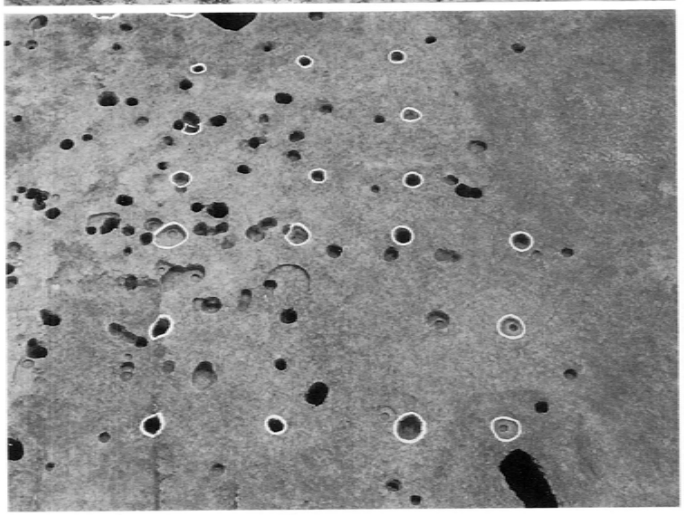
(4) SB01—5 柱穴断面土層状態（西から）

(1) SB01—7 柱穴断面土層状態（西から）

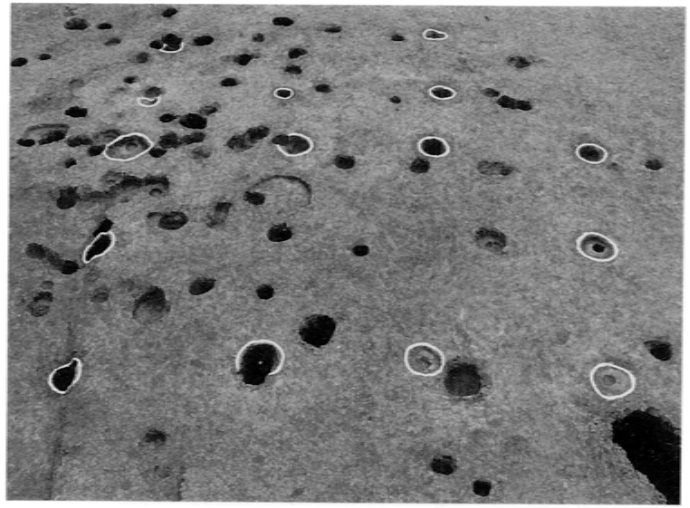


(2) SB01—10 柱穴断面土層状態（西から）

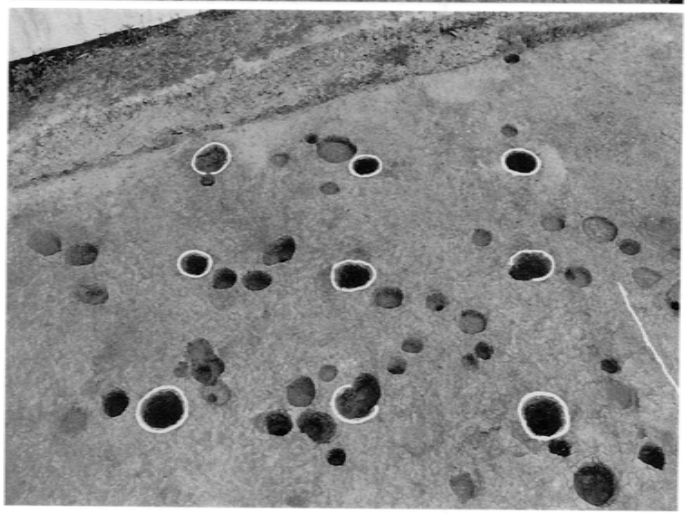
(3) SB01—15 柱穴断面土層状態（西から）



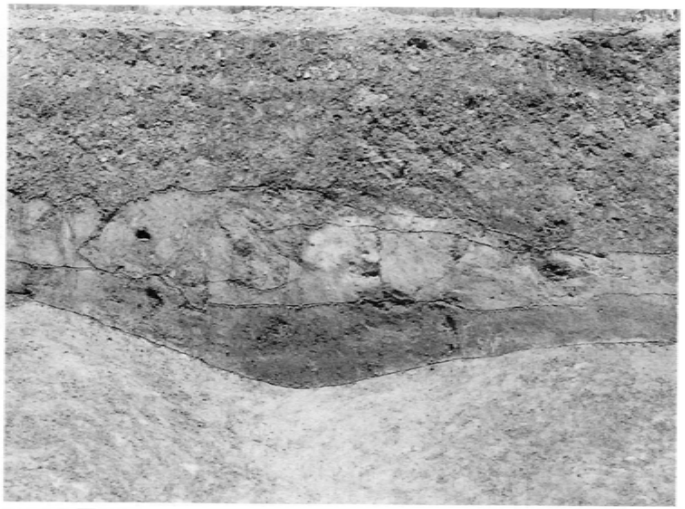
(4) 掘立柱建物 SB02（西から）



(1) 掘立柱建物 SB02（西から）

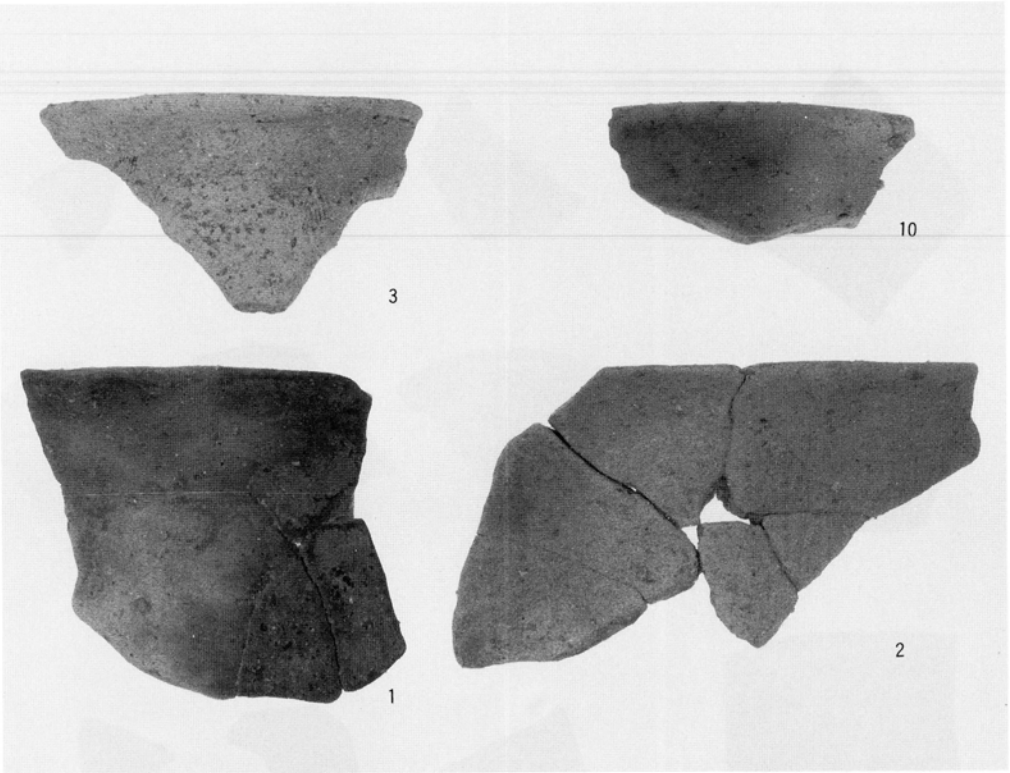


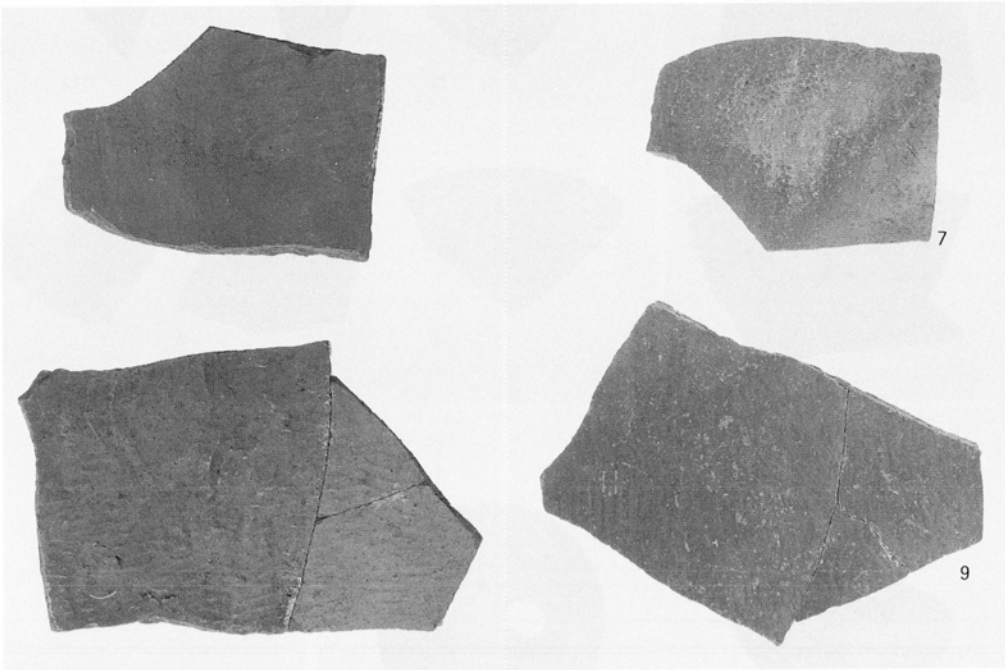
(2) 掘立柱建物 SB03（南から）



(3) 調査区北壁土層状態（南から）

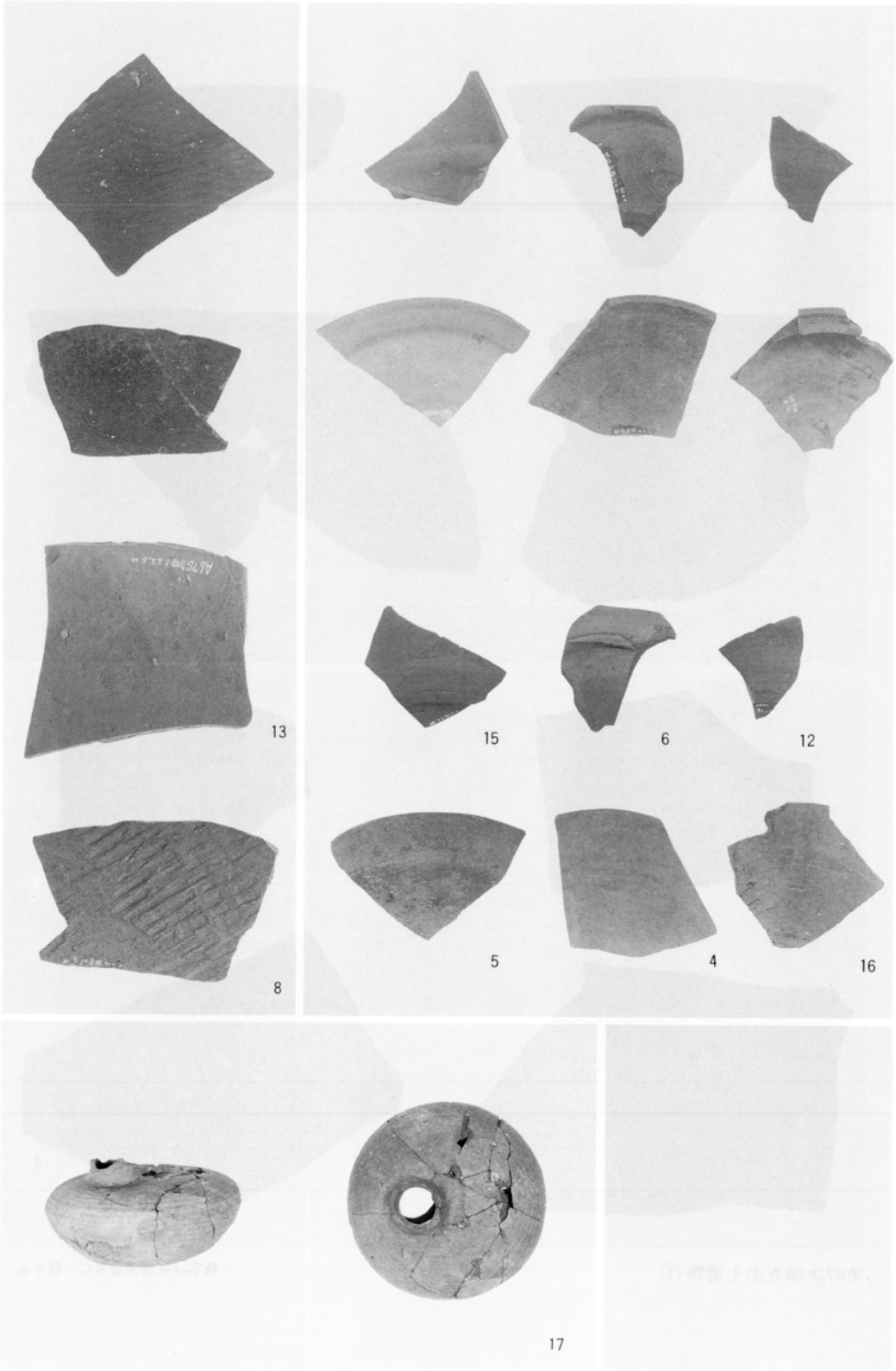
(4) 調査区北壁土層状態（南から）





第67次調査出土遺物 ①

数字は実測図番号に一致する



第６次調査出土遺物②

数字は実測図番号に一致する

福 岡 市

有 田 ・ 小 田 部

第19集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
電話 (092) 711－4666
平成6年3月31日

印　　刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10－15
電話 (092) 451－0027